

仙台市文化財調査報告書第374集

仙 台 城 跡 10

平成21年度 調査報告書
— 仙台城本丸大広間跡調査成果の総括 —

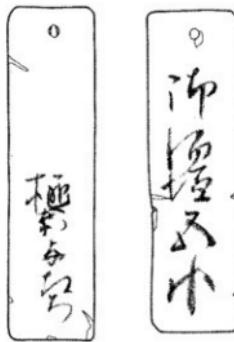


2010年3月

仙台市教育委員会

仙 台 城 跡 10

平成21年度 調査報告書
— 仙台城本丸大広間跡調査成果の総括 —



2010年3月

仙台市教育委員会



仙台城跡鳥瞰写真（東から・2007年10月撮影）



仙台市内鳥瞰写真（西から・2007年10月撮影）



第23次 調査区全景（北西から）



第23次 1区KS-746井戸跡検出状況（南から）



第23次 1区KS-768カマド跡検出状況（南から）



第23次 1区北壁基本層序（南東から）



第23次 1区KS-680鍛冶工房跡
1・2号炉跡検出状況（北東から）



No.1776



No.1776



No.1777



No.1777



No.1778



No.1778



No.1792



No.1792



1区 KS-746井戸跡出土京焼磨手筒茶碗 (No.1522)



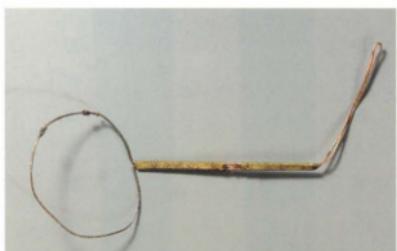
1区 I層出土備前大窯 (No.0148)



1区 KS-746井戸跡出土漆器椀 (No.2316)



1区 KS-746井戸跡出土漆器盃 (No.2350・2362)



1区 KS-746井戸跡出土灰汁掬いか (No.1769)



1区 KS-746井戸跡出土 (No.1769)部分拡大



1区 KS-746井戸跡出土連歯下駄 (No.2318・2320)



3区 III層出土二つ丁子巴文軒棧瓦 (No.1550)

序 文

慶長5年、初代仙台藩主伊達政宗が仙台城の縄張り始めを行い、城下のまちづくりを行ってから、四百年余りが過ぎ、仙台市は人口100万人を超える東北地方の中心都市となりました。市の中心部が、近代的なビルの林立する都市化の波にさらされていく中にあって、仙台城跡は市街地から最も近い緑豊かな場所として、青葉城や天守台といった愛称で、市民から親しまれてきました。

遺跡としての仙台城跡は、平成9年度から15年度まで行われた本丸石垣修復工事に伴う発掘調査や、平成13年度から始められた国庫補助による学術調査によって、中世の山城であった千代城期や、伊達氏の居城期の内容が徐々に明らかになってきました。

これらの発掘で新たに判明した石垣の変遷や、ヨーロッパ産のガラス器や金銅金具等の貴重な出土品などから、仙台城跡は我が国の近世を代表する城郭遺跡であることが評価され、平成15年8月、国の史跡に指定されました。これを契機として、仙台城跡の保存管理及び整備に向けた、「仙台城跡整備基本計画」が策定される等、仙台城跡の様々な魅力を引き出すための取り組みが始まっております。

こうした中で、平成21年度は清水門南側の造酒屋敷跡の発掘調査、大広間跡の発掘調査、広瀬川護岸石垣の測量調査が行われました。

清水門付近の造酒屋敷跡の調査では、屋敷に伴うと考えられる礎石跡や井戸跡、カマド跡などの遺構が発見されました。井戸跡からは、屋敷の当主の名前を記した木簡や、酒造りにかかわると考えられる木製品が多数見つかり、調査地が造酒屋敷の一角であることが裏付けられました。

また、昨年度まで8年次にわたる本丸大広間跡の調査成果についても総括し、これまで絵図や文献でしか、その姿を偲ぶことができなかつた大広間の全容が解明されてきました。

今回の調査事業及び調査報告書の刊行にあたり、多くの方々からご指導、ご協力を賜りましたことを深く感謝申し上げますとともに、本報告書が研究者のみならず市民の皆様に広く活用され、文化財保護の一助となれば幸いです。

平成22年3月

仙台市教育委員会

教育長 荒井 崇

例　　言

1. 本書は、仙台城跡の平成21年度遺構確認調査及び遺構測量調査、本丸大広間跡調査成果総括の報告書である。
本書の内容は既に刊行している『仙台城跡1～9』の内容及び遺跡見学会資料や各種の発表会資料に優先する。
2. 本調査は、国庫補助事業である。
3. 本報告書の作成にあたり、次のとおり分担した。

本文執筆　在川宏志（I・II・III・IV・V・VI・VII）

佐藤　洋（仙台城本丸大広間跡調査成果の総括）

陶磁器ほかの観察については佐藤が行った。

編集は、佐藤・在川がこれにあたった。

4. 記載内容の釈義については、仙台市博物館、仙台城跡調査指導委員のご教示を得た。
5. 木簡の墨書きについての実測は、文化財調査係　廣瀬真理子が担当した。
6. 石垣測量は、佐野コンサルタント㈱に委託した。
7. 木簡の樹種同定は、古代の森研究舎に委託した。
8. 発掘調査及び遺物整理にあたり、次の方々と機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝する。（敬称略・順不同）
須田良平（宮城県教育庁文化財保護課）　松尾信裕（大阪城天守閣）
小井川百合子、鶴岡幸子、青野正道、舟橋真紀、水野沙織、坂田美咲（仙台市博物館）
仙台市博物館　宮城県図書館　鈴斎藤報恩会
9. 本調査に係わる出土遺物、尖測図、写真などの資料は仙台市教育委員会が保管している。

凡　　例

1. 本書中の地形図は、国土地理院発行の1:50,000『仙台』と1:10,000地形図『青葉山』の一部を使用している。
2. 遺構図の平面位置図は平面直角座標系X（日本測地系）を用いており、文中で記した方位角は真北線を基準とし、高さは標高値で記した。
3. 遺構番号は、全遺構に通し番号（国庫補助調査による検出遺構番号：KS-）を付した。
4. 本報告書の土色については、「新版標準土色帳」（古山・佐藤：1970）を使用した。
5. 本書に使用した遺物図版縮尺は、陶磁器類・土器類は1:3、瓦は1:6、金属製品は1:2、錢貨は1:1、木製品は1:4、漆器は1:3、木簡は1:2を原則としている。
6. 木簡の釈文及び型式については、木簡学会刊行の『木簡研究』における記載方法に準じた。
7. 遺物の法量で（　）で示した数値は推定復元値、「-」は計測不能を示している。

目 次

卷頭写真図版

序 文

例 言

凡 例

目 次

I.はじめに.....	1
II.仙台城跡の概要	
1.仙台城跡の地理的環境.....	3
2.仙台城跡の歴史的環境.....	3
3.仙台城跡の発掘調査.....	5
III.調査計画と実績.....	6
IV.第23次調査	
1.調査目的及び調査経過.....	8
2.旧地形及び基本層序.....	9
3.検出遺構.....	10
4.出土遺物.....	40
5.絵図・文献の検討.....	98
6.まとめ	102
V.第24次調査	
1.調査目的及び調査経過	104
2.基本層序	104
3.検出遺構と出土遺物	105
4.まとめ	105
VI.第25次調査	106
VII.総括	113
引用・参考文献	
仙台城本丸大広間跡調査成果の総括	
I.これまでの調査成果	118
II.大広間建物跡の特徴	119
III.付属施設	131
IV.その他の遺構	132
V.出土遺物	139
VI.科学的分析	140
VII.絵図の検討	141
引用・参考文献	
写真図版	

挿 図 目 次

第1図	仙台城跡と周辺の遺跡	2
第2図	焼失以前の大手門と脇櫓	3
第3図	仙台城跡の遺跡範囲	4
第4図	仙台城本丸現存石垣解体修復工事前	4
第5図	仙台城本丸現存石垣解体修復工事後	4
第6図	木丸北邊石垣北東角部の石垣検出状況	5
第7図	本丸北邊石垣背面階段状石列検出状況	5
第8図	仙台城跡遺跡調査・調査区位置図	7
第9図	第23次調査区配図図	8
第10図	調査前状況	9
第11図	II層（花崗岩の碎石層）分布図	9
第12図	第23次調査第2重構面平面図	11~12
第13~16図	第23次調査1~3区断面図	13~16
第17図	1区KS-7-45井戸跡構造平面図	21
第18図	1区KS-768カドマ跡構造平面図	23
第19図	第23次調査1面遺構平面図	27
第20図	1区北壁分布図	28
第21図	1区KS-681-682構造断面図	29
第22図	KS-7の井戸跡出土荷札木簡にみられる地名	43
第23図	第23次調査出土上磁器	46
第24~27図	第23次調査出土陶器	47~50
第27~28図	第23次調査出土上部質土器	50~51
第28図	第23次調査出土瓦質土器	51
第29~31図	第23次調査出土瓦	52~55
第32~33図	第23次調査出土金屬製品	55~56
第34図	第23次調査出土石製品・レンガ	57
第35~40図	第23次調査出土木簡	58~63
第41~48図	第23次調査出土木製品	64~71
第49図	絵図からみた造酒屋敷	98
第50図	伊丹郷町第5丁175次調査検出カマド遺構平面図	102
第51図	五造小学校内調査かまど遺構平面図	102
第52図	調査前状況	104
第53図	第24次調査区位置図	104
第54図	第24次調査遺構平面図	105
第55図	第24次調査北壁断面図	105
第56図	調査区全景	105
第57図	KS-531石跡検出状況	105
第58図	広瀬川護岸石垣（大橋南側）全景	106
第59図	第25次調査位置図	106
第60図	第25次調査広瀬川護岸石垣立面図・縱横断面図	107~108
第61図	第14次調査中門跡北側石垣立面図	110
第62図	第14次調査広瀬川護岸石垣（大橋南側）立面図	111
第63図	第14次調査広瀬川護岸石垣（大橋北側）	112

仙台城本丸大広間跡調査成果の総括

第1図	大広間跡部位置図	119
第2図	広瀬川護岸平面図・「源木丸大広間地盤」の合致図	121
第3図	大広間跡構造平面図	122
第4図	「仙台城及びJBL上屋取手要建物姿絵図」	125
第5図	銅釘新模型式・柱脚部	126
第6図	大広間跡・御門跡 織り金具・銅釘出土地点図	126
第7図	移縫層分布図	128
第8図	第20次大広間南東周辺基本層序模式図	129
第9図	裏上段の構造側面模式図	129
第10図	大広間跡四遺構位置図	133
第11図	大広間跡開闢施設（堀跡）位置図	134
第12図	柱筋にのらない礎石位置図	136
第13図	大広間に下置遺構位置図	137
第14図	「御本丸大広間地盤図」	141
第15図	「御本丸千舟敷地図」	142
第16図	「吉良城御本丸之図」	143
第17図	「旧木丸御形図」	144
第18図	大広間跡遺構平面図	145~146
第19図	大広間跡遺構平面合成写真	147~148

挿 表 目 次

第1表	これまでの調査実績	6
第2表	調査計画表	6
第3表	調査実績表	7
第4~7表	第23次調査1~3区土層柱記表	16~18
第8表	第23次調査出土陶器類数量表	40
第9表	第23次調査出土瓦及瓦表	42
第10表	第23次調査出土金屬製品数量表	42
第11表	第23次調査出土ガラス・石製品数量表	42
第12表	第23次調査出土木製品数量表	45
第13表	第23次調査出土磁器観察表	46
第13~17表	第23次調査出土陶器観察表	47~50
第18~20表	第23次調査出土土師質土器	50~51
第20表	第23次調査出土上質土器観察表	51
第21~24表	第23次調査出土瓦觀察表	52~55
第25~26表	第23次調査出土金属製品観察表	55~56
第27~28表	第23次調査出土石製品・レンガ観察表	57
第29~34表	第23次調査出土木製品観察表	58~63
第35~42表	第23次調査出土木製品観察表	64~71
第43~44表	第23次調査出土磁器観察表	72~73
第45~47表	第23次調査出土陶器観察表	76~77
第48~49表	第23次調査出土土師質土器・瓦質土器観察表	78
第50表	第23次調査出土瓦觀察表	82
第51~52表	第23次調査出土金屬製品・石製品観察表	83
第53~54表	第23次調査出土木製品観察表	87~88
第55~56表	第23次調査出土木製品観察表	94~95
第57表	第23次調査出土鍛冶関係遺物観察表	96
第58表	第23次調査出土その他の観察表	97
第59表	権森家開運年表	100
第60表	造酒屋敷関連資料・質	101
第61表	第24次調査柱記表	105
仙台城本丸大広間跡調査成果の総括		
第1表	大広間座敷部各部屋規模一覧	123
第2表	大広間跡開闢出土瓦	125
第3表	飾り金具・銅釘集計表	126
第4表	残存石碑一覧	130
第5表	柱筋にのらない礎石跡及び掘り方一覧	136
第6表	下層遺構一覧	138
第7~8表	大広間跡開闢出土陶器・土器類	139
第9~10表	大広間跡開闢出土金属類・瓦	139
第11表	大広間座敷・部屋名対照表	144

写真図目次

写真図版1	第23次調査 調査区全景・1区遺構	30
写真図版1~8	第23次調査 1区遺構(第2遺構面)~31~37	
写真図版8~9	第23次調査 1区遺構(第1遺構面)~37~38	
写真図版10	第23次調査 2・3・4・5区遺構	39
写真図版11~12	第23次調査出土磁器	72
写真図版12~17	第23次調査出土陶器	73~78
写真図版17~18	第23次調査出土土師質土器・瓦質土器	78~79
写真図版19~21	第23次調査出土瓦	80~82
写真図版21~22	第23次調査出土金屬製品・石製品	82~83
写真図版23~25	第23次調査出土木簡	84~86
写真図版26~33	第23次調査出土木製品	87~95
写真図版34~35	第23次調査出土鍛冶関係遺物・その他	96~97
写真図版36	第25次調査	109
仙台城本丸大広間跡調査成果の総括		
写真図版1	第1次調査(平成13年)	150
写真図版2	第5次調査(平成14年)	151
写真図版3	第7次調査(平成15年)	152
写真図版4	第10次調査(平成16年)	153
写真図版5	第12次調査(平成17年)	154
写真図版6	第15次調査(平成18年)	155
写真図版7	第17次調査(平成19年)	156
写真図版8~9	第20次調査(平成20年)	157~158

I. はじめに

平成21年度は、仙台城跡遺構確認調査第2次5カ年計画の4年次にあたり、下記の体制で臨んだ。(敬称略、順不同)

調査主体 仙台市教育委員会（生涯学習部文化財課仙台城史跡調査室）

調査担当 文化財課 課長 田中 則和

仙台城史跡調査室長 工藤 哲司

主査 佐藤 洋

主任 熊谷 俊朗

主任 佐藤 淳

文化財教諭 在川 宏志

発掘調査、整理を適正に実施するために調査指導委員会を設置し、指導・助言を受けた。

委員長 岡田 清（東北福祉大学教授 中世史）

副委員長 平川 新（東北大学東北アジア研究センター教授 近世史）

委員 西 和夫（神奈川大学客員教授 建築史）

北垣聰一郎（石川県金沢城調査研究所長 石垣・城郭研究）

藤沢 敦（東北大学特任准教授 考古学）

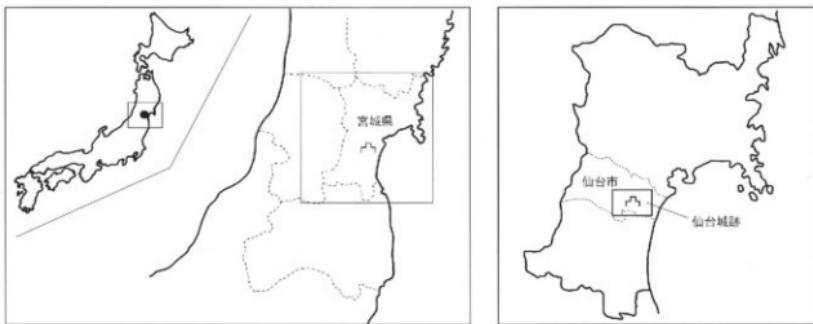
岡崎 修子（跡仙台ひと・まち交流財団 仙台市片平市民センター館長 地域史）

仙台城跡調査指導委員会開催!!

第23回：平成21年10月20日 第23次調査中間報告、若林城跡第10次調査中間報告、登城路調査報告、本丸大広間
跡調査成果総括の報告

第24回：平成22年3月12日 第23次・24次・第25次調査報告、若林城跡調査報告、仙台城跡調査整備計画

調査および整理参加者 相澤 守、安部文子、天野美津枝、内山陽子、太田裕子、小佐野直子、小野寺美智子、
脇家婦美子、木幡真喜子、竹内美江子、対馬悦子、菱沼みのり、堀内泰子、増田端枝、
三鶴典子、結城龍了、吉田竜絵子、淡邊 優



城跡		5 南日城跡	9 川内古墳群	14 南小泉遺跡
1	仙台城跡	6 谷地船塚	10 片平仙台大神宮の板碑	15 義經園遺跡
	天然記念物青葉山(斜線部分)	墓所	その他の中・近世の主な遺跡	16 杉土子(鹿除土子)
2	若林城跡	7 経ヶ峯伊達家墓所	11 川内A遺跡	
3	茂ヶ崎城	板碑・石碑	12 川内B遺跡	
4	国分庵印跡	源不痴尊文永十年板碑	13 桜ヶ岡公園遺跡	

第1図 仙台城跡と周辺の遺跡（中・近世）

II. 仙台城跡の概要

1. 仙台城跡の地理的環境

仙台城跡は仙台市街地の西方に位置し、青葉山丘陵及びその麓の河岸段丘部分を中心に城域が形成されている。青葉山丘陵は東を流れる広瀬川に向かい迫り出し、広瀬川とその支流の竜ノ口渓谷の浸食により高さ70mほどの断崖を形成しており、その丘陵上の平場（標高115～117m）に仙台城の本丸は位置する。本丸の規模は、東西245m、南北267mを計り、南側は落差約10mの竜ノ口渓谷、東側は広瀬川に落ちる高さ約70mの断崖に守られた天然の要害となっており、比較的傾斜の緩やかな本丸北側には約17mの高さを有する石垣が築かれている。尾根続きとなっている本丸西側には「御裏林」と呼ばれた森林が広がり、貴重な自然が残るために国指定天然記念物「青葉山」となっている。御裏林では、3条の大規模な堀切などが確認されている。本丸跡の麓部の河岸段丘には二の丸跡と三の丸跡が位置しており、二の丸跡は仙台下町段丘面、三の丸跡は仙台下町段丘面と高度を下げている。蛇行する広瀬川に西から二本の大きな沢が走り、この沢に挟まれ御裏林を背にした場所に二の丸跡が位置する。二の丸跡の東側に位置する大手門跡付近には、約9mの高さの石垣が残り、その南側には大手門脇櫓が昭和42年（1967）に復元されている。さらに低位に位置する三の丸跡は、外郭を土塁と土壘に囲まれ、門跡付近には石垣が残存している。三の丸跡の東側、河岸段丘の最も低位に位置する追廻地区の広瀬川の岸部分には、260mに及ぶ石垣が残存している。

2. 仙台城跡の歴史的環境

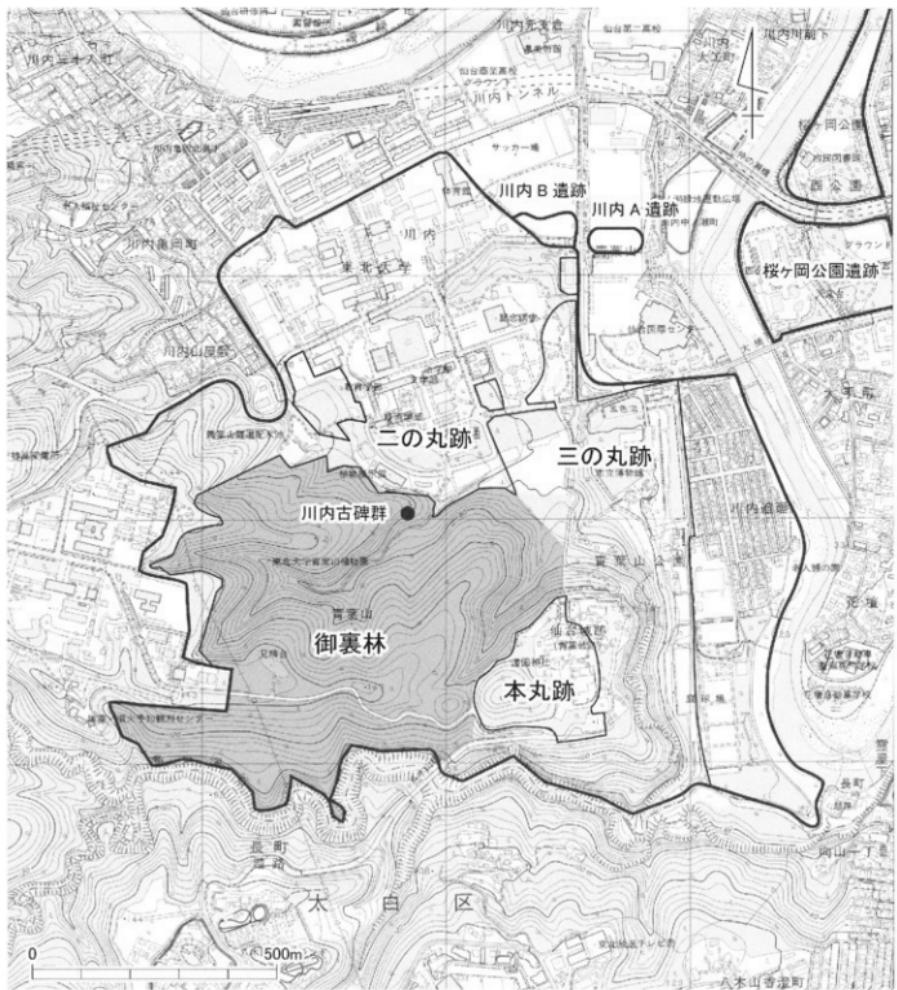
仙台城は、初代仙台藩主伊達政宗によって造営された城である。関ヶ原の戦い直後の慶長5年（1600）12月24日、城の縛張りが開始され、翌年1月から普請に着手、工事は慶長7年（1602）5月には一応の完成をみたとされている。築城当初は「山城」である本丸を中心とする城郭であったが、政宗の死後、二代藩主忠宗が山麓部に二の丸の造営を開始する。寛永年間以降はこの二の丸が藩政の中心となり、三の丸・勘定所・重臣武家屋敷などが一体となって城域を形成していた。残された絵図などからみると、本丸への登城路は、大手門を通って中門を経て本丸詰門に至るものと、巽門・清水門・沢門を通るものがある。

絵図や文献などによれば^(注1)、本丸には詰門に入った東側に天皇家や將軍家を迎えるための御成門があり、華麗な障壁画や欄間彫刻に彩られた大広間を中心とする御殿建物群が存在していた。東側の城下を見下ろす崖面に造られた懸造、さらには能舞台・書院など、上方から招いた当代一流の大工棟梁・工匠・画工等によって造られた桃山文化の集大成といえる建物群が威容を誇っていたと考えられている。西脇櫓・東脇櫓・艮櫓・巽櫓は三重の櫓であったが、正保3年（1646）4月の地震によって倒壊したとする記事がみられ^(注2)、以後復興されずに明治を迎えたものとされている。

本丸の建物群は江戸時代の度重なる災害に加え、明治維新後の取り壇などにより失われ、二の丸の御殿群も明治15年（1882）の大火によって焼失した。唯一仙台城の面影を伝えていた国宝の大手門及び脇櫓も昭和20年（1945）7月、太平洋戦争の際に米軍による空襲によって焼失した。現在では、本丸北壁や随所に点在する石垣、本丸西側の堀切、三の丸の周囲を囲む堀と土塁などが往時の仙台城を偲ぶ貴重な遺構となっている。また、伊達氏による仙台城築城以前にこの地域をおさめていた国分氏の居城「千代城」に関する16世紀代の文献記録も残っており^(注3)、中世山城が存在していた可能性も指摘されている。



第2図 焼失以前の大手門と脇櫓（1935年頃）



第3図 仙台城跡の遺跡範囲(1/10,000) 太線：埋蔵文化財包蔵地範囲 細線：史跡指定範囲

天然記念物「青葉山」



第4図 仙台城本丸現存(Ⅲ期)石垣
解体修復工事前(北西から)



第5図 仙台城本丸現存(Ⅲ期)石垣
解体修復工事後(北東から)

3.仙台城跡の発掘調査

仙台城のこれまでの調査には、昭和58年（1983）から継続的に実施されている東北大学構内の施設整備に伴う二の丸跡の発掘調査と、仙台市博物館の新築工事に伴って昭和58・59年（1983・1984）に実施された三の丸跡の発掘調査があり、本丸跡では石垣修復工事に伴う発掘調査が第1次発掘調査である。

本丸北壁の石垣は昭和30年代から変形が目立ち始め、防災上の観点から石垣修復工事が平成9年（1997）度から実施されている。この石垣修復工事に伴う本丸1次発掘調査は、平成9年（1997）7月から石垣解体に先行する事前調査と、翌年10月から開始した解体工事と並行する発掘調査からなっている。解体工事は平成12年（2000）9月に石材9,106石と、II期石垣124石の解体をもって終了し、石積工事を同年12月から開始し、平成16年（2004）3月に工事が終了した。

石垣解体修復に伴う発掘調査により、現存石垣（Ⅲ期石垣）背面より二時期にわたる旧石垣（I期・II期石垣）が検出され、石垣基部の調査や石垣断面構造の記録化により、I期からIII期までの石垣の変遷や構造が明らかになった。石材調査では各種の刻印や朱書、墨書きなどを多数発見し、矢穴や石材加工の変化も確認されている。石垣は、表面の「石積み」様式の変化とともに、背面の土木工法の変容も顕著であり、石垣背面の土木工事痕跡の考古学的な手法による層位的調査と、盛土の重複関係や遺物の分析からみた石垣変遷を、文献調査との照合により時期区分されている。築城期には、旧地形や中世山城「千代城」の縄張りを利用して斜面を切り土しながら石垣を構築（I期）し、元和2年（1616）の地震によりこの石垣が倒壊した後、築城期の石垣形状を一新する修復工事が行われて石垣が再構築（II期）され、その後、寛文8年（1668）の地震によりこのII期石垣も倒壊し、現存石垣に全面改築（III期）されたと考えられている。

平成13年（2001）からは国の補助を受け、発掘調査のほかに遺構現況調査や石垣測量などの総合調査を実施しており、平成22年（2010）3月現在で25次にわたる調査を実施している。特に本丸大広間跡の発掘調査は8次にわたり実施しており、その位置や内部構造について解明しつつある状況である。

平成15年（2003）5月に三陸沖を震源とする地震が起き、中門跡と清水門跡の石垣の一部が被災し、その後、平成15～17年（2003～05）に災害復旧工事を行った。

平成15年（2003）年8月には約66haが国史跡に部分指定され、その後、仙台市は「仙台城跡整備基本構想」「仙台城跡整備基本計画」を策定した。平成17～19年（2005～07）には巽門東側にあったとされる堀跡、平成20年（2008）からは清水門南側の造酒屋敷跡の学術調査を実施し、その調査成果に基づく史跡整備を事業目標としている。

註1 『仙台城下絵図』寛文4年（1664）宮城県図書館蔵・『青山公造制城郭木写之略図』17世紀後半（推定）
宮城県図書館蔵・『貞山公治家記録』など

註2 義山公治家記録、正保3年（1646）4月28日条

註3 貞山公治家記録、慶長5年（1600）12月24日条



第6図 本丸北壁石垣北東角部
旧石垣（I・II期）検出状況（北東から）



第7図 本丸北壁石垣背面
階段状石列検出状況（北西から）

III. 調査計画と実績

平成21年度は、仙台城跡遺構確認調査の第2次5ヵ年計画4年目にあたる。平成17年度までの第1次5ヵ年計画では、国指定史跡仙台城跡の全体像を把握することを目標として、遺構の遺存状況、種類、規模、配置等の確認を目的とする遺構確認調査と、石垣の破損状況や石積みの特徴を確認することを目的とする石垣現況調査、測量調査などを実施してきた。また、本丸大広間跡や翼櫓跡などの発掘調査、本丸での遺構現況調査などを行ってきた。

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間
第1次	大広間跡（1次）	185m ²	平成13年9月17日～12月27日
第2次	清水門跡付近石垣測量	210m ² （立面）	平成13年11月30日～平成14年2月13日
第3次	大番土手跡・御守殿跡・懸造跡	1,400m ²	平成14年5月20日～平成15年1月31日
第4次	奥櫓跡	110m ²	平成14年5月20日～8月31日
第5次	大広間跡（2次）	470m ²	平成14年8月5日～12月20日
第6次	仙台城跡（全城）	約145ha	平成15年5月7日～8月8日
第7次	大広間跡（3次）	258m ²	平成15年8月4日～12月25日
第8次	登城跡	58m ²	平成15年11月12日～12月25日
第9次	広瀬川護岸石垣測量（1次）	50m ² （立面）	平成15年12月9日～平成16年2月5日
第10次	大広間跡（4次）	397m ²	平成16年7月20日～12月24日
第11次	登城跡・広瀬川護岸石垣測量（2次）	349m ² （立面）	平成16年12月18日～平成17年3月31日
第12次	大広間跡（5次）	446m ²	平成17年5月26日～10月19日
第13次	三の丸堀跡（1次）	86m ²	平成17年11月1日～12月22日
第14次	中門北側・広瀬川護岸石垣測量（3次）	627m ²	平成18年1月16日～1月20日
第15次	大広間跡（6次）	311m ²	平成18年6月1日～8月4日
第16次	三の丸堀跡（2次）	522m ²	平成18年9月1日～11月30日
第17次	大広間跡（7次）	263m ²	平成19年5月28日～8月3日
第18次	三の丸堀跡（3次）	468m ²	平成19年9月1日～11月26日
第19次	本丸北壁石垣測量（1次）	425m ² （立面）	平成20年1月16日～1月18日
第20次	大広間跡（8次）	248m ²	平成20年5月8日～7月31日
第21次	造酒屋敷跡（1次）	160m ²	平成20年8月26日～10月29日
第22次	本丸北西壁石垣測量（2次）	448m ² （立面）	平成20年12月24日～平成21年1月21日

第1表 これまでの調査実績

第2次5ヵ年計画では、引き続き、国指定史跡仙台城跡における全体像の把握を目的として、遺構確認調査と石垣現況調査、測量調査、絵図等の資料調査などを実施する予定である。今年度は、造酒屋敷跡周辺および大広間跡における遺構確認調査、広瀬川護岸石垣の測量調査を実施した。発掘調査費については総経費16,713千円、国庫補助額8,099千円との内示を受けたことから、以下の調査計画を立案した。

調査次数	調査地区	調査予定面積	調査予定期間
第23次	造酒屋敷跡（2次）	420m ²	平成21年6月25日～10月31日
第24次	大広間跡	3m ²	平成21年12月14日～12月18日
第25次	広瀬川護岸石垣測量（4次）	250m ² （立面）	平成21年12月18日～平成22年3月23日

第2表 調査計画表

これまで、本丸跡では8次にわたる調査により、仙台城本丸御殿の中心的建物である大広間跡の礎石跡や雨落ち溝跡などを検出し、大広間建物跡の位置及び規模（東西33.5m、南北26.3m）を確認した。また、大広間跡の西側に位置する御成門跡の礎石や、そこから大広間跡に延びる通路跡と考えられる石敷き造構を検出した。大広間建物跡の内部については、迷物に関わる礎石跡を検出し、各部屋の間取りや位置など、大広間の全容を解明する上で大きな成果が得られた。

第23次調査は、清水門付近にあったとされる造酒屋敷跡の遺構確認を目的として実施した。屋敷跡の調査（1～4区）では、屋敷や造酒に関わると考えられる礎石跡や石列、カマド跡、井戸跡、溝跡などを検出した。また、造酒屋敷廃絶後に使われていたと考えられる鍛冶工房跡も検出した。遺物は、木筒をはじめとする多数の木製品、磁器、陶器、瓦、金属製品などが出土した。

第24次調査は、大広間跡虎の間西側、広縁部中央の礎石跡を調査指導委員会の指導により追加調査として実施

した。調査では、KS-531礎石跡の構造全体を検出した。

第25次調査は、広瀬川護岸石垣の測量を行い、石積み状況を調査した。これまで実施した第9次・第11次・第14次調査により、大橋北側の石材及び大橋南側約200m分の護岸石垣を既に測量している。第25次調査では約64mを測量調査し、石垣の國化作業を併せて行った。

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間
第23次	造酒屋敷跡（2次）	369m ²	平成21年7月1日～11月12日
第24次	大広間跡	2.25m ²	平成21年12月14日～12月15日
第25次	広瀬川護岸石垣測量（4次）	250m ² （立面）	平成21年12月16日～平成22年1月7日

第3表 調査実績表



第8図 仙台城跡遺構確認調査・調査区位置図 (1/5000)

IV. 第23次調査

1. 調査目的及び調査経過

第23次調査は、清水門付近の造酒屋敷跡を対象として、平成21年（2009）7月1日から同年11月12日まで遺構確認のための発掘調査を実施した。調査面積は369m²である。

調査目的は、清水門の南側に位置し、仙台藩の御用酒屋であった樋森家の屋敷跡や酒蔵跡など、造酒屋敷跡の位置および規模の確認（1～4区）である。樋森家は、初代仙台藩主伊達政宗が、親しい幕臣である柳生宗矩の紹介で、慶長13年（1608）に大和国（現在の奈良県）から招かれ、城内に酒蔵と屋敷を与えられて酒造にあたった。その後、明治9年（1876）に廃業するまでの約270年にわたり酒造業を営んだ。

調査区の設定や調査前の現況写真撮影後、6月29日にフェンスを設置し、重機による表土の除去作業を開始した。7月1日から人力による表土除去及び遺構の検出作業を開始した。

造酒屋敷跡の調査（1～4区）では、造酒屋敷に伴うと考えられる礎石跡、石列、井戸跡、カマド跡、炉跡、石組溝などを検出した。調査は遺構の確認を主とし、遺構の掘り込みは最小限にとどめた。遺物は、近世の整地層と考えられるIV層上面から18世紀代を中心とする磁器、陶器のほか、土師質土器、瓦質土器、瓦、古錢などが出土した。また、KS-746井戸跡からは陶磁器、金属製品などのほか、木簡や漆器、下駄、箸、樽や桶の部材などの木製品が多数出土した。

第23次調査は、平成21年2月24日の第22回仙台城跡調査指導委員会において、調査箇所や目的、方法について了承を得て実施した。平成21年10月20日に実施した第23回仙台城跡調査指導委員会において調査の進め方についての現地指導を受けた。調査成果については、10月22日に記者発表、10月24日に遺跡見学会（100名参加）を実施し公表した。その後、調査区の埋め戻しの作業を行い、11月16日に調査箇所は原状に復した。

なお、出土遺物の水洗作業中に樋森家当主の名前が記された木簡や年貢米の荷札木簡などを確認した。記載内容の糺文を仙台市博物館、仙台城跡調査指導委員のご教示を得た上で、12月10日に記者発表を実施し公表した。



第9図 第23次調査区配置図 (1/800)

2. 旧地形及び基本層序

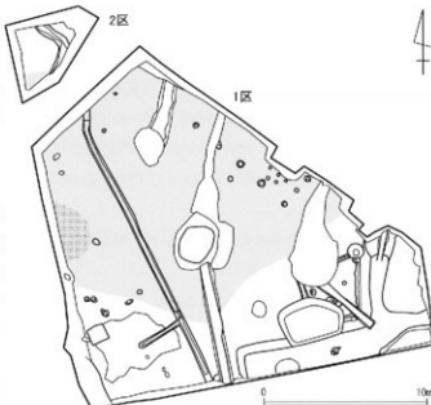
造酒屋敷跡は、追廻から本丸へ至る登城路の南側、青葉山丘陵の裾部にあたる標高約43mの平場に位置する。北側の三の丸跡がある下町段丘面との間には約3m、東側の巽門跡との間には約5mの比高差がある。平場の南側には青葉山丘陵の斜面が長沼（三の丸堀跡）方向まで伸びていることから、仙台城の築城時に斜面を造成して造られた平場であったと推定される。平場は西から東にかけて緩やかに傾斜している。以下、各区の基本層の概要について述べる。



第10図 調査前状況

(1) 1区

1区の基本層は5層に大別した（第5～6表）。I層は近代から現代にかけての盛土層で25層に細分した。II層は花崗岩の碎石層で、近代以降の整地層である（第11図）。II層直下に近代の遺構面を検出した。花崗岩の碎石は人為的に敷かれており、1区南部、KS-680鍛冶工房跡の周辺ではみられない。II層が鍛冶工房に関連する可能性が考えられる。今回の調査ではこの層を便宜上、基本層として扱う。III層は近世の整地層である。III層上面でKS-680鍛冶工房跡など第1遺構面の遺構を検出した。IV層は近世の盛土層で5層に細分した。IV層上面でKS-746井戸跡やKS-768カマド跡など第2遺構面の遺構を検出した。1区の北側は削平による段差がみられ、IV層も削平により失われている。V層は第21次調査の2区Ⅲa層に相当する。VI層は硬くしまった層で地山の可能性がある。



■ 花崗岩の碎石層(II層) ■■■ 炭層(II層上面)

第11図 II層（花崗岩の碎石層）分布図 (1/300)

(2) 2区

2区の基本層は3層に大別した（第7表）。I層は現代の盛土層で12層に細分した。調査区南壁でI層最下層直下に花崗岩の碎石が部分的にみられたが、調査区全体までは広がらなかった。III層は近世から近代にかけての整地層で1区のIII～IV層に対応する。KS-685石組溝、KS-687石組溝の検出面である。IV層は地山である。

(3) 3区

3区の基本層は3層に大別した（第7表）。I層は現代の盛土層である。調査区北壁と西壁でI層最下層の直下に花崗岩の碎石はみられたが、調査区全体には広がらなかった。III層は近世と考えられ盛土層でKS-800石組溝の検出面である。18世紀代の肥前染付網目文碗が出土した。IV層は近世の盛土層で2層に細分した。

(4) 4区

4区の基本層は4層に大別した。I層は現代の盛土層である。II層は時期不明の旧表土である。III層は近世の盛土と考えられる層で、溝1条を検出したが、埋土から焼土やビニールが出土しており、新しい溝である。IV層は崩落土の可能性がある。

3. 検出遺構

【第2遺構面】

おもに1区の基本層のIV層上面で検出された近世の遺構面である。1区南側で調査区を東西に横断する人為的に形成された段差がみられ、北側が10cm程度くなっている。段の南側では18世紀代の陶磁器を中心で、一段低い北側では19世紀前半の遺物も出土していることから、同じ第2遺構面でも18世紀代から19世紀の遺構面と19世紀前半の遺構面に分けられる。

(1) 1区

・KS-688礎石 調査区北壁裏面で検出した。加工のない川原石で長軸21cm、厚さ19cmである。掘り方は東西56cm以上、深さは20cmである。根固め石は確認されなかった。KS-690石列と関連する可能性が考えられる。

・KS-689礎石 調査区北部で検出した。加工のない川原石で長軸40cm、短軸25cmである。掘り方と根固め石は確認されなかった。礎石上端のレベルは41.75fmである。

・KS-690石列 調査区北部で検出した。東西方向に延び、西側で石材はまばらになるが、北に屈曲する石列である。検出した長さは東西28m、南北1.3m、方向はN-18°-Eである。径23~28cmの加工のない川原石を配している。石の上面の高さに統一性はない。石列の北側にブロック状の黄褐色土が分布しており、建物にかかわる盛土(犬走り相当か)であると推測される。この面で瓦が出土している。石列はその縁辺に配置されたものと考えられる。KS-691より古い。

・KS-691ピット 調査区北部で検出した。平面形は円形である。規模は東西50cm、南北54cmである。円礎、角礎を含む。KS-690石列より新しい。

・KS-692礎石跡 調査区北部で検出した。平面形は円形である。規模は東西100cm、南北89cmである。根固め石の大きさは径7~17cmの円礎である。径7cmの杭1本を検出した。礎石の抜取り穴は確認されなかった。瓦片が出土した。

・KS-693集石 調査区北部で検出した。平面形は円形である。規模は東西55cm、南北50cmである。根固め石と考えられる径5~30cmの礎を多数含む。なお、石が集合しており礎石の可能性があるが、根固め石と考えられる礎が立っている状況で検出されたものや少量のもの、角礎が混じるなど、礎石と判断できないものは集石として扱った。

・KS-694ピット 調査区北東部で検出した。平面形は円形である。規模は東西40cm、南北35cmである。

・KS-695溝跡 調査区北部で検出した。南北方向に延びる溝で、上端幅20~30cmである。検出した長さは357cm、方向はN-13°-Wである。埋土には砂の堆積がみられた。搅乱やKS-708-710に切られているが、KS-722-751溝跡に接続する可能性が推測される。

・KS-696溝跡 調査区北部で検出した。南北方向に延びる溝で、上端幅20~26cmである。検出した長さは173cm、方向はN-2°-Wである。埋土には砂の堆積がみられた。瓦が出土した。

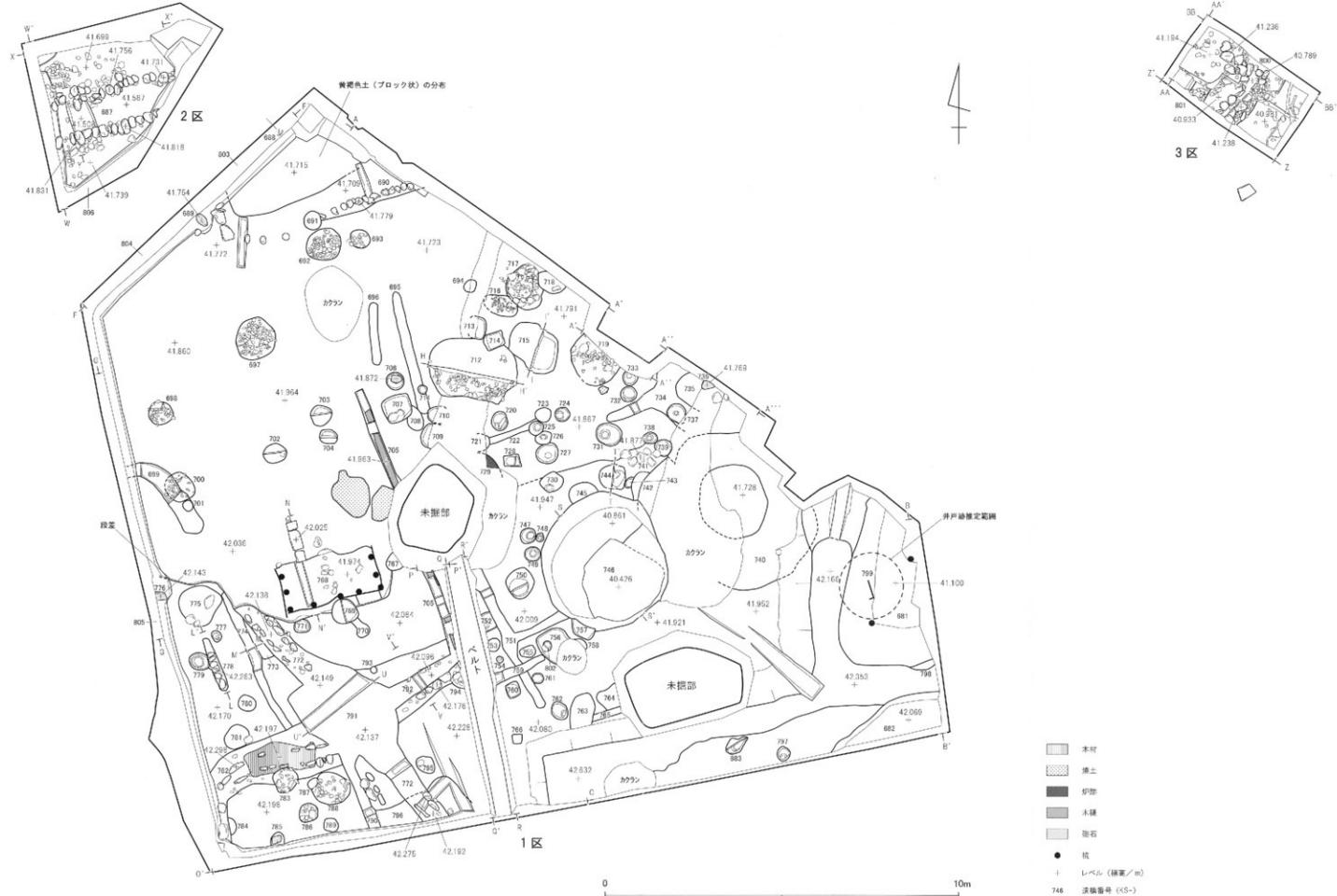
・KS-697礎石跡 調査区北部で検出した。平面形は円形である。規模は東西117cm、南北107cmである。根固め石の大きさは径15~24cmの円礎であり、角礎2石を含む。礎石の抜取り穴は確認されなかった。瓦片が出土した。

・KS-698集石 調査区西部で検出した。平面形は円形である。規模は東西71cm、南北61cmである。根固め石と考えられる径6~12cmの円礎、瓦が出土した。

・KS-699溝跡 調査区西部で検出した。調査区西壁から南に緩やかに曲がる溝で、上端幅42~60cm、深さ14cmである。検出した長さ2.6m、方向はN-35°-Wである。KS-700-701より新しい。上部が削平され残りが悪いが、KS-772溝跡に接続する可能性が考えられる。瓦が出土した。

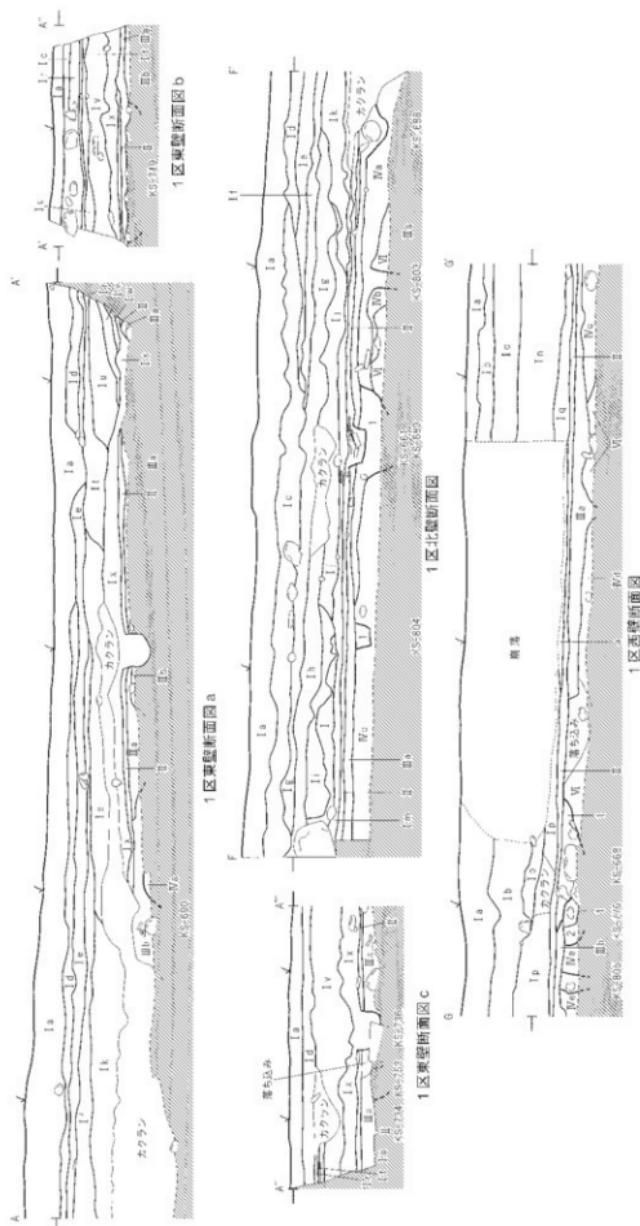
・KS-700集石 調査区西部で検出した。平面形は円形である。規模は東西75cm、南北80cmである。根固め石と考えられる径5~20cmの礎を含む。KS-699より古い。

・KS-701ピット 調査区西部で検出した。平面形は円形である。規模は東西26cm、南北32cmである。径10cmの礎



第12図 第23次調査 第2遺構面遺構平面図 (1/100)

第1図 第23次調査 1区断面図 1 ($1/50$ SL = +42.500m)



第14図 第23次調査 1区断面図 2 (1/50 SI = 42500m)

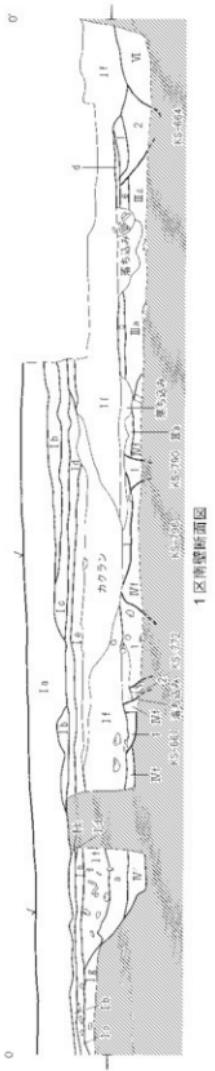
1区ベルト西壁断面図



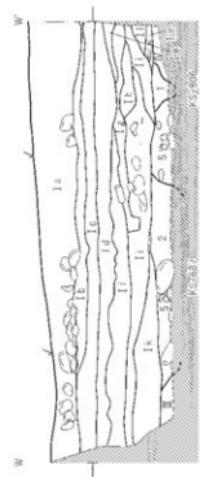
1区ベルト東壁断面図



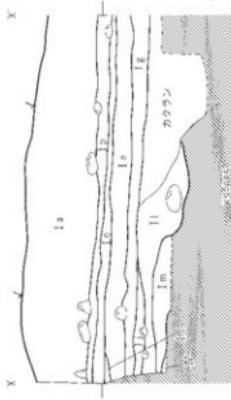
1区中央部壁断面図



1区南壁断面図



2区南壁断面図



2区北壁断面図

15'

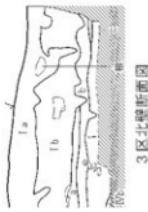
100

100

100



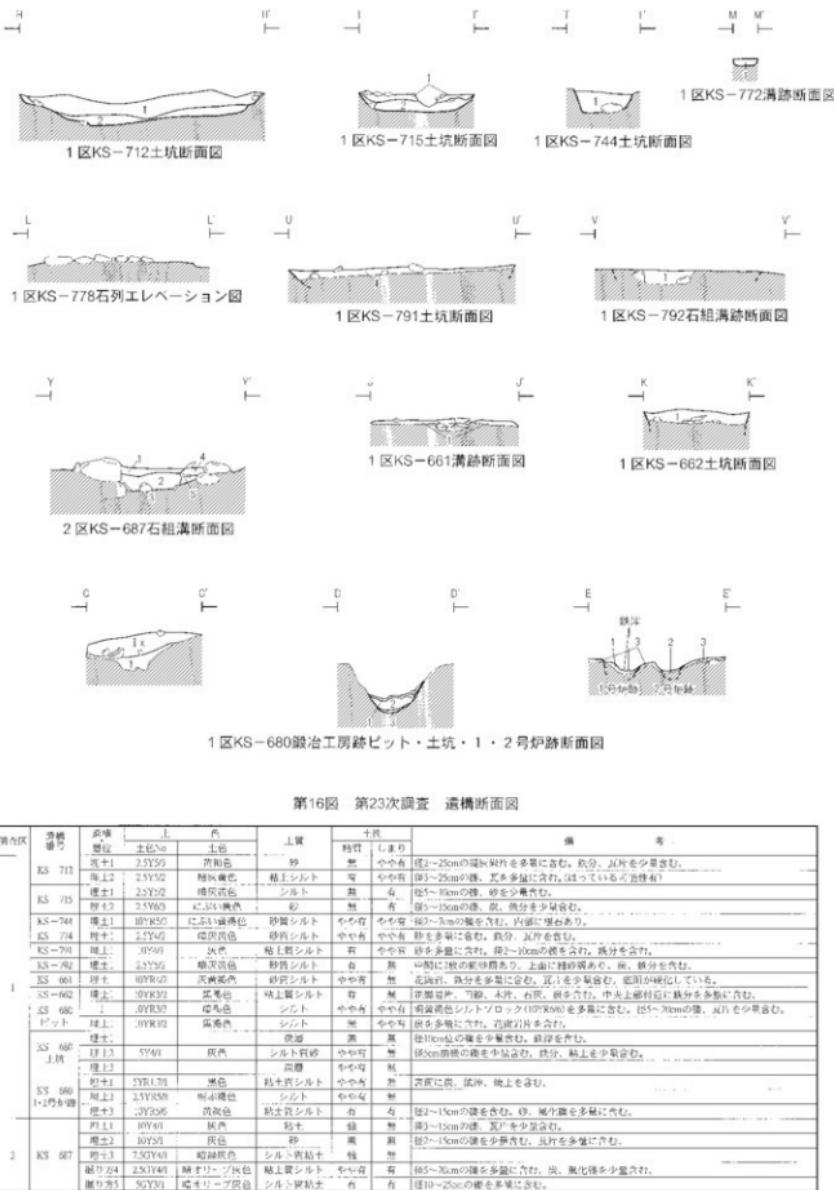
3区西壁断面図



3区東壁断面図



3区北壁断面図



第4表 第23次調査造構土層注記表（第16回）

調査区	地盤 種類	地盤 透水性	土 色		土質	特 性		備 考
			天然色	上色		粘質	しまり	
	I-a	10YR4/5	深褐色	粘土質シルト	有	弱	弱2~25cmの繊、ビニール片を含む。	
	I-b	10Y3/3	黒褐色	シルト	やや有	無	高褐色面合質粘土(10Y3/3)を多量に含む。	
	I-c	2.5Y6/1	黄褐色	粘土質シルト	有	無	高褐色面合質粘土(10Y3/3)を多量に含む。にぶい黄褐色土質ブロック(10Y4/5)に部分	
	I-d	10Y3/4D	灰褐色地帯	砂質シルト	無	無	弱1~5cmの繊を多量に含む。	
	I-e	10Y3/4D	灰褐色地帯	シルト・砂質	やや有	無	弱1~5cmの繊を多量に含む。	
	I-f	2.5Y3/2	黑褐色	砂質シルト	少	無	弱1~5cmの繊を多量に含む。弱分、繊を含む。	
	I-g	10Y3/4D	灰褐色地帯	砂質シルト	無	無	弱1~5cmの繊を多量に含む。	
	I-h	10Y3/5	にぶい黃褐色	粘土	強	無	強分を多量に含む。弱1~5cmの繊を少量含む。瓦片を含む。	
	I-i	10Y3/2	黑褐色	粘土	強	無	強分、繊を含む。	
	I-j	2.5Y3/3	黒褐色	泥質質粘土	強	無	動物を多量に含む。弱1~10cmの繊分を多量に含む。	
	I-k	2.5Y4/3	褐褐色	泥	無	無	中間に地盤食害を含む。上面に強分を多量に含む。	
	I-l	10Y3/6	灰褐色	シルト質粘土	強	無	漏斗を多量に含む。強1~5cmの繊を多量に含む。ややグライしている。	
	I-m	2.5Y4/6	灰色	粘土	強	無	下部に地盤食害を含む。強分を少量含む。瓦片(瓦)を含む。	
	I-n	2.5Y6/2	にぶい青色	粘土	強	無	強10~50cmの次元繊を下部に含む。強分、瓦片を少量含む。	
	I-o	10Y4/1	灰色	粘土	有	無	上面に地盤食害あり。強1~5cmの繊を少量含む。強分、瓦片を少量含む。	
	I-p	3YV2	褐色オーブン	粘土	強	やや有	高化度を多量に含む。弱10~30cmの繊を少量含む。	
	I-q	2.5Y3/1	黑褐色	シルト質粘土	有	無	植物を多量に含む。弱10~30cmの繊を少量含む。	
	I-r	10Y4/5	灰褐色	泥質シルト	強	無	強2~10cmの繊、強、高化度を少量含む。	
	I-s	10Y4/7	黑褐色	シルト	有	無	強2~10cmの繊を少量含む。強分を多量に含む。瓦片、礫岩を含む。	
	I-t	10Y4/6	10Y4/7	シルト	やや有	無	弱2~5cmの繊を少量含む。	
	I-u	10Y4/5	にぶい黃褐色	シルト	やや有	無	弱1~5cmの繊を少量含む。	
	I-v	10Y4/3	黒褐色	シルト	やや有	無	強分を少量含む。	
	I-w	10Y4/2	灰褐色地帯	シルト	やや有	無	強分、成層を少量含む。	
	I-x	2.5Y5/2	褐褐色	シルト	やや有	無	弱1~5cmの繊を少量含む。	
	I-y	10Y4/2	灰褐色地帯	シルト	やや有	無	強分を多量に含む。強1~10cmの繊、強分を少量含む。第1氷淵帶(2区)北に強分。	
	I-z	2.5Y5/2	褐褐色	粘土質シルト	有	無	強1~5cmの繊を少量含む。	
	I-a	3.5Y5/2	暗褐色	粘土	強	有	強1~5cmの繊を多量に含む。強分を少量含む。	
	I-b	10Y4/2	暗黃褐色	粘土質シルト	有	無	強2~5cmの繊、強分を少量含む。	
	I-c	-	黑色	灰	-	-	在地盤が切れる。	
山麓	I-d	-	黑色	灰	-	-	在地盤が切れる。	
KS-716	耕り方1	2.5Y5/0	暗褐色	泥質シルト	無	やや有	強2~20cmの繊、強分を少量含む。礫石。	
KS-667	耕り方2	3.5Y5/0	暗褐色	粘土	有	無	下部に砂層を多量に含む。強分を少量含む。	
KS-667	耕り方1	3.5Y4/1	暗オーブン	粘土	やや有	有	砂、強分を多量に含む。	
KS-668	耕り方1	3.5Y4/1	暗褐色	泥土質シルト	有	無	強2~10cmの繊を多量に含む。砂を多量に含む。強分を少量含む。	
KS-716	耕り方1	2.5Y5/0	暗褐色	シルト	有	無	強1~5cmの繊を多量に含む。砂を含む。	
KS-716	耕り方2	2.5Y4/1	暗オーブン	粘土質シルト	有	やや有	強化繊を少量含む。グライ。	
KS-665	耕り方1	3.5Y4/1	暗褐色	粘土質シルト	有	無	強5cmの繊、強化繊を多量に含む。	

第5表 第23次調査1区土層付記表1(第13回)

園芸区	通路名	通渠 位置	上 色		土質	上性 粘粒 しょり		解 考
			ナガイ	ヒナギ		有	無	
笠置本 園	1-a	10Y30Q	黒褐色	シルト	やや有	10Y30Q黒褐色地表上層ソックロを多量に含む。根 \times 5cmの根を少量含む。土面にまだらな齊 斑(アラカツボ)あり。		
	1-b	10Y24Q	灰褐色	粘土質シルト	有	無	表面を多量に含む。鉄分、根を少量含む。第2次洗掘 \times 5cmの根を含む。	
	1-c	10Y45Q	赤-黄褐色	赤土質シルト	やや有	無	赤褐色ブロックを多量に含む。根 \times 5cmの根、鉄分、瓦片を少量含む。	
	1-d	10Y30Q	黒褐色	シルト	有	無	根 \times 1-3cmの根、鉄分、根、砂粒を少量含む。大半時代の瓦片が出土。	
	1-e	2.5Y50	灰褐色	シルト・粘土質シルト	有	無	根、鉄分、化粧土を少量含む。	
	1-f	2.5Y50	灰褐色	シルト・粘土質シルト	有	無	有(赤褐色化粧土を多量に含む)。根 \times 1-4cmの根、鉄分、瓦片を少量含む。	
	1-g	2.5Y50	灰褐色	シルト・粘土質シルト	有	無	根 \times 5cmの根、鉄分を多量に含む。瓦片を含む。	
	1-h	0.9Y40Q	灰褐色	シルト・粘土質シルト	有	やや有	根 \times 1-2cmの根、鉄分、黄褐色粘土ブロックを多量に含む。瓦片を多量に含む。	
	1-i	2.5Y50	黒褐色	シルト	有	無	有(赤褐色化粧土を含む)。根 \times 1-5cmの根、鉄分、瓦片、瓦片を含む。	
	1-j	10Y30Q	灰褐色	シルト	無	無	瓦片を含む。	
笠置 園	II	10Y30Q	灰褐色	シルト	やや有	無	瓦片を含む。	
	III	10Y30Q	灰褐色	シルト	有	無	瓦片を含む。	
	IV	10Y30Q	灰褐色	シルト	無	無	瓦片を含む。	
	V	10Y40Q	灰褐色	シルト	有	無	瓦片を含む。	
	VI	2.5Y50	灰褐色	シルト	有	無	瓦片を含む。	
	VI	10Y30Q	灰褐色	シルト	無	無	瓦片を含む。	
	VI	10Y30Q	灰褐色	シルト	無	無	瓦片を含む。	
	VI	10Y40Q	灰褐色	シルト	有	無	瓦片を含む。	
	VI	10Y40Q	灰褐色	シルト	有	無	瓦片を含む。	
	VI	2.5Y50	灰褐色	シルト	有	無	瓦片を含む。	
鷺井	c			花崗岩片				
	b			灰	無	無	根 \times 2-3cmの根を多量に含む。瓦片を含む。	
鷺井	b			灰	有	無	根 \times 2-3cmの根を多量に含む。瓦片を含む。	
	c	2.5Y50	極灰褐色	シルト	有	無	根 \times 2-3cmの根を多量に含む。瓦片を含む。	
鷺井地	d			沙	有	無	根 \times 2-3cmの根を多量に含む。瓦片を含む。	
	e	2.5Y50	極灰褐色	沙	有	無	根 \times 2-3cmの根を多量に含む。瓦片を含む。	
KS-661	想4+	2.5Y40	暗灰褐色	砂質シルト	有	無	根 \times 2-3cmの根を多量に含む。瓦片を含む。	
	想4+	10Y40Q	暗灰褐色	砂質シルト	やや有	有	根 \times 2-3cmの根、瓦片を多量に含む。	
KS-664	想4+	2.5Y40	暗灰褐色	シルト質砂	中や有	中	根 \times 2-3cmの根、瓦片を少量含む。	
	想4+	2.5Y50	暗灰褐色	シルト質砂	中や有	中	根 \times 2-3cmの根、瓦片を少量含む。	
KS-705	想4+1	2.5Y40	灰-灰褐色	繊維シルト	無	無	根 \times 2-3cmの根を多量に含む。瓦片を含む。	
	想4+1	10Y40Q	灰-灰褐色	砂質シルト	やや有	有	根 \times 2-3cmの根を多量に含む。瓦片を含む。	
KS-753	想4+	10Y40Q	灰-灰褐色	シルト	やや有	有	根 \times 2-3cmの根を多量に含む。瓦片を含む。	
	想4+	2.5Y50	灰-灰褐色	シルト	やや有	有	根 \times 2-3cmの根を多量に含む。瓦片を含む。	
KS-759	想4+	2.5Y50	灰-灰褐色	繊維シルト	無	無	根 \times 2-3cmの根を多量に含む。瓦片を含む。	
	想4+	2.5Y50	灰-灰褐色	繊維シルト	やや有	有	根 \times 2-3cmの根を多量に含む。瓦片を含む。	
KS-773	想4+	9CY40	灰-灰褐色	砂質シルト	有	中	根 \times 2-3cmの根を多量に含む。瓦片を含む。	
	想4+	2.5Y40	灰-灰褐色	砂質シルト	有	中	根 \times 2-3cmの根を多量に含む。瓦片を含む。	
KS-790	想4+	2.5Y40	灰-灰褐色	粘土質シルト	やや有	有	根 \times 2-3cmの根を多量に含む。瓦片を含む。	
	想4+	2.5Y40	灰-灰褐色	シルト	やや有	有	根 \times 2-3cmの根を多量に含む。瓦片を含む。	
KS-796	想4+	2.5Y50	灰-灰褐色	シルト	やや有	有	根 \times 2-3cmの根を多量に含む。瓦片を含む。	
	想4+	2.5Y50	灰-灰褐色	シルト	やや有	有	根 \times 2-3cmの根を多量に含む。瓦片を含む。	

第6表 第23次調査1区土属性記表2(第14回)

調査区	立地 区分	立地 番号	直病 種類	土色	土質	上性 質	露		考
							露頭	しまり	
2 基本国	基本園	1a	IPY3/29	栗褐色	砂質シルト	無	無	無	2~15cmの縦を少含む。下部暗褐色シルト層(10Y3/4)
		1b	IPY4/29	栗褐色	シルト	やや粗	有	有	3~5cmの縦。鉄分を少含む。
		1c	SY3/1	オリーブ褐色	シルト	やや粗	有	有	(2~3cm)の縦。鉄分を少含む。
		1d	IPY4/2	栗褐色	シルト粘土質	やや粗	有	有	黄褐色粘土コックを多量に含む。3~5cmの縦。鉄分、頁岩片を少含む。
		1e	2SY4/2	暗灰褐色	粘土シルト	やや粗	有	有	砂を多量に含む。3~12cmの縦。鉄分を少含む。
		1f	IPY4/3	栗褐色	腐葉土質	有	無	無	栗褐色シルトブロック (2 SY5/3)を多量に含む。腐葉、植物を含む。
		1g	IPY4/3	栗褐色	粘土	有	無	無	同構造を示す。北東では中國に少含む。
		1h	IPY4/2	栗褐色	シルト	有	やや粗	有	(1~3cm)の縦。頁岩片を少含む。
		1i	2SY3/2	栗褐色	粘土	有	やや粗	有	3~10cmの縦。板状、板片を少含む。
		1j	IPY4/2	栗褐色	粘土	有	やや粗	有	同上。
3 KTS-100	基本園	1k	SGY4/4	暗オリーブ褐色	シルト粘土質	強	やや粗	有	黄褐色粘土ブロック。栗褐色粘土ブロックを多量に含む。2~5cmの縦。並を含む。上部に花崗岩片あり。
		1l	2SY4/4	暗緑褐色	粘土	強	やや粗	有	25~35cmのシルト。酸化鉄、黒鉛を少含む。北東では(1~3cm)の縦。
		1m	2YM4	灰色	粘土	強	無	無	15~20cmのシルト。頁岩片が少含む。生垣内に25cm。
		1n	2SY4/1	暗緑褐色	粘土シルト	やや粗	有	有	1~3cmの縦を含む。
		1o	SGY4/4	オリーブ褐色	砂	強	有	有	1~10cmの縦。鉄分を少含む。通山。
		1p	2SY4/1	オリーブ褐色	シルト	有	無	無	紅化鉄、頁岩片、鉄分、頁岩片を含む。
		1q	IPY3/2	栗褐色	砂質シルト	無	無	無	2~3cmの縦を含む。
		1r	IPY4/4	栗褐色	シルト	やや粗	無	無	2~15cmの縦。葉巻片を含む。瓦片を少含む。
		1s	IPY3/3	ぶどう葉色	シルト	無	無	無	上部に3~5cmの縦を少量に含む。
		1t	IPY4/5	栗褐色	砂質シルト	無	無	無	3~10cmの縦を含む。
塑地土	塑地土	1u	IPY4/6	栗褐色	シルト	有	無	無	2~3cmの縦を含む。通山。
		1v	IPY4/4	栗褐色	砂質シルト	無	無	無	3~10cmの縦を含む。
		2b	IPY4/4	栗褐色	シルト	やや粗	有	有	1~10cmの縦を少含む。通山に花崗岩片がある。鉄分を少含む。
		2c	IPY4/3	ぶどう葉色	シルト	やや粗	有	有	1~10cmの縦を少含む。通山に花崗岩片がある。頁岩片を含む。
		2d	IPY4/2	ぶどう葉色	シルト	やや粗	有	有	1~10cmの縦を少含む。通山に花崗岩片がある。頁岩片を含む。
KTS-500	壤土土	2e	IPY4/2	ぶどう葉色	シルト	やや粗	有	有	1~10cmの縦を少含む。通山に瓦を含む。
		2f	IPY4/1	栗褐色	シルト	やや粗	有	有	1~10cmの縦を少含む。通山に瓦を含む。
KTS-1000	壤土土	2g	IPY4/1	栗褐色	シルト	やや粗	有	有	1~10cmの縦を少含む。通山に瓦を含む。
		2h	IPY4/1	栗褐色	シルト	やや粗	有	有	1~10cmの縦を少含む。通山に瓦を含む。

第7表 第23次調査2・3区土層注記表（第15図）

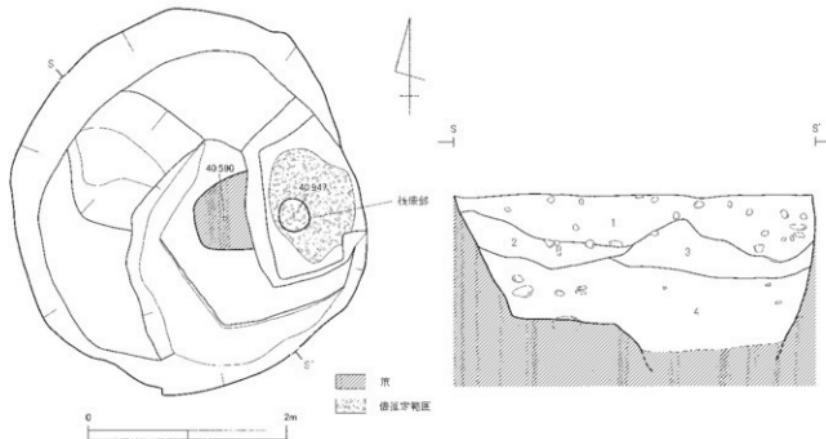
を含む。KS-699より古い。

- ・KS-702ピット 調査区西部で検出した。平面形は楕円形である。規模は東西66cm、南北55cmである。径4~16cmの礫を含む。
- ・KS-703ピット 調査区中央部で検出した。平面形は不整円形である。規模は東西63cm、南北55cmである。径4~18cmの礫を含む。
- ・KS-704ピット 調査区中央部で検出した。平面形は楕円形である。規模は東西46cm、南北37cmである。径5~10cmの礫、瓦片が出土した。
- ・KS-705木樁 調査区中央部で検出した。南北方向に延びる木樁で、上端幅は25cmである。検出した長さは8.1m、方向はN-20°-Wである。木樁は上部が削平され、底板と側板の一部のみ残存し、底板幅は18cmである。掘り方の上端幅30cm、下端幅24cmである。KS-792石組溝の掘り方と交差しているが、溝との切り合いは確認されなかった。KS-792石組溝と直交しており、I区南西部の石組溝や溝跡と一連のものである可能性も考えられる。瓦が出土した。
- ・KS-706礎石 調査区中央部で検出した。平面形は円形である。加工のない扁平な川原石で長軸37cm、短軸31cmである。掘り方は東西49cm、南北45cmである。根固め石は確認されなかった。礎石上端の確認レベルは41.872mである。
- ・KS-707柱穴 調査区中央部で検出した。平面形は方形である。規模は東西78cm、南北70cmである。長軸23cm、短軸18cmと長軸31cm、短軸25cmの柱痕跡2基を確認した。柱痕跡には切り合はみられず、2つ同時に存在し、どちらかが柱の補強材であると考えられる。KS-708より新しい。
- ・KS-708土坑 調査区中央部で検出した。平面形は楕円形である。規模は東西42cm、南北67cm以上である。瓦が出土した。KS-707より古い。KS-695とは接しているが新旧関係は不明である。
- ・KS-709土坑 調査区中央部で検出した。平面形は擾乱により切られているが、楕円形と推測される。規模は東西20cm以上、南北65cm以上である。径10~20cmの礫を含む。内部に炭の詰まったピット1基を確認した。
- ・KS-710土坑 調査区中央部で検出した。平面形は擾乱により切られているが、楕円形と推測される。規模は東西27cm以上、南北45cm以上である。
- ・KS-711ピット 調査区中央部で検出した。平面形は円形である。規模は径25cmである。KS-695溝跡より新しい。
- ・KS-712土坑 調査区北東部で検出した。平面形は不整円形である。規模は東西170cm、南北250cm、深さ30cmである。底面に径5~20cmの礫が多数みられる。KS-713・714より古い。KS-715より新しい。出土遺物は肥前染付皿片、大堀相馬灰釉碗片、瓦である。
- ・KS-713土坑 調査区北東部で検出した。平面形は擾乱により切られているが、方形と推測される。規模は東西28cm以上、南北60cmである。径7~21cmの礫を含む。KS-712より新しい。
- ・KS-714土坑 調査区北東部で検出した。平面形は擾乱により切られているが、方形と推測される。規模は東西54cm、南北48cmである。径5cmの礫を含む。KS-712より新しい。
- ・KS-715土坑 調査区北東部で検出した。平面形は方形である。規模は東西160cm、南北105cm、深さ18cmである。径5~20cmの礫を含む。KS-712より古い。17世紀から18世紀の白磁皿2点と瓦が出土した。
- ・KS-716集石 調査区北東部で検出した。平面形は楕円形である。規模は東西83cm以上、南北54cmである。径5~15cmの礫を多数含む。KS-717より古い。プラン上で18世紀代の廻前糸目徳利片、瓦が出土した。
- ・KS-717礎石跡 調査区北東部で検出した。平面形は不整円形である。規模は東西90cm、南北150cmである。径110cmの礎石抜取り穴を確認した。根固め石の大きさは径5~25cmの円礫である。KS-718より古く、KS-716より新しい。瓦が出土した。
- ・KS-718土坑 調査区北東部で検出した。平面形は不整円形である。規模は東西76cm以上、南北66cm以上である。径5~25cmの礫を多数含む。KS-717より新しい。瓦が出土した。礎石もしくは集石の可能性が考えられる。

- ・KS - 719礎石跡 調査区東部で検出した。平面形は北東部が調査区外となっているが、円形と推測される。規模は東西100cm、南北147cmである。根固め石の大きさは径5～35cmの円錐である。礎石の抜取り穴は確認されなかった。瓦が出土した。
- ・KS - 720柱穴 調査区中央部で検出した。平面形は円形である。規模は東西50cm、南北44cmである。径18cmの柱痕跡を確認した。掘り方には径5～30cmの礫を含む。瓦が出土した。
- ・KS - 721ピット 調査区部で検出した。平面形は搅乱により切られているが、円形と推測される。規模は東西13cm以上、南北40cm以上である。KS - 722より新しい。
- ・KS - 722溝跡 調査区中央部で検出した。東西方向に延びる溝跡で、上端幅11～20cmある。検出した長さは125cm、方向はN-68°-Eである。KS - 721・723・725より古い。KS - 695と接続する可能性が考えられる。
- ・KS - 723土坑 調査区中央部で検出した。平面形は円形である。規模は東西45cm、南北40cmである。
- ・KS - 724柱穴 調査区中央部で検出した。平面形は円形である。掘り方の規模は東西45cm、南北40cmである。長軸25cm、短軸20cmの柱が一部残存する柱痕跡を確認した。
- ・KS - 725柱穴 調査区中央部で検出した。平面形は円形である。掘り方の規模は東西41cm、南北35cmである。径20cmの柱が一部残存する柱痕跡を確認した。
- ・KS - 726柱穴 調査区中央部で検出した。平面形は不整円形である。掘り方の規模は東西40cm、南北34cm、径17cmの柱が一部残存する柱痕跡を確認した。
- ・KS - 727柱穴 調査区中央部で検出した。平面形は不整円形である。掘り方の規模は東西63cm、南北53cmである。径20cmの柱が一部残存する柱痕跡を確認した。掘り方には長軸7cm、短軸5cmの石を含む。
- ・KS - 728柱穴 調査区中央部で検出した。平面形は梢円形である。掘り方の規模は東西35cm、南北50cmである。長軸33cm、短軸27cmの柱が一部残存する柱痕跡を確認した。
- ・KS - 729炉跡 調査区中央部で平面の一部を検出した。平面形は大部分を搅乱により切られているが、円形と推測される。規模は東西90cm、南北40cmである。炉床に多量の焼上がりがみられた。
- ・KS - 730柱穴 調査区中央部で検出した。平面形は不整円形である。掘り方の規模は東西57cm、南北51cmである。径21cmの柱が一部残存する柱痕跡を確認した。径5～20cmの礫を含む。
- ・KS - 731柱穴 調査区東部で検出した。平面形は円形である。掘り方の規模は東西80cm、南北60cmである。径25cmの柱が一部残存する柱痕跡を確認した。
- ・KS - 732柱穴 調査区東部で検出した。平面形は円形である。掘り方の規模は東西43cm、南北40cmである。長軸35cm、短軸33cmの柱痕跡を確認した。
- ・KS - 733柱穴 調査区東部で検出した。平面形は円形である。掘り方の規模は東西35cm、南北25cm以上である。径18cmの柱根が残存する柱痕跡を確認した。
- ・KS - 734溝跡 調査区東部で検出した。東部が調査区外、南部が搅乱に切られている。上端幅25～150cm以上である。検出した長さは東西2.9m、南北1.3m、方向はN-68°-Eである。プランが東側に広がる。KS - 735・737より古い。染付碗や瓦が出土した。
- ・KS - 735土坑 調査区東部で検出した。平面形は搅乱により切られているが、梢円形と推測される。規模は東西70cm以上、南北80cm以上である。径5～23cmの礫を含む。
- ・KS - 736礎石 調査区東部で検出した。加工のないやや変形した四角い川原石で、長軸10cm以上、短軸25cm以上である。掘り方と根固め石は確認されなかった。
- ・KS - 737柱穴 調査区東部で検出した。平面形は円形である。掘り方の規模は東西48cm、南北54cm以上である。径13cmの柱痕跡を確認した。柱痕跡は空洞になっていた。瓦片が出土した。
- ・KS - 738柱穴 調査区東部で検出した。平面形は梢円形である。掘り方の規模は東西36cm、南北34cmである。径

19cmの柱の一部が残存する柱痕跡を確認した。

- ・KS-739ピット 調査区東部で検出した。平面形は円形である。規模は東西50cm、南北47cmである。KS-741より古い。
- ・KS-740井戸跡 調査区東部で検出した。平面形は掻乱（第21次調査でKS-592溝跡としたが、今回の調査で掻乱として扱う）により、上部約半分が失われているが、円形と推測される。規模は東西5m以上、南北4.4mである。掘り方からKS-746井戸跡に切られるが、井戸本体の切り合いはない。KS-742より新しい。
- ・KS-741集石 調査区東部で平面のみ検出した。扁平な加工のない川原石で、径約25~40cmの6石が確認された。KS-740井戸跡の北側に配されていることから、KS-740井戸跡にかかる構造である可能性が考えられる。KS-739より新しい。
- ・KS-742土坑 調査区東部で検出した。平面形は大部分を掻乱により切られているが、梢円形と推測される。規模は東西25cm以上、南北80cm以上である。KS-740・746井戸跡より古く、KS-743より新しい。
- ・KS-743ピット 調査区東部で検出した。平面形は梢円形である。規模は東西17cm以上、南北30cmである。KS-742より古い。
- ・KS-744土坑 調査区東部で検出した。平面形は不整円形である。規模は東西74cm、南北62cm、深さ25cmである。底面に径20cm以上の川原石を確認した。
- ・KS-745土坑 調査区中央部で検出した。平面形はKS-746井戸跡に切られているが、円形と推測される。規模は東西82cm以上、南北46cm以上である。径15cmの礫を含む。KS-746井戸跡より古い。
- ・KS-746 井戸跡 調査区中央部で検出した。平面形は円形である。規模は東西3.5m、南北3.85m、深さ1.6m以上である。調査深度の底面で掘り方と本体との間が段になっており、調査深度の底面で掘り方の南側に寄って井戸本体のプランを確認した。本体は略方形を呈している。調査を行った深さでは井戸枠は確認されなかった。段の北西側に一



調査区 測点番号	測点 名	土壤 層位	土 色		土質	十代	著	考
			土門部	土色				
KS-746	埋上1	10YR2/4	灰黄褐色	動土質シルト	有	しまり 有 有	(3.5)~10cmの礫を多量に含む。細粒物、砂を多量に含む。化粧灰土、灰、瓦片を少量含む。	
	埋下5	2.5Y1/3	黑褐色	堆土質シルト	有	無	(3.5)~10cmの礫を少量含む。砂を多量に含む。灰化灰土を多量に含む。灰、鐵分、木製品を少量含む。ややグレイしている。	
	埋下3	5Y1/0	オリーブ黒色	堆土質シルト	有	無	(3)~7cmの礫、灰を含む。木製品、鐵分を少量含む。砂を多量に含む。ややグレイしている。	
	埋下4	2.5Y1/4	灰黑色	シルト質粘土	有	無	(3)~7cmの礫を少量含む。下層に砂を多量に含む。ややグレイしている。木片、漆油、鐵分を多量に含む。	

第17図 1区KS-746井戸跡平・断面図 (1/50)

段低くなっている箇所が確認され、井戸として使用しなくなったあと、井戸枠を抜く際に掘り下げたことによるものと推測される。

埋土の2層上面では、面取りの加工がみられる長軸約50cm、短軸約28cmの方形の石とその周囲に環状に配された加工のない川原石13石を検出した。この配石については井戸を埋める際に行った井戸鉢などの祭祀遺構であると考えられる。埋土1層は山土で埋められていた。埋土2～4層以下の埋土からは後述する遺物のほかに、俵が残る部分を中心に押しつぶされた状態で検出した。また、笊とみられる竹を編んだものも検出した。埋土から出土した磁器は18世紀のものが中心である。陶器は大堀相馬産の碗や皿、仏壇器のほか、寛保2年(1742)の墨とみられる京焼肩手筒茶碗(第24図3)、鳴海織部皿(写真図版16-108)、瀬戸鉄松蓋物(第25図15)など18世紀のものが中心であるが、19世紀前葉の大堀相馬産の鍋も出土しており(第24図11)、井戸使用時期の下限が19世紀代になるとを考えられる。陶磁器以外では、土師質・瓦質土器、煙管、古錢、砥石などのほか、木筒をはじめ漆器椀、下駄、箸、樽や桶の部材、栓、井戸支柱材(第18図4)などの木製品が多数出土している。出土した木筒のうち、樺森家6代当主である「樺森与左衛門」と記されたものが3点確認された(第35図1～3)。KS-740・742・745・757より新しい。なお、第21次調査では本遺構をKS-595土坑として扱ったが、今回の調査で井戸跡であることが確認された。

・KS-747柱穴 調査区中央部で検出した。平面形は円形である。掘り方の規模は東西40cm、南北42cmである。径23cmの柱の一部が残存する柱痕跡を確認した。

・KS-748柱穴 調査区中央部で検出した。平面形は円形である。掘り方の規模は径22cmで、径15cmの柱痕跡を確認した。

・KS-749ピット 調査区中央部で検出した。平面形は円形である。規模は径40cmで、径19cmの柱痕跡を確認した。瓦が出土した。

・KS-750土坑 調査区中央部で検出した。平面形は不整円形である。規模は東西85cm、南北90cmである。長軸60cm、短軸55cmの柱痕跡を確認した。

・KS-751溝跡 調査区南部で検出した。南北方向に延びる溝跡で、KS-746井戸跡に直交するように東西方向にも延び、T字型を呈する。上端幅20～33cmである。検出した長さは南北方向4.39m、東西方向1.6m、方向はN-28°～Wである。KS-746より古く、KS-752より新しい。瓦片が出土した。

・KS-752柱穴 調査区南部で検出した。平面形はベルトとKS-751溝跡により切られているが、楕円形と推測される。掘り方の規模は東西35cm以上、南北55cmである。長軸25cm、短軸15cmの柱痕跡を確認した。

・KS-753柱穴 調査区南部で検出した。平面形は円形である。掘り方の規模は東西35cm以上、南北37cmである。長軸20cm、短軸15cm以上の柱痕跡を確認した。

・KS-754柱穴 調査区南部で検出した。平面形は円形である。掘り方の規模は東西16cm、南北18cmである。径10cmの柱の柱痕跡を確認した。

・KS-755柱穴 調査区南部で検出した。平面形は不整形である。掘り方の規模は東西49cm、南北30cmである。径23cmの柱の一部が残存する非常に太い柱痕跡を確認した。掘り方中に径5～15cmの礫を含む。

・KS-756土坑 調査区南部で検出した。平面形は搅乱により切られているが、方形と推測される。規模は東西83cm、南北93cm以上である。堆積土中に径5～10cmの礫を含む。

・KS-757土坑 調査区南部で検出した。平面形はKS-746井戸跡に切られているが、不整円形と推測される。規模は東西38cm以上、南北70cm以上である。堆積土中に径6～20cmの礫を含む。

・KS-758ピット 調査区南部で検出した。平面形は搅乱により切られているが、円形と推測される。規模は東西10cm以上、南北40cm以上である。

・KS-759溝跡 調査区南部で検出した。東西方向に延びる溝で、上端幅23～33cmである。検出した長さは153cm、方向はN-68°～Eである。KS-751より新しい。東側で接しているKS-756土坑との関係は不明である。

- KS - 760柱穴 調査区南部で検出した。平面形は方形である。掘り方の規模は東西36cm、南北40cm、深さ10cmである。径23cmの柱痕を確認した。径2~6cmの礫を含む。
- KS - 761ピット 調査区南部で検出した。平面形は円形である。規模は径30cmである。瓦が出土した。
- KS - 762柱穴 調査区南部で検出した。平面形は梢円形である。掘り方の規模は東西43cm、南北49cmである。径15cmの柱痕が残存する柱痕跡を確認した。柱痕跡は空洞になっていた。径5~20cmの礫を含む。
- KS - 763土坑 調査区南部で検出した。南側の段の下に延びるが、平面形は不整円形と推測される。規模は東西64cm、南北93cm以上である。中心部から径10~15cmの礫や瓦片が出土した。
- KS - 764土坑 調査区南部で検出した。平面形は一部が未調査部分に延びているので確認できないが、不整形と推測される。規模は東西58cm以上、南北55cm以上である。KS - 765溝跡より古い。
- KS - 765溝跡 調査区南部で検出した。東西方向に延びる溝跡で、上端幅は18cmである。検出した長さは90cm、方向はN-72°-Eである。KS - 764より新しい。溝の上面で丸瓦3個体が凹面を上にして横並びに敷かれた状態で確認された。溝にかかる施設の可能性が考えられる。KS - 763より古い。
- KS - 766ピット 調査区南部で検出した。平面形は方形である。規模は東西30cm、南北27cmである。径3~5cmの礫を含む。
- KS - 767土坑 調査区中央部で検出した。平面形は一部が未調査部分にあたるので確認できないが、梢円形と推測される。規模は東西50cm以上、南北40cm以上である。南側に段差を確認したが、段差より新しい19世紀代の構造であると考えられる。
- KS - 768カマド跡 調査区西部で検出した。平面形は長方形で、東西辺と南辺を横板で囲まれた区画と、その北側に接続する扁平な石材が残るカマド本体部からなる。長方形の区画部は上部が削平され、残存している底部のみを検出した。規模は横板で囲まれた部分が東西2.8m、南北1.15m、石列部分が南北1.2m、方向はN-15°-Wである。横板は北辺以外の三辺で確認され、内側には横板を支える径12cm程の丸杭が9本打ち込まれている。杭は南辺が両角を含め5本、東西辺は各3本配置されている。北東と南東角に杭はない。北辺に杭はなく、土壁であった可能性が考えられる。床面には一面に炭が堆積しており、上面には加工のない径12~25cmの川原石や桟瓦がみられる。北側には幅50~55cm、長軸24~58cmの切石が3石並んだ状態で検出し、掘り方は16cmである。各石材は石材の長軸方向に浅く凹んだ溝状になっている。南東隅の横板外側には東西70cm、南北35cmの方形の硬化面が、南西側の横板外側に接続するような板材が確認された。出土遺物は炭屑より19世紀前葉の瀬戸美濃産の染付端反陶や桟瓦などが出土してお



調査区	番号	地質 層位	土 色	土質	土性		腐
					土色No.	土色	
1	KS - 768	地盤	7.5Y40	灰色	礫の層	無	土面上に板材、板瓦片がのる。
		板杭1	2.5Y31	赤褐色	無	有	径1~3cmの礫、瓦を含む。築方の可能性もあり。
		板杭2	2.5Y32	赤褐色	無	有	径2~4cmの礫、瓦、瓦片を含む。
		板杭3	2.5Y31	赤褐色	無	有	瓦を含む。

第18図 1区KS-768カマド跡平・断面図 (1/50)

り、造構時期の下限が19世紀代になると考えられる。なお、遺構の類例については、まとめて後述するが、兵庫県伊丹市の伊丹郷町第164次・175次調査で検出された酒造用と考えられるカマド跡や大阪府大阪市の瓦造小学校内の調査で検出されたカマドと構造が類似している。また、カマド跡の南側で調査区を東西に横断し、北側が一段低くなる段差を確認した。この造構の北東側には炭を含む焼土の分布を2箇所検出した。

・KS - 769土坑 調査区西部で検出した。平面形は円形である。規模は径70cmである。径3~15cmの礫、瓦片が出土した。KS - 768・770より新しい。

・KS - 770土坑 調査区西部で検出した。平面形は不整形である。規模は東西35cm、南北58cm以上である。径15cmの礫、木片を含む。KS - 769より古い。

・KS - 771土坑 調査区西部で検出した。平面形は梢円形である。規模は東西50cm、南北30cmである。瓦が出土した。

・KS - 772石組溝 調査区西部で検出した。南北方向に延びる石組溝で、上端幅60~85cmである。検出した長さは8.45m、方向はN-38°-Wである。加工のない20~35cmの川原石を縁石として据えている。溝の北側は段差を境に削平されている。KS - 773・774より新しい。北側で検出したKS - 699溝跡と接続する可能性が考えられる。瓦が出土した。

・KS - 773土坑 調査区西部で検出した。平面形は大部分をKS - 772・774溝跡に切られているため不明である。規模は東西30cm以上、130cm以上である。KS - 772・774溝跡より古い。

・KS - 774溝跡 調査区西部で検出した。南北方向に延びる溝跡で、上端幅16~30cmである。検出した長さは4.27m、方向はN-25°-Wである。北側は段差を境に削平されている。KS - 772より古く、KS - 773より新しい。瓦が出土した。

・KS - 775集石 調査区西部で検出した。平面形は不整円形である。規模は東西120cm、南北115cmである。径4~40cmの礫を含む。礫石の可能性が考えられる。

・KS - 776礫石 調査区西部で検出した。平面形は方形である。規模は東西20cm、南北10cmである。KS - 668礫石に切られる。

・KS - 777柱穴 調査区西部で検出した。平面形は円形である。掘り方の規模は東西25cm、南北35cmである。径15cmの柱痕跡を確認した。

・KS - 778石列 調査区西部で検出した。南北方向に延びる石列で、幅25~30cmである。検出した長さは164cm、方向はN-18°-Wである。加工のない15~30cmの川原石を並べて置いて布石としている。石は他の石列とは異なり、幅、高さともにほぼ一定に敷かれており、造構の形状から土台をのせる施物基礎の可能性が考えられる。

・KS - 779柱穴 調査区西部で検出した。平面形は円形である。掘り方の規模は径50cmである。径30cmの柱痕跡を確認した。径6~10cmの礫を含む。KS - 778石列より古い。

・KS - 780土坑 調査区西部で検出した。平面形は円形である。規模は東西55cm、南北45cmである。径3~20cmの礫を多数含む。

・KS - 781集石 調査区内部で検出した。平面形は円形である。規模は東西77cm、南北70cmである。径5~25cmの礫を多数含む。礫石の可能性が考えられる。

・KS - 782石組溝 調査区西部で検出した。東西方向に延び、調査区西壁付近で南に屈曲する。上端幅1~1.5m、東西約2mにわたり溝と直交して並べられた板材が覆う。検出した長さは3.7m、深さは30cm以上、方向はN-116°-Wである。板材の下には加工のない10~20cmの川原石と面取りした石や角礫を縁石として据えている。溝の掘り方が確認され、幅は1.2~1.8mである。掘り方より17世紀中葉の肥前染付皿や紙石（第34図5）が出土した。

・KS - 783集石 調査区南部で検出した。平面形は円形である。規模は東西42cm、南北40cmである。風化礫を含む。KS - 782石組溝より新しい。

・KS - 784土坑 調査区南部で検出した。平面形はKS - 782石組溝に切られているが、円形と推測される。規模は東

西20cm以上、南北50cm以上である。KS-782石組溝より古い。

・KS-785礎石 調査区南部で検出した。平面形は楕円形である。掘り方の規模は東西35cm、南北40cm以上である。径20cmの加工のない川原石を礎石とする。

・KS-786集石 調査区南部で検出した。平面形は円形である。規模は東西55cm、南北50cmである。径10~30cmの礎多数含む。礎石の可能性が考えられる。

・KS-787ピット 調査区南部で検出した。平面形は楕円形である。規模は東西30cm、南北25cmである。KS-789より新しい。

・KS-788集石 調査区南部で検出した。平面形は楕円形である。規模は東西90cm、南北72cmである。径5~15cmの礎を多数含む。KS-787より古い。

・KS-789集石 調査区南部で検出した。平面形は不整円形である。規模は東西42cm、南北40cmである。風化礎を含む。

・KS-790石組溝 調査区南部で検出した。南北方向に延びる石組溝で、上端幅は26~35cm、深さ19cmである。検出した長さは2.3m、方向はN-23°-Wである。加工のない25cmと40cmの2石のみが残存している。東側に縁石の抜取り穴と考えられるピット3基が確認された。

・KS-791土坑 調査区南部で検出した。平面形は不整形である。規模は東西2.6m、南北2.6mである。内部からは多量の瓦の小片が敷き詰められた状態で出土した。KS-772-782-790-792と接続しており、石組溝や溝跡と一連の排水にかかわる遺構の可能性が考えられる。19世紀前葉の产地不明の大型爛壊利が出土した。

・KS-792石組溝 調査区南部で検出した。南北方向に延びる石組溝で、上端幅は27~40cm、深さ14cmである。検出した長さは2.3m、方向はN-57°-Eである。南側の縁石は加工のない長軸22~35cmの川原石が長軸方向を溝の方向に並べて据え、北側には小さな石が並ぶように立在している。溝の掘り方が確認された。埋土は砂層と粘土層の互層となっている。KS-705木樁と接続する可能性が考えられる。

・KS-793ピット 調査区南部で検出した。平面形は円形である。規模は径18cmである。瓦片が出土した。KS-792石組溝の掘り方より新しい。

・KS-794ピット 調査区南部で検出した。平面形はベルトに切られているが、ほぼ円形であった推測される。規模は東西30cm以上、南北50cm以上である。径15cmの礎を多数含む。KS-792石組溝より新しい。

・KS-795土坑 調査区南部で検出した。平面形は不整円形である。規模は東西46cm、南北56cmである。径5~20cmの礎多数含む。

・KS-796土坑 調査区南部で検出した。平面形はKS-772-790に切られているため不明である。規模は東西2.7m以上、南北1.1m以上である。瓦片や径7cmの丸杭が出土した。

・KS-797柱穴 調査区南部で検出した。段の上面を掘り込んでおり、検出面はV層上面である。平面形は円形である。掘り方の規模は東西35cm、南北40cmである。長軸20cm、短軸15cmの柱痕跡を確認した。

・KS-798土坑 調査区南部で検出した。段の上面から掘り込んでおり、検出面はV層上面である。平面形はKS-681池状遺構に切られているが、南壁断面にみられるプランから円形であった推測される。規模は東西98cm以上、南北25cm以上、深さ70cm以上である。KS-681池状遺構より古い。

・KS-799井戸跡 調査区南東部でKS-681池状遺構の西壁前面で検出された。東西10cm以上、南北50cm以上の井戸枠の横板がL字状に確認された。KS-740-746井戸跡よりも小型の井戸とみられる。埋土から瓦が出土した。

・KS-802柱穴 調査区南部で検出した。平面形は円形である。長軸24cm、短軸21cmの瓦の一部残存する柱痕跡を確認した。

・KS-803ピット 調査区北壁前面で検出した。規模は東西28cm、深さ14cmである。

・KS-804ピット 調査区北壁前面で検出した。規模は東西20cm、深さ20cm以上である。

・KS-805ピット 調査区西壁面で検出した。規模は東西18cm、深さ20cm以上である。

(2) 2区

・KS-687溝跡 調査区中央で検出した。東西方向に延びる石組溝で、上端幅86cm、下端幅47cm、深さ34cm以上である。検出した長さは3.5m、方向はN-77°-Eである。加工のない20~45cmの川原石を長軸を横にして二段に重ねて練石として据えている。溝の内部には砂が堆積し、多量の瓦片が含まれていた。1区KS-690石列とほぼ平行に並び、清水門に近い位置で検出していることから、屋敷境となる石組溝である可能性も考えられる。肥前白磁と考えられる碗や土器質土器皿が出土した。

・KS-806ピット 調査区南壁断面で検出した。規模は東西50cm、深さ16cm以上である。

(3) 3区

・KS-800石組溝 調査区中央で検出した。調査区を東西方向に延びる石組溝で、上端幅65~70cmである。検出された長さは1.93m、方向はN-23°-Eである。加工のない25~35cmの川原石を練石として据えている。東壁付近で北へ方向を変えている。溝の埋土から18世紀後葉の大堀相馬の土瓶や瓦、溝の北側掘り方から瓦が出土した。

・KS-801暗渠状遺構 調査区北側で検出した。多量の川原石を詰めている。上端幅は40cmである。KS-800石組溝と同じ方向に並ぶと考えられる。また、暗渠を埋め立てた上部、Ⅲ層上面から樋森家の家紋である二つ丁子文の軒桟瓦1点出土した。

【第1遺構面】

1区で基本層のⅡ層とした花崗岩の碎石層直下で、Ⅲ層上面で検出された近代の遺構面である。出土遺物には19世紀代の陶磁器片などが出土している。第1遺構面の上駆は樋森家が城内から市内に移転した明治10年(1877)頃、下限は招魂社(現宮城県護國神社)の参道整備が行われた明治30年代後半頃と考えられる。

なお、第21次調査で検出したKS-589~592についてはⅡ層上面から掘り込まれていたので遺構から除いた。また、KS-593についても屋敷跡の段差と理解し、個別の遺構名として使用していくことにした。

(i) 1区

・KS-661溝跡 調査区北部で検出した。1区を南北方向に継ぎ、北側で東に屈曲する。上端幅45cm、下端幅35cm、深さ8cmである。検出した長さは約18.2m、方向はN-26°-Wである。溝の内部からは花崗岩の碎石を詰め込まれた状態で出土した。北側の溝の底面で径10cmの丸杭を2本確認した。溝の南側でT字状にはほぼ直交し、西に延びる溝も検出した。検出した長さは2.8mで、方向はN-118°-Wである。KS-663・684より新しい。遺物は瓦のほか、銅版転写の瀬戸美濃染付爛健徳利(第23図15)、19世紀前葉と考えられる白磁皿片、染付皿片が出土した。

・KS-662土坑 調査区南西部で検出した。平面形は正方形で、KS-633を切って掘り込まれている。規模は一边が1m、深さ14cmである。花崗岩片や石灰、木片などを含む。底面は硬くしまっている。染付長皿、瓦質土器鉢、瓦が出土した。

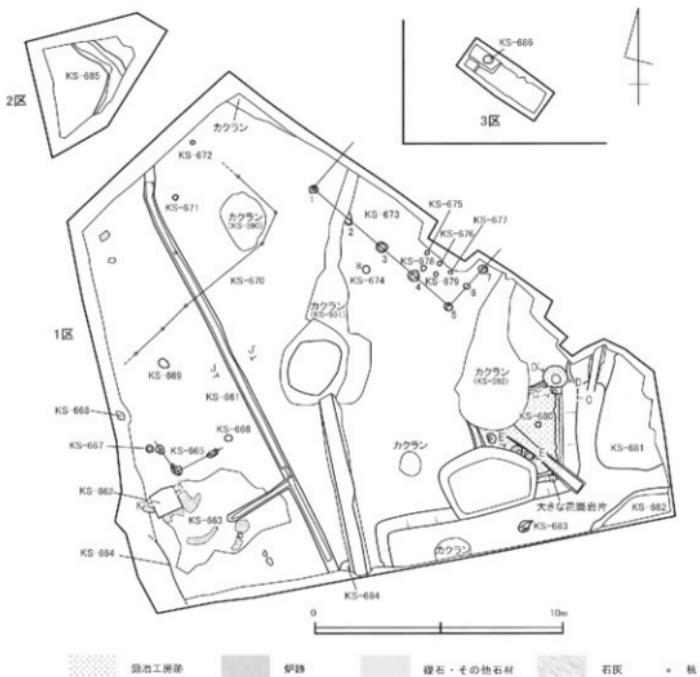
・KS-663硬化面 調査区南西部で検出した。平面形は不整形で、東西約5.2m、南北約3.2mの範囲でみられた。厚さ4cmほどで、部分的に硬化した石灰が貼りついている状況で確認された。KS-662と関連する可能性が考えられる。面の直下で瓦片や木片が出土した。

・KS-664溝跡 調査区南西部で検出した。大部分が調査区外となっており、検出した長さは2.7mで、方向はN-32°-Wである。花崗岩片や瓦、ガラス瓶が出土した。2区のKS-685溝跡と関連する可能性が考えられる。

・KS-665柱立柱建物跡 調査区西部で検出した。東西1間(約1.7m)、南北1間(1.2m)である。方向は南東邊でN-60°-Eである。柱穴掘り方は径40~55cmの不規則円形である。柱穴の中には根石と考えられる花崗岩片が確認された。柱痕跡は確認できなかった。

・KS-666ピット 調査区西部で検出した。平面形は梢円形である。規模は東西30cm、南北25cmである。

- ・KS-667ピット 調査区西部で検出した。平面形は隅丸方形である。規模は東西30cm、南北25cmである。底面で辺15cmの略方形の川原石が確認された。
- ・KS-668礎石 調査区西部で検出した。平面形は不整円形である。加工のない川原石で、長軸50cm、短軸30cmである。礎石の掘り方は調査区西壁断面で確認でき、南北136cm、深さ20cm以上である。
- ・KS-669ピット 調査区西部で検出した。平面形は不整円形である。規模は東西35cm、南北45cmである。ピットの中には花崗岩片が確認された。KS-665掘立柱建物跡の柱穴と類似しているので、関連する可能性が考えられる。
- ・KS-670杭列 調査区北部で検出した。6本の杭が東西方向に延び、東側で北西に屈曲する杭列である。隣り合う杭の間隔は1.4~4mである。方向はN-48°-Eである。杭は径10cm前後の丸材である。KS-673掘立柱建物跡の北辺と東辺がほぼ平行に並ぶため、敷地内を区画する施設として、一連の遺構になる可能性が考えられる。
- ・KS-671ピット 調査区北部で検出した。平面形は隅丸方形である。規模は東西25cm、南北25cmである。
- ・KS-672ピット 調査区北部で検出した。平面形は円形である。規模は径20cmで、ピットの中には花崗岩片が確認された。
- ・KS-673掘立柱建物跡 調査区北部で検出した。東辺が調査区外となっているが、東西2間(約1.7m)以上、南北4間(7.2m)である。方向は西辺でN-48°-Wである。柱穴が7基確認された。柱穴の掘り方は径25~40cmの円形もしくは楕円形である。柱穴6基の中には花崗岩の碎石が多数確認され、柱を支えるために詰められたものと考えられる。



第19図 第23次調査第1遺構面遺構平面図(1/200)

えられる。柱痕跡は確認できなかった。柱穴3・5と床面からは17世紀中ごろの肥前染付皿が出土した。KS-680鍛冶工房跡に関連する建物の可能性が考えられる。

・KS-674ピット 調査区東部で検出した。平面形は円形である。規模は径30cmである。内部にはKS-675掘立柱建物跡の柱穴と同じように花崗岩片が詰められていた。瓦が出土した。KS-673掘立柱建物跡と関連すると考えられる。

・KS-675ピット 調査区東部で検出した。平面形は円形である。規模は径20cmである。

・KS-676ピット 調査区東部で検出した。平面形は円形である。規模は径20cmである。

・KS-677ピット 調査区東部で検出した。平面形は不整円形である。規模は東西20cm、南北15cmである。花崗岩片が出土した。

・KS-678ピット 調査区東部で検出した。平面形は不整円形である。規模は東西20cm、南北25cmである。

・KS-679ピット 調査区東部で検出した。平面形は円形である。規模は径20cmである。

・KS-680鍛冶工房跡 調査区南東部で検出した。一部を擾乱に切られているが、平面形は台形を呈するものと考えられる。規模は東西4m以上、南北4mである。南半部で後述の炉跡2基を検出した。炉跡の周辺を中心に床面上には炭層が分布している。四辺で周溝を検出した。上端幅25~30cm、深さ10cmである。断面形は逆台形に近い。工房跡の東辺北端で土坑とピットを検出した。土坑の平面形は円形で、規模は径1m、深さ30cmである。埋土の上部には矢穴をもつ破片を含む花崗岩片の層、下部に鉄滓、瓦を含む炭の層がみられる。ピットは北側を先述の土坑に切られ、平面形は楕円形である。規模は東西50cm、南北30cm以上、深さ10cmで、炭を多量に含み、花崗岩片、瓦片も含む。土坑は周溝と接続しており、排水施設と考えられる。床面の南東角には長軸33cm、短軸24cmの四角く加工された花崗岩片がみられた。

1号炉跡 鍛冶工房跡南側に位置し、東西36cm、南北48cm、深さ12cmの精円形の炉跡である。表面に炭、焼土、鉄滓がみられた。炉床は溶解したものが硬化面を形成していた。

2号炉跡 1号炉跡の北西に位置し、東西30cm、南北50cm、深さ18cmの楕円形の炉跡である。底面は焼けていた。炉の北側でレンガ1点が出土した(第34図7)。鍛冶作業に伴う台石と考えられる。レンガの北西には花崗岩片を含む東西35cm、南北45cm、不整円形のピット1基を検出した。

・炭層 調査区の南東部と西部で炭が堆積する層が5箇所でみられた(第20図)。炭層はサンプル採取し、水洗作業を行った。水洗した炭の中から採取した遺物や特徴から炭層を1~5に分類した。

炭層1 鍛冶工房跡の床面に分布する。炭の中から鉄滓、粒状滓、瓦を検出した。

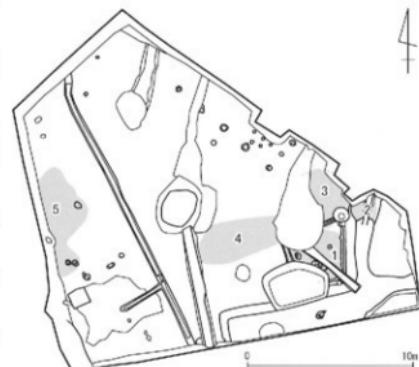
炭層2 鍛冶工房跡の北東、調査区南部の段の壁面に分布する。炭の中から鉄滓、粒状滓を検出した。遺構精査の際に羽口が出土した。

炭層3 鍛冶工房跡の北側に分布する。炭の中から鉄造鋏片を検出した。

炭層4 鍛冶工房跡の北西に分布する。炭の中から鉄滓、粒状滓、羽口2点、針金、石灰の塊を検出した。

炭層5 調査区西部に分布する。炭以外はみられなかった。

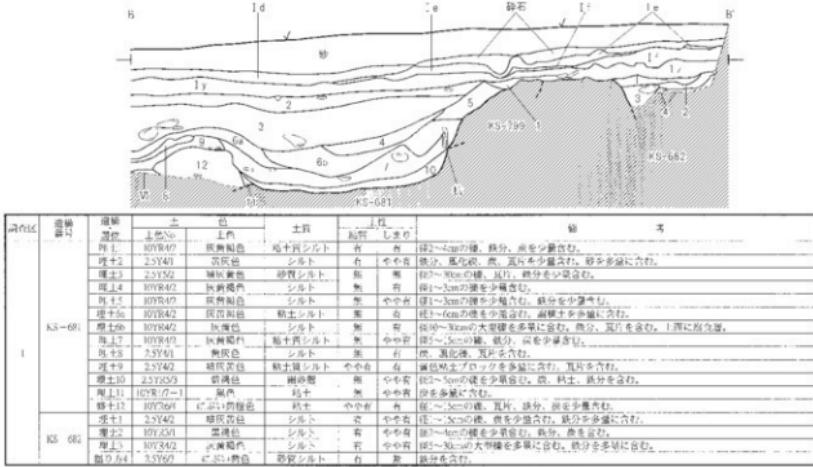
炭層1~4は鍛冶工房床面およびその周辺でみられ、検出した遺物から鍛冶作業に伴うものと考えられる。炭層5は遺物がみられず、工房跡からも離れていた。



第20図 1区炭層分布図 (1/300)

るが、同じ検出面であることから工房に何らかの関連するものと考えられる。

- ・KS - 681池状遺構 椰柵区南東部で検出した。比高差40cmの段差上部の平場を掘り込んでおり、検出面はV層(第21次調査のⅢa層)上面である。平面形は北部と東部が調査区外となっているが、隅丸方形と推測される。規模は東西2.8m以上、南北4.5m以上、深さ1.12mである。最下層および底面はグライとしており、水が溜まっていた状態が一定期間あったと推測される。この層からは18世紀代の肥前染付碗（くらわんか手）が出土している。構築時期の上限は不明であるが、近世から近代にかけて使用されていたと推測される。北東部には東西1m以上、南北4.7m以上、高さ30～40cmの盛土による高まりがみられ、丸杭1本を検出した。南壁でも丸杭1本を検出しており、護岸の土留めに使われていたものと考えられる。遺物は西壁に多い。瀬戸美濃染付端反碗、肥前染付碗、皿、瓶や切込白梅梅花文角小皿などのほか、瓦が多量に出土した。埴上中の炭屑層から鉛滓が出土している。
 - ・KS - 682性格不明遺構 椰柵区南東部で検出した。段の上面を掘り込んでおり、検出面はV層上面である。平面形は南部と東部が調査区外となっているため不明である。規模は東西3.2m以上、南北1.1m以上である。構築時期は不明である。磁器、瓦が出土した。



第21図 KS-681池状遺構・682遺構断面図 (1/50)

- ・KS-683土坑 調査区南部で検出した。段の上面を掘り込んでおり、検出面はⅢa層上面である。平面形は不整形である。規模は70cm、南北45cmである。埋土には炭が多量に含まれている。

- ・KS-684ピット 調査区南部で検出した。平面形はベルトがあり、KS-661溝跡に切られているが、ほぼ円形と推測される。周縁は東西40cm以上、南北40cm以上である。KS-661溝跡上り古い。

(2) 2 区

- ・KS-685溝跡 調査区中央で検出した。溝立区北壁から南側に延びるL字型の溝跡で、上端幅は60~80cmである。検出した長さは北側1.1m、南側2mである。瓦と鉄輪轍片、花崗岩片が出土した。I区KS-664溝跡と形状が類似するため関連する可能性が考えられ、KS-680般治工房跡の西側を区画し、排水施設として利用されたと推測される。

(3) 3 区

- ・KS-686ピット 調査区北部で検出した。検出面はII層上面である。平面形は楕円形である。規模は東西45cm、南北35cmである。



調査区全景（北から）



1区 第2遺構面全景（南東から）



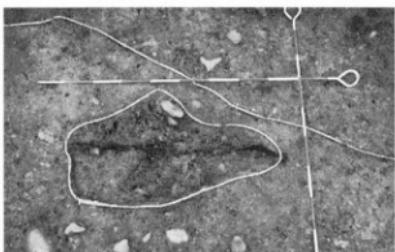
1区 第2遺構面全景（南から）



1区 KS-681池状遺構検出状況（東から）



1区 KS-682遺構検出状況（北から）



1区 KS-683土坑検出状況（北から）



1区 KS-688礎石検出状況（南東から）

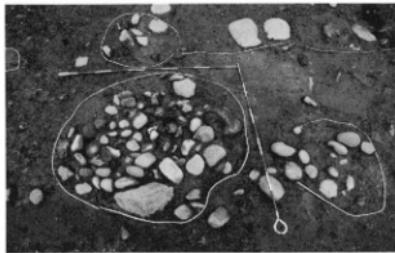


1区 KS-688礎石検出状況（南東から）

写真図版1 第23次調査 調査区全景・1区遺構（第2遺構面）1



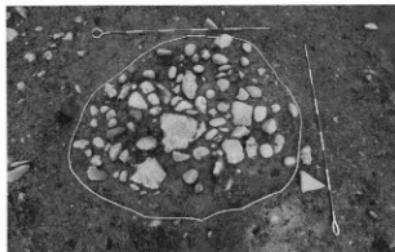
1区 KS-690石列検出状況（東から）



1区 KS-691・692礎石跡・693集石検出状況（南東から）



1区 KS-695・696溝跡検出状況（北から）



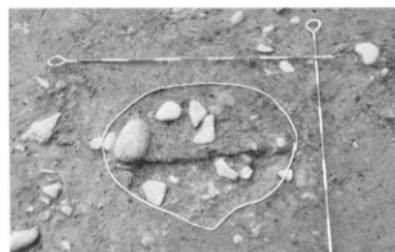
1区 KS-697礎石跡検出状況（南から）



1区 KS-698集石検出状況（東から）



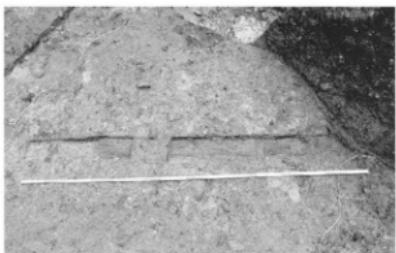
1区 KS-699溝跡・700集石・701ビット検出状況（北東から）



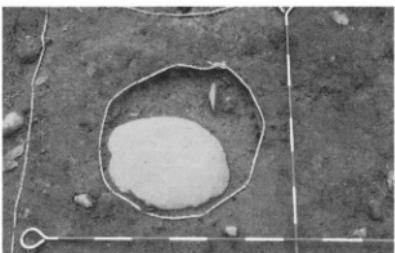
1区 KS-702ビット検出状況（北から）



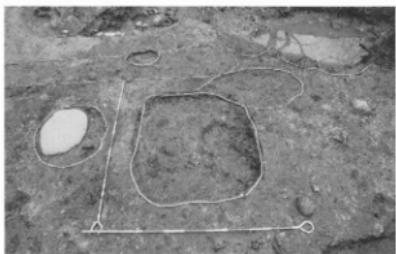
1区 KS-703・704ビット検出状況（北から）



1区 KS-705木棟検出状況（西から）



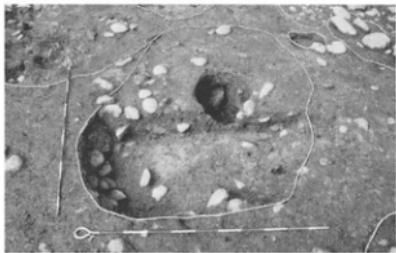
1区 KS-706礎石検出状況（北から）



1区 KS-707柱穴・708・709・710土坑・711ピット検出状況（北から）



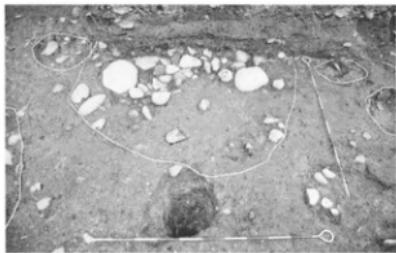
1区 KS-712・713・714土坑検出状況（北西から）



1区 KS-715土坑検出状況（東から）

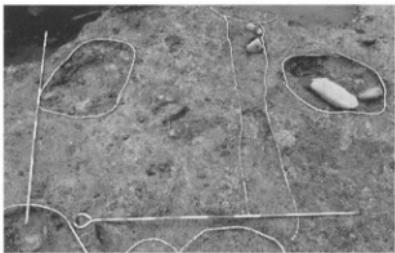


1区 KS-716集石・717礎石跡・718土坑検出状況（南西から）

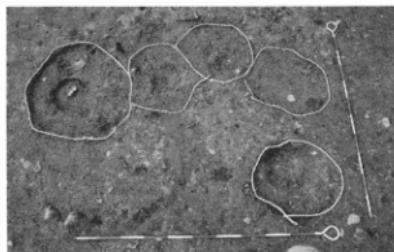


1区 KS-719礎石・732・733柱穴検出状況（南西から）

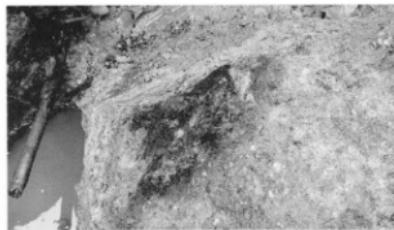
写真図版3 第23次調査 1区遺構（第2遺構面）3



1区 KS-720柱穴・721ピット・722溝跡・728柱穴検出状況（東から）



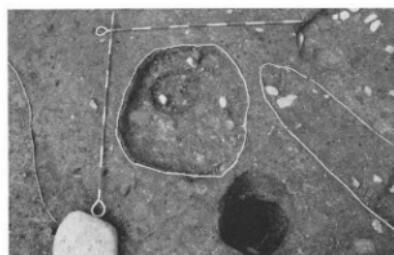
1区 KS-723土坑・724・725・726・727柱穴検出状況(東から)



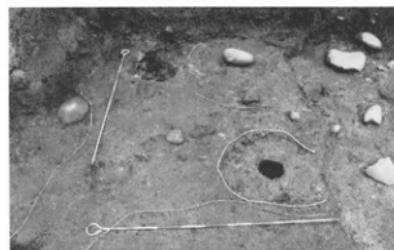
1区 KS-729炉跡検出状況(東から)



1区 KS-730柱穴・745土坑検出状況(北西から)



1区 KS-731柱穴検出状況(北東から)



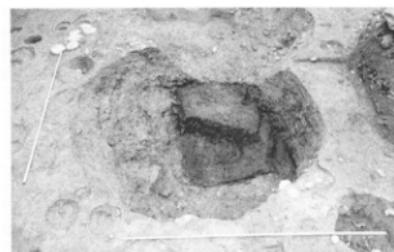
1区 KS-734溝跡・735土坑・736礫石跡・737柱穴検出状況(西から)



1区 KS-738・739・740・741集石・742土坑・743ピット・744土坑検出状況(西から)



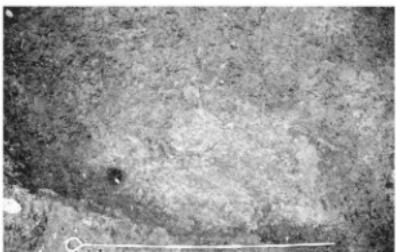
1区 KS-740井戸跡検出状況(北西から)



1区 KS-746井戸跡検出状況(西から)



1区 KS-746井戸跡東壁断面（西から）



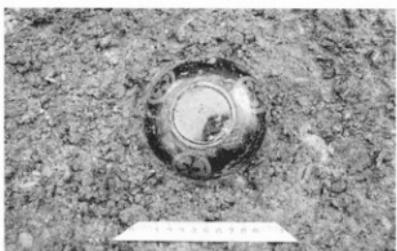
1区 KS-746井戸跡出土状況（東から）



1区 KS-746井戸跡出土状況（西から）



1区 KS-746井戸跡祭祀遺構（北から）



1区 KS-746井戸跡漆器楓（No.2310）出土状況



1区 KS-747-748柱穴・749ピット検出状況（西から）



1区 KS-750土坑・751溝跡・752・753柱穴検出状況（北西から）



1区 KS-754-756柱穴・759溝跡・760柱穴・761ピット検出状況（西から）

写真図版5 第23次調査 1区遺構（第2遺構面）5



1区 KS-762柱穴・763・764土坑・765溝跡検出状況（南から）



1区 中央部焼土検出状況（南から）



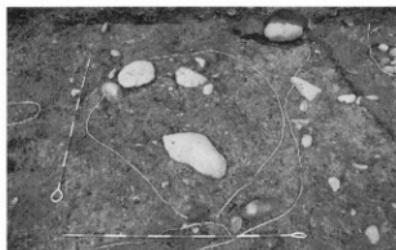
1区 KS-768カマド跡・767・769・771土坑出土状況（南から）



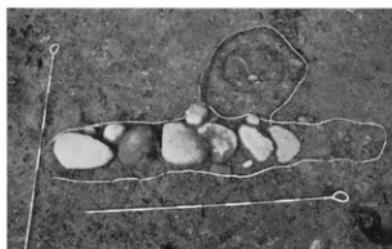
1区 KS-768カマド跡サブトレンチ断面（西から）



1区 KS-770土坑・772石組溝・773土坑・774溝跡・790石組溝・791土坑検出状況（東から）



1区 KS-775集石検出状況（東から）



1区 KS-778石列・789柱穴検出状況（東から）



1区 KS-780土坑検出状況（東から）



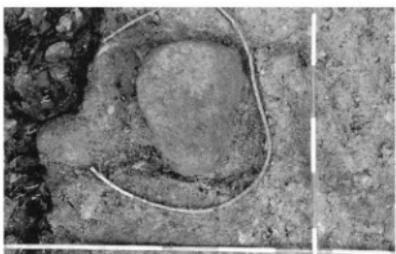
1区 KS-781集石検出状況（北西から）



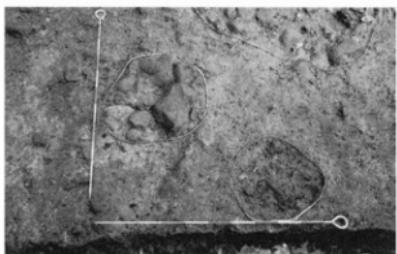
1区 KS-782石組溝検出状況（南から）



1区 KS-783集石検出状況（南から）



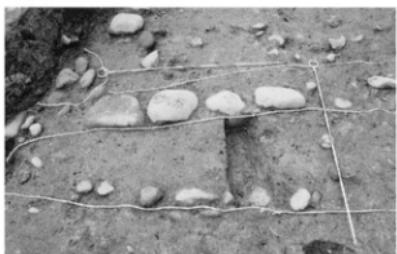
1区 KS-785碰石検出状況（東から）



1区 KS-786・789集石検出状況（南から）



1区 KS-787ピット・788集石検出状況（東から）



1区 KS-792石組溝・794ピット検出状況（北西から）

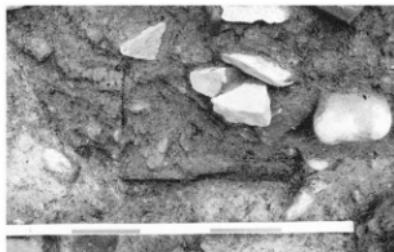


1区 KS-705木桶（南部）検出状況（東から）

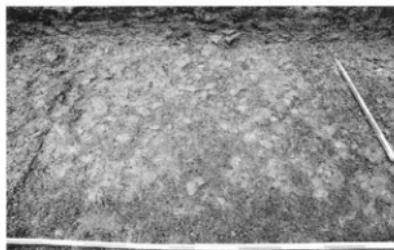
写真図版7 第23次調査 1区遺構（第2遺構面）7



1区 KS-797柱穴検出状況（東から）



1区 KS-799井戸跡検出状況（東から）



1区 III層（花崗岩の碎石層）検出状況（南東から）



1区 南東部炭層検出状況（北東から）



1区 第1造構面検出状況（南東から）



1区 KS-661溝跡検出状況（南から）



1区 KS-662土坑検出状況（南東から）



1区 KS-663硬化面検出状況（南から）



1区 KS-664溝跡検出状況（東から）



1区 KS-665掘立柱建物跡検出状況（北から）



1区 KS-666礎石・776礎石検出状況（東から）



1区 KS-673掘立柱建物跡検出状況（南から）



1区 KS-680鍛冶工房跡検出状況（上から）



1区 KS-680鍛冶工房跡土坑検出状況（北東から）



1区 KS-680鍛冶工房跡 1-2号炉跡検出状況（北東から）

写真図版9 第23次調査 1区遺構（第1遺構面）2



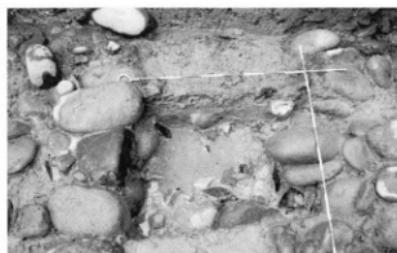
1区 KS-680 2号炉跡北側レンガ（No.634）出土状況



2区 第2遺構面全景（上が西）



2区 KS-685溝跡検出状況（南東から）



2区 KS-687石組溝断面（東から）



3区 第2遺構面全景（上が東）



3区 KS-800石組溝・801暗渠状遺構検出状況（北東から）



4区全景（北東から）



調査作業風景



遺跡見学会風景

4. 出土遗物

各遺物の出土点数については、区・遺構・層位別の数量表（第8～12表）を作成し、報告書掲載遺物については観察表（第13～58表）を付した。なお、陶磁器の点数は、接合・分類作業を行い同一個体と判断されるものを1点とし、それ以外は全て破片数として算出した。今年度の調査では3基の井戸跡が検出されたが、このうち部分的に調査を行ったのは重複関係からみて最も新しいKS-7-16井戸跡である。この井戸跡の出土遺物は、数多くの多種類に及ぶが、陶器・磁器・木製品が中心である。

(1) 磁器 (第8表)

磁器は429点出土した。1区では、

KS-746井戸跡からの出土が多い。

井戸跡から出土した磁器の組成特徴は、肥前が102点で、内訳は染付83点（胸胎1点）、白磁13点、青磁23点、鉄釉1点（碗）、色絵2点（水滴か、口縁端部を金彩したもの）である。中岡青花2点（皿・鉢）、瀬戸美濃は染付碗（端反）1点である。染付では筒形のもの5点。皿では中岡4点や輪花皿2点を含む。女性の使用が考えられる紅猪口2点がみられる。白磁は碗と伝飯器である。

(2)陶器 (第8表)

胸器は728点出土した。1区では、KS-746井戸跡からの出土が多い。井戸跡から出土した陶器の产地は大坂

相馬207点、小野相馬14点、京焼2点、京・信楽8点、肥前陶器23点、瀬戸不明5点、中国産と考えられる褐釉器はみられない。最も新しいと考えらる馬は碗を主体に皿・香炉がみられた例と同じで、寛保2年(1742)のもの。前陶器(片津)では、古い唐津灰釉文碗(第25図15)が注目される。美濃焼には、志野菊皿・鉄・志野は口縁部付近に鉄釉を施した人形は、鉄釉の播磨の他、初めて茶入を大堀相馬の仏教器が多く出土した。ているのが注目される。また、備前微として、17世紀代のものと考えらる

第8表 第23次調查出土陶器器物數量表

洒造りに関連する可能性がある。

3区ではKS-800石組溝埋土中より18世紀代後半以降の大堀相馬白濁釉土瓶が出土した。

(3)土師質土器（第8表）

土師質土器は144点出土した。皿が多い。ほとんどが法事復元のできない小片であるため、口径等に關して全体的な傾向を知ることは困難である。口径の計測または復元できたものは、燈明皿2点、皿7点、折縁鉢1点、植木鉢1点、焼塙壺2点である。すべて図示した（第27・28図）。

KS-746井戸跡からは土師質土器29点出土した。土師質土器は皿が主体であるが、1点焼塙壺が出土している。

(4)瓦質土器（第8表）

瓦質土器は39点出土した。すべて破片資料である。I区では34点が出土した。KS-746井戸跡からは鉢類をはじめとして13点が出土しており、風かと考えられるものが2点、擂鉢が1点含まれる。2区では不明1点がI層から出土した。3区から1点出土し、風炉と考えられるものが1点である（第28図13）。

(5)土製品（第8表）

羽口が3点出土した。すべて破片資料である。I区KS-680鍛冶工房跡床面や炭層2から出土している。鍛冶工房にかかわるものと考えられる。

(6)レンガ（第8表）

レンガ5点出土した。ほとんどがI層からの出土である。I区KS-680鍛冶工房跡の2号炉跡北側、炭層1から1点出土しており、鍛冶作業に伴う台石の可能性が考えられる（第34図7）。

(7)瓦（第9表）

瓦は総計4,132点出土し、このうち丸瓦が844点、平瓦が2,880点で併せて全体の90%を占める。1～3区とも、多くは近代以降の層から出土している。丸瓦、平瓦を中心に軒丸瓦、軒平瓦、軒棧瓦、伏間瓦、輪違い、平板類など多様な瓦が出土している。

①軒丸瓦 62点出土した。瓦当文様の判別可能なものは46点である。文様構成は、I区が三引両文1点、三巴文21点、珠文三巴文18点である。I層からの出土が多い。2区は三巴文1点、珠文三巴文2点である。I層からの出土が多い。3区は九瓣文1点、三巴文1点、珠文三巴文1点である。II層上面からの出土である。

②軒平瓦 30点出土した。瓦当文様の判別可能なものは7点である。文様構成は、1区が梅花文1点、枯梗文3点、花菱文1点、梅文1点である。III・IV層上面からの出土が多い。また、菊花文の滴水瓦1点がII層上面から出土した（第25図6）。2区は花菱文1点でKS-687石組溝埋土から出土した。3区は三葉文1点でI層から出土した。

③軒棧瓦 9点出土した。瓦当文様の判別可能なものは7点である。文様構成は、I区が三巴文4点、2区が三巴文2点である。I層からの出土が多い。3区ではIII層上面から櫻森家の家紋とされる二つ丁子巴文1点出土した（第32図2）。なお、二つ丁子巴文の軒棧瓦は巽門跡の調査でも1点出土している。

④棟瓦 主に棟に使用される瓦を棟瓦と総称する。91点出土した。内訳は、I区が冠伏間瓦35点、箱冠伏間瓦1点（第29図1）、熨斗瓦8点、輪違い23点、面戸瓦26点である。大半が近代以降の層から出土している。2区は、熨斗瓦2点、輪違い3点出土した。3区は熨斗瓦3点、輪違い2点、面戸瓦1点である。

⑤飾り瓦 I区から詳細不明の2点が出土した。2点とも図示した（第30図9・第31図11）。

⑥駒瓦 I区から駒巴瓦50点が出土した。3区から駒巴瓦2点が出土した。

⑦堀瓦 123点出土した。これは平板瓦、堀平瓦、棟付平板瓦、駒付平板瓦、二の平瓦の総数である。5点を除き、すべて1区から出土した。平板瓦28点、堀平瓦22点、棟付平板瓦3点、駒付平板瓦15点、二の平瓦3点が出土した。ほとんどが近代以降の層から出土している。

⑧その他 この他、1区で種別不明の瓦が1点出土した。

第9表 第23次調查出土瓦數量表

(8) 金屬製品 (第10表)

59点出土した。内訳は煙管7点、火箸の頭部と考えられる玉1点(第32図8)、鉄弾2点(第32図6、7)、鉄釘21点、銭貨13点、灰汁掬いと考えられるものが1点、針金6点、その他8点である。3区から鉄釘9点が出土した以外はすべて1区からの出土である。煙管は雁首4点、吸口2点、火皿1点である。雁首4点を図示した(第32図9~12)。銭貨

は寛永通宝7点、近代銅貨2点、煙管をつぶ
1点で洗られたもの1点、不明3点である。審

5点出土した。KS-681池状遺構南壁からは鋳造年代が明和6年（1769）の正字11波の四文銭が出土した。また、I

第10表 第23次調查出土金屬製品數量表

層から大正4年（1915）銘の縞一錢青銅貨が1点出土した。不明なもの以外の10点を図示した（第33図）。KS-746井戸跡の埋土上部からは用途不明で形状が灰汁掬いに類似するものが1点出土した（第32図13）。1区KS-680鍛治工房跡に伴う土坑やピット、炉跡のほか、工房周辺の炭層からは鍛造片、鉄滓、鐵滓、粒状滓を検出した。

⑨ガラス・石製品（第11表）

ガラス42点、石製品14点出土した。ガラスはすべて1層からの出土である。石製品は水晶3点、砥石7点、硯4点である。KS-746井戸跡から水晶1点、砥石3点、硯3点が出土した。ほかの石製品も第2遺構面からの出土である。

区	遺構・部位 標記	ガラス	水晶	砥石	硯	計
	33					32
	IV層	1				1
	KS-552-208		1			1
	KS-552-209		1			1
	KS-746-302	1	1	1	1	3
	KS-746-303	1	1	1	1	3
	KS-746-304		1	1	1	2
	KS-746-305		1	1	1	2
	KS-746-306		1	1	1	2
	KS-746-307		1	1	1	2
	KS-746-308		1	1	1	2
1	1区小塙	3	7	4	4	22
2	1区小塙	2	9	6	0	27
3	1区小塙	3	9	6	0	28
	計	42	35	29	4	95

第11表 第23次調査出土ガラス・石製品数量表

伽木製品（第12表）

2,204点出土した。ほとんどがKS-746井戸跡から出土し、木筒、漆器、樽、桶、栓、栓、箸、下駄等がみられる。木製品には、酒造りにかかわるものと生活用品とに大別される。ここではすべての種類を扱うことができないので、おもな遺物について扱うこととした。

①木簡

63点出土した。すべてKS-746井戸跡からの出土である。墨書があり一字以上判読可能のものが26点、墨痕は認められるが判読できないものが11点である。判読可能な木簡はすべて図示した（第35～40図）。

木簡は形状や記載内容等からⅠ～Ⅲ類の3種類に大別できる。文字が判読できる木簡について種類別にその特徴を述べる。（ ）内は『木簡研究』の提示されている型式を基にした型式番号である。

Ⅰ類 木札木簡

形状は、短冊形（011型式）で四隅が面取りされている柾目板のものが、4点出土した。大きさは10～12cm、上部中央に穿孔があり成形や加工が丁寧に施されている。樹種はすべてスギである。

記載内容はすべてに「御酒塩」とあり、「五升」などの容量が記されており、そのうち3点はもう一面に「樋森与左衛門」と記されている。「酒塩」とは調味のために使われた酒であり、「樋森与左衛門」は樋森家の6代当主であった人物である。文献からも、「御酒塩」とともに「御酒塩」が藩に献上されたという記録がある。このことから樋森家が酒塩を藩に納める際、その容器につけた木札であったと考えられ、未使用か使用済みのものが井戸跡に廃棄された可能性が推測される。

Ⅱ類 荷札木簡

形状は、短冊形のもの（011型式）と、一端が方頭で、他端が欠損、腐食で原形が失われたもの（019型式）、長方形の材の一端を尖らせたもの（051型式）、折損、腐食その他によって原形の判明しないもの（081型式）が、14点出土した。下端が尖るものと下端が細くなるものの割合が多い。木札木簡に



第22図 KS-746井戸跡出土荷札木簡にみられる地名

比べて成形や加工が粗雑であり、ほとんどのものが、木材を削ったままか、軽く削ったもので、柱目板や板目板を斜めに木取りされた材が混在する。

記載内容は「御年貢米」、「御米」、「米」とあり、仙台藩での米一俵分を示す「四斗五升入」と容量が記されている。もう一面には「上松村喜六」「名取等鳴村」「名取等鶴門」など、地名と人名がみられることから、年貢米として藩に納める際、米俵につけた荷札木簡であったと推測される。なお、東北大学埋蔵文化財調査センターが行った仙台城二の丸北方武家屋敷地区第7地点の調査で出土した米の記載が確認できる木簡の中に、年号や日付の記載されたものがみられるが、今回の調査で出土した木簡からは確認できなかった。

木簡に記載された地名についてみると、「郡分部谷村」(宮城郡)、「名取四郎丸村」(名取郡北方)、「下余田村」、「植(上)松村」、「名取等鳴村」(名取郡南方)の5つの村名が確認できた。現在の仙台市宮城野区鶴ヶ谷、太山^{トヨマ}・四郎丸・名取市下余田、植松、笠島である。明治22年(1889)まではそれぞれ村であり、仙台城下からも近く、藩に年貢を納める蔵入地(藩の直轄地)であったと考えられる。造酒屋敷で酒造りに使われた米が藩から支給されていたとすれば、仙台城下近郊の蔵入地から集められた年貢米であったことが推察される。

■類 その他

形状は一端が方頭で、他端が欠損、腐食で原形が失われたもの(O19型式)、長方形の材の一端の左右に切り込みを入れたもの(O32型式)、長方形の材の一端を尖らせており、他端は欠損したもの(O59型式)のものが、8点出土した。これらは記載内容が断片的であったり、詳細がわからぬため用途が不明である。I・II類の木筒とは区別した。

なお、木筒26点中24点が樹種同定の結果、スギと確認された。スギは16世紀以降檜や曲物材として東北をはじめ全国で利用頻度の高い用材である(注1)。針葉樹とした木筒もスギの可能性があり、極めて厳密な用材選択が行われていたと推察される。

②漆器・漆塗製品

漆器は、椀の個体と分かれるものが34点出土し、汁椀と考えられるもの12点(内外赤色2点、内赤外茶1点、内赤外黒6点、内赤外緑1点)、飯椀と考えられるもの5点(内外赤色4点、内赤外黒1点)、分類できなかつたものの17点(内外赤10点、内外茶色1点、内赤外黒6点、うち文様あり4点)である。腰部に稜線のある腰折タイプの椀は8点出土し、2点は大型品である。いずれも内外とも赤色漆である。蓋は7点出土し、内訳は内赤外黒のもの4点、内外赤色1点、内外黒色1点、稜線のみられる腰折タイプ1点である。皿は3点出土し、内赤外黒1点(大型)、腰折タイプ?2点である。この他金彩文様のある盃片2点(1個体)、片口1点、段重など箱状になるもの予想できる板材2点(赤と黒7点、赤とオリーブ色か1点)、膳の部材は6点で、内訳は側板2点(竹材?に塗彩したもの1点)、脚1点、脚の脇にとりつくものの3点(第42図3~5)である。漆器は、内外赤黒の椀類のほかに、腰折や緑色の椀が組合されており、江戸後期頃の特徴と考えられる。曲物は側板73点(うち桜皮で縫じたもの1点)、蓋板と考えられるもの(中央に穴)2点、底板2点、合計77点である。側板の多くは残りが悪く、破片の状態で出土した。

③桶・樽

おもに酒造りに関わるとみられる木製品に、桶・樽がある。側板は203点出土し、内訳は柱目材125点、板目材77点、ミニチュア(柱目材、柄約か)1点、把手1点、蓋板6点、底板とみられるもの4点、タガ材とみられるもの102点が出土した。側板は全体の長さの分かることはほとんどなく、多くはノコギリで切断された破片である。おそらく上下端の柄ちた(磨耗した)部分を切り離し、作り直しているのではないかと想像される。タガ材も節間を基準に切断した特長がみられる。そうした破片となった部材で注目されるものは、側板では第45図5~6のような、厚さ3cm以上あるものは、酒造用民具例と比較して大桶に相当し、底径や高さが5尺ないし6尺になるものと予想される。また、蓋板でも第44図4は、推定直径が2.15mになり、大桶のものであると考えられる。これら大型品は酒造りにかかわり、仕込み用や貯蔵用などに使われた可能性がある。また、桶等を固定する目的などに使ったと考えられるクサビ(ストッパー)は、31点出土している。側面が三角形のものが主体であるが、中央がくぼむM字状のも

のものもみられる。なお、1区の調査では、戸井跡、南西部Ⅲ層、IV層上面では多数のノコギリで切断したとみられる木製材が出土した。桶・樽などの木製品の解体・再加工が行われていた可能性が高い。

① 檢

37点出土した。未成品と考えられるものを1点含む。酒樽(角樽)用と考えられる栓も1点出土した(第46図7)。

七

している。片面にはカゴのヒゴ材が貼り付いており、この樹皮はカゴの内貼りだったことが分かる。樹皮には穴のみられるものがある。カゴの内側に樹皮(桜皮か)を貼り付けた容器ということになる。用途等、現在不明である。

もう1つは、屋根に使用する木材であると考えられる。杉皮とみられる大型で倒壊形のものが36点出土した。破片が多いが全体の分かれるものが2点あり、1点は48cm×10.5cm、もう1点は46cm×5.5cmを測る。この屋敷では建物の建て替えを行っているので、それと関連する可能性がある。

⑥等

筆は合計432点川土し、内訳は丸型（多角形の面取り）402点（完形品110点、破片262点）、丸型先細2点、角型先細27点（完形7点、破片20点）、漆塗り筆（丸型）1点である。丸型のものには、19cm前後の短いものと、20~21cmの長いものに分かれる。漆塗り筆（第45図5）は、赤色漆と茶色漆を塗り分けている。

⑦下駄

下駄は合計21点出上し、井戸出上は23点である。内訳は四角形の角型連歎下駄10点(搅乱出土1点)、角型刺り下駄8点、丸型で特徴不明のもの1点、草履1点である。一般的に角型は男性用、丸型は女性用と考えられる。連歎下駄の中には、歯の先端に釘穴の認められるものがある。すべり止めを目的として歯を打ち付けた、冬用のものであると考えられる。図で示した大型の角型連歎下駄は、台部表面に同じ特徴の焼面(刻印か)があり、大きさもそろっていることから、1足の下駄と考えられる(第49図1・3)。

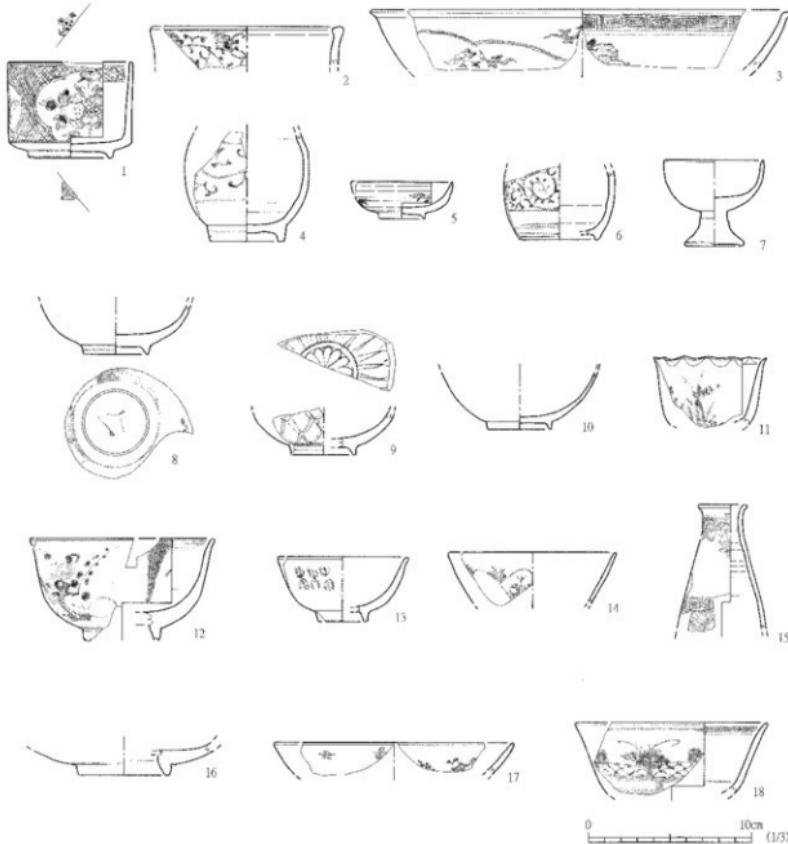
⑧その他

前述のもの以外に膳の一部、セイロ、道具の柄、糸巻き、建具部材、調度品部材、燭台支脚、人形の手、戸戸柱材、棒などが出土した。

^{註1} 山田昌久「日本列島における木質遺物出土遺跡文獻集成—用材から見た人間・植物関係史」

『植物生态研究特别』第1号 1993

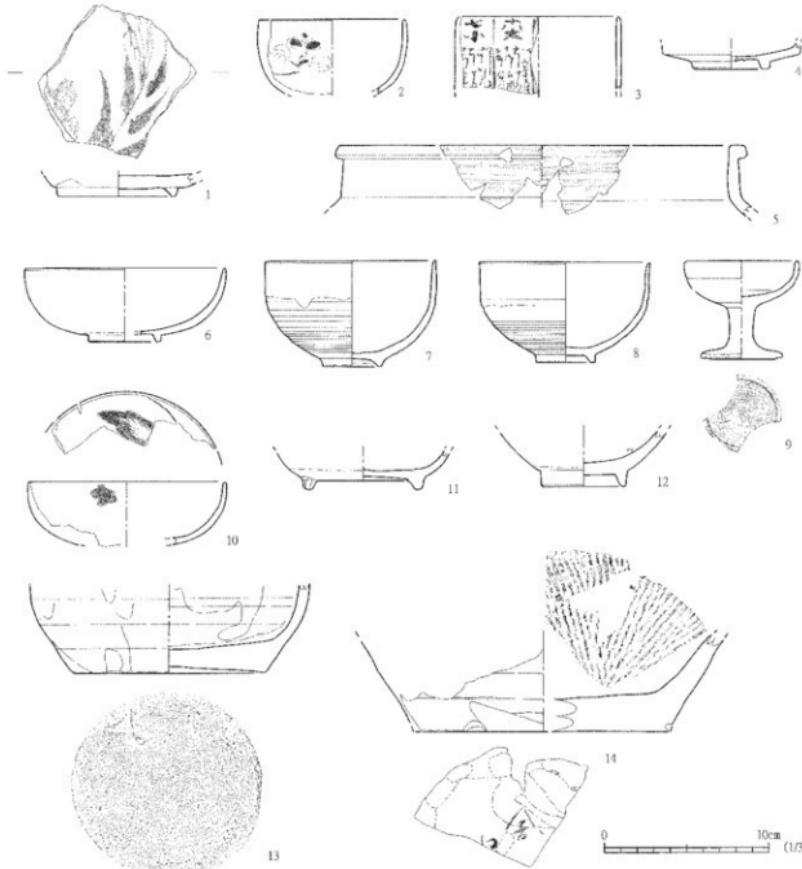
第12表 第23次調查出土木製品數量表



第23図 第23次調査出土土器 (S=1/3)

件 名	造 成 年 代	造 成 場 所	種 類	生 産 地	器 種	製作年代	口 径 (mm)	底 厚 (mm)	壁 厚 (mm)	文 様 等	備 考	厚 度
1 1103	1	KS-746・海上	埴輪	起司	瓶	-	8.5 前	0.85	3.2	柱再文 肩に斜線文付 文様は要統 地又に斜 線子文 内側斜方彫文 両台内二重線(画面)か		1
2 1504	1	KS-746・海上	埴輪	起司	瓶	-	8.5 前～18.5 中	1.10	-	柱再文	柱再文	2
3 1100	1	KS-746・海上	埴輪	起司	折沿盆	-	7.5 後～8.5 中	0.85	1.33	柱再文 口縁斜文文付 裏面絞 番号文 口縁 漢字文		3
4 1425	1	KS-746・海上	埴輪	起司	瓶	-	8.5 前～3.5 中	1.60	0.67	柱再文 内面斜彫 文台長付のみ斜彫		4
5 1473	1	KS-746・海上	埴輪	起司	紅茶口	-	8.5 前	0.62	2.0	柱再文 口縁の内斜彫		5
6 1526	1	KS-746・海上	埴輪	起司	折沿盆	-	15.0 前～18.5 中	0.82	1.03	柱再文 内面斜彫 葵付のみ斜彫		6
7 1571	1	KS-746・海上	埴輪	起司	直筒	-	7.5 前～3.5 後	0.76	3.6	柱再文 口縁に斜彫文		7
8 1276	1	KS-746・海上	埴輪	波佐原	瓶	-	3.5 中	0.92	4.03	柱再文 花文 両台内に施あり(不明)		8
9 1185	1	KS-746・海上	埴輪	網	瓶	-	8.5 前	-	4.0	波佐文 両台内二重線斜文 波点葉文 花台内文 及びリ		9
10 1186	1	KS-746・海上	埴輪	網	瓶	-	12.5 前	0.96	3.6	波佐文の内斜彫		10
11 1187	1	KS-746・海上	埴輪	網	輪形櫛口	-	17.5 前～18.5 中	0.89	-	柱再文 内側に波佐付有		11
12 187	1	KS-746・海上	埴輪	網	堆疋碗	-	9.5 前	1.11	-	柱再文 花台行斜彫 二手のもの(鉢土白色)		12
13 806	1	KS-746・海上	埴輪	網	堆疋碗	-	10.5 前	0.80	3.0	柱再文	海い口縁(口紅) もち	13
14 1295	1	KS-715・海上	埴輪	網	堆疋碗	-	10.5 前～19.5 中	0.94	-	柱再文 (山川) 番號文地	外に別く網またに伝世陶	14
15 221	1	KS-661・海上	埴輪	網	堆疋碗	-	19.5 後	0.20	-	柱再文 (山川) 番號文地	湖田工房浜田遺物	15
16 671	1	KS-662・海上	埴輪	網	青磁	-	12.5 前	-	(5.6)~(7.7)	柱再文 (波佐文様)	船上灰陶、葉角瓶了	16
17 1658	1	KS-662・海上	埴輪	網	青磁	-	19.5 後	0.45	2.0	柱再文	柱再文	17
18 971	1	KS-746・海上	埴輪	小口	深芦美濃	-	10.5 前	1.08	1.44	柱再文		18

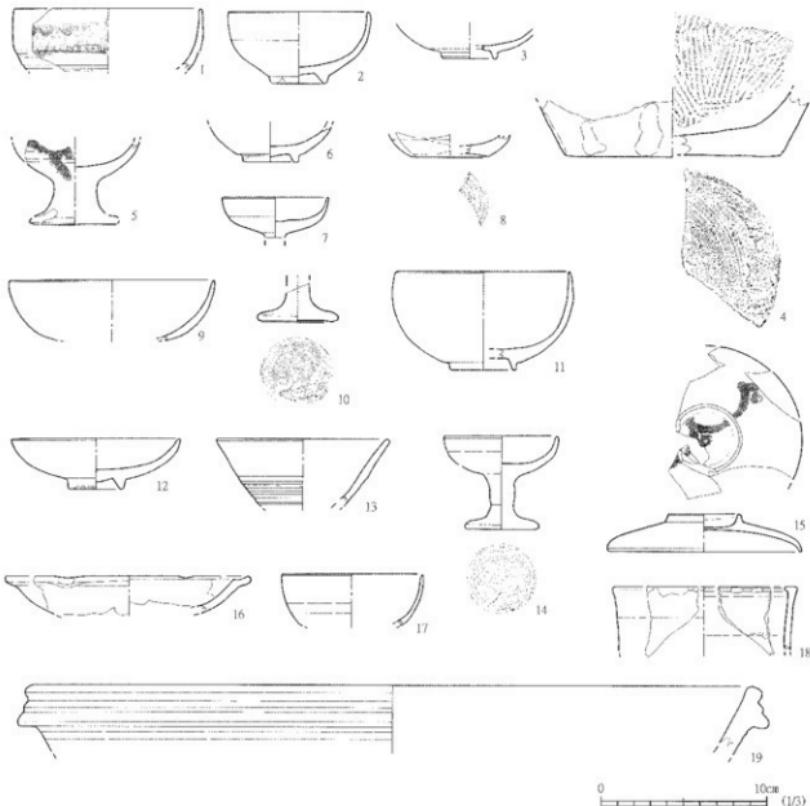
第13表 第23次調査出土土器観察表



第24図 第23次調査出土陶器 1 (S=1/3)

件 号	通 号	区	清 拂	覆 位	生 灰	器 所	製作年代	口徑 (mm)	底径 (mm)	高 さ (mm)	沿 面 文 様等	備 考	写 真
1	1350	1	KS-746・理土	直上	瀬戸美濃 輪花	輪花	18c	—	—	72	(14) 指紋文、埴輪灰面	—	33
2	1504	1	KS-746・理土	立・信楽	—	—	18c	—	—	—	(6) 丹青模文、水、波、舟、合、小豆、筋文灰面、口部、腹入	—	34
3	1522	1	KS-746・建2	京极	灰面	—	18c	—	—	—	—	電線塔下 (1/4) の門か、東京 都持立橋吉河山土に隣り	35
4	1/05	1	KS-746・理土4	京・青葉少	輪花	輪花	18c	84	46	16	内面灰面、外面輪花、脚上焼灰面、白内側砂、灰面多 し、山古内子尖、脚の沈み、粗大な盛入	—	36
5	1208	1	KS-746・理土4	瀬戸	—	—	17c 中	650	—	640	二重模文、松文か	当分しない文様のあと續かあり	37
6	1200	1	KS-746・理土4	大和相馬	平側	—	18c 後~	420	44	45	灰面、脚上火色、黒面粒子、真人両脛から英介内高脚	—	38
7	1307	1	KS-746・理土4	大和相馬	脚	—	18c	76	65	65	脚分 (弓形と鉄脚)、脚上火色、窓付のみ灰面	—	39
8	1107	1	KS-746・理土	大和相馬	脚	—	18c	76	62	62	脚分 (弓形と鉄脚)、脚上火色、窓入、窓付のみ灰面	—	40
9	1799	1	KS-746・建2	大和相馬	伝板體	—	18c	70	42~50	91	灰面、脚上灰面、黑色粒子	—	41
10	1,27	1	KS-746・脚上	京成か	平側	—	18c 後か	120	—	90	内面灰面、青、紫、脚上に無を兼ねて居、脚土は同じ	—	42
11	1289	1	KS-746・理土4	大和相馬	脚	—	19c 純	—	64	25~	脚分、返造灰ス村付 (ふるせわざ)、脚軸ヘラナ	KS-746・理土脚の下地を参考資料	43
12	1723	1	KS-746・理土4	小野村	脚	—	18c	105	50	34	内面、外面、筋文灰面、筋多、脚軸「心」(向かひ)日	—	44
13	918	1	KS-746・理土	笠幡不開	脚	—	18c ~	160	116	55	筋文、内面、筋文灰面、筋多、脚軸「心」(向かひ)日	—	45
14	1707	1	KS-746・建土	豊後不明	脚	—	18c ~	—	106	29	脚軸、毛筋灰面、筋多、脚軸「心」(向かひ)日	在地か	46

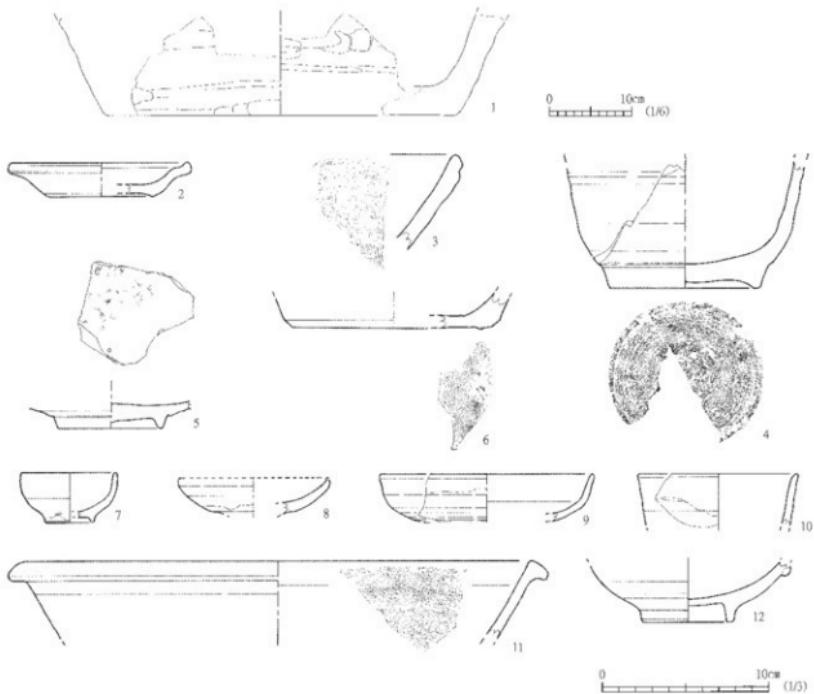
第14表 第23次調査出土陶器 1 観察表



第25図 第23次調査出土陶器2 (S=1/3)

器 種 類 等	底 径	底 構 造	底 部 形	底 部 厚	作 成 年 代	上 部 高 (mm)	内 径 (mm)	外 径 (mm)	施 装 ・文 様 等		考 察	器 皿	
									内 径 (mm)	外 径 (mm)			
1 1252	1 KS-746・理+土	大腹鉢型 盤	鉢	18.0 (11.4)	—	(38~)	部分施釉 (底面と底足)	—	—	—	47		
2 1131	—	KS-746・理+土	大腹鉢型 小作	18.0 (11.4)	—	37	44.5	底面 豊臣高麗文瓦器	—	—	48		
3 1.23	1 KS-746・理+土	深 鉢	碗	18.0 (8.8)	—	34	(22)	凸沿有 脂子灰白 気泡多々	—	—	49		
4 1.71	1 KS-746・理+土	KS-746・理+土	透 明	18.0~ 18.0 (10.0) (11.4)	—	(30) (41)	底面 底面 豊臣高麗文 瓦器	—	—	10150の伝統陶と類似			
5 1.8	1 KS-746・理+土	KS-746・理+土	火燒灰陶	18.0 18.0 (10.0)	—	(53) (52)	底面 底面 豊臣高麗文 瓦器	—	—	古物印	50		
6 1.59	1 KS-746・理+土	火燒灰陶	鉢	18.0 (10.0)	—	34 (24)	—	—	—	—	53		
7 1210	1 KS-746・理+土	大腹鉢型 底	弘慶款	3.0 (6.5)	—	(25)	底面 側面有施釉	—	—	側面 側面有施釉	52		
8 1522	1 KS-746・理+土	底拵有明	底入	3.0 か	—	(16) (14)	内 外 施 装 ・文 様 等	—	—	内 外 施 装 ・文 様 等	54		
9 146	1 KS-746・理+土	大腹鉢型 盤	平鉢	3.0 か	(6.2)	—	(37)	底面 内 外 施 装 ・文 様 等	—	—	内 外 施 装 ・文 様 等	56	
10 1195	1 KS-746・理+土	大腹鉢型 盤	平鉢	18.0 (11.4)	—	44	— 24	底面 —	—	—	57		
11 1581	1 KS-746・理+土	大腹鉢型 盤	碗	18.0 (10.0)	—	46	61	内 外 施 装 ・文 様 等	—	—	内 外 施 装 ・文 様 等	57	
12 1294	1 KS-746・理+土	大腹鉢型 盤	碗	18.0 (10.0)	(33)	—	31	底面 底面 豊臣高麗文 瓦器	—	—	内 外 施 装 ・文 様 等	58	
13 1387	1 KS-746・理+土	大腹鉢型 盤	腹口	18.0 (10.0)	—	(40~)	部分 (底面と底足)	—	—	部分 (底面と底足)	59		
14 1341	1 KS-746・理+土	大腹鉢型 盤	弘慶款	18.0 (10.0)	(20)	—	57	底面 側面有施 装 ・文 様 等	—	—	内 外 施 装 ・文 様 等	60	
15 869	1 KS-746・理+土	神戸井 蓋	18.0 か	—	(18)	—	23	内 外 施 装 ・文 様 等	—	—	内 外 施 装 ・文 様 等	61	
15 5.6	1 KS-746・理+土	小野筋型 底	底拵花形	18.0 (10.0)	—	(23)	底面 —	—	—	—	62		
17 1655	1 KS-745・理+土	大腹鉢型 盤	小型碗	18.0 (10.0)	—	(22)	底面 内 外 施 装 ・文 様 等	—	—	内 外 施 装 ・文 様 等	64		
18 164.	1 KS-746・理+土	小野筋型 底	底拵とし	3.0 (1.2)	—	(39)	底面 内 外 施 装 ・文 様 等	—	—	内 外 施 装 ・文 様 等	65		
19 1326	1 KS-746・理+土	底	底拵	18.0~ 20.0 (10.0)	—	(42)	底面 —	—	—	—	66		

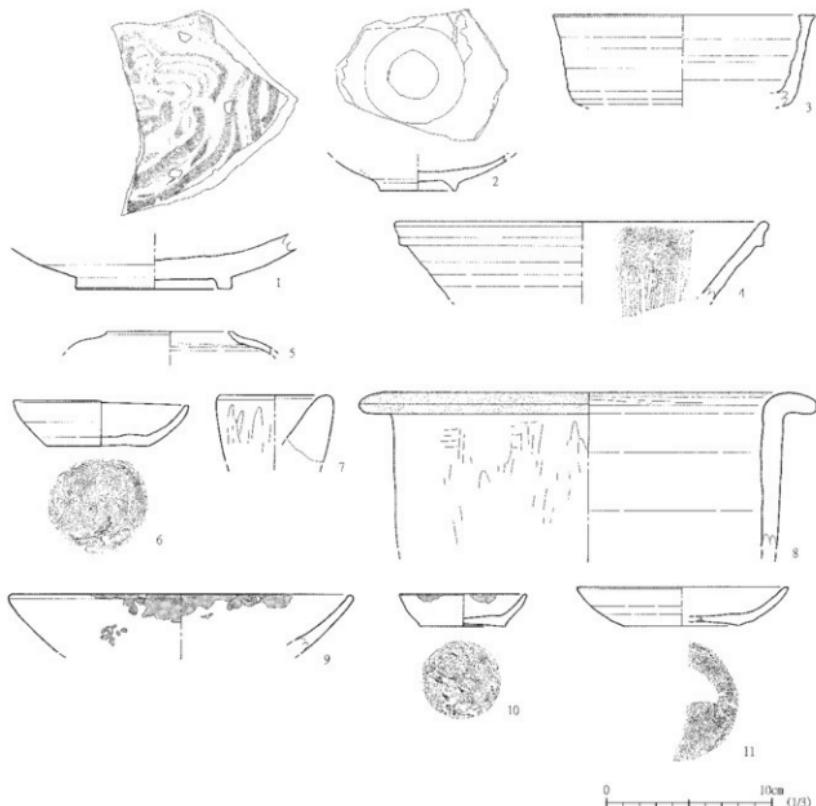
第15表 第23次調査出土陶器2 観察表



第26図 第23次調査出土陶器 3 (1 : S=1/6 2~12 : S=1/3)

番号	形	造形・基底	牛深溝	器種	製作時代	口径 (cm)	底径 (cm)	厚さ (mm)	摘要・文様等		参考	写真
									内面	外側		
1 -48	I	I	圓筒	大鉢	17c	-	(40)	(325~)	内面深溝(下口内凹) 内外灰土 足部突出具痕1ヶ 点 一部黒褐色斑紋と絞り	内面深溝(下口内凹) 内外灰土 足部突出具痕1ヶ 点 一部黒褐色斑紋と絞り	66	
2 -257	I	I	喇叭状	折沿盤	16c後	(110)	(62)	21	灰褐色 倒り出し高台 此深溝ふき波り	人室? 頸部 黒褐色斑紋 (6c) の模倣が出土	67	
3 -436	I	KS-680(復製)	丸	折沿	19c	-	-	-	浅褐色 線引き	複合	68	
4 -529	I	KS-463	縦葉巻カマ	鉢	17c	39	(70)	70	浅褐色 隙狭は2つ以上 年輪輪~葉突内溝筋 泥引き 網引出、高付、蓋付の一部に地色れあり	複合	69	
5 -400	I	I	唐津	窓	17c中	(97)	(64)	(17)	最高部 紋刷剥り 透明白和 磁土灰白色 見込み目跡 2ヶ 高付の出付	複合	70	
6 -469	I	I	志戸戸	施釉	C40	(120)	(23)	45	施上部 神奈川立かず 漆道直版 両面回転ヘリケ リック	KS-34より多く出土	71	
7 -309	Ⅲ 1	入瓶桶馬	小坪	弦	15c後~	(99)	(30)	31	口面端 高付輪~窓内内溝筋(わすかに無れあり) 黑 色 黑色粒子	複合	72	
8 -301	I	*	周溝	瓶	16c前~17c初	(92)	(22~)	-	深溝 磁土 黑色 繪むらあり	複合	73	
9 -853	I	II	麻作	瓶	16c末~17c初	(132)	-	(29)	深褐色 ロクロヘラケヅ	複合	73	
10 -992	I	舟形盒	湖口坐	短颈瓶	15c後	-	(92)	-	深褐色	複合	75	
11 -927	I	IV	筒状盒	短颈瓶	15c後	(358)	-	(32~)	深褐色	複合	77	
12 -599	I	II	大桶形馬	大坪馬	15c後	(123)	54	(30)	腰分(底付と無地) 杖付の落書き 沈土灰白 黑色粒子	複合	78	

第16表 第23次調査出土陶器 3 観察表



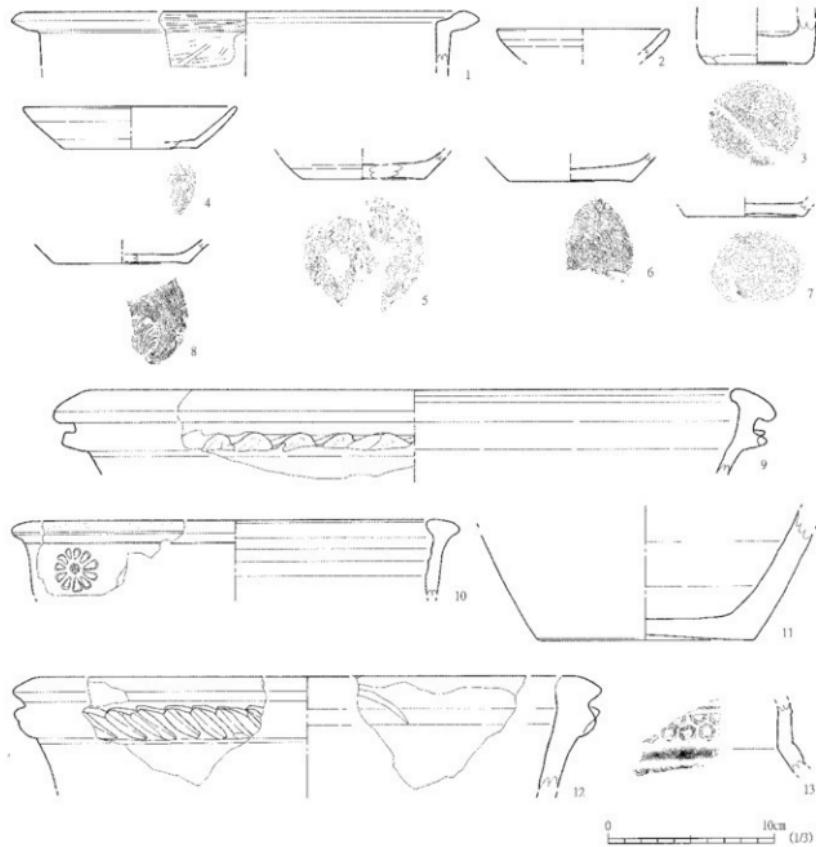
第27図 第23次調査出土陶器4・土師質土器1 (S=1/3)

器 物 番 号	区	造形・遺化	生産地	器種	製作年代	口径 高度 基底			執事・文様等	備考	参考
						(mm)	(mm)	(mm)			
1 555	I	V	肥前系	大鉢	17~18c	-	(94)	(34)	新毛台形 脊上直筒高身 砂目跡×2所あり	-	78
2 930	I	腹丸	肥前	盆	7c後	(102)	約	(22)	灰釉 見込部の口縁ハギ 空青研絞	-	82
3 166	I	KS-622・灰釉	造形不明	持手青銅	8c	(158)	-	(56~2)	船縁 口底も施釉	便地か	79
4 579	I	KS-622・青釉	造形不明	盤鉢	8c	(226)	-	(48)	跳ね 弦上・脚付 黒灰色×操作	便地か	80
5 605	I	KS-600・埋土	大鉢細脚	土所	8c後~	(76)	-	(14)	円筒鉢 口脚部は施釉(無釉)	81	

第17表 第23次調査出土陶器4 観察表

器 物 番 号	種 別	器種	区	測量・位置	口径 高度 基底			備 考	参考	
					(mm)	(mm)	(mm)			
6 1773	土師質土器	皿	I	KS-746・埋土	26	51	28	-	内面ハクロナデ 斜窓一赤褐色 外面ハクロナデ 横筋のハシミガキ(斜)コット ブ形	18
7 1633	七輪復土器	熱便座	I	KS-746・埋土	(72)	-	(42)	-	内面ハクロナデ 斜窓一赤褐色 外面ハクロナデ 横筋のハシミガキ(斜)コット ブ形	17
8 1718	土師質土器	灰木鉢	I	KS-746・埋土	(276)	-	-	-	内面に横筋ハシミガキと黒褐盛り 体部外側 縦筋ハシミガキ トーンは濃 い	20
9 1204	土師質土器	口折鉢	I	KS-746・埋土	(209)	-	(35)	-	内面に付着 (内面ふき取り汚れてる)	21
10 1708	(抄)質土器	口明里	I	KS-746・埋土	26	50	20	-	口クロコ形 手すり 有脚 ハギ脚 内面内れでいるか 亂部ハ松み切り 鹿鳴あり 内 外黒褐色物付有 外面ハクズ	16
11 1595	土師質土器	皿	I	KS-746・埋土	(220)	24	24	-	底延・凹転扁切	19

第18表 第23次調査出土土師質土器1 観察表



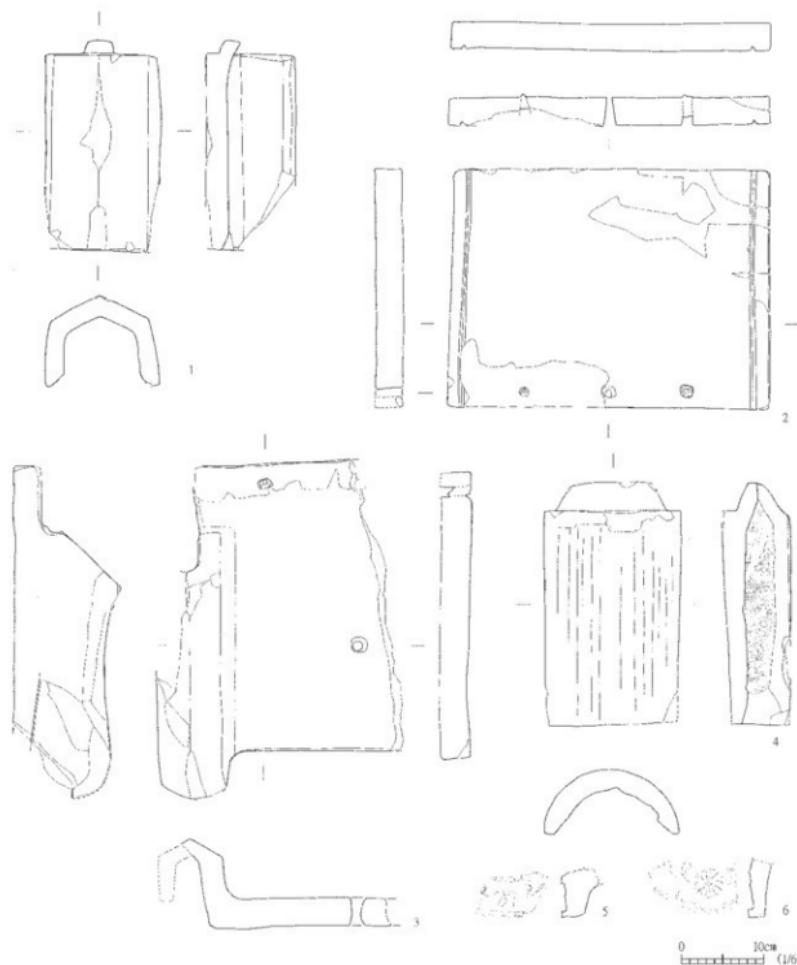
第28図 第23次調査出土土師質土器2・瓦質土器 (S=1/3)

回	遺物 番号	種別	器種	式	遺構・層位	口径 (mm)	底径 (mm)	高さ (mm)	備考	写真
1	571	土師質土器	呑器	I	KS-717・垂り方	(292)	—	(33)	施地不明 直口か 深口色・淡褐色 壁砂 外山三万寺	121
2	951	土師質土器	瓶	I	KS-917・垂り方	(106)	—	(15)	動土 漢赤褐色 内部立たず	123
3	931	土師質土器	鉢	IV	—	(72)	58	(36)	クロロ透形 円盤型か 等手 脚付絵色 瓦絵 瓦部 回転帯切り摩滅 外面黒 ケズリ持ち 17cm	124
4	578	土師質土器	瓶	IV	—	(128)	(80)	(26)	陶紙ぬけあり	126
5	792	土師質土器	瓶	IV	—	(74)	(17)	(17)	細乳孔作り	125
6	1084	土師質土器	瓶	IV	—	(164)	(76)	(17)	動土 漢赤褐色 瓦絵	127
7	1650	土師質土器	瓶	II	KS-687・垂り方	(78)	(70)	(69)	回転系作り	128
8	983	土師質土器	瓶	II	KS-690・垂り方	(160)	(78)	(12)	動土灰白色 縫口立たず 瓦絵圓底丸切り	129

第19表 第23次調査出土土師質土器2観察表

回	遺物 番号	種別	器種	式	遺構・層位	口径 (mm)	底径 (mm)	高さ (mm)	備考	写真
9	1774	瓦質土器	火鉢	I	KS-746・理手	(418)	—	(51)	丸のみの丸突窓1条	137
10	1510	瓦質土器	瓶	I	KS-546・瓶I	(212)	—	(46)	口縁部に墨花文(瓦花) 口縁部に赤彩あり 内面円化無付着 トーンは唇部	139
11	1775	瓦質土器	鉢	I	KS-746・理手	(200)	(20)	(20)	クロロナゲ	138
12	1985	瓦質土器	火鉢	I	KS-746・理手I	(325)	—	(55)	別のみの丸突窓が、垂直窓 内凹口部は窓状に彫刻、刻痕窓あり	141
13	1183	瓦質土器	瓶	I	—	—	—	—	瓦質質文(瓦花) 淡褐色、灰土火色 瓦化物が残	139

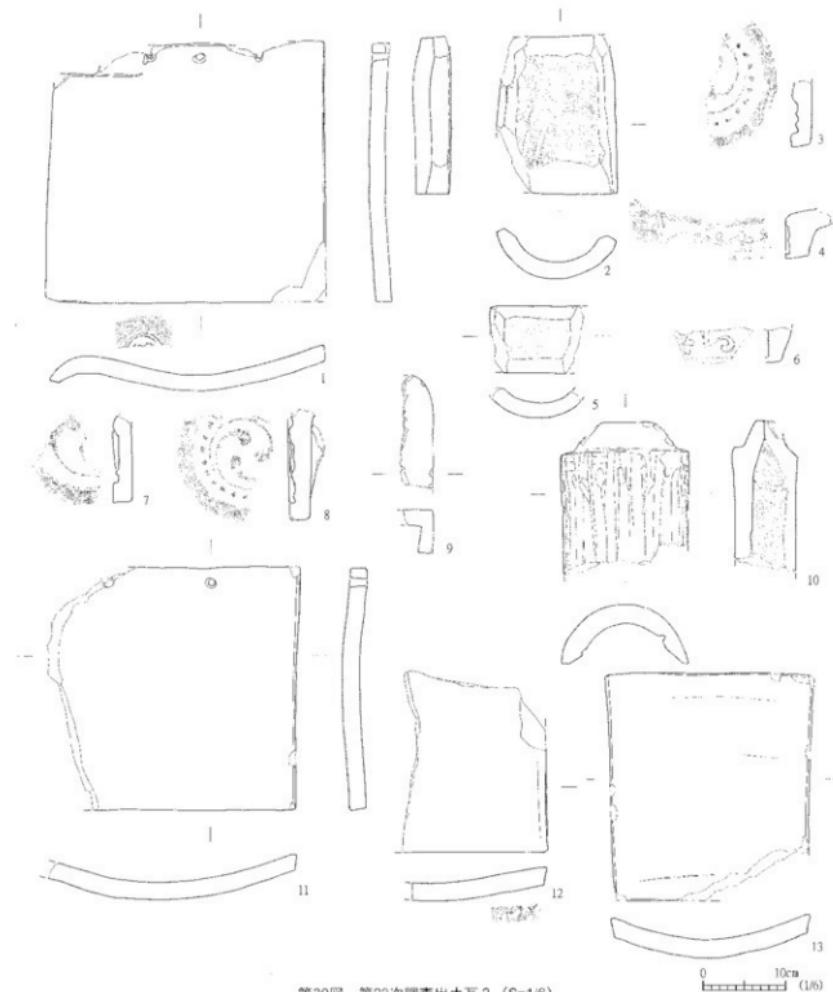
第20表 第23次調査出土瓦質土器観察表



第29図 第23次調査出土瓦 1 (S=1/6)

図	遺物 番号	種類	区	測量・位置	文様	計測値 (cm)	重量(g)	備考	写真
1	77	箱足灰陶瓦	I	I	-	全長39.0 横4.1 厚さ11.0 游み23 斜縁横38 上縁直 2.15 下縁2.1縫45.5 壁厚2.5 品2.38	1940	斜上灰色砂	143
2	69	唐草瓦	I	I	-	全長20.5 壁厚3.2 頂輪3.0 游み34 水切り幅6.5 水切 り厚さ5.5 孔径2.5 (4×5) 15.4×15.11×11	3880	斜上灰砂 穴開き 黑色鉢底 狹形残存	147
3	501	胸付平板瓦	I	I	-	馬太丸(295.5) 安政4.0 厚さ3.6 斜縁幅7.5 斜縁長さ (26.0) 斜縁高さ3.73 在庫の22.2 14×15	6080	斜上灰黒色 (かなり黒い) 筒形 烏い赤緑か 黒 皮厚	148
4	591	丸瓦	I	I	-	馬太丸(295.5) 安政4.0 厚さ3.6 斜縁幅7.5 斜縁長さ (26.0) 斜縁高さ3.73 在庫の22.2 14×15	22.0	コビナ3 (斜縁切り) 斜縁幅 斜上灰砂 黑色砂 子多い 赤目立ちず	146
5	931	絆半瓦	I	壁型	絆縁 刻差	瓦面高さ(5.0) 上縁游み2.8 底区高さ3.3 斜縁幅3.4	201	裏凹文 (接続) 斜上灰砂 黑色砂子少量	145
6	714	唐六瓦	I	II	吻合	瓦面高さ(5.0) 上縁游み2.8 底区高さ3.3 斜縁幅3.4	74	側厚又	146

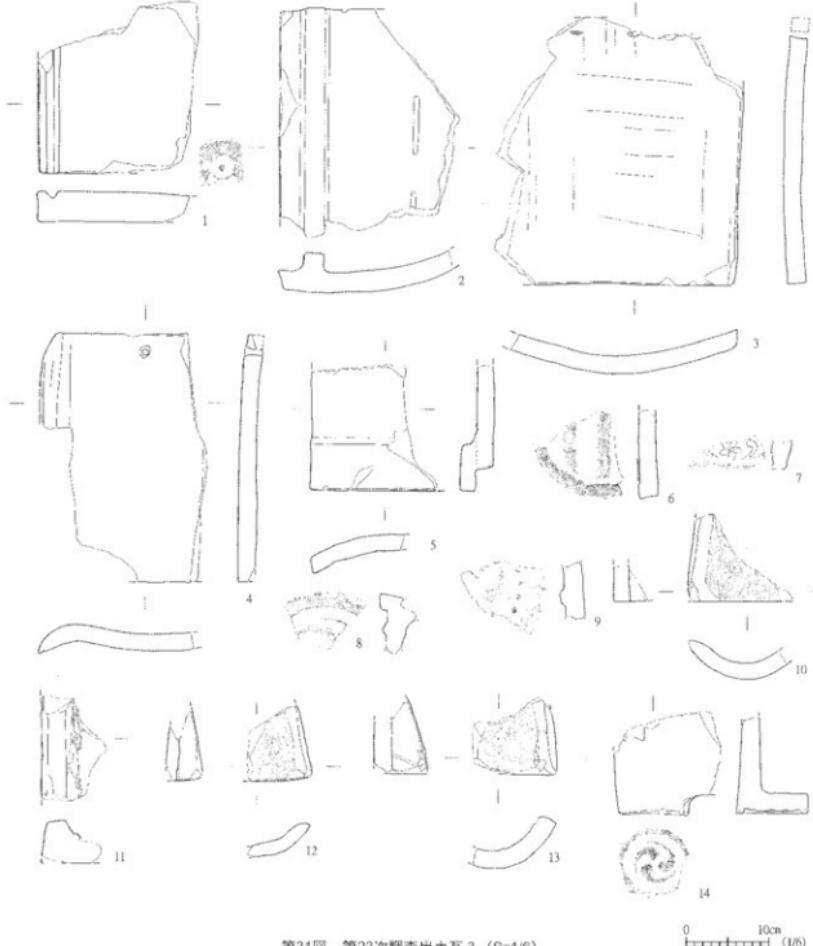
第21表 第23次調査出土瓦 1 観察表



第30図 第23次調査出土瓦2 (S=1/6)

区	番号	種類	区	遺物・部位	文様	計測値 (mm)	重量 (g)	備考	所在
1	60	丸形瓦・瓦	1	下下部		全長107、背幅(33)、孔直径	7540	側面あり、表面凹凸、折れを取ったところは曲取りが少ない	158
2	1074	輪窓瓦	1	瓦	-	全長107、背幅(35)、背幅(107)、裏さ(5)、浮み(重棒)11	384	側面ヨコサギ(重棒切り)、杏叶唐草、範位ナギ	149
3	560	町丸瓦	1	63-77-2、縫合	底文三葉(重棒)	裏幅17、側幅79、瓦当厚さ25	357	口文は尾房、杣文は楕円、筋土黄色、石墨、風化強	150
4	752	滑平瓦	1	縫合	桔梗、筋形	厚さ22、瓦当高さ(6)、瓦当浮み28、内区裏高さ35、側幅	351	度タヌキ、瓦上端面吹き、始上波相灰色、浮少量	152
5	8-5	圓筒瓦	1	瓦	-	介高32、縫(114)、高さ(3)、腹み15	226	内側ヨコサギ、底折切り、筋土灰色	153
6	587	滑平瓦	1	瓦	桔梗、網目	瓦当高さ(42)、瓦当浮み(36)、内区裏高さ(42)	134	唐草文、羅列(縫)、油上灰褐色小草	151
7	919	滑丸瓦	1	瓦上部	二葉(重棒)	側幅72、側幅79、瓦当厚さ25	317	木束底、やや筋干子、筋土灰色、黑色斑子	154
8	730	新丸瓦	1	瓦	筋文三葉(重棒)	側幅72、側幅79、瓦当厚さ25	487	口文は楕円吹き、筋文は楕円吹き、底色灰	155
9	1824	鰐口瓦	1	瓦上部	-	全長(335)、幅(41)、高さ(20)	236	東丸瓦、筋上色、筋少邊、黑色斑子少幹	56
10	2036	丸瓦	1	-		全長(382)、背幅15、高さ72、浮み23、瓦当幅(66)	1068	内側ヨコサギ(重棒切り)、筋土灰、筋地強、筋上灰色、筋内側斑子	157
11	7021	平瓦	1	K5-681・南端	-	背幅(24-1)、後幅(19-4)、長さ200、高さ56、浮み21、孔径(2)×3	740	表面から表皮剥離(サビリ)有、筋土灰色	160
12	241	平瓦	1	K5-661・溝土	-	全長(25)、前幅(17)、高さ(4)、浮み22	131	側面丸み、表面吹き、筋土灰、黑色斑子少幹	159
13	2007	平瓦	1	K5-701・70.1	-	全長280、前幅(19-1)、後幅(26-5)、高さ354、浮み27	256	筋上厚唇瓦、黑色斑子、砂跡	162

第22表 第23次調査出土瓦2 観察表

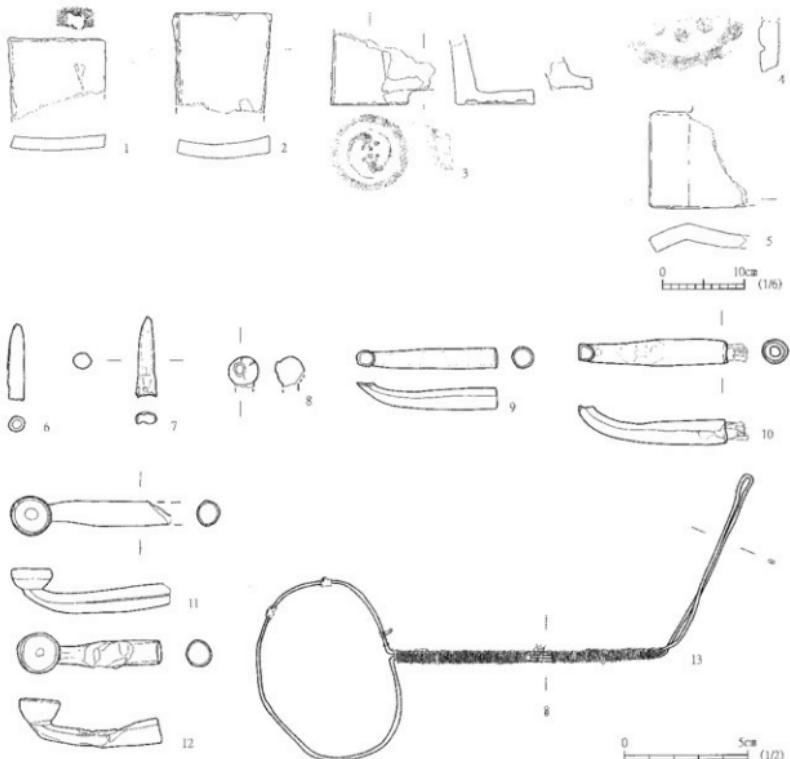


第314図 第23次調査出土瓦 3 (S=1/6)

0 10cm (1/6)

目 番 号	和 式 名	区	地 質 ・保 持	文 様	お よ び 箇 所 (cm)	重 量(g)	編 考	号 類
1 1833	西平瓦	1	西側斜面	-	全長(30) 側幅(13) 高み33 氷切端さ15 氷切端さ9	1750	輪印あり 破片	161
2 1639	二の平瓦	1	南側斜面	-	全長(25) 側幅(12) 高さ26 葉端部破片 実測端部さ23	2300	水波しがくつ	164
3 2066	平瓦	1	西上層	-	全長(28) 側幅(23) 高さ49 厚み22	2800	波状瓦 破片 黒色粒子 虹穴	158
4 2162	瓦片瓦	1	K5-708・埋土	無	全長(30) 厚さ20-22	1620	新上層色 破片	170
5 2033	角接続窓瓦	1	K5-711・埋土	-	全長(35) 窓幅(12) 厚み20 窓幅27 端幅57 ハ	737	新上層色 破片 條形 狹いナメ やや大きな西取りあ	165
6 2089	平丸瓦	1	1	-引開	深溝幅19 窓幅26 窓高さ30 窓高さ23	246	新上層色 引口立たず	166
7 1702	和平瓦	1	西上層	無花	カク瓦底(33) 内底高さ(27)	85	古式瓦(横裂) 蓋頭部破れ移 新上層色 黑色粒子	167
8 2076	斜丸瓦	1	K5-746・埋土	巴左垂妻	窓幅20 窓高さ39	177	新上層色 引口立たず	168
9 2082	斜丸瓦	1	K5-746・埋土	青文字巴左垂妻	窓幅20 窓高さ27 窓高さ27	256	新上層色 新上層色多量	169
10 2051	輪邊瓦	1	K5-746・埋土	-	全長(10) 窓幅(12) 高さ(55) 厚み(横幅) 20	223	234(11)キリ(横切切り) 密口組 新上層色 破片 黒色粒子少量	171
11 1853	輪瓦	1	K5-746・埋土	-	全長(13) 側幅(7) はみ(55)	409	東丸瓦の外边缘破片 新上層色 破片少量 黑色 粒子少量	172
12 837	輪邊瓦	1	K5-712・埋土	-	全長(92) 窓幅(8) 高さ(45) 厚み(前幅17)	39	既出(2)中(1)(横縦切り) 斜し割れ 滑落瓦 砂 磨きあ黒	174
13 2146	輪邊瓦	3	K5-695・埋土	-	全長(94) 窓幅(10) 高さ(65) 厚み(前幅で) 22	209	西丸瓦(2)中(1)(横切切り) 斜し割れ	175
14 742	研削瓦	2	1	三巴左垂妻	小口組 上当口(34) 为区隙研 窓幅20 窓高さ6	632	新上層色 破片 黑色粒子少量	173

第23表 第23次調査出土瓦 3 顆粒表



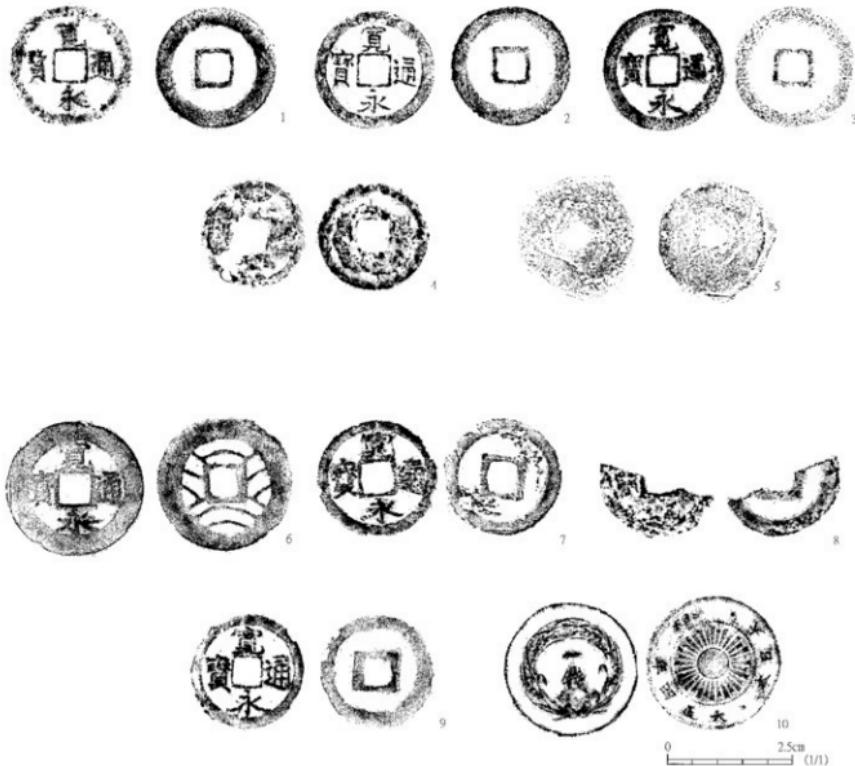
第32図 第23次調査出土瓦4・金属製品1 (1~5 : S=1/6 6~13 : S=1/2)

部	器物 番号	種類	区	底構・附着	文様	片側面 (cm)	重さ(g)	備考	等級
1	2117	堅瓦	3	Ⅱ	-	全長(150) 幅(110) 高さ(9) 厚み.4 断縫の深さ2	213	脚印あり ハラ状基盤 砂色灰白色 破損の程い	177
7	7110	堅瓦	3	Ⅲ	-	全長(123) 幅(116) 高さ27 厚み.6 断縫の深さ6	379	脚上黒灰色 砂苔被り 上端崩壊 ナデ 破 自然が一部にあり	177
7	1550	有檻瓦	3	Ⅲ	二つ丁半円	小巴形(△) 从後85 内弧径75 両端幅3.5 断縫の深さ5 丸周厚み18 金沢形 内弧高さ20 両端高さ14	441	地直家の家紋 軒平部は墨書きの店蔵文か 蔤門紋 に土星倒立形 砂色灰白色 破損含む	155
6	2137	堅瓦	3	Ⅲ	丸端	断縫幅24 断縫高さ6 両端高さ20	253	脚下灰白色 砂葉含む	176
5	994	角椎瓦・芯	3	ES-NOD・想+	-	全長(179) 幅(120) 厚み(19)	309	脚上灰白色 砂葉 砂苔被り少部分 番頭は木口削 (現白化)	150

第24表 第23次調査出土瓦4 觀察表

区	器物 番号	種類	区	底構・位置	底 量(cm)	重さ(g)	備考	等級
5	681	軽井	-	複数	全長31.865	7.6	近代 路面(鋼板か)	153
7	5.9	鏡面	-	複数	全長33.966	1.24	近代 磨きの金属か(少し錆斑) 内面に白色物質充填	164
6	6.1	不明	-	複数	全長(12) 幅(12)	1.24	大岩武鉄か 鋼鐵か(精)	155
9	1269	鍍金	-	ES-T4-楕円・少	5.05	鍍金(古銀灰褐色) 金色真細か	47	
10	1069	芯管	1	ES-T4-楕円・少	全長65	8.52	鍍金(古銀灰褐色) 金色凸起か(球状) 竹形、萬葉筆一葉既收	158
11	1091	鍍金	1	ES-T4-楕円・少	全長65×16	7.00	鍍金(古銀灰褐色) 深青でない 材質不明	169
12	2168	特管	1	ES-T4-覆土	全長58.955×6×15	6.11	鍍金(古銀灰褐色) 火炎で改造した筒状物あり 油塗1.つなぎ百も継ぎあり 破損し中央部 は剥離する	150
12	1069	不明	1	ES-T4-楕円	全長200	9.77	近代 鋼鐵か(少しころ) 鋼鐵を本體にしたものの内側に真っつけている 破けてない 金葉を 貼り付けていた	166

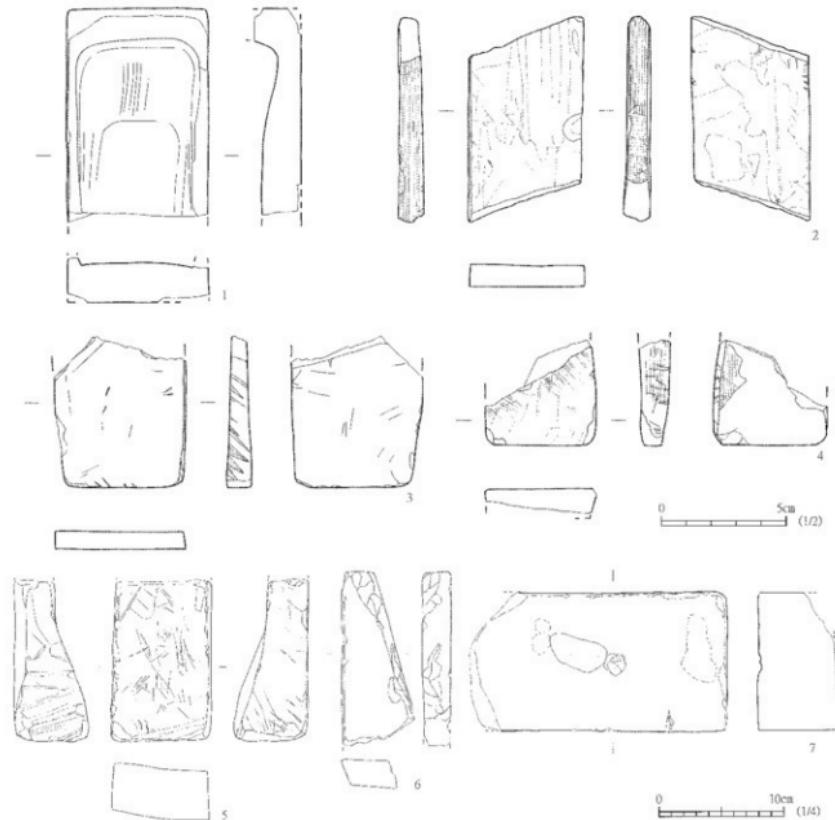
第25表 第23次調査出土金属製品1観察表



第33図 第23次調査出土金属製品2 (S=1/1)

番号	種類	径	邊幅・削り	孔 約 (mm)	重量 (g)	備考	写真
1 260	古鉄	1	K5-745・丸孔	外径25.0 空孔5.7	1.96	貨永通宝 (新貨本)	191
2 201	古鉄	1	K5-746・丸孔	外径25.0 空孔5.7	3.02	貨永通宝 (新貨本)	192
3 1499	古鉄	1	K5-747・丸孔	外径25.0 空孔5.7	4.23	貨永通宝 (新貨本)	193
4 1083	古鉄	1	K5-748・丸孔	外径25.0 空孔5.7	1.1	貨永通宝 (新貨本)	194
5 1086	古鉄	1	K5-749・丸孔	外径24.0 空孔5.6	1.06	空気をついた状態 貨永鉄	195
6 233	古鉄	1	K5-86・南朝	外径25.3 空孔5.7	3.35	四文銘 8年 造 明和4年 (1767)	196
7 313	古鉄	1	直	外径25.0 空孔5.7	2.75	貨永通宝 (古貨本)	197
8 985	古鉄	1	IV	外径25.0	0.9	貨永通宝 (古貨本)	198
9 499	古鉄	1	直	外径25.0 空孔5.5	2.3	貨永通宝 (新貨本)	199
10 222	古鉄	1	直下部	外径25.8	6.4	船 銘 天正4年 (1576)	200

第26表 第23次調査出土金属製品2観察表



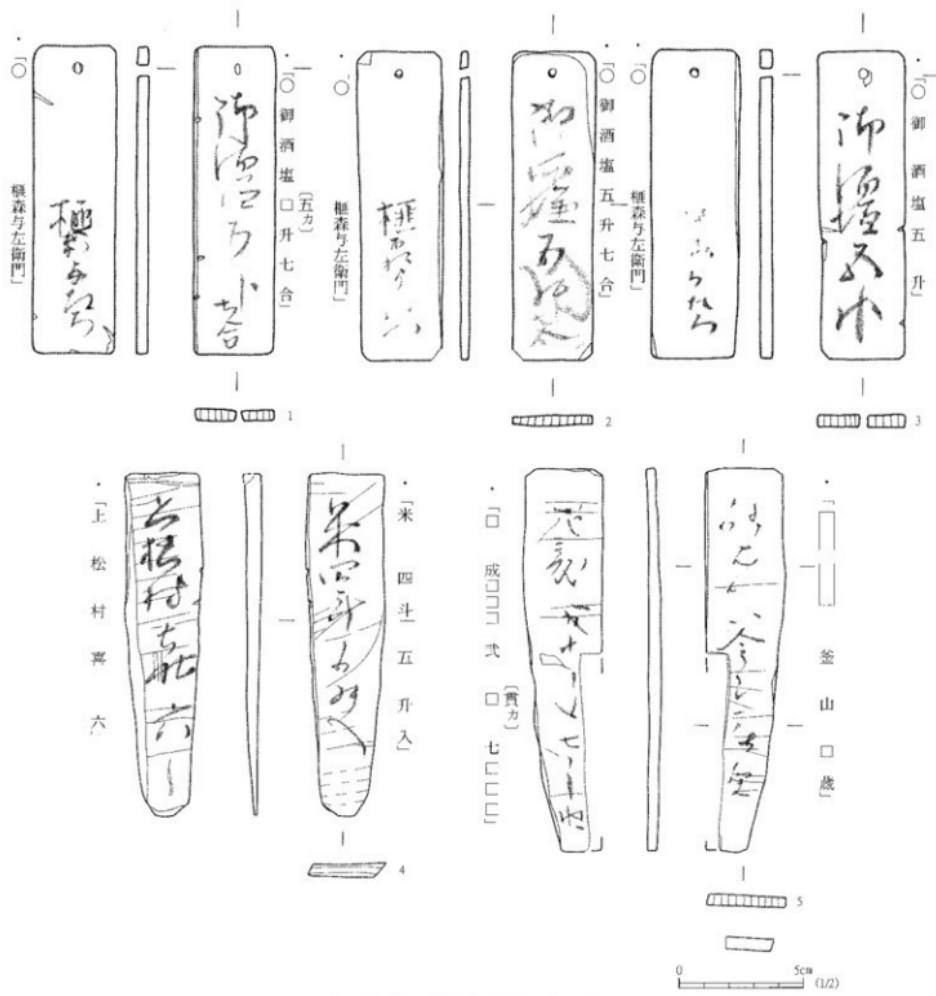
第34図 第23次調査出土石製品・レンガ (1~4 : S=1/2 5~7 : S=1/4)

図 形 式 番 号	種 類	区	遺構・位置	法 寸 (cm)	厚 さ (mm)	重 量 (g)	通 考	写 真
1 1657	磨	1	BS-695・現上 全長48.7 厚さ19	48.7	19	117.56	—	205
2 1161	研石	1	BS-746・現上 全長68.4 厚さ10	68.4	10	52.29	—	205
3 1271	研石	1	BS-7-6-現下 全長62.6 厚さ8.8	62.6	8.8	51.95	—	207
4 972	研石	1	BS-7-6-現上 全長47.4 厚さ4.5	47.4	4.5	25.24	—	209
5 1930	研石	1	BS-762・現上 全長12.0 厚さ2.4	12.0	2.4	19.0	—	210
6 764	磨石	1	1 全長10.0 厚さ3.2	10.0	3.2	190.58	瓦(平瓦)瓦板用研石 トーンは生面削り直	211

第27表 第23次調査出土石製品観察表

図 形 式 番 号	種 類	面 側	区	遺構・位置	長 さ (cm)	幅 (mm)	厚 み (mm)	面 考	写 真
7 614	その他	レンガ	1	BS-660・1層結構上	3.3	(20)	6.0	古石か、使用面あり、2枚重ねの壁、焼成口の中、施設工房関連 19c後半	202

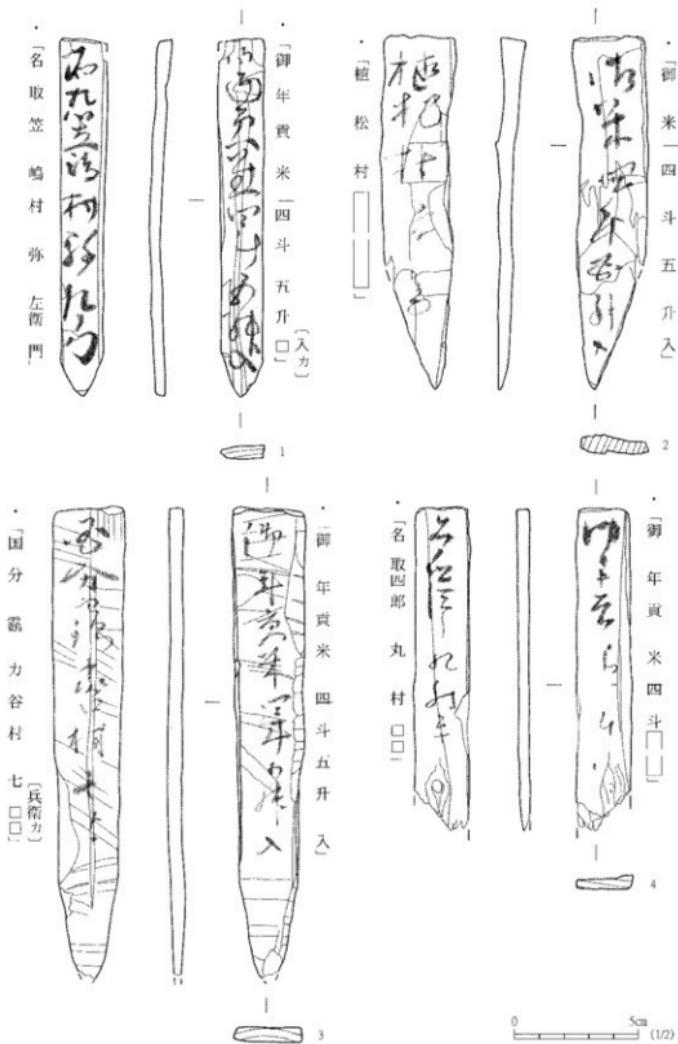
第28表 第23次調査出土レンガ観察表



第35図 第23次調査出土木簡1 (S=1/2)

回	測量番号	区	遺物名・部位	断式	孔	長合 (mm)	寬 (mm)	厚合 (mm)	記載事項 (A)	記載事項 (B)	樹種	留 考	写真
1	776	-	ES-746・付上	0.1	半身	10.	26	3.5	・「〇御酒塩四升 (五升) 七合」	・「〇横森与左衛門」	スギ	上絞	212
2	777	-	ES-746・腹上	0.1	中央	10.	26	3	・「〇御酒塩五升二合」	・「〇横森与左衛門」	スギ	上絞	213
3	778	-	ES-746・腰下	0.1	半身	10.	26	4.5	・「〇御酒塩五升」	・「〇横森与左衛門」	スギ	上絞	214
4	779	-	ES-746・腰下	0.9	140	20	6	・「横森村喜六人」	・「上松村 喜六人」	スギ	正しくは横森村	215	
5	780	-	ES-745・付下	0.9	137	23	5	・「横森喜六人」	・「横森喜六人 (喜六) 七合」	スギ	直綫	216	

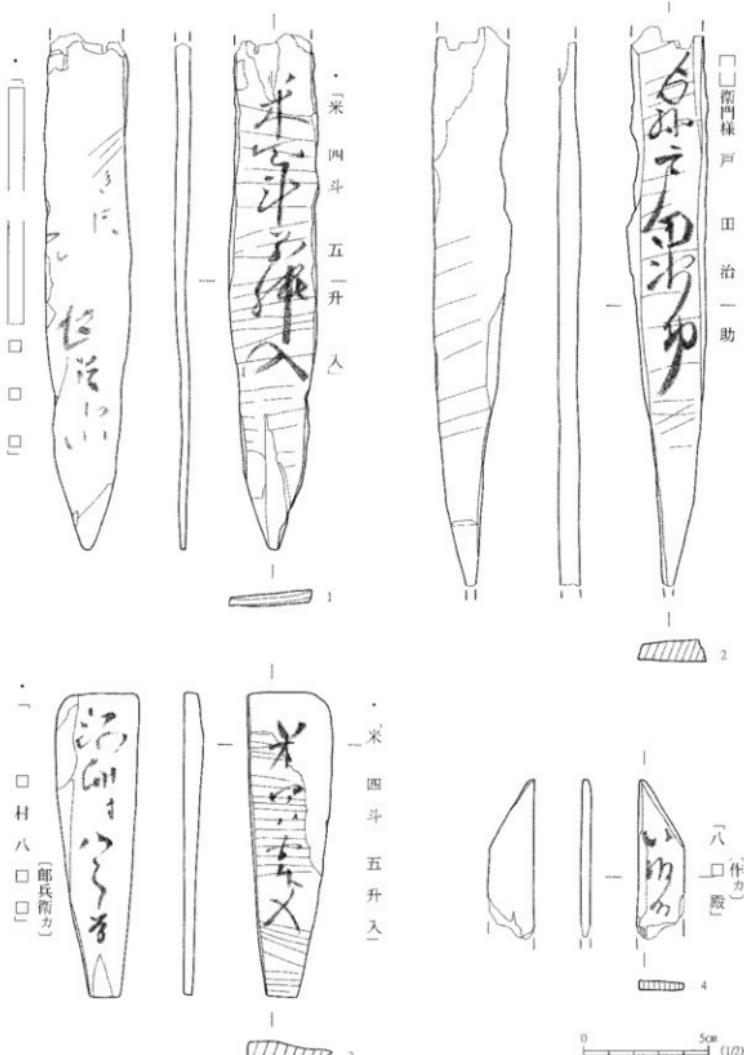
第29表 第23次調査出土木簡1 観察表



第36図 第23次調査出土木簡 2 (S=1/2)

図	監査番号	区	道筋・層位	型式	孔	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	記載箇所(左)	記載箇所(右)	目録	備考	厚真
1	1767		KS-746・壁 L4	059	46	18	3.9	「御年貢米一斗五升入」(入力), 「御年貢米四斗五升入」(入力)	「名取笠 鳥村 弥 左衛門」, 「松村」	又平	自然	217
2	1765		KS-746・壁 L4	051	46	29	5.9	「御年貢米四斗五升入」(入力)	「松村」	又平	自然	220
3	1793.1		KS-746・壁 L4	019	(19)	26	6	1.0	「御年貢米四斗五升入」 「御年貢米四斗五升入」(入力)	「国分霧力谷村 七口」(兵衛力)	又平	自然	218
4	1760		KS-746・壁 L4	019	(12)	20	6.2	1.0	「御年貢米四斗五升入」 「御年貢米四斗五升入」(入力)	「名取笠 鳥村 丸」 「松村」	又平	自然	219

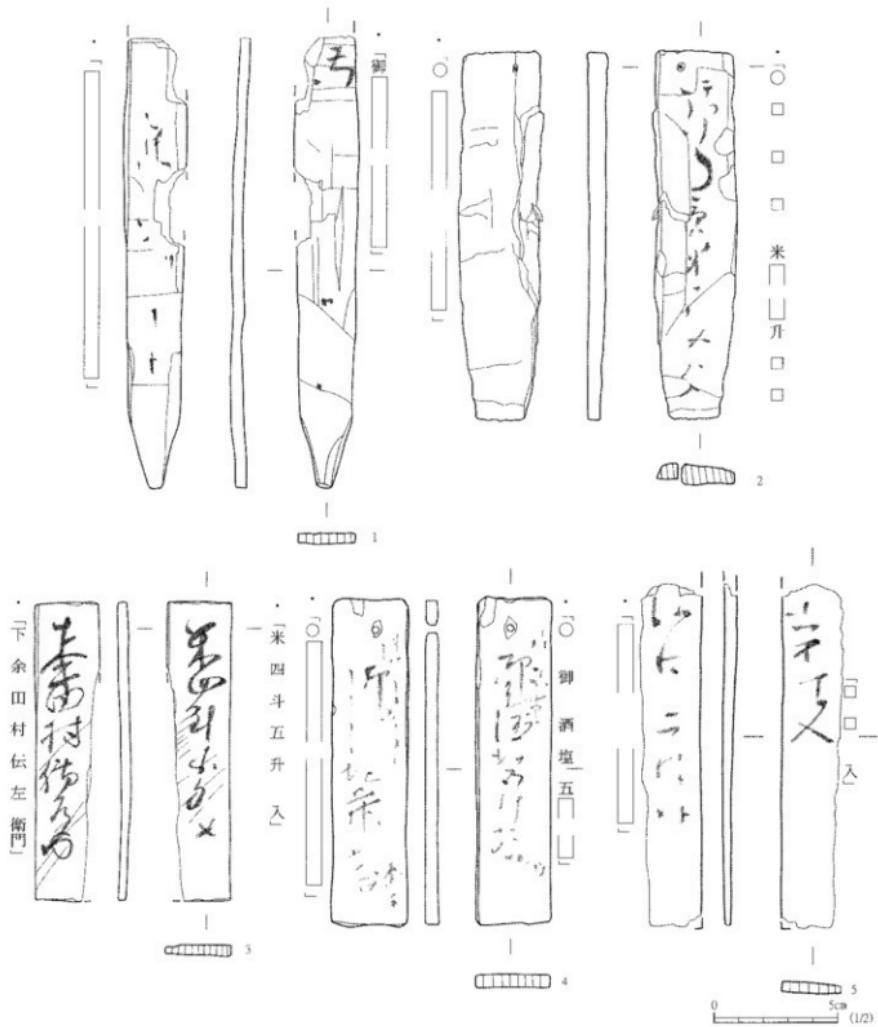
第30表 第23次調査出土木簡 2 観察表



第37図 第23次調査出土木簡3 (S=1/2)

固 定 番 号	区 別 記 号	測 量 部 位	型 式	孔	長 さ (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	記載事項(表)	記載事項(30)	種 類	備 考	1 2
1 1795	1	E5-746・先4.4	059	(21.1)	35	6	1.1	「米四斗五升入」	「一」 「二〇〇」	丸手	直筒	221
2 1795	1	E5-746・周上	081	(29.9)	31	9	1.1	「一」 「一〇〇」	「一」 「二〇〇」	丸手	直筒	222
3 1795	1	E5-746・底4.4	011	125	33	8	1.1	「米四斗五升入」	「二村八二〇」 (即兵衛二)	丸手	直筒	227
4 1915	1	E5-746・底1.4	079	(66)	18	3.5	1.1	「八」 (作六) 裏	「一」 「二」	斜面	直筒	224

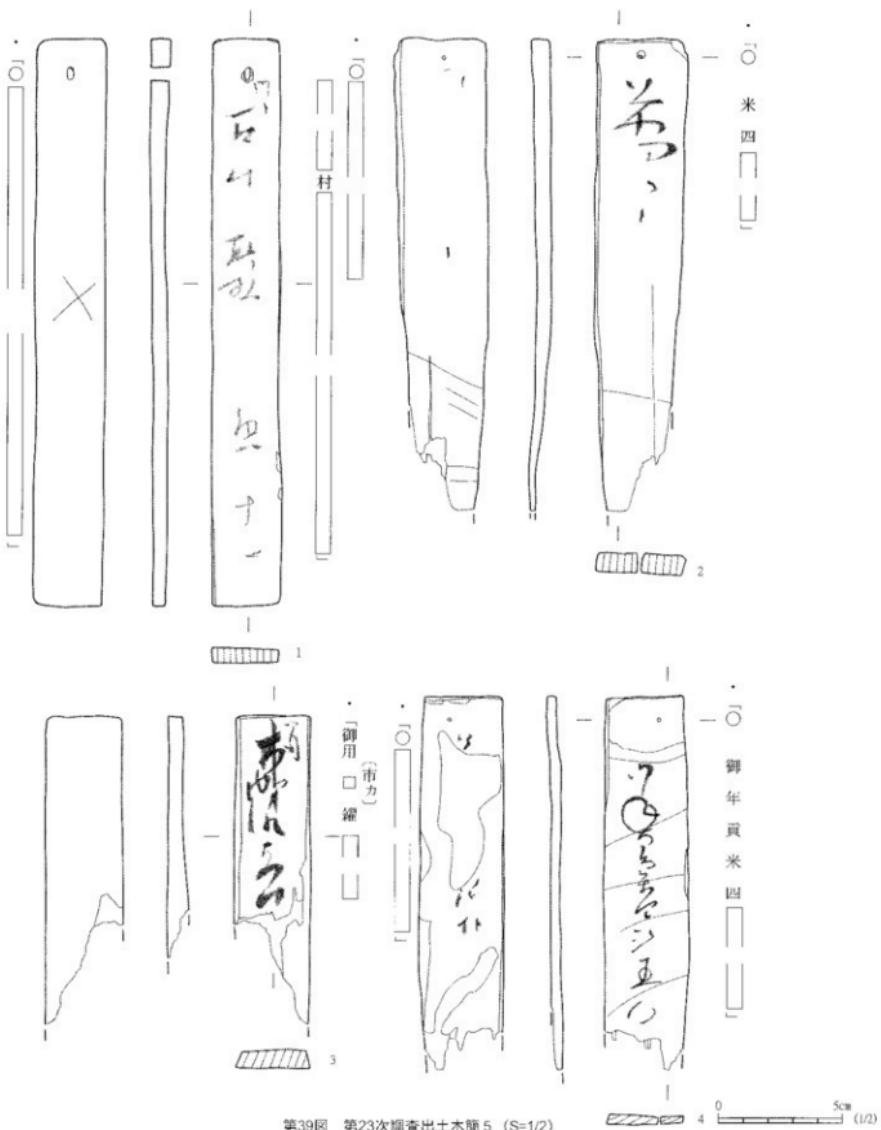
第31表 第23次調査出土木簡3 観察表



第36図 第23次調査出土木簡 4 (S=1/2)

図	通称 番号	区	施城・源氏	形式	孔	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	記載事項 (表)	記載事項 (表)	附表	備考	分類
1	1703	1	K5-346・埋土6	059	1	1.34	26	6	「(中)」	「(中)」	計測表	直筒	224
2	1799	1	K5-346・埋土	019	中央	52	12	8.3	「(中)」	「(中)」	○	直筒	231
3	1922	1	K5-346・埋土4	011	中央	23	26	4	「(未記)」	「(未記)」	下余田村・柏森面門	丸形	正腹
4	1943	1	K5-346・埋土4	011	中央	35	50	5.6	「(未記)」	「(未記)」	○	直筒	229
5	1890	1	K5-346・埋土4	081	中央	1.13	60	4	「(中)」	「(中)」	×4°	直筒	230

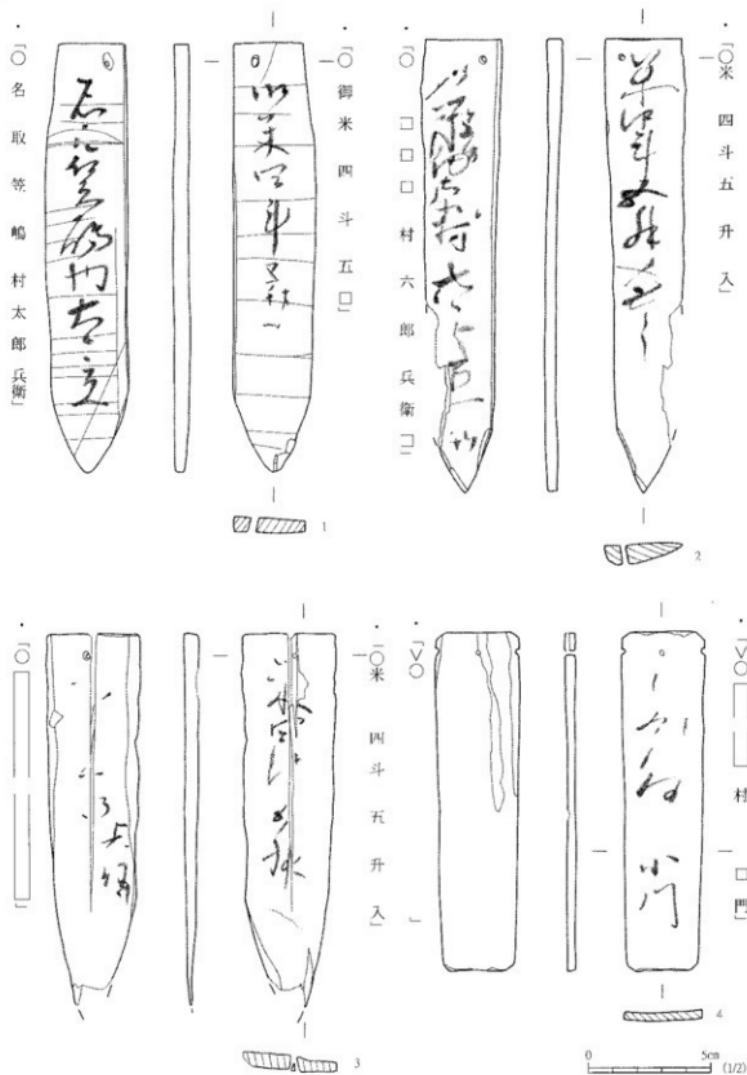
第32表 第23次調査出土木簡 4 観察表



第39図 第23次調査出土木簡 5 (S=1/2)

調査番号	式	遺構・層位	型式	孔	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	記載項(表)	記載箇所(表)	樹種	性 考	年 代
1 1914	I	SS-745・埋土4	0.1 中央		232	28	8	・○()	・○()	スギ	且無 ×の跡	223
2 1800	I	SS-746・想土4	0.9 中央 (153)		37	8	8	・○()	・○()	スギ	且無	223
3 1917	I	SS-748・埋土4	0.9		1(27)	30	8	・御用 口(市合) 埋	・○()	スギ	且無	213
4 1923	I	SS-746・埋土4	0.9 中央 (153)		34	5	5	・○()	・○()	スギ	且無	213

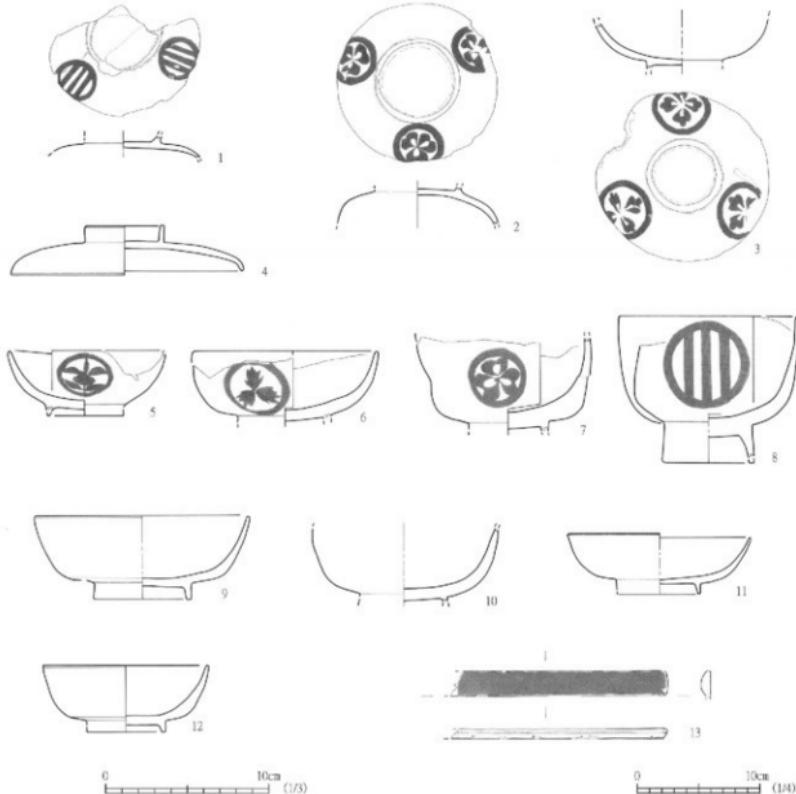
第33表 第23次調査出土木簡 5 觀察表



第40図 第23次調査出土木簡6 (S=1/2)

番号	品番	区	通横・層位	型式	孔	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	記載事項(表)	記載事項(直)	種類	参考	写真
1 19-01	1		KS-746・理上4	051	横	176	35	6.9	・「○名取 島村 太郎 兵衛」	久平 直彌	久平	直彌	227
2 1920	2		KS-746・理上4	051	横	157	32	8	・「○御米四斗五升入」	久平 直彌	久平	直彌	228
3 1944	3		KS-746・理上4	019	中央	153	38	6	・「○米四斗五升入」	久平 直彌	久平	直彌 美術 文字2行	229
4 1945	4		KS-746・理上4	052	中央	109	34	6.6	・「○」	久平 直彌	久平	直彌	230

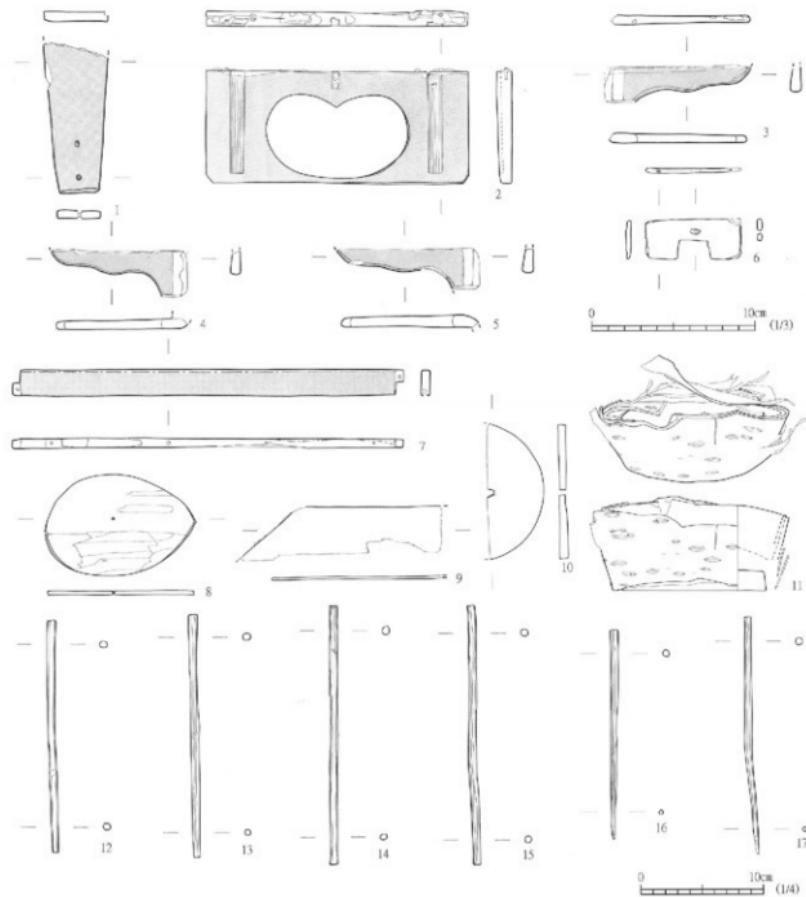
第34表 第23次調査出土木簡6 観察表



第41図 第23次調査出土木製品 1 (1~12: S=1/3 13: S=1/4)

回	番号	種類・類	径	遺構・層位	法基 (mm)	備考	写真
1	23.1	漆器 (盆)	—	KS-746・埋土	口径 (90) 深高 (12) 厚さ (3)	板の裏面から黒漆地に墨引凹彫紋 (赤色漆) 3箇所 (伊豫家歌) 内赤色漆 口縁漆 縁部分の内側	238
2	23.2	漆器 (盆)	—	KS-746・埋土	口径 (98) 深高 (23) 厚さ (4)	丸に正方 (白漆地) 繪墨 (黒墨) ライフ (白漆) 3箇所 (伊豫家歌) 内赤色漆 口縁漆 高台漆欠損	236
3	1988	漆器 (楕円)	—	KS-746・埋土	口径 (100) 深高 (29) 厚さ (7) 縁厚 (4)	外漆墨 (赤色漆) 外に丸に木挽 (くわう) 文様 3箇所 (伊豫家歌) 内赤色漆 口縁漆 高台部欠損	240
4	1971	漆器 (盆)	—	KS-746・埋土	口径 (43) 深高 (30) 窄径 (9)	板墨 (赤色漆) 内に丸に木挽 (くわう) 文様 3箇所 (伊豫家歌) 口縁漆 黄色墨 (口縁漆一部欠損) 外漆墨 (赤色漆) 全体に押す	241
5	1972	漆器 (楕円)	—	KS-746・埋土	口径 (95) 深高 (8) 厚さ (6)	丸に純文 (墨) 外は黒漆地に赤色漆文様 内には赤色漆 口縁部墨漆 高台残存部に黒漆 縁 口縁墨 小型で細い輪状の墨の上に、垂幕の墨の跡性	242
6	1975	漆器 (楕円)	—	KS-746・埋土	口径 (114) 深高 (44) 厚さ (7)	丸形の墨縁 色はようかが墨の可能性はないか、真に三和模様 (伊豫) 口縁漆高台欠損 外側・底面に赤色漆地、内面に、赤色漆、口縁墨、口縁漆墨欠損	244
7	7006	漆器 (楕円)	—	KS-746・埋土	口径 (107~) 深高 (58~) 厚さ (9~)	丸に純文 (墨)、内側に、墨墨 (黒墨) タブレ。外側に黒墨に赤色漆文様 内面には赤色漆 口縁漆 高台漆欠損 体墨跡 (赤墨) みる	245
8	2316	漆器 (楕円)	—	KS-746・埋土	口径 (110) 深高 (90)	二重墨文 3箇所 (白漆地) 以外に黒墨に赤色漆の墨紋 (伊豫家) 内面に赤色漆 縁 口縁部墨漆墨 細刷毛墨 口縁漆欠損 口縁漆墨欠損	245
9	394	漆器 (漆刷網)	—	KS-746・埋土	口径 (132) 深高 (52) 厚さ (6)	丸形 内側と外側墨 (くすんだ赤墨) 高台各付と口縁漆墨欠損 一文字墨 (直物墨) (直物墨) (直物墨)	246
10	491	漆器 (楕円)	—	KS-746・埋土	口径 (113) 深高 (65) 厚さ (8)	丸に純色漆 (黒) (口縁墨) 口縁漆、高台隠部の一部欠損 体墨墨跡 (赤墨) みる 内側墨 (墨) がれり	247
11	297	漆器 (楕円)	—	KS-746・埋土	口径 (112) 深高 (64) 厚さ (4)	袖 口縁墨 (黒) (口縁墨) 内赤色漆 口縁漆、つまみ墨先端、口縁、供材は漆器 口縁 大形墨 体墨墨 (墨) みる	248
12	2296	漆器 (漆刷網)	—	KS-746・埋土	口径 (129) 深高 (48) 厚さ (6)	縁墨 (墨) 内赤色漆 口縁漆 (墨) みる 当財物 (漆刷網) 漆刷網 (墨) 本町5つ	249
13	1959	漆器	—	KS-746・埋土	口径 (95) 深高 (40) 厚さ (5)	当財物 (漆刷網) 漆刷網 (墨) 本町5つ	250

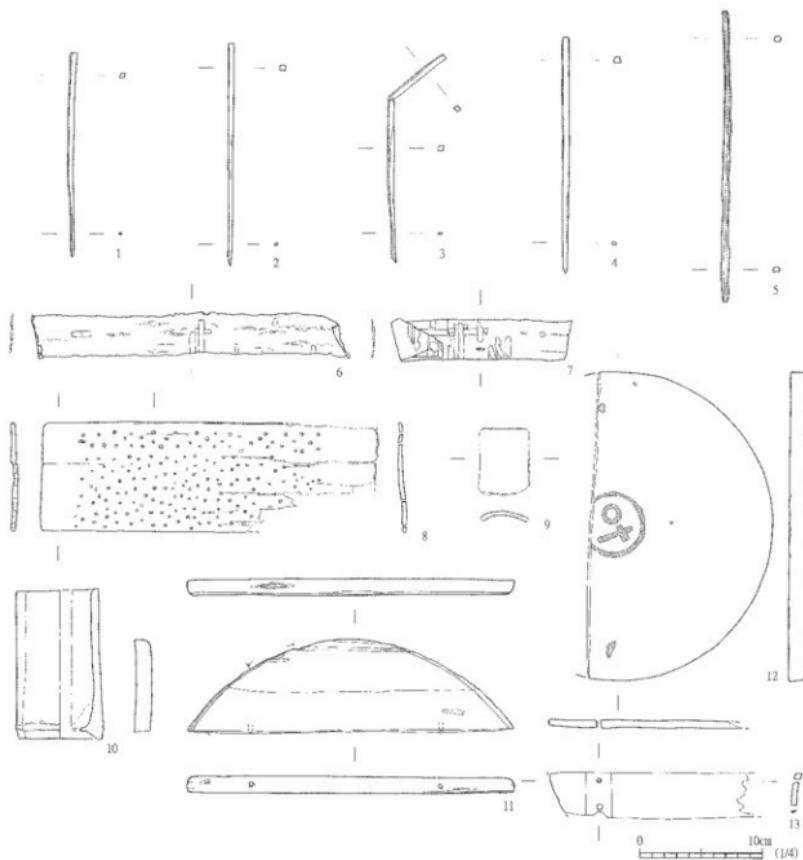
第35表 第23次調査出土木製品1観察表



第42図 第23次調査出土木製品 2 (1, 3~5, 7 : S=1/3 2, 6, 8~17 : S=1/4)

周	造物番号	種類	区	測量・局位	法寸 (mm)	参考	写真
1	1977	漆器(板付)	1	KS-746・板(4)	全長(3) 幅(4) 厚さ(5)	大柄の柄に黒漆(輪ぬき可視面あり) 錆く光沢がない。対六(2) (対役) 板付(4)	280
2	1982	漆器(漆の底)	1	KS-746・底(4)	全長(3) 幅(4) 厚さ(6~13)	漆の様な、薄合板となる木製面に木漆(4)、付着物(漆着剥離)あり 表面は光沢のない黒色。裏面は茶色。	282
3	1989	漆器(漆の底)	1	KS-746・底(1)	全長(3) 幅(22) 厚さ(6)	漆表面部の漆膜・網目取り 黒漆。一部剥離。本村1つ 漆着剥離材 3a(590・199)と同一の漆の漆材か	233
4	1992	漆器(漆の脚)	1	KS-746・理(4)	全長(3) 幅(29) 厚さ(6)	漆表面部の漆材・網目取り 黑漆。一部剥離。上端形欠損 3a(198)と同一の漆の漆材か	234
5	1991	漆器(漆の脚)	1	KS-746・理(4)	全長(3) 幅(29) 厚さ(8)	漆表面部の漆材・網目取り 黑漆。一部剥離。複合塗油漆有り 工業剥離(重複)していない。3a(198)と同一の漆の漆材か	284
6	1798	漆	1	KS-746・理(4)	全長(3) 幅(28) 厚さ(4)	小形の漆 板方に穴 先剥離。漆着剥離	275
7	2125	漆(脚)	1	KS-746・理(1)	全長(3) 幅(16) 厚さ(5)	(1)漆表面部漆・漆着剥離 (2)漆表面部漆が(墨色) 漆着剥離材(1) 梓材 切り込みがある漆の根	256
8	2205	木柄	1	KS-746・理(2)	全長(3) 幅(2) 厚さ(3~4)	漆表面部の漆材・中央部に穴有り(1) 梓材(脚板) 梓材穴 穴はつまみ用か 中央で分離箇所 引出漆器部(漆口部)あり	276
9	2254	漆物	1	KS-746・理(3)	全長(3) 幅(3) 厚さ(2)	漆表面部(漆口部) 梓材(脚板) 梓材穴 有り 漆着剥離あり	277
10	1797	板材	1	KS-746・理(3)	全長(3) 幅(3) 厚さ(2)	有孔材(脚) 梓材(脚板) 梓材穴 梓材(脚) 梓材穴 漆器底板か	278
11	2301	機械部品	1	KS-747・理(1)	全長(3) 幅(6) 厚さ(6)	有孔材か 地板脚 桁脚(脚) 梓材(脚) 漆器底板ですか ... お参考	279
12	2299	漆	1	KS-746・理(2)	全長(3) 幅(3) 厚さ(5)	丸形 多数漆表面り 黒いタイプ	275
13	2299	漆	1	KS-746・理(3)	全長(3) 幅(3) 厚さ(5)	丸形 多数漆表面り 黒いタイプ	275
4	2298	漆	1	KS-746・理(4)	全長(3) 幅(3) 厚さ(5)	丸形 多数漆表面り 黒いタイプ	275
5	2292	漆	1	KS-746・理(4)	全長(3) 幅(3) 厚さ(5)	丸形 多数漆表面り 黒いタイプ	275
6	2186	漆	1	KS-746・理(5)	全長(3) 幅(3) 厚さ(2)	丸形 光沢漆表面り	275
7	2187	漆	1	KS-746・理(5)	全長(3) 幅(3) 厚さ(5)	丸形で先端が尖り、コグ部分	277

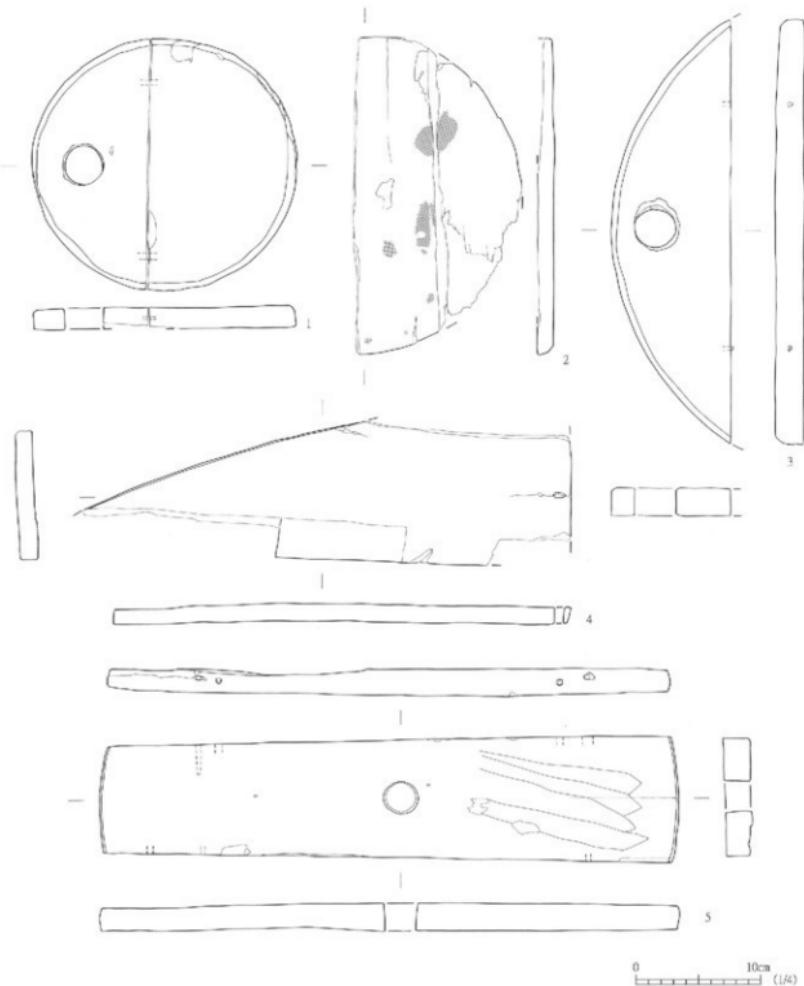
第36表 第23次調査出土木製品2 対観察表



第43図 第23次調査出土木製品3 (S=1/4)

番号	遺物名	種類	区	遺跡・層位	法 尺 (mm)	説 明	参考	年月
1 2279	箸	1	KS-786・埋4	全長168 端24		角形先端		376
2 2262	箸	1	KS-786・埋14	全長153 端25 厚さ4		角形先端 2箇所削削している 中央部に面取りか		379
3 2376	箸	1	KS-786・埋24	全長180 端35 厚さ4.5		角形先端 2箇所に削れ		380
4 2332	箸	1	KS-786・埋14	全長194 端28 厚さ4.5		角形先端		381
5 1986	漆器 (筒)	1	KS-786・埋土4	全長28		漆器 所持漆 (丁寧部分) と黒色漆の半分で 円柱状の筒 (面取りあり) 漆面艶平になっているが先端か (つぶれて断面が変形している所あり)		282
6 2349	漆皮	1	KS-786・埋14	全長36 細33 厚さ0.7~2		漆の内側に貼ったとみられる漆皮 漆付着 板材ガルしている		283
7 2249	漆皮	1	KS-786・埋土4	全長148 細22 厚さ0.5~1.5		漆付材の裏側の漆面に貼りたとみられる漆皮 漆付材 削り曲げたたんでいる ドコ材からに入り込んでいる		283
8 2334	漆し漆 (漆籠)	1	KS-786・埋土4	全長26 幅30 厚さ2		漆付材の裏側の漆面に貼りたとみられる漆皮 漆付材に計り切の穴があり 脊縫に穴の跡がない部分あり 漆面に剥げ目あり (外側)		283
9 2327	小型容器	1	KS-786・埋4	全長55 幅30 厚さ4		漆付材 漆円形容		284
10 2335	竹製品	1	KS-786・埋14	上径168 下径153 高さ58		竹籠としか 3枚同一の底 フジの(次藤)		285
11 2339	箆	1	KS-786・埋土4	全長267 端10 厚さ14		箆か 箆付材 3枚以上の底物 新規な(面取り) 斧刃 箆表面く夷色 箆径約3cm 木柄12 口径12 上に削れあわせ 製作苔の苔被覆あり		287
12 2336	箆	1	KS-786・埋土4	全長222 端20 厚さ4.5		[箆か] 箆は内部の底物か 箆面はく夷色		287
13 2223	箆	1	KS-786・埋土4	全長165 箆37 端8.5		[口] 箆は内部の底物か 箆面はく夷色		288

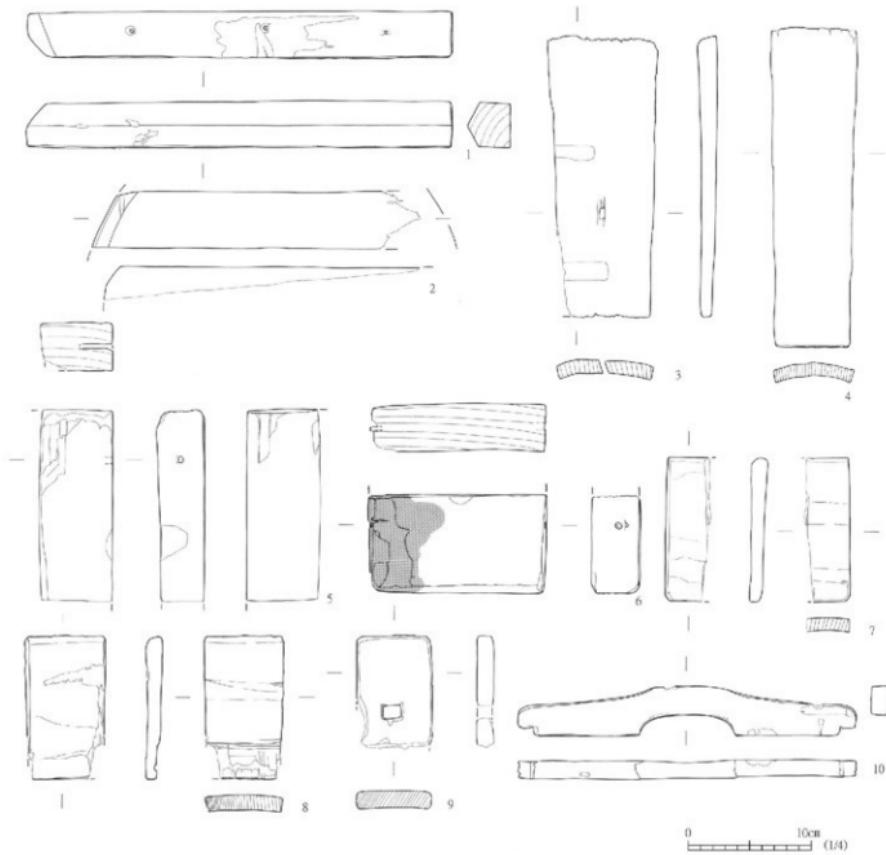
第37表 第23次調査出土木製品3観察表



第44図 第23次調査出土木製品 4 (S=1/4)

図 番号	遺物 番号	種類	区	遺構・場所	法 量 (m)	解 説	写 真
1	2337	蓋 (漆)	1	KS-7/6・埋1.4 直鉢式	全長207 梅13 厚さ18 直径(230) 手 本町2丁 箱上漆面取り (手柄) 蓋2枚組 2枚の板はいざらし板材 は研光	290	
2	2171	蓋か	1	KS-7/9・埋土 金長265 梅(136) 厚さ13	木質材 (ツクあり) 番号シルフ は研光	291	
3	2336	蓋 (漆)	1	KS-7/6・埋1.4 全長(308) 梅(90) 厚さ21 径(200) 在直 手本町1丁 番号シルフ	木質材 (ツクあり) 番号シルフ 本町1丁つ 箱取り漆面み漆 裏面 (内側 か) 茶色漆料 (漆酒か、茶漆など)	292	
4	2275	蓋 (大納)	1	KS-7/6・埋土 金長(390) 梅(118) 厚さ14 直径(15) 直鉢式	直径約15mm 手元1つ 木質材 3枚あるいは6枚組か 切り込み加工あり 片面漆油 は研光	293	
5	2367	蓋か	1	KS-7/9・埋土 直鉢式 梅(100) 厚さ22 直径34	手柄あり 番号シルフ取り 乾燥穴 附蓋漆面玉板 ゴシ手の漆板か	297	

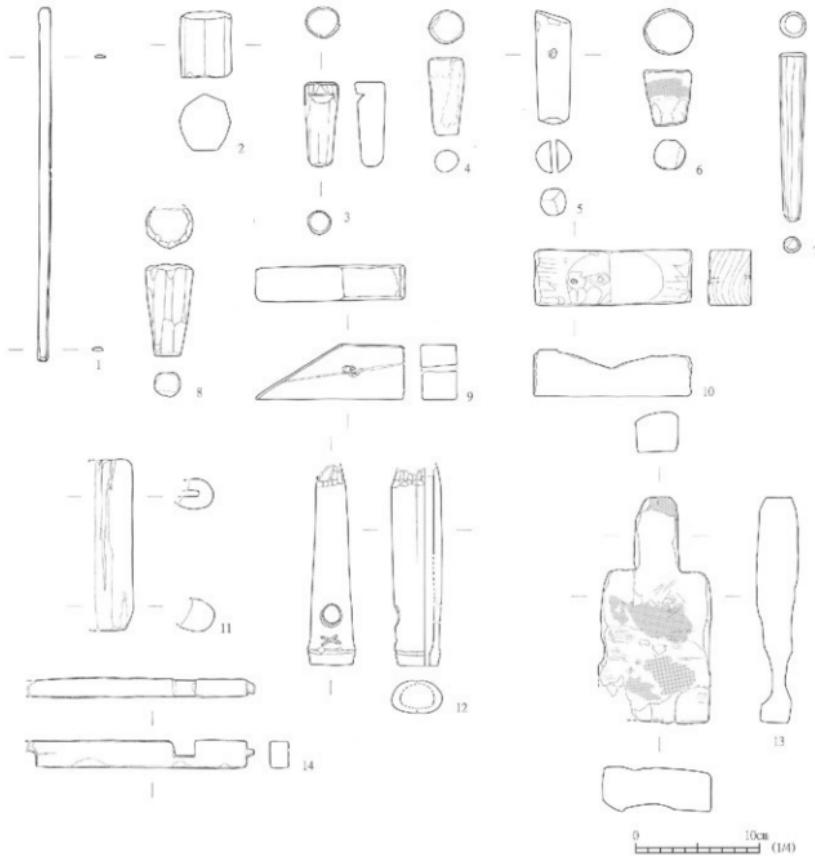
第38表 第23次調査出土木製品 4 観察表



第45図 第23次調査出土木製品 5 (S=1/4)

目	測定番号	種類	遺物・層位	法尺 (m)	参考	写真
1.	2258	角材	I KS-746・理工4	全長344 幅37 厚さ35	背面五角形 一方の端部は直角を示しており蓋の残材(つまみ)の可動性あり 打口つ2 施用跡残存	298
2.	1978	板材	I KS-746・理工4	全長(260) 幅(40) 厚さ(20)~	種の跡の底面か 板目材 漢定直角板材(背面か) 斜面直角板材(背面か) もう片側斜面 取り(理工4番中身も厚1) 断面ノ形	
3.	7175	板	I KS-746・理工	全長290 幅28 厚さ15	斜板 板目材 端面欠損近辺斜角(斜穴か、何かに穴開したら) 口縫は1尺(内部約 33cm) ほどの音割か 斜面の裏材部分はかなり失われてばんざいる 施用している部分 にカットか 斜取	294
4.	2119	板(側板)	I KS-746・理工	全長263 幅(70) 厚さ10	板目材 両側斜直角板材(外側) 内側(?) 口縫部の面取り確認できず(内側)	295
5.	2329	大板	I KS-746・理工4	全長459 幅59 厚さ38	板目材 両側斜直角板材(木板か) 大型構造板の口縫部? 斜板ともカットされている る 斜面の裏材あり 斜取 斜きが4cm程度で斜板がかかるに沿うて大型化	296
6.	2227	大板	I KS-746・理工4	全長291 幅244 厚さ39	斜面側に木板あり 斜面 斜板面にござり 大切削の構造口縫材(カットされた口縫 片) 斜の分岐 斜板けずり現れ、口縫部内側面取りあり 斜がくにかいものは斜板から底 堅只あるいは別の大型部と予想される(下部はノギヤリで逆曲)	299
7.	2167	板	I KS-746・理工	全長118 幅63 厚さ12	小半切幅分斜板(板目材) タガ板 斜板直角 0.6267と同一 他にも同じくらいいの 小半切幅分斜板(板目材) タガ板 斜板直角 0.6267と同一 他にも同じくらいいの	300
8.	2168	板	I KS-746・理工	全長118 幅65 厚さ10	小半切幅分斜板(板目材) タガ板 斜板直角 0.6267と同一 他にも同じくらいいの	301
9.	2323	板	I KS-746・理工	全長591 高さ62 厚さ14	傾の角材 斜手はくにあり 下斜欠版 斜取	302
10.	2326	把手	I KS-746・理工	全長272 厚さ14	斜分板の把手 斜目材	303

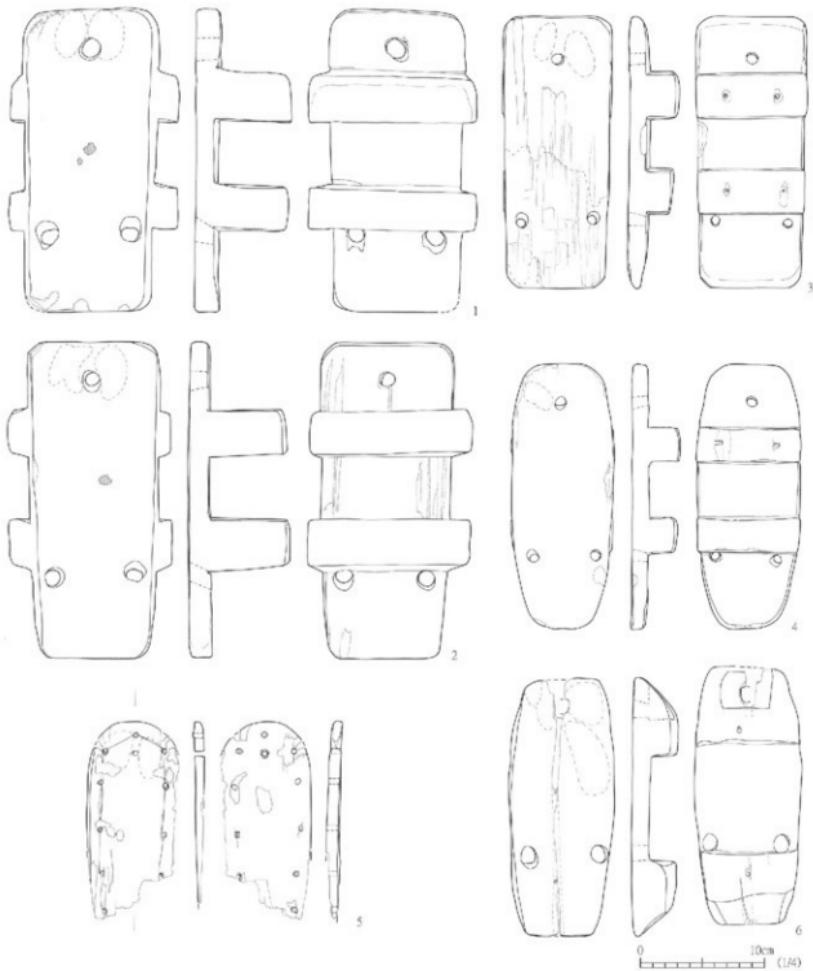
第39表 第23次調査出土木製品 5 観察表



第46図 第23次調査出土木製品 6 (S=1/4)

16	測定番号	種類	IC	測量・順位	計量 (mm)	参考		写真
						細い竹にゴム、柄のタガを加した可能性高い。竹のツク因縁にあら。	多角形、曲面(?)柄。竹の木型はか?	
1	2750	竹材	I	K5-746・塵-4	全長260 幅10 厚さ4			303
2	2756	砂鉄	I	K5-746・塵-4	全長55 扉内軸輪			304
3	2802	後	I	K5-746・塵-4	全長160 高さ27			305
4	2801	後	I	K5-746・塵-4	全長60 大筋25	柄部(竹色) 塗り 表面の刷毛感、削落感が美しい。上端彫り		306
5	7325	後	I	K5-746・塵-4	全長60 重500g 高さ27	上面六穴がある 上が斜めになっている		307
6	7311	後	I	K5-746・塵-4	全長60 最大幅40	柄部(黒色) が滑感に分布(傾向)		308
7	2315	後	I	K5-746・塵-4	全長35 最大幅24	滑潤感の持続		308
8	2314	後	I	K5-746・塵-4	全長75 最大幅37			310
9	2228	チサビ	I	K5-746・塵-4	全長20 幅4 厚さ2	孔径3.5× 横幅10mm×2つ(貴通穴2つ)		311
10	2290	手縫	I	K5-746・塵-4	全長45 幅16 厚さ3	刃1つ 枝目材		312
11	2290	道具(足踏み)	I	K5-746・塵-4	全長40 幅30 厚さ3	道具の柄、茎の穴があり(表面無い) 柄の駆け目に彫りあり		314
12	2184	道具(筋骨付)	I	K5-746・塵-4	全長165 幅19 厚さ(?)	孔2つ 孔径7mm×2つ 竹骨柄 孔あり「X」印 帽しついた先端を失創加工(筋骨付)		315
13	2251	溶接(鉢)	I	K5-746・塵-4	全長80 幅20 厚さ35	削り込みの跡と多孔蒸氣孔。手づなつたもの。裏面1つあり。ヨコ溝あり(鉢底)		317
14	1919	溶接(鉢)	I	K5-746・塵-4	全長80 幅25 厚さ15	上面無孔。底の凹部が「鉢底」。裏面2つあり。裏面1つあり。鋏跡あり		316

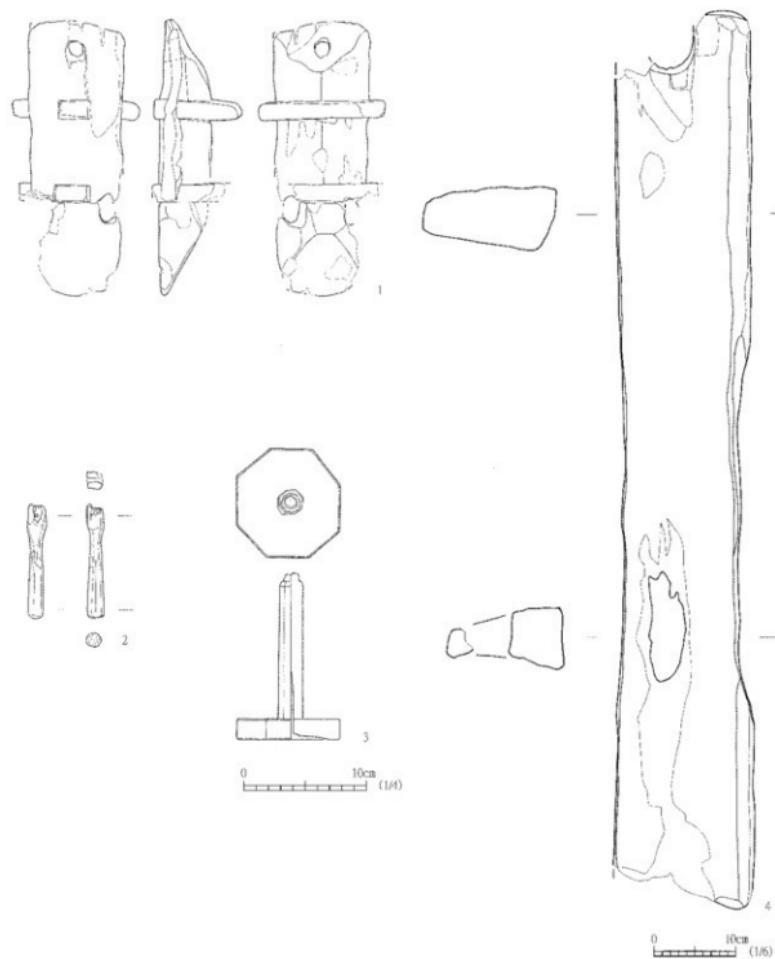
第40表 第23次調查出土木製品 6 觀察表



第47図 第23次調査出土木製品 7 (S=1/4)

番号	遺物番号	種類	区	遺物・編目	長・幅 (mm)	参考	写真
1	2230	下駄	1	KS-746・直室	全長259 幅104 高さ20 高さ28	通面下駄(直下駄) 前の長さ(高さ)約60mm 前部板目取り 先の底面にコグあり ロゲ目口(直下駄) No.218下駄と同形ではないか 台形	239
2	2318	下駄	1	KS-746・直土4	全長260 幅105 高さ24 高さ28	前の長さ(高さ)約65mm 通面下駄(直下駄) 台形板目取り 前後の底面コグしている丸い形の下駄(直下駄) 丸い底面 前面に加工した作りの丁寧な下駄 吉原式直下駄(駄目)に近い 付けたものかもしれない 台形目取り 滑面、後脚と6つづつ鋸歯状がある(すべて引ひき合ひ) 26の型面にコグ	218
3	2178	下駄	1	KS-746・直土4	全長223 幅68 高さ12 高さ40	通面下駄(直下駄) 前面に加工した作りの丁寧な下駄 吉原式直下駄(駄目)に近い 付けたものかもしれない 台形目取り 滑面、後脚と6つづつ鋸歯状がある(すべて引ひき合ひ) 26の型面にコグ	239
4	2104	下駄	1	KS-746・直土4	全長218 幅63 幅14 高さ39	通面下駄(直下駄) 直面実測値 各部均一 不规则 前脚に凹凸状穴あり	219
5	2109	草履	1	KS-746・直土4	全長(162~) 幅(71~) 高さ(10~)	脛のない駄馬(直下駄) 木の六角脚、そのうち本脚は木脚 表面漆絞られていなさい 上面には木脚用接着剤(二合墨) 付	233
6	2234	下駄	1	KS-746・直土4	全長212 幅69 高さ14 高さ37	張り駄(丸駄) 駄箱、表側と木に漆の入った大箱に軒穴あり オ竹材 置道する穴あり(木の部分が削り出している) 軒穴(駄箱) 右の脚側にコグ	231

第41表 第23次調査出土木製品 7観察表



第48図 第23次調査出土木製品 8 (1~3 : S=1/4 4 : S=1/6)

回	遺物 番号	種 類	PC	測定・置位	法 隆 (mm)	作 考	等 級
1	2177	下鉢	1	KS-747・埋土1	全長225 橋(79) 幅(45) 高さ(71)	直筒下鉢(隠れ下鉢) 番号:欠番あり 人形の頭部、脚の脛などに黑色粘土塊。小脚付近欠損。基部面取りあり(後縫不規則) 例 を採った状態 射側高約1.3cm	324
2	237	人形(手)	1	KS-746・埋土1	全高140 手(13) 腕(38)		325
3	2240	支撑	1	KS-746・埋土1	全長170 支柱(20) 土台(80) 二脚 相合	右脚が八角形 基底彫刻(縦溝) 武取り 直火法(焼石法)	326
4	2135	足場(34)	1	KS-746・埋土1	全長105 実(27) 幅(25)	舟型支柱(脚材用) 素面をもつており材質である(馬鹿=定していない) 胡り野サ井戸の支柱として利用 表面は焼くあるいは焼いているのか べて加工済	327

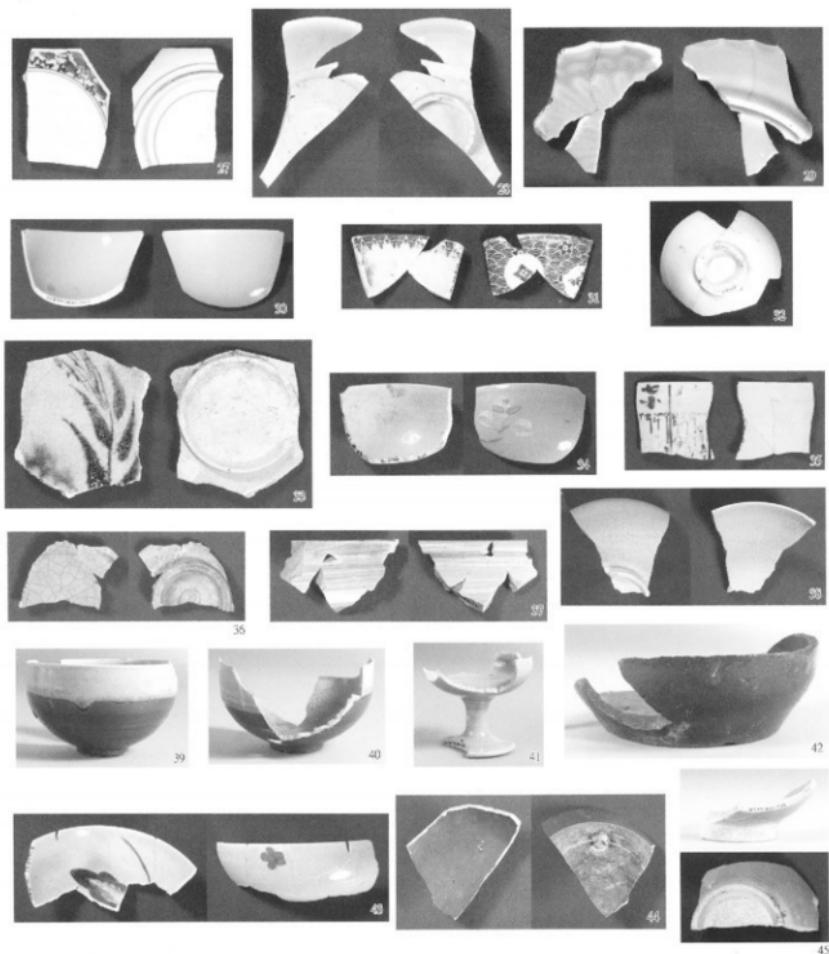
第42表 第23次調査出土木製品 8 観察表



写真図版11 第23次調査出土磁器1 (S=1/3)

写真番号	出物番号	E.C.	造様・置位	種類	生産地	器種	製作年代	口径 (mm)	底径 (mm)	厚さ (mm)	文様等	備考
29	69	2	E	安付	磁州系	碗	19C.前	—	—	—	(昭子文)	
30	1532	1	E.S-76c・柄+4	安付	磁州	碗	18C.	—	—	—	鱼龙文	
21	1081	1	S.S-981・柄上	安付	磁州	碗	18C.	—	—	—	鱼龙文	
22	226	1	E	安付	磁州	碗	18C.か	—	—	—	鱼龙文	
23	1384	1	E.S-76c・底+4	安付	磁州	碗	17~18C.	—	—	—	缠枝しき	
24	1332	1	E.S-76c・底+4	安付	磁州	碗	17~18C.	—	—	—	鱼龙 文	
25	1385	1	青様	青磁安付	磁州	碗	18C.後	—	—	—	青花文	
26	1385	3	—	白磁	磁州系	碗	19C.中	—	—	—	青花文	

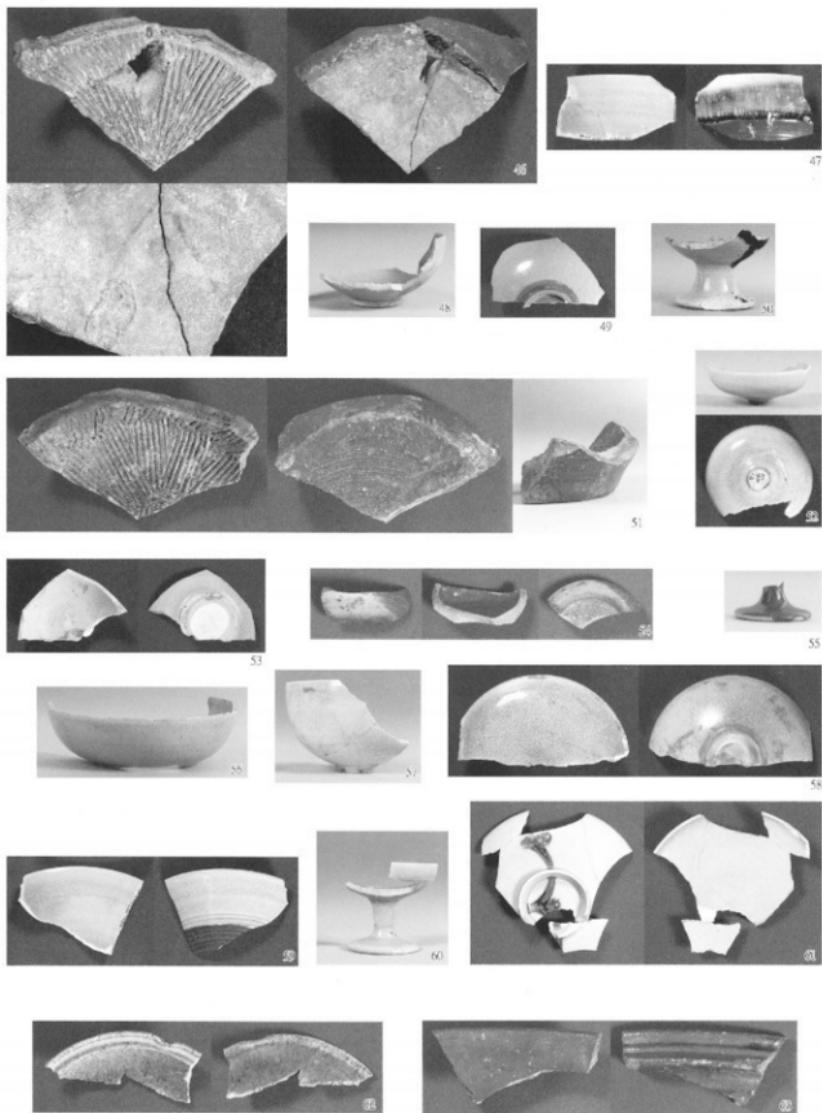
第43表 第23次調査出土磁器1観察表



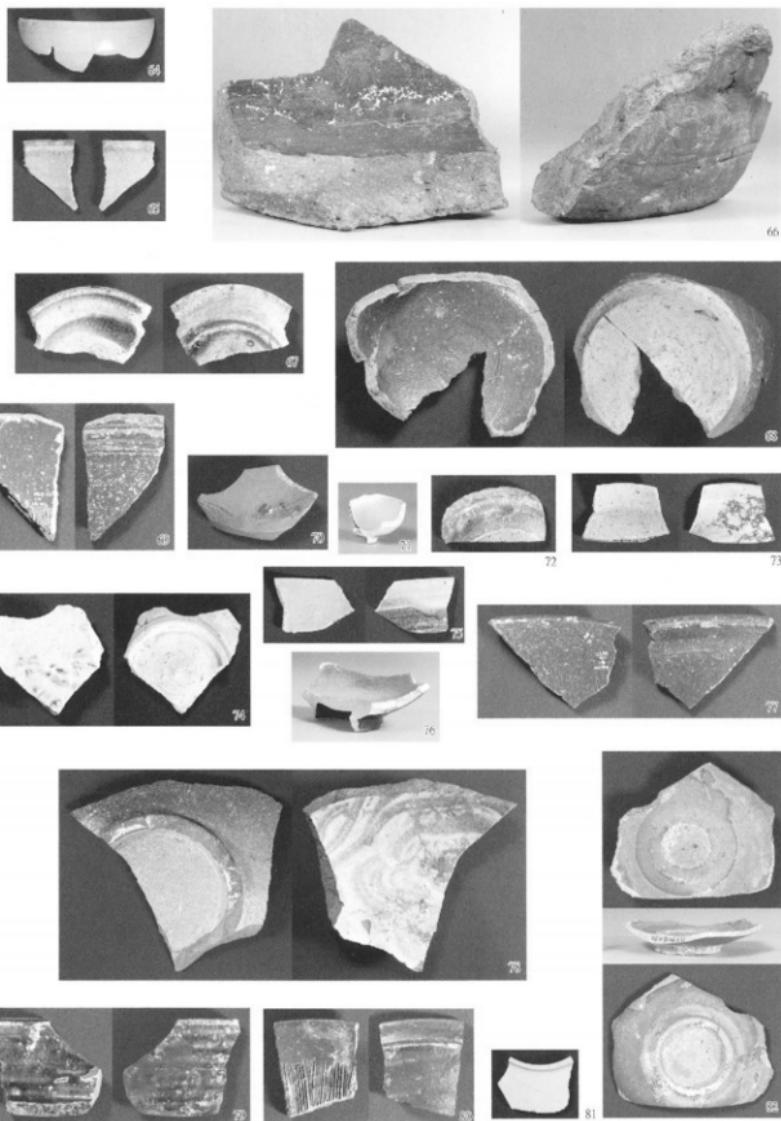
写真回版12 第23次調査出土磁器2・陶器1 (S=1/3)

写真 番号	出物 区分	底板・部位	種 類	生産地	器 種	製作年代	U1径 (mm)	U2径 (mm)	器高 (mm)	文 様	考
27 620	1	I	块陶	近畿	杯	18c後	—	—	—	带唐草文、高台内凹脚1ヶ	
28 537	1	器上部	块陶	近畿	杯	17c後か	—	—	—	见近畿ノ目録八手	
29 213	1	328-681・脚上	青磁	近畿	碗	17~18c	—	—	—	先折支文	
30 1757	1	328-681・脚上	白磁	近畿	碗	18c前	—	—	—		
31 480	1	I	块陶	产地不明	碗	19c後	—	—	—	波付に波文	
32 59	2	I	白磁	近畿	小口碗	—	—	—	—		

第44表 第23次調査出土磁器2観察表



写真図版13 第23次調査出土陶器 2 (S=1/3)



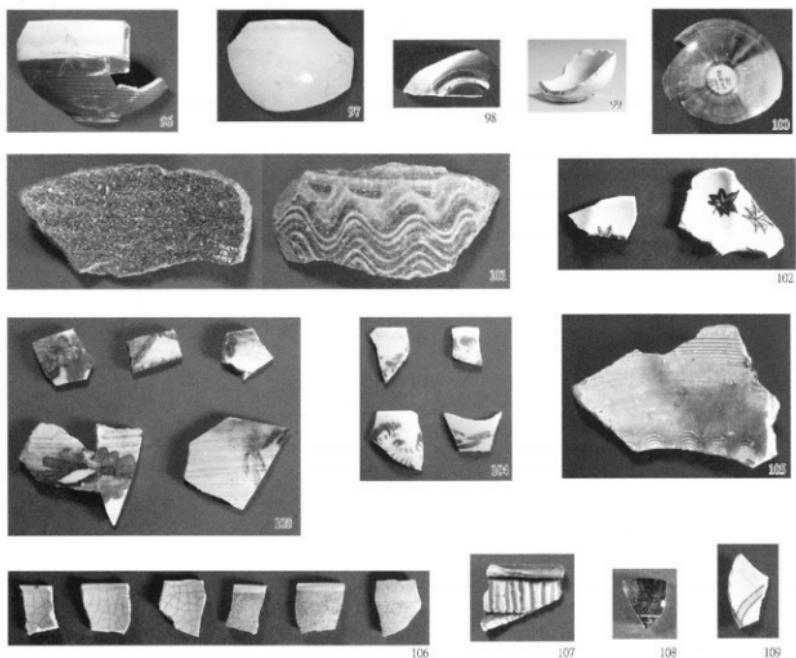
写真図版14 第23次調査出土陶器 3 (S=1/3)



写真図版15 第23次調査出土陶器4 (S=1/3)

写真 記載番号	区 域	遺構・部位	生産地	基 礎	製作時代	寸 寸			文 様 等	考 察
						口 径 (mm)	底 径 (mm)	高 度 (mm)		
83 1305-48	I	遺構・部位	生産地	基 礎	製作時代	口径 (mm)	底径 (mm)	高 度 (mm)	文 様 等	写真20と同一
84 336	2	1	大堀廻場	直	1世	—	—	—	铁鍬	
85 271	1	II	寺町廻場	直	1世	—	—	—	灰鍬	見沾點／目輪八孔
86 1405-48	I	KS-746・埴土4	生産地	直	1世	—	—	—	灰鍬	内面と外側に餘緑 高台に淡泥皮 厚、白色粒子
87 375	3	1	大堀廻場	直	1世	—	—	—	灰鍬	
88 149	1	II	寺町廻場	直	1世	—	—	—	内溝壁土	
89 468	1	II	大堀廻場	小坪	1世後	—	—	—	灰鍬	当台内溝化灰鍬
90 525	1	II	杞的	直	1世後	—	—	—	灰鍬	豊村のみ露む
91 1455	I	KS-746・埴土4	人形廻場	直	1世	—	—	—	灰鍬	
92 96	1	貢村4切	直	小坪	1世	—	—	—	分高台	
93 454	1	II	寺町廻場	直	1世	—	—	—	灰鍬	見沾點／目輪八孔
94 197	1	V	杞的	直	1世後	—	—	—	青灰鍬	見沾點／目輪八孔
95 953	1	IV上階	人形廻場	小坪	1世後	—	—	—	灰鍬	

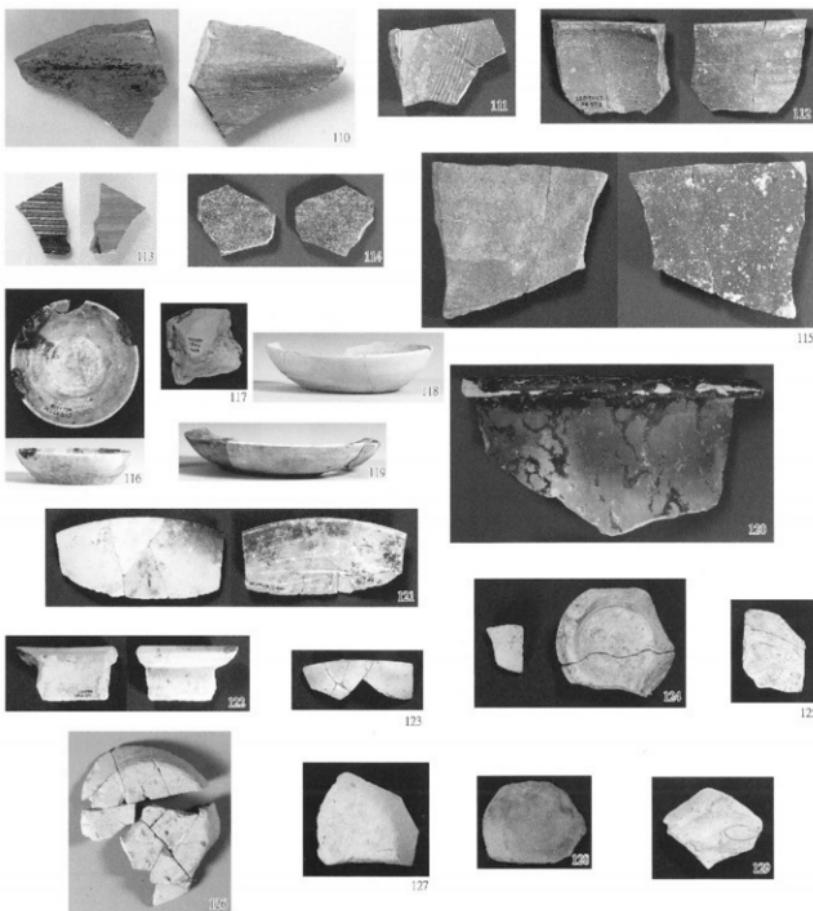
第45表 第23次調査出土陶器4 観察表



写真図版16 第23次調査出土陶器5 (S=1/3)

写真	遺物番号	区	遺跡・部位	生産地	器種	製作年代	口径 (mm)	底径 (mm)	高さ (mm)	文様等		備考
										縦分	横分	
96	1428	I	K5-746・溝土4	大塙相馬	碗	18c	—	—	—	縦分	灰磚、鉢脚	
97	1/25	I	K5-745・溝土4	大塙相馬	碗	18c	—	—	—	横分		
98	268	I	II	大塙相馬	碗	18c	—	—	—	縦分	灰磚、鉢脚(青白模印)	
99	625	I	II	大塙相馬	小坪	18c早~	—	—	—	円溝脚		
100	1/79	I	K5-746・溝土4	大塙相馬	弧形器	18c	—	—	—	横脚輪廻		
101	958	I	2F上階	常陸不來	甕か	18c~	—	—	—	刷毛文、猶土無彩色、碎き合せ		
102	33・施	I	酒戸内窓	輪形折	18c中	—	—	—	踏場柱頭文		調査	
103	1151+施	I	K5-746・溝土4	唐津	甕	18c	—	—	—	二色彩絵、松文か		
104	1127+施	I	K5-746・溝土4	京須奈	碗	18c	—	—	—	色绘草花文、刷・齊・金		写真17と同一起
105	1077	I	K5-581・溝土4	美濃	大鉢	17c後	—	—	—	灰釉綠繪文	波状文	
106	1459+施	I	K5-746・溝土4	京須奈か	碗	18c	—	—	—	灰釉筒形、内面と外側に蓮瓣、底内側無		
107	928	I	2F上階	酒戸内窓	瓶	19c初	—	—	—	縫合縁付		
108	492	I	田舎	酒戸内	瓶	18cか	—	—	—	縫合		
109	645	I	茂丸	鳴鳴緑添?	皿	17c後	—	—	—	縫合		

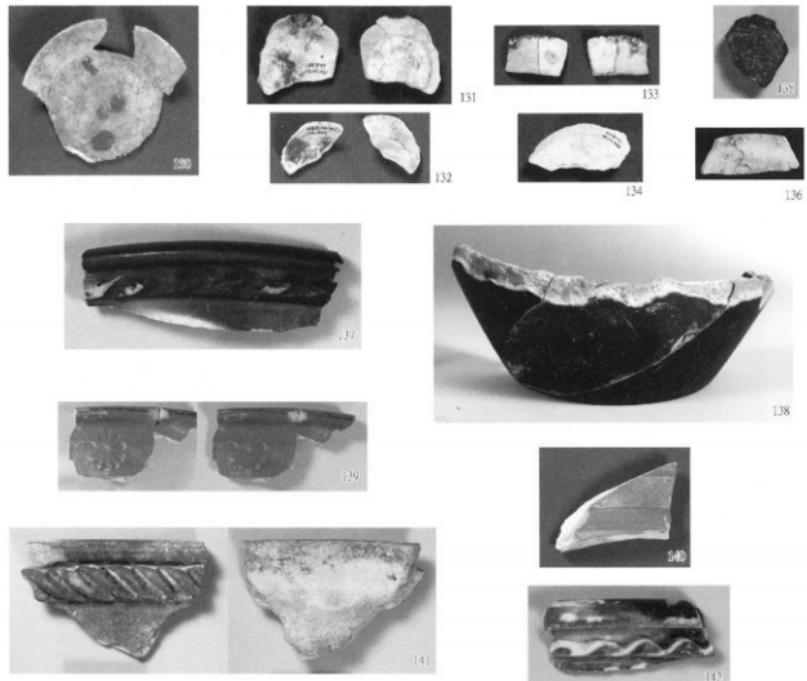
第46表 第23次調査出土陶器5観察表



写真図版17 第23次調査出土陶器6 (S-1/3)

件名	遺物番号	E.S.	遺構・測位	生産地	形種	製作年代	口径	底径	高さ	文様等	備考
							(mm)	(mm)	(mm)		
1.0	645	1	把丸	鶴羽	大浅	17前	—	—	—	内外塗土 帯手	
111	985	1	平上素	片拔	深盆	17	—	—	—	鐵化斑	
112	558	1	SS-682・埋土	露泥不規	香炉小	17	—	—	—	埠墨小	
113	570	1	SS-715・縦り方	鶴羽	碗	17.4~18.6前	—	—	—	高目 海手 中上	
114	1621	1	SS-745・埋土	中國?	微小	17.6	—	—	—	埠墨 錐溝迹	
115	871	1	三	東周?	盤	時期不明	—	—	—	埠墨小	

第47表 第23次調査出土陶器6 鏡察表



写真図版18 第23次調査出土土師質土器2・瓦質土器 (S=13)

写真 番号	種別	器種	区	遺構・部位	口径 (mm)	底径 (mm)	厚さ (mm)	参考
130 1158	土師質土器	皿	1	KS-745・埋土4	—	—	—	内輪褐色 回転切削
131 1532	土師質土器	印明皿(小型)	1	KS-704・埋土	—	—	—	滑擦付着 回転切削
132 1205	土師質土器	印明皿(小型)	1	KS-705・埋土3	—	—	—	滑擦付着 回転切削
133 1064	土師質土器	印明皿(小型)	1	KS-706・埋土2	—	—	—	朱色土と重合 滑擦付着 回転切削
134 100	土師質土器	皿	1	直上面	—	—	—	滑擦付着 回転切削
135 1594	土師質土器	印明皿(小型)	1	KS-681・埋土	—	—	—	滑擦付着 回転切削 施土黒色
136 1728	土師器	皿	1	埋土	—	—	—	上縁部 平安時代(神化1点市手)

第48表 第23次調査出土土師質土器2観察表

写真 番号	種別	器種	区	遺構・部位	口径 (mm)	底径 (mm)	厚さ (mm)	参考
141 2771	瓦質土器	火鉢	1	KS-740・埋土4	—	—	—	口縁部2分牛

第49表 第23次調査出土瓦質土器観察表



163



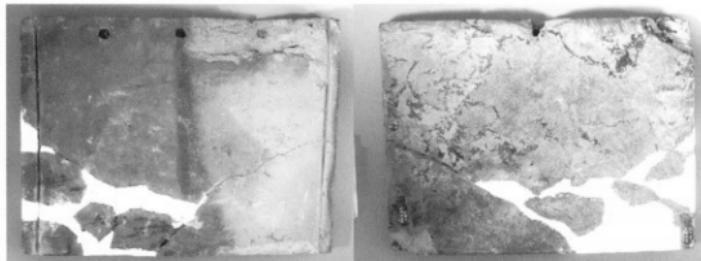
144



145



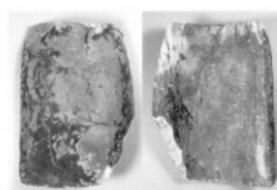
146



147



148



149



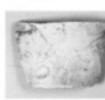
150



151



152



153



154



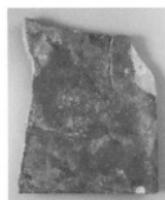
155



156

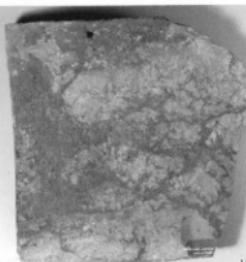


157



158

159



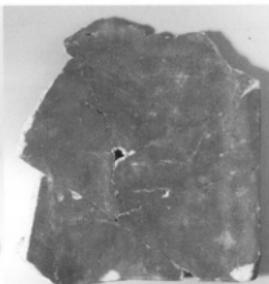
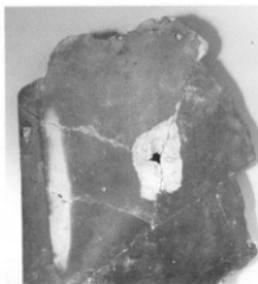
160

161



162

163



164

165

166



167

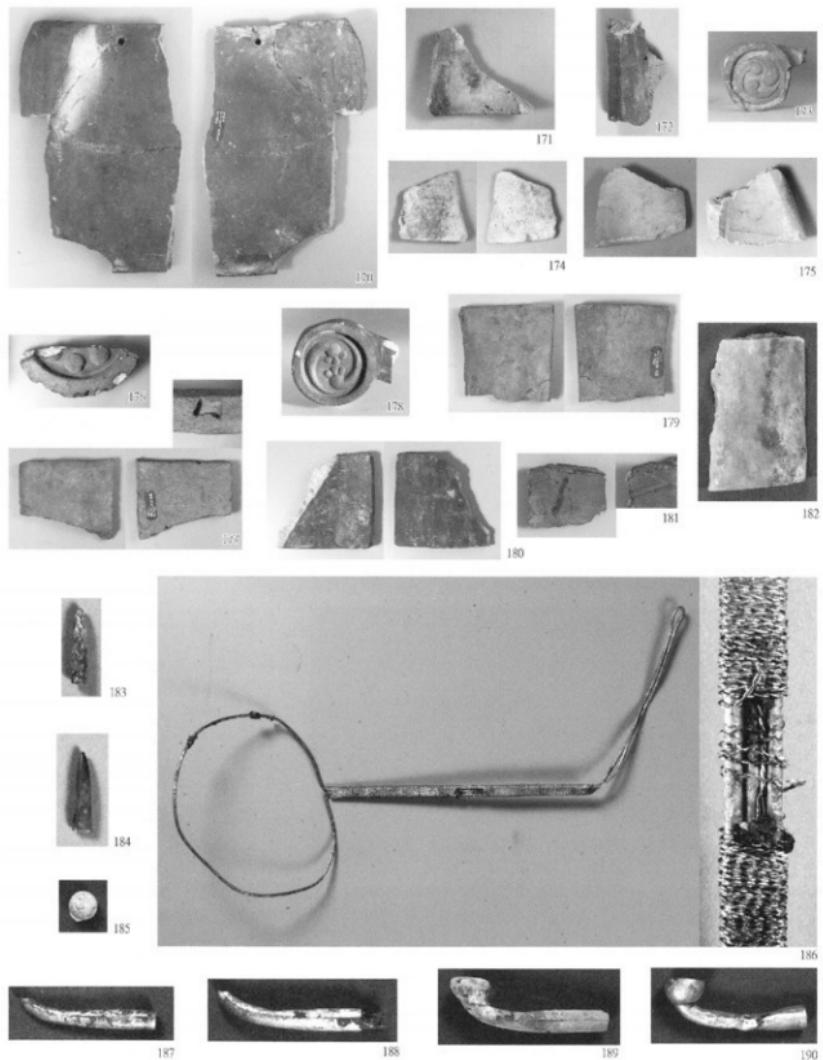


168



169

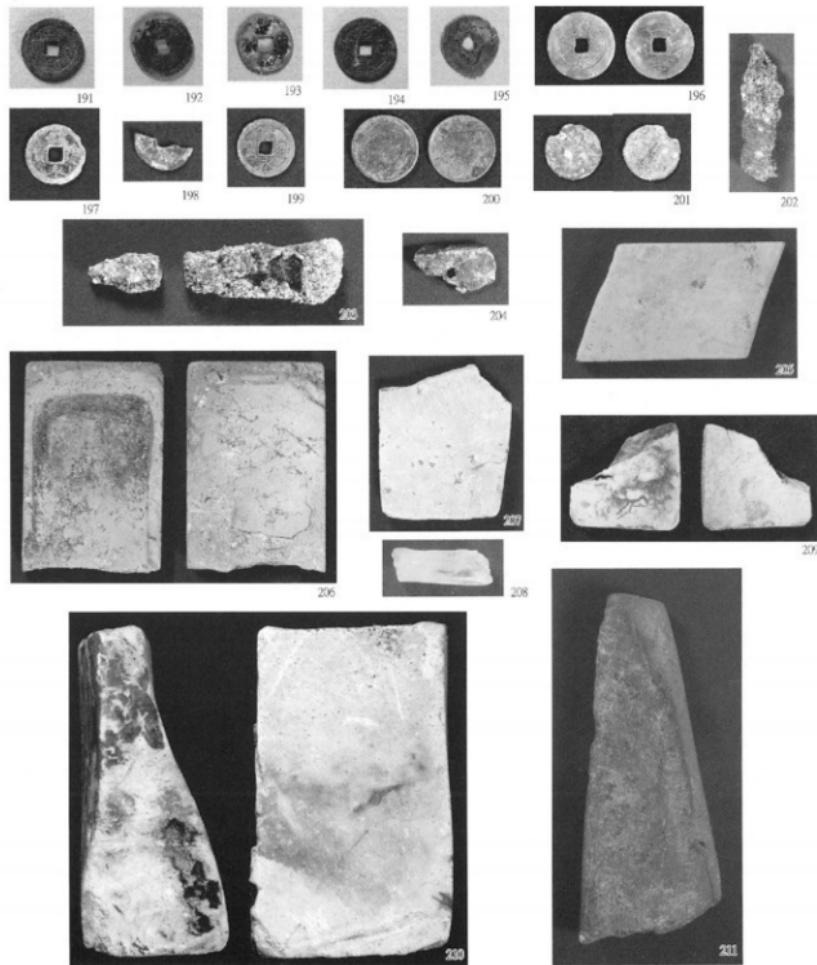
写真図版20 第23次調査出土瓦2 (S=1/6)



写真図版21 第23次調査出土瓦3 (S=1/6)・金属製品 (1/2)

写真	遺物 番号	種類	区	通納・層位	文様	計測値 (mm)	重量 (g)	備考
181	HS7	平瓦	1	KS-581・想土	—	—	—	レの剥離あり
182	206	筒瓦か	1	KS-768・想土	—	—	—	

第50表 第23次調査出土瓦3 観察表



写真図版22 第23次調査金属製品2・石製品(S=1/2)

写真	遺物 番号	種類	区 域	遺構・部位	法 量(cm)	重量(g)	備考
201	431	石鏟	3	Ⅱ下部	—	—	銅一鉛共削 大正～昭和
202	869	鉤	3	Ⅲ	全長:0.90	—	—
203	431	鉤	3	K3-596・壁上	全長:0.60	—	木質材轡
204	1279	金刀	3	K3-746・壁上4	全長:0.31	—	刃穴あり 裏面に鋸目

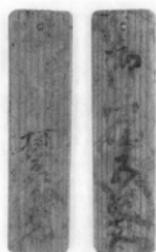
第51表 第23次調査出土金属製品2観察表

写真	遺物 番号	種類	区 域	遺構・部位	法 量(cm)	重量(g)	備考
205	1957	木砧	1	Ⅲ	—	—	机に陳列2点組上

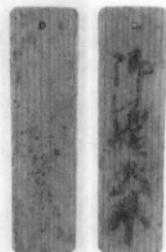
第52表 第23次調査出土石製品観察表



212



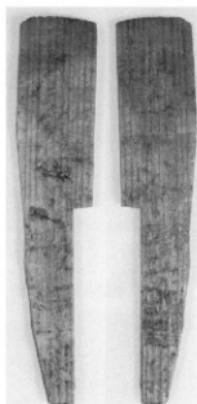
213



214



215



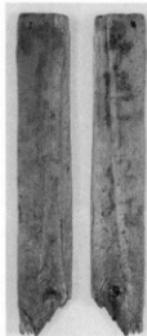
216



217



218

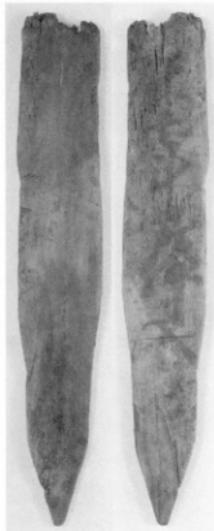


219



220

写真図版23 第23次調査出土木簡 1 (S-1/2)



221



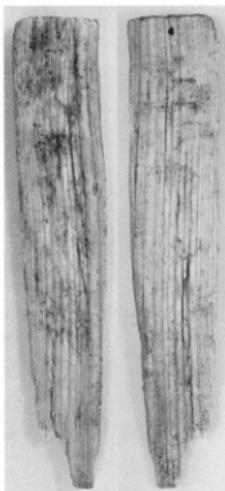
222



223



224



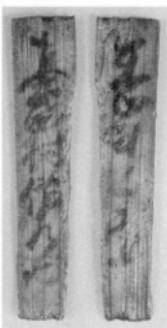
225



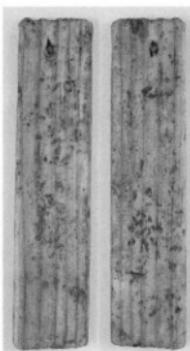
226



227



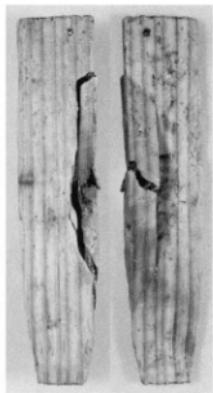
228



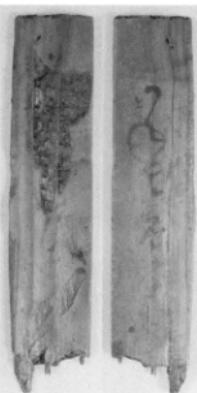
229



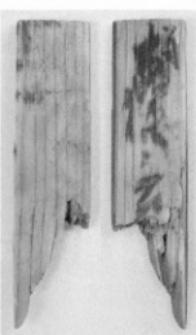
230



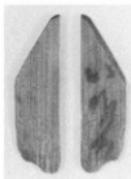
231



232



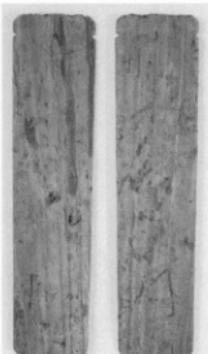
233



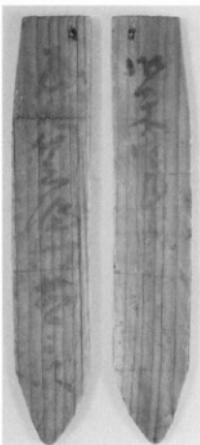
234



235



236



237

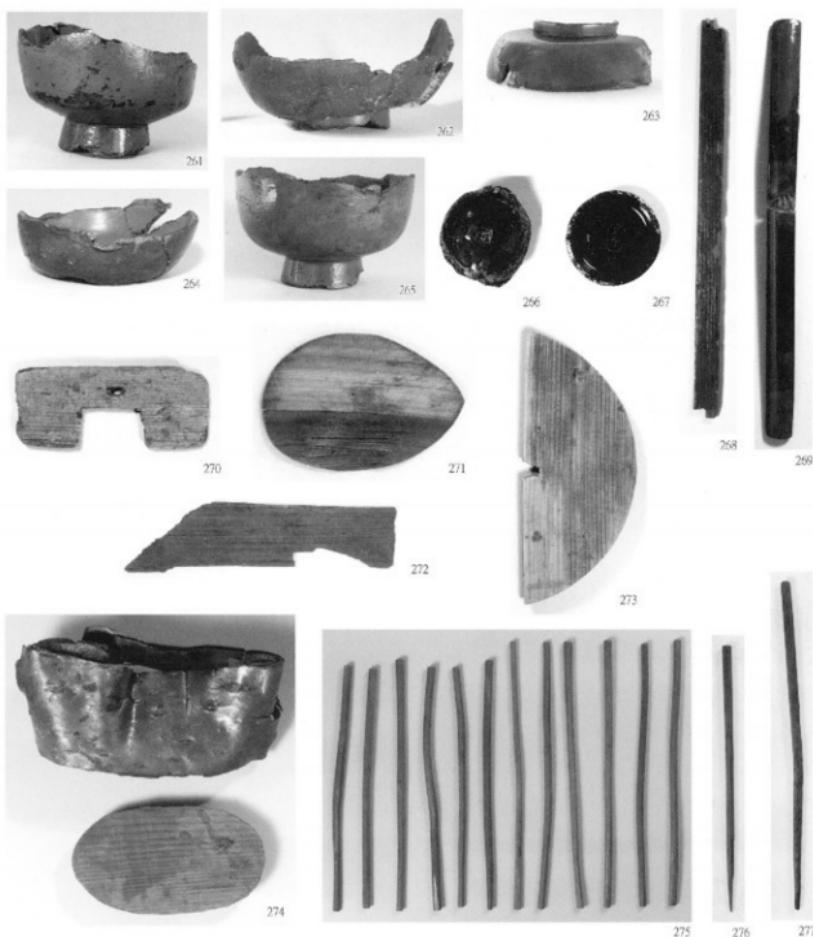
写真図版25 第23次調査出土木簡 3 (S=1/2)



写真図版26 第23次調査出土木製品1 (S=1/3)

品目	遺物 番号	種類	状 況	法 量 (mm)	重 量 (g)	備 考
251	1909	漆器	柄蓋	口徑98 深高75 つまみ径50	-	内赤色漆外黒色漆 木底又軸
252	1997	漆器	柄蓋	口徑100 深高53 つまみ径48	-	内赤色漆外黒色漆 欠頭アリ
253	1975	漆器	片側	口徑100 深高19 肪底(19) 木底(52)	-	内赤色漆外黒色漆 片頭又軸
254	2356	漆器	柄	長さ150	-	内赤色漆外黒色漆
255	2357	漆器	蓋	直径100	-	内赤色漆外黒色漆
256	2358	漆器	柄	長さ150	-	内赤色漆外黒色漆
257	2359	漆器	蓋	直径100	-	内赤色漆外黒色漆
258	2360	漆器	蓋	直径100	-	内赤色漆外黒色漆 内面金糸文模(和・和室)

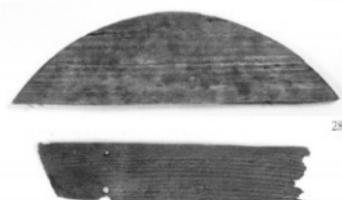
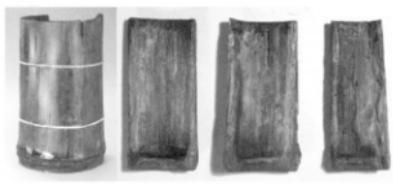
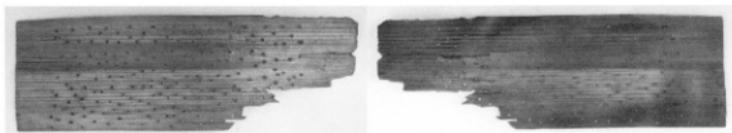
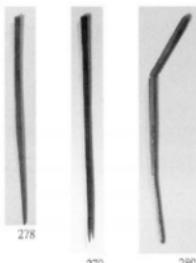
第53表 第23次調査出土木製品1 觀察表



写真図版27 第23次調査出土木製品2 (260~268 : S=1/3 269~276 : S=1/4)

写真 番号	遺物 名	種類	区	遺構・層位	法 量 (m)	重量 (g)	備 考
261 1973	漆器 風呂	1	SS-745・附-1.1	口付(107) 脱漆(37) 残漆(57)	—	—	内外赤色漆 漆剥離あり
262 1996	漆器 丹塗舟形	1	SS-745・附-1.2	舟形(112) 漆高(78) 氏(96)	—	—	内外赤色漆 漆剥離あり 大型 舟形
263 1990	漆器 風呂	1	SS-745・附-1.4	舟形(110) 漆高(55) 残漆(92)	—	—	内外赤色漆 漆剥離あり 離合
264 1995	漆器 舟形	1	SS-745・附-1.5	舟形(40) 残漆(55)	—	—	内外赤色漆 漆剥離あり
265 2305	漆器 風呂	1	SS-745・附-1.6	舟形(17) 残漆(73) 残漆(57)	—	—	内外赤色漆
266 2347	漆器 風呂	1	SS-745・附-1.7	舟形(18) 残漆(55) 漆器(18)	—	—	漆台脚のみ 漆台内舟形内に「万」字柄
267 2361	漆器 風呂	1	SS-745・附-1.8	舟形(16) 漆器(13)	—	—	漆台脚のみ 漆台内舟形内に「万」字柄
268 094	漆器 舟(櫛突合)	1	SS-745・附-1.9	舟(40) 櫛(35) 厚(35)	—	—	3面赤色漆突合 漆剥離あり込み
269 095	漆器 舟	1	SS-745・附-2.0	舟(20) 厚(2)	—	—	竹材に赤色 漆剥離を保ったものか

第54表 第23次調査出土木製品2観察表



288



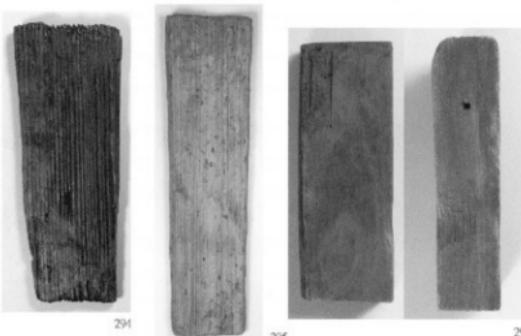
写真図版28 第23次調査出土木製品 3 (S=1/4)



292



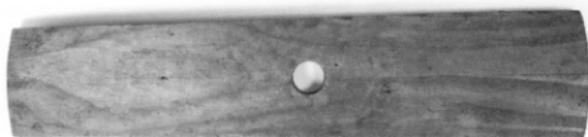
293



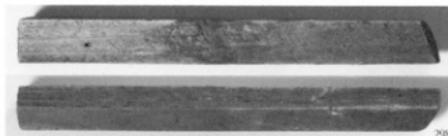
294

295

296



297



298

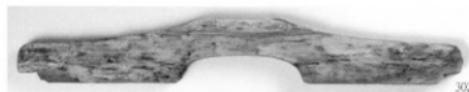


299



300

301

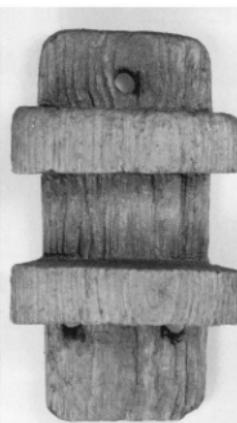


302

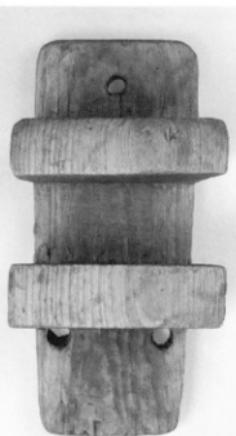
写真図版29 第23次調査出土木製品 4 (S=1/4)



写真図版30 第23次調査出土木製品 5 (S=1/4 318・319 : S=1/3)



321



322



323

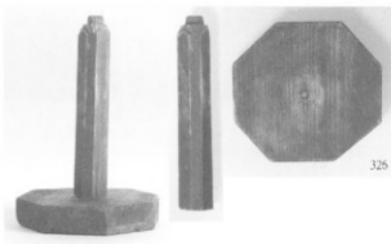
写真図版31 第23次調査出土木製品 6 (S=1/3)



324



325



326



327

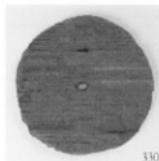
写真図版32 第23次調査出土木製品 7 (324・325 : S=1/3 326 : S=1/4 327 : S=1/6)



328



329



330



331



332



333



334



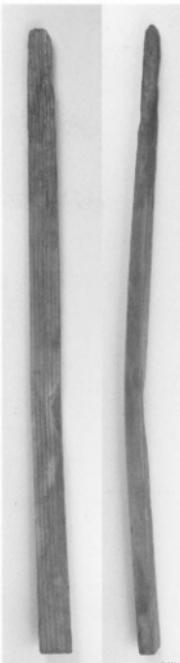
335



336



337



338

写真図版33 第23次調査出土木製品 8 (S=1/4)

写真 番号	種類 器物	区	道標・場所	法 規 (m)	重量 (g)	参考
328 206	曲物 箕型	1	KS-206・理工 全長約15cm 幅約10cm 厚さ1.5			板板 細じ日あり (板灰か)
329 205	棒・棒 板灰	1	KS-205・理工 全長約15cm 幅約5cm 厚さ3.2			板材 細めあり (板西か)
330 206	不明	1	KS-206・理工 幅約2.5cm~5.2			有孔板 板灰に穴づ
331 223	棒 仰灰か	1	KS-206・理工 全長約15cm 厚さ1.5			板 無板か 有孔灰起 (斜毛か)
332 209	酒杓 筒	1	KS-206・理工 全長約15cm 幅約2.5cm 厚さ2.3			
333 203	柱	1	KS-206・理工 全長約15cm 幅約1.5cm 厚さ1.2			
334 205	柱	1	KS-206・理工 全長約15cm 幅約1.5cm 厚さ1.2			
335 228	棒の倒伏か	1	KS-206・理工 全長約15cm 幅約2.5cm 厚さ3.2			板材 斜めりなし
336 196	板材	1	KS-206・理工 全長約15cm 幅約4cm 厚さ12			一面削消 (素色) 後刃 刃穴2つ (裏板溝か)
337 227	棒材か	1	KS-206・理工 全長約15cm 幅約5cm 厚さ4			粗粒 (約6.0~48cm) ×10.3cm
338 204	棒材か	1	KS-206・理工 全長約15cm 幅約5cm 厚さ4			粗粒 (約6.0~48cm) ×5.5cm

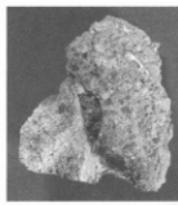
第55表 第23次調査出土木製品 8 観察表



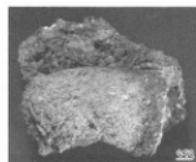
写真図版34 第23次調査出土木製品9 (S=1/4)

写真	遺物 名	種類	回	遺物・部位	法 線 (mm)	重量 (g)	備考
339	丸火鉢	1	SS-745・埋土上	全員123	海苔筋	-	蓋分か 八角形 中央に目せ穴
340	「弓」か	1	SS-745・埋土上	全員95	縦28 横さ14	-	-
341	「弓」か	1	SS-745・埋土上	全員13	縦11 横さ7	-	板材 和洋張り(漆色)か 約20cm
342	柄小刀	1	SS-745・埋土上	正偏177	刃さ14	-	板材
343	人形	1	SS-745・埋土上	全長 (165)	幅36 厚さ30	-	印伝 (正偏) 内側面取手 背面に木打穴
344	棒	1	SS-745・埋土上	全長 (132)	-	-	棒状製品(柄材 棒面三角形) 表面浅縁欠損 約4cm×1.5cm
345	少サビ	1	SS-745・埋土上	全長186	幅39 厚さ52	-	約1kg
346	ヘラ状木製品	1	SS-745・埋土上	全長30	幅38 厚さ3	-	板材 斧半分欠損か 木打穴か
347	鍔	1	SS-745・埋土上	全員95	厚さ14	-	-
348	鍔	1	SS-745・埋土上	全長 80	幅92 厚さ17	-	-
349	竹筒	1	SS-745・埋土上	全員12	幅75 厚さ6	-	筒状(抜いてる) 用途不明
350	竹筒	1	SS-745・埋土上	全員55	幅43 厚さ5.4	-	筒状(抜いてる) 用途不明
351	竹材	1	SS-745・埋土上	全員50	幅23 厚さ2.5	-	内側加工 刃穴つ

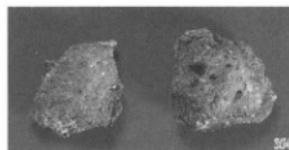
第56表 第23次調査出土木製品9観察表



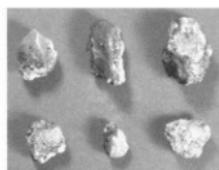
352



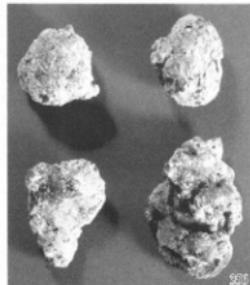
353



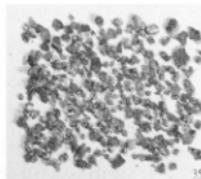
354



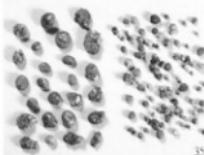
355



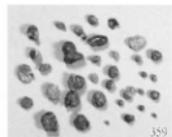
356



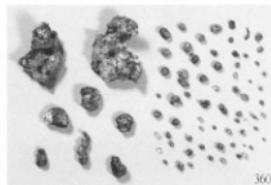
357



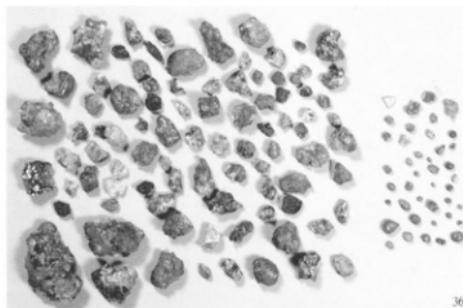
358



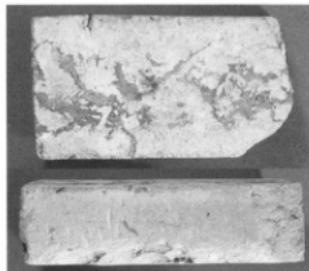
359



360



361

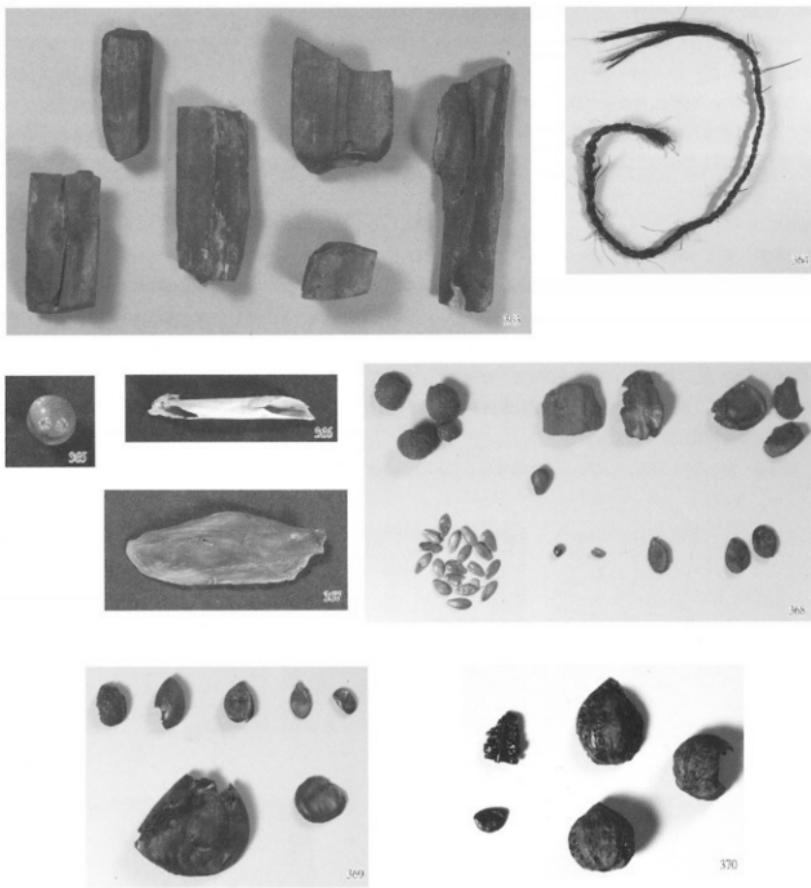


362

写真図版35 第23次調査出土銀冶關係遺物 (S=1/2)

号	品名 番号	種類	区	遺構・位置	法 量 (kg)	重量 (g)	編 号
352	347	鉛口	1	IS-600+81	—	—	
353	1869	鉛口	1	IS-600+812 厚さ425	—	—	
354	625	鉛口	1	IS-600+81	—	—	未1片2枚
355	1700	鉛口・鉛口	—	IS-600+812	—	—	
356	1740	鉛口	IS-600+81	—	—	4点	
357	1746	點透鏡形・斜長錐	IS-600+81	—	—	—	
358	1745	鉛塊	IS-600+81	—	—	—	
359	1748	鉛塊	IS-600+813	—	—	—	
360	1755	鉛口・鉛口	IS-600+812	—	—	—	
361	251	鉛口・鉛口	1	IS-600+802	—	—	

第57表 第23次調査出土銀冶關係遺物観察表



写真図版36 第23次調査出土その他 (S=1/2 365~367 : S=1/1)

写真番号	測定番号	種類	区	遺物・部位	法量 (mm)	重量 (g)	備考
363	201	木炭	I	K5-746・東±4	-	-	透明白色
365	2340	鉢	I	K5-746・東±4	-	-	
365	147	とんぼ玉	2	I	-	-	花文 穴1個 かんざしか
366	1000	椎骨	I	K5-746・東±4	直径約4mm	-	牛空
367	1086	鳥の骨	I	K5-746・東±4	-	-	
368	2507	半筒足跡	I	K5-746・東±4	-	-	クルミ・ワリ帽子など足跡
369	2342	半筒足跡	I	K5-746・東±4	-	-	トマト・芝皮など足跡
370	2344	半筒足跡	I	K5-746・東±4	-	-	ツバメなど足跡

第58表 第23次調査出土その他観察表

5. 絵図・文献の検討

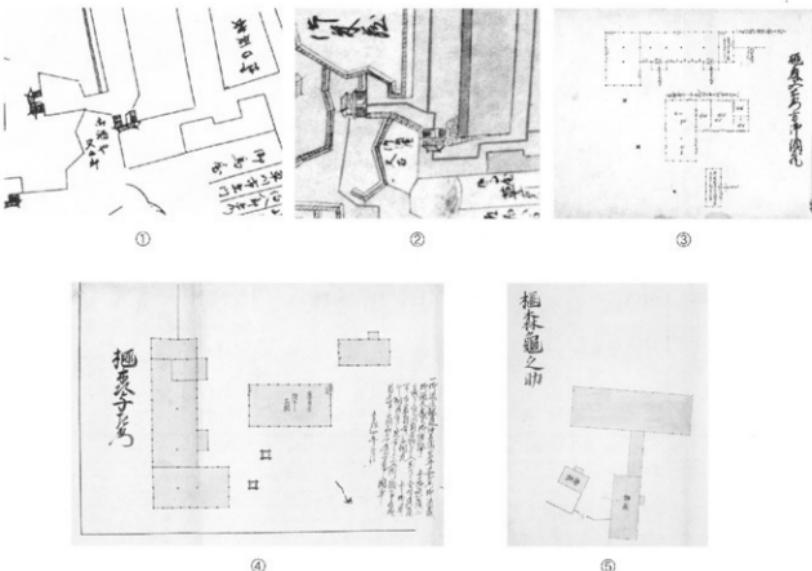
今回調査を行った造酒屋敷跡の位置や建物の配置等について時期的な変遷を明らかにするため、江戸時代の絵図の比較を行った。

造酒屋敷跡の位置は、樋森家が務めた御用酒屋（御酒屋）と記された絵図から翼門の西、清水門の南東に位置していたことが読み取れる。現在においてもその場所は、一部が近代以降の参道整備や公園整備等により改変されているが、平場が残存している。このことから、現在の翼門と清水門の間に平場があることであるといえる。

次に建物配置であるが、絵図における建物の配置には大きく3段階の変遷を確認することができた。以下、その概要について述べる。

I段階 寛文～元禄年間（1661～1704）の『仙台藩内神社仏閣等作事方役所修繕二属スル場所圖』に描かれた段階である（第49図③）。この絵図が造酒屋敷（酒蔵）の建物配置を描いた現存する最古のものであり、これ以前についての建物配置等は知ることができない。方位は記されておらず、建物3棟と井戸2基が描かれている。上に大きく描かれている建物が主屋で、この建物の右側（東か）に屋敷の入口があると推測される。次のL字形の建物には「米持屋ふかし屋」「煙出し」、下の建物には「御米蔵」と記されていることから、それぞれ作業場と米蔵であると推測される。また、絵図の右側に「樋森又右衛門方御酒蔵」と記されているが、文献から寛文～元禄年間に3代当主だった又右衛門を指すと考えられる。

II段階 安永年間（1772～1781）の『御修覆帳』（以下、『御修覆帳・古』）に描かれた段階である（第49図④）。I



①『仙台城下絵図』 酒酒や・又五郎 寛文8・9年（1668・69） 第二高等學校所蔵 模写図 昭和11年（1937） 横写

②『仙台城下絵図』 酒酒屋・又右 寛文9年（1669） 宮城県図書館蔵

③『仙台藩内神社仏閣等作事方役所修繕二属スル場所圖』 酒蔵 寛文～元禄年間（1661～1704） 宮城県図書館蔵

④『御修復帳』 酒蔵 樋森又右衛門 安永年間（1772～1781） 東北大学大学院工学研究科蔵

⑤『御修復帳』 酒蔵 樋森龜之助 文化・文政年間（1804～1830） 宮城県図書館蔵

第49図 絵図からみた造酒屋敷

の段階同様、方位は記されておらず、建物3棟と井戸2基が描かれている。ただし、作業場がL字形から長方形の二階建てになり、米蔵の入口が半間向にずれるなどの変化が読み取れる。また、井戸の位置もIの段階より近接して描かれている。このことから建物の修復もしくは改築が行われていたことがわかる。なお、絵図には6代当主与左衛門の名前と享保4年(1719)2月付けの付記が記されている。これは享保4年に描かれたものが、のちに安永年間にまとめられた『御修復帳・古』へ綴じ直されたと推察される。享保年間の当主が与左衛門であることは文献からも裏付けられる。

Ⅲ段階 文政・文政年間(1801~1830)の『御修復帳』に描かれた段階である(第49図⑤)。これまでの絵図とは大きく異なり、大小2棟の建物が通路によって結ばれて丁字形となり、1棟が離れて描かれている。屋敷入口も変化した。規模の小さな建物2棟には「御蔵」と記されている。これは屋敷地内で大規模な改築が行われたことが推察できる。絵図の左側に亀之助の名前が記されており、文献から文化年間に9代当主だった亀之助と一致する。なお、大正時代の文献(註1)に「仙台城内樅森御酒屋之図」が所収され、その図には建物が3棟以上描かれている。

今回の調査では、上記の変遷を考古学的に検証することが主要な目的の一つであった。今回の調査において、KS-746井戸跡から出土した6代当主「樅森与左衛門」銘の木簡から、Ⅲ段階の以降の屋敷にかかる造構と推察される。来年度以降も継続的な調査により全体像を解明していく必要がある。

文献の面からも造酒屋敷(酒蔵)の存在を検討するため、樅森家および造酒屋敷に関する文献および記事を抜粋し、これをまとめる作業を行った。ここに掲載した第59・60表はその成果の一部である。記事の大半は樅森家に代々伝わった通称『樅森家文書』である。『樅森家文書』は樅森家の子孫が所蔵していた。大正から昭和にかけて、複数の文献(註2)に紹介されており、慶長13年(1608)に初代又右衛門(以下、又右衛門)が仙台に招かれ、御用酒屋に命じられてから、明治9年(1876)に酒造業を発展するまでの記事を中心に掲載した(おもに『宮城県酒造史別篇』より引用)。また、又右衛門来仙以前の仙台での酒造に関する記事と樅森家同様、又右衛門の推薦により御用酒屋となった岩井家の記事についても掲載した。

仙台藩初代藩主で又右衛門を仙台に招いた伊達政宗から又右衛門に宛てた書状が7通確認されている。また、今回の調査で発見された木簡に名前が書かれている6代当主与左衛門が寛延元年(1748)に記したとされる「樅森与左衛門書上」では、又右衛門から自分までの歴代当主の功績を挙げている。与左衛門は享保17年(1732)11月から享保18年(1733)3月まで奈良に滞在して酒造法を習得しており、その後、次々と新しい御膳酒を藩主に献上している。8代当主市郎左衛門も奈良に赴き、酒造法を見聞する記録がみられる。このように歴代当主が奈良で当時最新の技術を習得し、その酒造法を学んだ藩内の酒屋が相次いだとみられる。一方で又右衛門の頃に藩から支給されていた酒造道具や酒造用の品物、紙、麻、柿渋、作業に当たる人足などは元禄年間(1689~1703)頃から、支給が中止となり、人足の定数が減らされるようになる。さらに藩の財政難から屋敷等の修復も自費で賄わなければならなかつた。やがて、市中(町)酒屋の台頭により、御用酒屋としての樅森家はやがて衰退していったと考えられる。明治時代になって仙台城が軍用地となり、12代当主季蔵はこの地でなおも酒造りを続けるが、明治7年(1874)、大伯母やすに譲って隠居し、明治9年(1876)にやすが廃業することにより、仙台城内の酒造りは終焉を迎える。

今後も関連資料の収集を進め、造酒屋敷の調査を行う上での参考とし、併せて集成していく予定である。

註1 伊達邦宗『伊達家史叢談 卷之五』 1921

註2 寺崎巻石『藩祖以来仙臺物産誌』 1917

矢野顯義『仙臺藩祖時代実業一斑』 1914

鈴木省三『仙臺物所沿革』 1925

仙臺市史編纂委員会『仙臺市史9 資料編2』 1963

元号	西暦	月	事 境	当主	藩主
慶長10	1605		大泉堀右衛門附、仙台田分町にて酒造を始める。(大泉接觸翁小伝)		
慶長13	1608		樺森(日本近震表)又右衛門、柳生宗矩の紹介により伊達政宗に召抱えられ、城内結御酒御用に仰せつかる。		
慶長年間	1596~1615		又右衛門の推奨により、岩井家が奈良より召され、御用酒屋として仙台元柳丁で酒造を始める。(藩祖以来仙台物産誌)		政宗
元和元	1615		又右衛門、政宗の命により、京都で『忌冬酒』の製造法を習得する。		
寛永18	1641		又右衛門、居候願いを出されも却下され、藩主より酒庵の号を許される。		忠宗
万治2	1659		又右衛門病死、又五郎が2代当主となる。		綱宗
寛文2	1662		又五郎病死、又右衛門が3代当主となる。		
天和3	1683	10	又右衛門、御膳酒の出来が良いため、藩主より時服を拝領する。		
貞享2	1685	11	又右衛門、御膳酒の出来が良いため、藩主より時服を拝領する。		又右衛門
元禄2	1689	7	又右衛門、日光山普請に付き、酒造に係る費用の一割を返上する。米袋足人、米100石に付き28人を170人に定め足人足を3人を2人に減らされる。		
元禄7	1694		又右衛門病死、茂市郷が4代当主となる。		茂市郷
元禄16	1703		茂市郷病死、又五郎が5代当主となる。		
宝永6	1709		城下御酒造御免右かやの森分450石、岩井分250石(慶郎文書)		
正徳元	1711		又五郎病身につき隠居、左与衛門が6代当主となる。		
享保4	1719	2	藩が後約中につき、酒蔵、米庫等を自費にて修繕する。(御修復帳)		
享和16	1731	1	大雨により屋敷が浸漬する。(獅山公治療家記録)		
享保17	1732	6	南都(奈良)より樺森家の師匠神田六兵衛来仙。左与衛門、藩主の命により南都流酒造法の11軒を受ける。		
享保18	1733	11	左与衛門、南都寒造西造法を見聞、習得するため南都に出発する。		
享保20	1735	3	左与衛門、南都酒造法を習得し帰仙、南都よりの諸白樽を藩主に献上する。		
享保年間	1716~1735		御膳酒「勝ノ井」を藩主に献上する。		吉村
		5	御膳酒南都流「千ノ井」を藩主に献上する。		
元文3	1738	7	御膳酒南都流「秋ノ井」、「梅ノ井」を献上する。		
		10	御膳酒「中汲増井」、「薄萬水井」を献上する。		
		11	新御膳酒「秋ノ井」を献上する。		
元文4	1739	3	御膳酒南都流「安ノ井」、「竹ノ井」を献上する。		
		与左衛門、出入川支配領板に仰せ付かる。			
元文5	1740	12	南都流「みぞれ酒」を献上する。		
延享2	1745	11	左与衛門、長井に向ぐ勤続の功績により御足軽御小人領板並に仰せ付かる。		
延享3	1746	3	藩主、樺森家西蔵を訪れる。		
		8	藩主、「桜酒」を御酒差遣樺森家・岩井家に求めるが無いために、樺森家で仕込み9月17日に献上する。		
寛延元	1748		「樺森左与衛門書上」を記したとされる。(仙台市史) 寛延3年(1746) 説あり		
寛延2	1749	7	左与衛門冠位、与助が7代当主となる。		
寛延3	1750	11	名酒「いん酒」、「熟蘇酒」を献上する。		与助
宝曆2	1752		与助死去、左与衛門左衛門が8代当主となる。		
宝曆4	1754		御膳酒「松ノ井」、「楓ノ井」、「梅ノ井」を献上する。「菊酒」を仕込む。		
宝曆8	1758		「椿井」、「壺ノ井」、同年7月に名酒「醍醐酒」を献上する。		
宝曆12	1762		「千代井」、「松ノ井」、「竹ノ井」を献上する。		
明和2	1770		藩上より「印御酒」の製造を命ぜられる。		
安永4	1775		市部左衛門、白面にて南都に赴き、酒造法について見聞する。		
天明3	1783		南都流諸酒品に品を献上し、藩主より疊布一疋を賄賂する。		
寛政元	1789		市部左衛門、酒造法を命ぜられる。酒造道具の復舊・修繕費用の求めに対し、藩が20両のみしか給付しなかったことや自費による負担額などの窮状について願いを出す。		
享和2	1803		市部左衛門死去、龜之助が9代当主となる。		龜之助
文化10	1813		龜之助死去、斎吉が10代当主となる。		周宗
文政13	1830	11	惣吉、勘定所にて、引き締め市町払い店2軒の無役御免を求める願いを出す。		齊宗
安政4	1837	11	南都、伊丹の酒造法を樺森家に入門した門弟に指導する。		齊邦
年代不明			又右衛門が11代当主となる。		不明
年代不明			孝義が12代当主となる。		慶邦
明治4	1871		李義、清酒75石の酒造願いを県庁に提出する。(宮城県酒造史)		又右衛門
明治7	1874		李義、酒造業を大伯母やすに譲り、廃業する。(藩祖以来仙台物産誌)		泰義
明治9	1876		やす、酒造業を廃業する。(藩祖以来仙台物産誌)		やす

第59表 樺森家関連年表

年	月日	文書名	宛先	差出人	造酒量敷開係部分	所蔵者
慶長12年 または 慶長15年 (1607) (1610)	9.11	茂庭石見守綱元 免書状	茂庭綱元	伊達政宗	かの慶しきに此度のさけつくり、必々可指置候。 手前之ぎうさにてくらをもつくらせ、たうぐまてざうさを入、こしらへ候間	登米市歴史博物館 (瓦理家文書)
元和2年 (1616)	1.1	諸白屋又五郎 樋森又右衛門宛 黒印狀	樋森又右衛門 (初代)	伊達政宗	老人分 一月二御しゅ巻斗五升づ・御わたし候 へく綱けんわ二ねん 正月一日 (黒印) 御つかひ九郎さへもん 又五郎殿参る	
元和2年 (1616)	10.14	諸白屋又五郎 樋森又右衛門宛 黒印狀	樋森又右衛門 (初代)	伊達政宗	酒巻斗五升づ、毎月、宮内因幡所へ可相候、 但、喝吸丸つかい准也、仍如件。 元和二年 十月十四日 (黒印) ちろはく屋又五郎	
元和5年 (1619)	3.9	諸白屋又五郎 樋森又右衛門宛 黒印狀	樋森又右衛門 (初代)	伊達政宗	上之丸之御酒 巻付は、巻斗五升づ・御上候 へく候。 元和五年 二月九日 (黒印) 御佐文右衛門 もろ白や又五郎殿	
元和9年 (1623)	3.7	諸白屋又五郎 樋森又右衛門宛 黒印狀	樋森又右衛門 (初代)	伊達政宗	月なみのうけとり御しゅ みかわ様御やしきへ、一月二斗四升づ・ 一糸らせん様御やしきへ、一月二斗五升づ・ 一糸もん様御やしきへ、一月二斗四升づ・ 御かつき様御やしきへ、一月二斗四升づ・ こののとをりあひわたし候へく候。 元和九年 三月七日 (黒印) 又五郎	
寛永4年 (1627)	8.21	樋森又右衛門宛 黒印狀	樋森又右衛門 (初代)	伊達政宗	おきんつほね 亦々 もろはく一斗二巻斗五升 づ・相わめたすへく候、たし、七月廿一日より のつもりにわたすへき也、以上、 寛永四年 八月廿一日 (黒印) かやのもり又ゑもん	
寛永4年 (1627)	12.15	樋森又右衛門宛 黒印狀	樋森又右衛門 (初代)	伊達政宗	せんきく様へ月なみの御しゅ、一月に巻斗五升 づ・むらかみ正すけへ相わたすへき也、以上、 寛永四年 優月十五日 (黒印) かやのもり又ゑもん	
寛永10年 (1633)	6.16	樋森又右衛門宛 黒印狀	樋森又右衛門 (初代)	伊達政宗	酒三升・治部大輔通方へ毎月可相候、但、斐田 勝兵衛・佐瀬所左衛門ニ可相候者也、仍如件。 寛永十年 六月十六日 (黒印) 御酒屋 又右衛門	
寛文～ 元禄半間 (1661～ 1704)		仙台藩封内神社 仏閣等作事方役 所修繕ニ属スル 場所調			御酒屋樋森又右衛門	宮城県図書館
享保16年 (1731)	23条	獅山公治家記録			去年二十九日ヨリ翌朔日子刻二至マテ大雨、樋 森与左衛門、齋定所東方ノ屋崩ル	仙台市博物館
寛保元年 (1740)	1月	勤功告	千田理氏		御本丸下御酒屋方堅柏共二道ニ一所々御締共 二括者儀	仙台市博物館
寛延元年 (1748)		樋森與左衛門青 土	樋森與左衛門			
寛延4年 (1751)	3.19	御城中御締等之 部	千葉名太夫		一、(樋森與左衛門)同人居宅江 同宅人 右ハ樋森與左衛門居宅江相人中城、与左衛門家 内共二居敷ニ御座候事	御斎藤報恩会
安永年間 (1772～ 1782)		御修復帳			樋森与左衛門	東北大学大学院 工学研究科
文化・ 文政年間 (1804～ 1830)		御修復帳			十二 御酒屋樋森舟之助	宮城県図書館
文化・ 天保年間 (1804～ 前半)		御給仕心得之事			御本丸川樋森上之雄子御鳥原	御斎藤報恩会
安政2年～ (1855～)		初施心之手帳			一、御酒屋脇野 是八姓御門と申所ニ有之事、 『川内エツニ有』。此御門江続十二西也。界ノ御門 近道ヨリ御米糀之方江人口也。南、右御江 続西之方ハ御酒屋樋森在辰吉と云組抜居所也。	仙台市博物館

第60表 造酒屋敷開連資料一覧

6.まとめ

第23次調査では、以下①～⑦の成果が得られた。

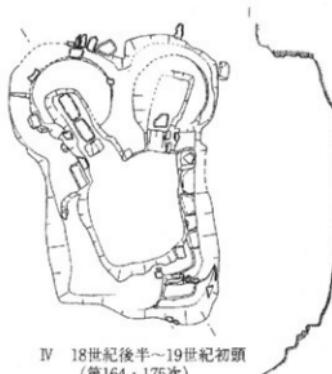
① 1区の中央部では、第2造構面からKS-746井戸跡を検出した。井戸跡の埋土から18世紀代のものを中心とする陶磁器、土師質・瓦質土器、煙管、古錢、砥石などのほか、木筒をはじめ漆器椀、下駄、箸、樽や桶の部材、栓、井戸支柱材などの木製品が多数出土した。出土した木筒のうち、樋森家6代当主「樋森与左衛門」と記されたものが3点確認された。また、年貢米の荷札木筒が出土しており、この場所に酒造りで使われる大量の米が藩から支給されていたためであると考えられる。ほかに米俵や樽、桶の部材、栓など酒造りにかかる可能性のある遺物も多数出土した。厚みのある大型の桶の部材は酒造りの仕込み貯蔵などに使われた大桶の可能性が考えられる。また、さまざまな形をした木製の栓も、ほかの遺跡に比べて数多くみつかり、多くの木製容器が使われていたことが推測される。陶器では、17世紀代の厚手の備前大甕の破片が16点出土した。貯蔵用のもので、酒などを入れていた可能性が考えられる。

これらの出土遺物から、調査地が「樋森家の造酒屋敷」の一角であることが裏付けられたと考えられる。

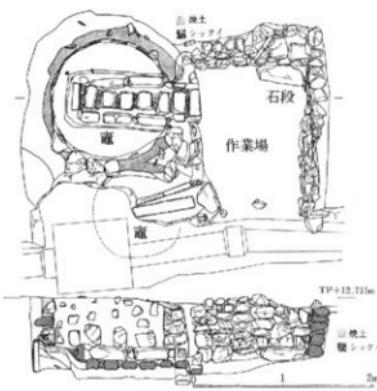
② 1区西部では、第2造構面からKS-768カマド跡を検出した。平面形は横板で囲まれた部分が方形で、北側に加工された方形の石材の列が接続する形状の造構である。検出当初は用途が不明で木製構として扱ったが、その後、酒造にかかる遺跡や造構の検討を行い、酒造用と考えられるカマドとして報告されている伊丹郷町第164次・175次調査（兵庫県伊丹市）と玉造小学校内の調査（大阪府大阪市）で検出された造構に類似していることがわかった。カマドの構造については松尾信裕氏の論文（註1）で、「大小二つの竈が並び、さらに焚き口の前に作業場がつくられた。（中略）竈の底には石で組んだ溝が作られ、灰や炭を搔き出す箇所と考えられる。作業場は1.1m×1.8m以上の長方形で、焚き口以外の壁は石垣が積まれていた。（中略）作業場の床には灰や炭が厚さ3cm程たまっている、竈の中から搔き出したものと考えられる。（一部要約）」と述べている。KS-768は上記の論文によると、北側の石列がカマドにあたり、横板で囲まれた部分が作業場にあたると推測される。

カマドは1つと考えられ、上部が削平されたためにカマド本体は失われ、底部の石組溝にあたる石のみを検出したことになる。なお、2連の可能性もあるため、造構の精査を行ったが東側ではカマドの痕跡は確認されなかつた。

作業場については石垣ではなく、横板で囲まれていたと考えられる。規模や形は、玉造小学校の調査で検出されたものが1.1m×1.8m以上の長方形であるのに対し、KS-768では1.15m×2.8mの長方形で類似しているといえる。



第50図 伊丹郷町第164・175次調査検出カマド造構平面図



第51図 玉造小学校内調査検出カマド造構平面図 (1/50)

なお、作業場と考えられる箇所の上面に3~4cmの炭の堆積がみられることから、カマドから掻き出した炭と考えられる。ここからは棧瓦や瀬戸美濃染付端反碗が出土した。

構築時期については伊丹郷町のカマドが18世紀後半から19世紀初頭、玉造小学校のかまどが18世紀中ごろと考えられている。KS-768は検出面が第2造構面とする近世の造構面であり、造構の南側にみられる段差より一段低い位置で検出されていることから19世紀代の造構の可能性を考えられ、2つの造構と構築年代が近い。

類似する造構は近畿地方の事例であるが、造酒屋敷で酒造りを行った初代樋森又右衛門は大和国（現在の奈良県）出身であり、江戸時代初頭に「南都諸白」として酒造りが盛んであった南都（奈良）流の酒造法を用いていた。文献によると、その後も歴代当主が最新の技術を習得するために奈良へ赴いていることから、上方（おもに大阪・京都とその周辺地域）の酒造技術を取り入れていたと考えられる。カマドの構造が類似する点もこのような背景にあると推察される。

以上の点からKS-768はカマド跡と考えられる。造酒屋敷内での酒造にかかわる造構が検出されたことからも、この地で酒造りが行われていたことが明らかになった。

また、仙台藩が江戸時代の初めから、当時の先進地である上方の酒造技術を東北地方に導入した点は評価される。

③ 1区の第2造構面からは、造酒屋敷の建物に伴うと考えられる礎石跡や集石、石列、柱穴などを検出した。それぞれ位置関係などを検討したが、明瞭に建物配置と考えられる造構間の組み合わせがみられず、今後の更なる検討が必要とされる。また、屋敷内の排水施設と考えられる石組溝、溝跡、木樋なども検出した。造構の切り合いもみられ、作り替えによるものと考えられる。KS-695・696・722・751・759溝跡は上端幅や方向、溝内に砂が堆積している検出状況から、KS-705木樋が作られる以前の木樋の可能性が考えられる。KS-799井戸跡はKS-681池状造構内壁下部で検出されており、第2造構面より古い造構面が存在すると考えられる。

④ 1区南東部では、第1造構面からKS-680鍛冶工房跡を検出した。平面形は台形を呈し、規模は東西4m以上、南北4mである。南半部で炉跡2基を検出した。炉跡の周辺を中心に床面上には炭層が分布している。炭層はサンプルを採取して水洗作業を行い、炭の中から鍛造剥片、鉄滓、鉱滓、粒状滓などを検出した。また、羽口も出土しており、これらの遺物などからこの場所で鍛冶作業が行われた工房があったと推測される。工房に伴うと考えられる掘立柱建物跡も検出した。鍛冶工房の存続時期は樋森家が城内から市内に移住した明治10年（1877）頃、下限は招魂社（現宮城県護國神社）の参道整備が行われた明治30年代後半頃と考えられる。

⑤ 2区の調査では、KS-687石組溝を検出した。清水門に近い位置で検出していることから、造酒屋敷北側の屋敷境となる石組溝である可能性が考えられる。

⑥ 3区の調査では、KS-800石組溝、KS-801暗渠状造構を検出した。ともに造酒屋敷に伴う排水施設と考えられる。

⑦ 遺物としては、近世の造構面である第2造構面から陶磁器、土師質・瓦質土器、瓦、煙管、古錢、砥石、木桶、漆器椀、下駄、箸、櫛や桶の部材、栓、井戸支柱材などが出土した。近代の造構面である第1造構面からは陶磁器、羽口、瓦、レンガ、ガラス瓶、金属製品、鍛造剥片、鉄滓、鉱滓、粒状滓などが出土した。

註1 松尾信裕 「玉造小学校内で発見された酒造遺構」 大阪市文化財協会編『葦火』9号 1987

V. 第24次調査

1. 調査目的及び調査経過

第24次調査は、大広間跡虎の間西側、広縁部中央の礎石跡を調査指導委員会の指導により、遺構確認を目的として平成21年（2009）12月14日から12月15日まで実施した。調査面積は、青葉山公園として管理されている仙台市有地内の2.25m²である。

調査区の設定や調査前の現況写真撮影の後、12月14日から人力による遺構面の検出作業を開始した。掘削は表土Ⅰ層を除去後、明治以降のブロック土Ⅱa層を除去した。掘削の過程では第20次調査区とともに、第1次調査区の埋め戻し土を確認した。灰色の硬くしまったⅡb層を確認後に除去し、調査区中央に不整形で横長の遺構を検出した。その周囲には大広間建築前に敷いた整地土Ⅲ層が一面にみられたことから、この遺構が第20次調査で一部のみ検出したKS-531礎石跡であることを確認した。調査では、KS-531礎石跡の遺構全体を検出した。遺物は、磁器、瓦が出土した。その後、調査区の埋め戻し等の作業を終え、12月15日に調査箇所を原状に復した。

平成22年3月12日に第24回仙台城跡調査指導委員会を開催し、調査成果の最終的な確認を行った上で、本報告書を刊行するに至った。

2. 基本層序

基本層は、Ⅰ層（現表土）、Ⅱ層（近代以降の整地層）、Ⅲ層（近世の整地層）に大別される。Ⅱ層は2層に細分した。Ⅱa層はにぶい黄褐色粘質土、Ⅱb層はにぶい黄褐色砂質シルト主体である。Ⅲ層は黄褐色粘土質シルト主体で、礎石跡の検出面である。



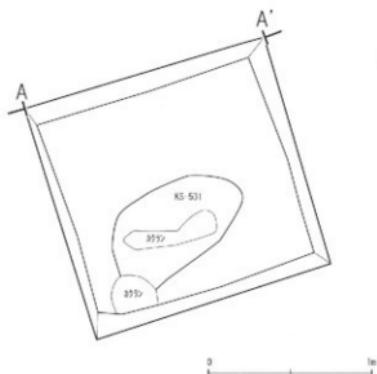
第52図 調査前状況（西から）



第53図 第24次調査区位置図 (1/400)

3. 検出遺構と出土遺物

・KS-531礎石跡 今回の調査で確認した礎石跡はKS-531の1基で礎石が無く、礎石抜取り穴のみを検出した。抜取り穴の検出面はⅢ層上面である。平面形は不整円形で一部木の根により切られている。規模は東西85cm、南北50cmである。根固め石と掘り方は確認されなかった。出土遺物は近現代の磁器2点、平瓦14点、丸瓦3点、鳥伏間(巴文)1点で、いずれもⅡ層および擾乱から出土した。



第54図 第24次調査遺構平面図 (1/30)



第55図 第24次調査北壁断面図 (1/30)

遺構 名	遺構・相位	土色		土質	様 式
		十位数	百位		
基礎	I	10Y24/4	褐色	砂質シルト	細かな木粋が多く含む
	IIa	10Y3/2	にじみ青褐色	砂質土	砂質土内のブロックとなり、10Y5/2a内の汚泥を少量含む 10Y3/2の褐色地質上ブロックを少含む
	IIb	10Y3/3	にじみ黄褐色	砂質シルト	褐色色シルトを灰状に堆积に含む
	III	10Y4/6	黄褐色	粘土質シルト	10Y4/6明黄色地質上シルトを全体に覆し含む 10Y5/2a内の汚泥をまばらに含む 西側の黄褐色地質上シルトブロックを含む 一部に10Y5/2a内の赤褐色地質上シルトブロックを含む
KS-531	理土	10Y4/6	褐色	シルト	

第61表 第24次調査土層注記表



第56図 調査区全景（北から）



第57図 KS-531礎石跡検出状況（北から）

4.まとめ

今回の調査では、第20次調査で一部しか検出されなかったKS-531礎石跡の遺構全体を確認することができた。また、これまで大広間跡の調査で検討材料としてきた『御本丸大広間地絵図』(斎藤報恩会蔵)に描かれている広縁部西辺の柱位置に礎石があったことが検証された。

VI. 第25次調査

1. 調査の経緯

第25次調査として広瀬川護岸石垣（大橋南側）の石垣測量を実施した。これまで広瀬川護岸石垣の調査は平成15年度の第9次調査、平成16年度の第11次調査、平成17年度の第14次調査と3年次にわたって測量を実施している。今回の調査範囲は現存する護岸石垣で最も南側に位置する面である。

平成21年12月16日から12月17日にかけて石垣の除草作業を行った。測量はレーザーを用い、平成22年1月7日に基準点設置、測量とオルソ画像用の写真撮影を実施した。レーザーは、地上からのみ照射した。なお、第14次調査で実施した広瀬川護岸石垣（大橋北側・南側）、中門北側石垣の測量図についても、本報告書にて掲載した。

2. 測量結果の概要

広瀬川護岸石垣（大橋南側）

今回の測量は第14次調査で測量した範囲の南側64m分を測量した。

- 天端の長さ：約47m、下端の長さ：約64m、石垣の高さ（天端残存部）：約1.5～3m

- 石垣南端部から北側に約10m付近までは石垣の天端部分が失われており、南端部では下端に1石ずつしか残存していない。江戸時代の絵図によると広瀬川の河道は現在よりも西側にあり、護岸石垣も河道に沿う形で青葉山山麓まで描かれている。絵図によって表現等の違いがみられるが、石垣はやがて河道の変化に伴い、山麓側の石垣が取り外され、現在のような形になったのは明治以降と考えられる。

- 測量地点の石垣は自然石を使った野面積みで、勾配は82～85度である。比較的大型の石材を横置きに積んでいる。石垣の間には詰石がみられるが、石垣前面にある石は近年になって詰められたものと考えられる。58m付近から北端部までの約6m分は切石を使った落とし積みによる積み直しを行った箇所である。石垣の北側に「仙台電気工業株式会社」が大正8年(1919)から大正10年(1921)の間に建設したと推定される発電用水路の取水口が設けられている。護岸石垣が施設建設のため、約30mにわたって石垣が取り外されたと考えられる。

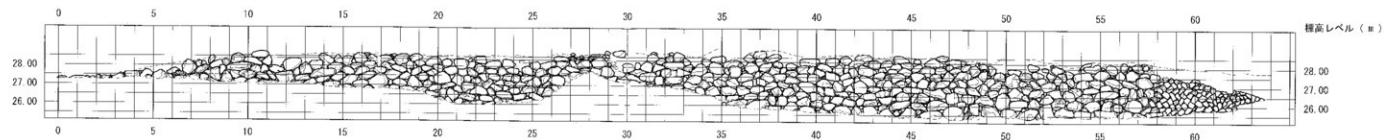
- 横断図をみると、20～40m付近が直線的であり、石垣が少しずつ角度を変え、弧を描く積み方から石垣の構築時期が江戸時代前期に遡る可能性が考えられる。



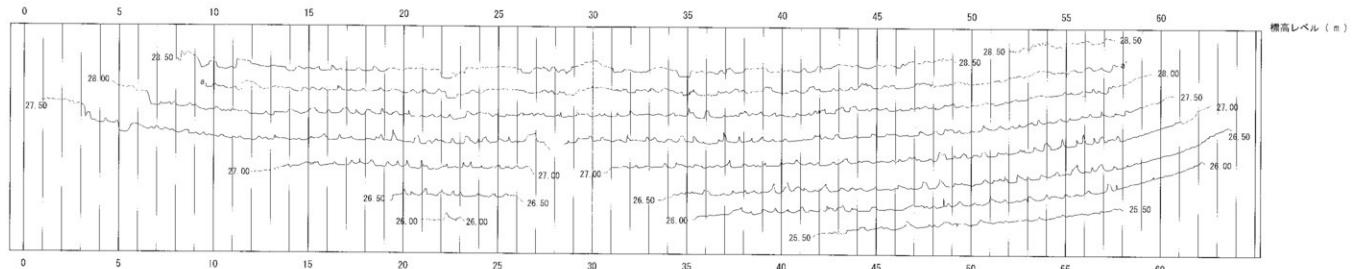
第58図 広瀬川護岸石垣(大橋南側)全景(南東から)



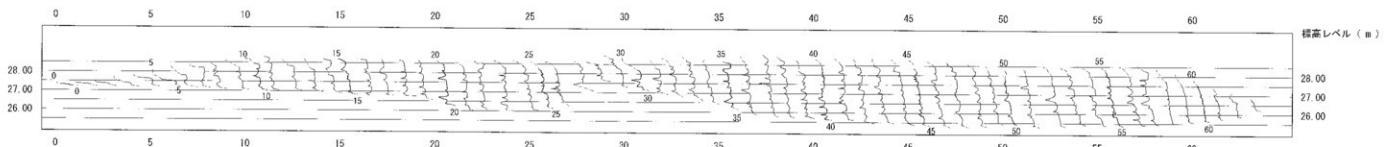
第59図 第25次調査位置図 (1/5000)



立 面 図



横 断 図



縦 断 図



第60図 第25次調査 広瀬川護岸石垣立面図・横断図 S=1/200



測量地点全景（東から）



測量地点全景（北東から）



測量地点全景（南東から）



測量地点北端部（東から）



野面積み・落とし積み（東から）



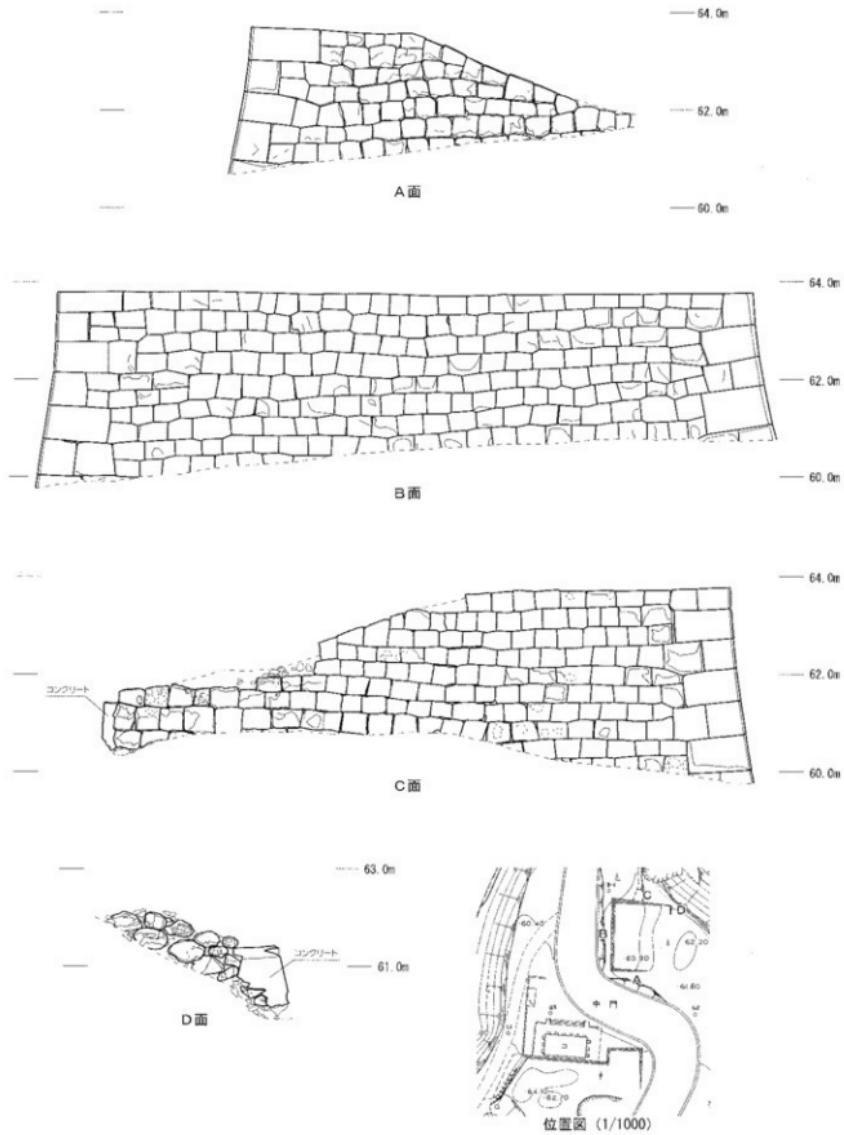
野面積み（東から）



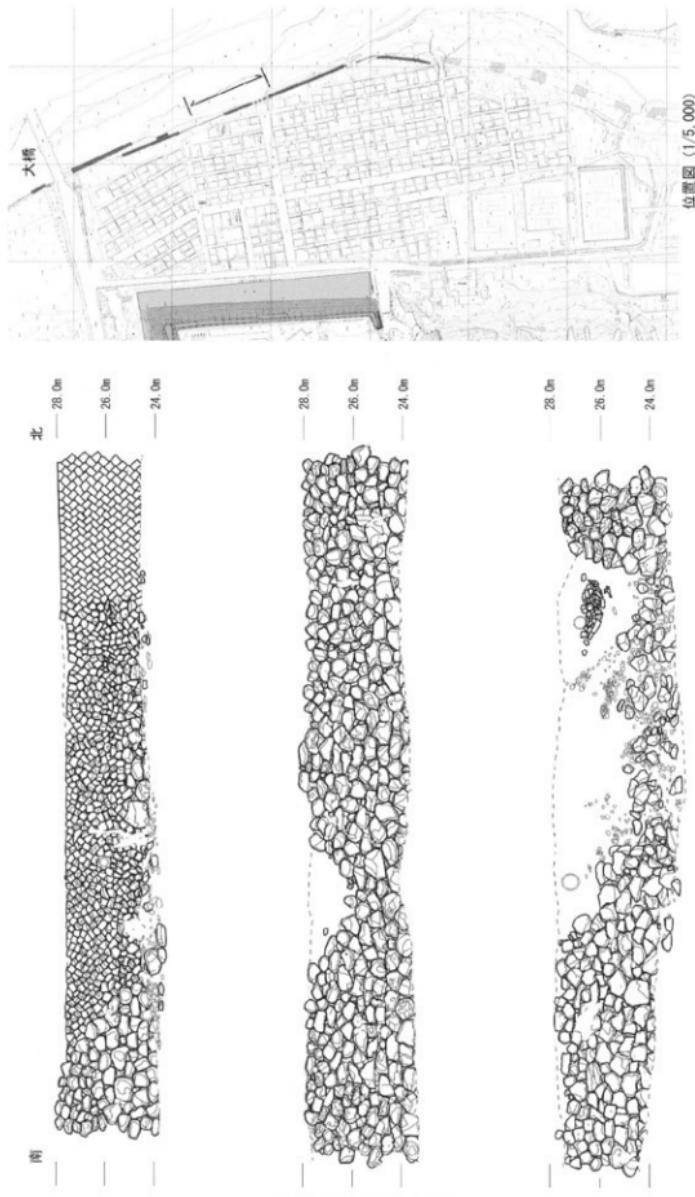
広瀬川護岸石垣南端部（南東から）



レーザー測量風景（南東から）



第61図 第14次調査 中門跡北側石垣立面図 (1/100)



第62図 第14次調査 広瀬川護岸石垣(大橋南側)立面図 (1/100)



位置図 (1/500)



位置図 (1/1,000)



側面図 (1/50)



正面図 (1/50)



現況写真 (2005年撮影)

第63図 第14次調査 広瀬川護岸石垣 (大橋北側)

VII. 総括

本年度は仙台城跡遺構確認調査の第2期5ヵ年計画の4年目であり、造酒屋敷跡の遺構確認調査（第23次）、本丸大広間跡西部の遺構確認調査（第24次）、広瀬川護岸石垣の石垣測量調査（第25次）を行った。

第23次調査は、造酒屋敷跡（1～4区）に關連する遺構の確認を目的として実施した。今回の調査区は屋敷の主屋部分にある場所である。1区中央部では、第2遺構面からKS-76井戸跡を検出した。井戸跡の埋土から18世紀代のものを中心とする陶磁器などのほか、木筒をはじめとする木製品が多数出土した。出土した木筒のうち、樅森家6代当主「樅森与左衛門」と記されたものが3点確認された。そのほかに酒造りにかかわると考えられる樽や桶の部材、栓なども出土した。これらの出土遺物から、調査地が「樅森家の造酒屋敷」の一角であることが裏付けられたと考えられる。

1区西部では、第2遺構面からKS-768カマド跡を検出した。カマドは1つと考えられ、上部が削平されたためにカマド木体は失われ、底部の石組溝にあたる石と作業場にあたる横板に埋まされた部分を検出した。造酒屋敷内での酒造にかかわる遺構が検出されたことからも、この地で酒造りが行われていたことが明らかになった。

1区南東部では、第1遺構面から2基の炉跡を作うKS-680鍛冶工房跡を検出した。炉跡の周辺を中心に床面上には炭屑が分布し、炭の中から鍛造剝片、鉄滓、銑滓、粒状滓などを採取した。また、羽口も出土しており、これらの遺物などから造酒屋敷廃絶後にこの地で鍛冶作業が行われた工房があったと推測される。

造酒屋敷の建物に伴うと考えられる礎石跡や集石、石列、柱穴などを検出した。それぞれ位置関係などを検討したが、明瞭に建物配置と考えられる遺構間の組み合わせがみられず、主屋をはじめとする建物の規模や配置については今後の検討課題である。

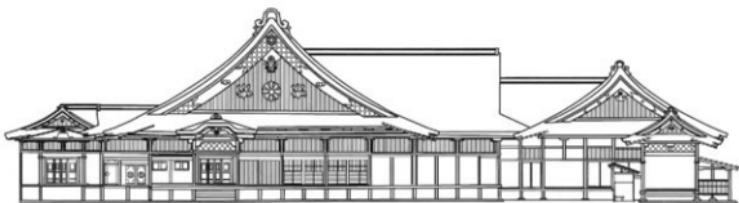
第24次調査は、大広間跡虎の間西側、広縁部中央の遺構の確認を目的として実施した。KS-531礎石跡の遺構全体を確認することができた。大広間跡の調査は昨年度の第20次調査で一応の終了となったが、今後も必要に応じて補足調査等を行っていく予定である。

第25次調査は、広瀬川護岸石垣の石垣測量調査を実施した。大橋の南側から追廻にかけて石垣が残されており、その観察によって広瀬川護岸における石積み技法の変遷を解明し得ると考えられる。今後も、石垣の現状の記録化を進めていくことが必要である。

引用・参考文献

- 江戸遺跡研究会編『図説江戸考古学研究事典』 2001
- 大阪市文化財協会『大坂城跡VI』 2002
- 小長谷正治「伊丹の酒蔵を掘る—伊丹の酒造り発展史—」伊丹市立博物館秋季企画展関連講座 2009
- 児玉幸多『くずし字解説事典』 1970
- 佐野美術館『みしま～三島署から上島茶碗へ～』 図録 2001
- 鈴木省三『仙臺物産沿革』 1925
- 仙台市教育委員会『仙台城』 1967
- 仙台市教育委員会『仙台城三ノ丸跡』 仙台市文化財調査報告書第76集 1985
- 仙台市教育委員会『仙台城跡1』 仙台市文化財調査報告書第259集 2002
- 仙台市教育委員会『仙台城跡2』 仙台市文化財調査報告書第254集 2003
- 仙台市教育委員会『仙台城跡3』 仙台市文化財調査報告書第270集 2004
- 仙台市教育委員会『仙台城跡4』 仙台市文化財調査報告書第271集 2004
- 仙台市教育委員会『仙台城跡5』 仙台市文化財調査報告書第285集 2005
- 仙台市教育委員会『仙台城跡6』 仙台市文化財調査報告書第297集 2006
- 仙台市教育委員会『仙台城跡7』 仙台市文化財調査報告書第309集 2007
- 仙台市教育委員会『仙台城跡8』 仙台市文化財調査報告書第330集 2008
- 仙台市教育委員会『仙台城跡9』 仙台市文化財調査報告書第348集 2009
- 仙台市教育委員会『天賞酒造に係る文化財調査報告書』 仙台市文化財調査報告書第304集 2006
- 仙臺市史編纂委員会『仙臺市史9 資料編2』 1953
- 仙台市史編さん委員会『仙台市史 特別編7 城館』 2006
- 仙台市史編さん委員会『仙台市史 通史編3 近世1』 2001
- 仙台市史編さん委員会『仙台市史 通史編5 近世3』 2004
- 仙台市史編さん委員会『仙台市史 資料編11 伊達政宗文書2』 2003
- 仙台市史編さん委員会『仙台市史 資料編13 伊達政宗文書4』 2007
- 高倉淳ほか『絵図・地図で見る仙台 第一輯』 1994
- 伊達邦宗『伊達家史叢談 卷之五』 1921 復刻版『伊達家史叢談』 2001
- 寺崎巖石『蓬祖以来仙臺物産誌』 1917
- 東北大大学埋蔵文化財調査研究室『東北大大学埋蔵文化財調査年報19 第2分冊』 2009
- 東北大大学埋蔵文化財調査研究室『東北大大学埋蔵文化財調査年報19 第3分冊』 2007
- 東北大大学埋蔵文化財調査研究室『東北大大学埋蔵文化財調査年報19 第4分冊』 2007
- 東北大大学埋蔵文化財調査研究センター『東北大大学埋蔵文化財調査年報19 第1分冊』 2006
- 『南部杜氏』編纂委員会編『南部杜氏』 岩手県石鳥谷町 1983
- 早坂芳雄『宮城県酒造史 別篇』 宮城県酒造組合 1962
- 松尾信裕『玉造小学校内で発見された酒造遺構』 大阪市文化財協会編『葦火19号』 1987
- 松尾信裕『上方の酒造り』 平成20年度平野区画整理記念会館住民大学講座資料 2009
- 木簡学会『木簡研究』 第29号 2007
- 矢野謙蔵『仙臺藩祖時代実業・庶』 1914
- 吉岡一男ほか『絵図・地図で見る仙台 第二輯』 2005
- 吉田 元『江戸の酒 その技術・経済・文化』 朝日選書 1997

仙台城本丸大広間跡調査成果の総括



仙台城本丸大広間跡調査成果の総括 目次

I. これまでの調査成果	118
II. 大広間建物跡の特徴	119
(1)上屋の特徴	120
1) 建築様式	120
2) 方位、面積	120
3) 規模	120
4) 柱間寸法	120
5) 座敷各部屋の規模・特徴	120
6) 縁側の特徴	124
7) 屋根 (瓦)	124
8) 塗り金具類 (銅釘)	125
(2)基礎の特徴	127
1) 床下 ①整地層の特徴	127
②砂礫層	127
③座敷・縁側の勾配 (傾斜)	128
④軒下 犬走りの叩き (硬化層)	129
2) 磯石 ①残存磯石の特徴	129
②礎石レベルの比較	130
③座敷部礎石掘り方・抜取り穴	130
④縁側部礎石掘り方・抜取り穴	131
III. 付属施設	131
(1)雨落ち溝跡の特徴	131
1) 規模・形状	131
2) 構造	132
3) その他の特徴	132
IV. その他の遺構	132
(1)石敷き遺構	132
(2)区画施設 堀跡	133
(3)暗渠状遺構	135
(4)KS-8 4溝跡	135
(5)柱筋にのらない礎石跡及び掘り方	135
(6)下層遺構	137
V. 出土遺物	139
(1)陶磁器 (2)土師質土器 (3)金属製品 (4)瓦	
VI. 科学的分析	140
VII. 絵図の検討	141
引用・参考文献	
写真図版	

仙台城本丸大広間跡調査成果の総括

I. これまでの調査成果

仙台城本丸大広間跡の調査は、平成9年度より始められた青葉山公園整備事業の一環として行われた石垣修復に伴う調査の後、平成13年度からの国庫補助事業による仙台城跡の造構確認調査として始められた。平成15年度には、国の史跡指定を受け、城跡の保存管理及び整備を目的とした調査に切り替わった。以来、大広間跡の調査は、小規模なものを含めて9年次にわたり実施された。以下は、大広間跡調査成果の概要である。なお、文中の部屋名称は『御本丸大広間地絵図』(御斎藤報恩会蔵、以下『地絵図』と略する)に描かれたものを使う。

第1次調査（平成13年度）

初めて、大広間跡物跡東辺ライン、礎石跡（13基）確認。くらすみの間から裏上段の間、檜の間から紅葉の間の一部調査。

第5次調査（平成14年度）

建物跡西辺、北辺ライン、礎石跡31基検出（首実検の間と建物北東角部）。

第7次調査（平成15年度）

西辺部より御成門跡付近、南東部（裏上段の間・鶴の間の一部）の調査。建物跡を検討し、柱間寸法が6尺5寸であることが明らかとなる。また、御成門跡の位置や車寄せに沿る石敷き造構の検出。

第10次調査（平成16年度）

引き続き、西辺部より御成門跡付近と石敷き造構の調査。大広間跡西側の痕跡（区画施設）の調査。

第12次調査（平成17年度）

大広間跡北辺部の調査。雨落ち溝跡に改修を確認。大広間跡の北側で、より古い礎石立建物跡を検出。これまでの調査の層位を検討整理し、5時期の変遷が明らかになる。

I期：基礎層（V層）上に形成された造構の時期

II期：II f層上の造構を想定した時期（礎の集中や瓦が出土、造構未確認）

III期：古い雨落ち溝跡が形成された時期

IV期：III a層（12次調査）上面に造構が形成された時期（改修後の雨落ち溝跡等）

V期：大広間廃絶以降の時期

第15次調査（平成18年度）

大広間跡北東角部及び南東角部の調査。これにより、建物跡角の礎石跡と雨落ち溝跡の角をそれぞれ確認できた。第12次調査例に類似する大広間に先行する礎石を検出。また、大広間跡の内外より近世以前の溝跡や焼土造構などの造構群を発見。

第17次調査（平成19年度）

大広間跡北半部の調査。これにより、上段の間から孔雀の間、そして、檜の間の一部を検出。

第20次調査（平成20年度）

大広間跡南半部の調査。これにより、奥向きの裏上段の間から鶴の間・鷹の間、そして、虎の間を検出した。

調査のできない鹿の間を除き、ほぼ全容を調査した。今回、床東や縁東の礎石跡を多数検出でき、また、大広間に先行する下層の建物跡の礎石1基を確認。

第24次調査（平成21年度）

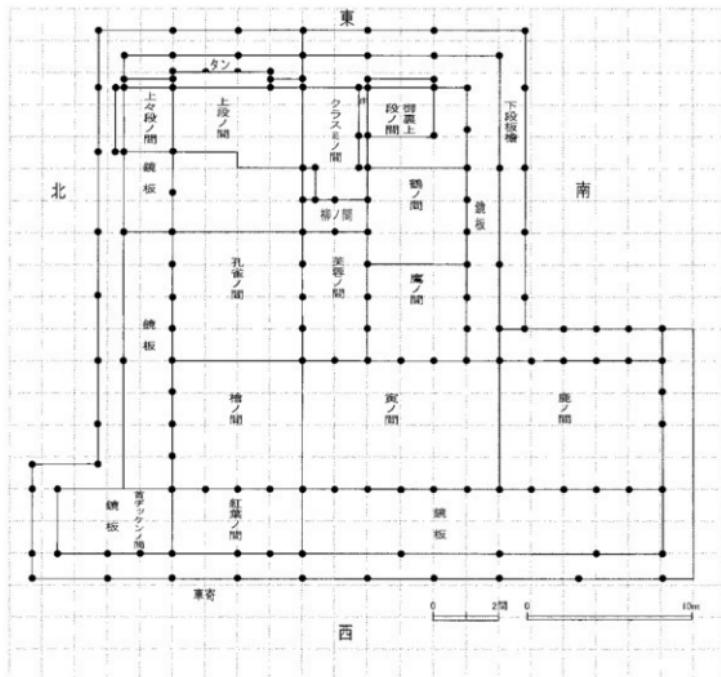
大広間跡虎の間の西側広縁中央の礎石跡の調査。調査指導委員会の指導により追加調査を実施。

大広間建物は、『地絵図』で名前の付いた部屋を14部屋知られているが、このうち13部屋についての調査ができた。南西部に位置する鹿の間付近が市有地外にあり、未調査となっている。なお、本丸大広間跡をはじめ、史跡仙台城跡では、保存を前提とする調査であることから造構の掘り込みは必要最小限度に留め、保存・整備の措置として、調査後は砂を入れて埋め戻しを行っている。

II. 大広間建物跡の特徴

仙台城本丸大広間は明治初年に取り壊され、その際礎石の多くも抜き取られ兵舎建設などに転用されといわれている。さらに昭忠碑や招魂社の建立、宮城県護国神社建設、青葉山公園造成、各種埋設物やケーブルの設置などの影響を受けている。そのため、礎石が失われさらに礎石跡も残らないなど、残存状況の悪い箇所が少なくなかった。このため間仕切りを示した絵図の必要性が強く感じられていたので、『地絵図』は調査の際に有効な資料であった。

本丸大広間建物は、長方形の母屋に曲屋を付属させたもので、北側には中門廊に相当する「首実検ノ間」、南側に色代に相当する「鹿ノ間」がある。西の妻側に車寄せを備え、北側が表となる典型的な江戸初期の御殿建築である。大広間に描いた『地絵図』をみると、表側に「上々段ノ間」・「上段ノ間」・「孔雀ノ間」・「檜ノ間」を配し、さらに上字に曲がって「虎ノ間」・「鹿ノ間」へと続く。南の奥向きには、「御裏上段ノ間」・「鶴ノ間」・「鳶ノ間」を配し、両者の中間に小規模な「クラスマノ間」・「柳ノ間」・「芙蓉ノ間」を介在させている。この部屋割りの特徴は、調査成果から得られた礎石跡の配置と良く一致している。大広間建物の建築学的な研究については、小倉強氏、佐藤巧



第1図 大広間部屋割り図 「御本丸大広間地絵図」の寸法による (1/300)

氏らの論考があるが(註)、詳細な寸法と建具の記入などがあり、誤記が一部にあるものの正確性の高い資料として『地絵図』を評価されており、対照資料として扱われている。ここでも、有効とされるこの『地絵図』を参考に、調査成果で得られた具体的な特徴について述べていくことにしたい。

註1 小倉強:『仙台城の建築』(1930)

佐藤巧:『近世武士住宅』(1979) 『仙台城の建築と姿絵図』(1981)

(1)上屋の特徴

- 1)建築様式 板葺入母屋造礎石建物 (桃山様式の御殿建築)
2)方 位 約N-79°-W (大広間建物の主軸方向)
3)規 模 東西33.5m、南北26.3m (第7次調査データより) 面積 約1034m² (推定)
<記録> 縦(南北)十七間半、横(東西)十三間半
『伊達家治家記録』慶長15年(1610)の条
4)柱間寸法 6尺5寸 (約197cm)
7次調査で礎石跡を検討し、調査指導委員の西和夫氏により6尺5寸のメッシュ透過シートを用い、遺構平面図と合わせることで柱間寸法を検証した。メッシュの交点と礎石跡が多く部分で一致しており、6尺5寸が大広間の柱間寸法の基準となっていることが確認された。その後の調査でも矛盾はなく当てはまる。

5)座敷各部屋の規模・特徴

<上段の間>

主室となる上段の間は建物北東部に位置し、規模は東西4間半(北辺は2間半2つ割 第3図①)と2間、南辺は2間2つ割と2間半通し(第3図②)、南北4間(床の間のある東辺では3間2つ割 第3図③)と1間である。この部屋は上段・下段に二分され、上段は格式の高い折れ上段であることが知られている。調査でも部屋中央部で柱筋が約半間ずれる箇所があり、それに対応する礎石跡が1基検出された。東辺の床の間(絵図には「タン」と表記)中央では、束柱の可能性のある礎石跡に接して礎石1石が連結するように検出されている。類例には、丹波篠山城跡の大書院跡床の間中央床下にも、礎石跡の可能性のある穴がみられる。後述する裏上段の間の床の間中央床下では、束柱とみられる礎石跡が認められる。西辺や中央床部の礎石跡は、近代以降の公園整備等で削平をうけているためか、検出できなかった。東側の違棚に対応する位置でも礎石跡は検出されていない。

<上々段の間>

上々段の間は上段の間の北側に位置している。規模は、礎石跡が西辺2基のみの検出にとどまつたことからはっきりしないが、『地絵図』では東西2間、南北1間半の規模である。北側に付書院、東側に違棚が設けられているが、これらに対応する礎石跡は検出されていない。

<孔雀の間>

孔雀の間は上段の間の西側に、芙蓉の間の北側に位置している。礎石跡は、後世の公園整備等で削平をうけ、非常に残りが悪い。南辺では東西4間分検出できたが、南辺・北辺では両端角の礎石跡を検出するに留まった。しかし、両端の礎石跡位置から南北4間であることが推定できる。部屋中央部では、束柱にあたる礎石跡は検出できなかつたが、西辺では根固め石のない東石の可能性のある礎石が1石検出された。ただし、報告書(第17次調査)では、石の上面が傾き、原位置を保っていないと指摘されている。

<檜の間>

檜の間は、孔雀の間の西側、寅の間の北側に位置している。四辺とも掃った形で礎石跡を検出できず、各辺とも3基ずつの礎石跡の検出に留まつた。しかし、検出できた四隅の礎石跡等と『地絵図』から、規模は東西4間、南

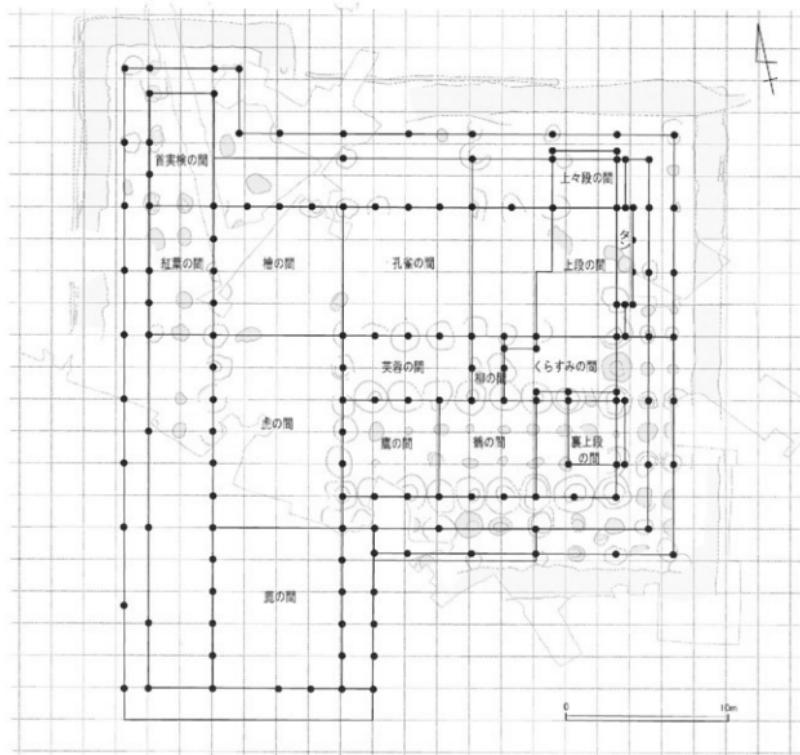
北4間と推定できる。この部屋も中央部では、削平を受けて、束柱の礎石跡は検出できなかった。なお、前述したように孔雀の間との境（東辺）の柱筋で、礎石が1石検出されている。

＜紅葉の間＞

紅葉の間は大広間西側で檜の間の西に位置し、玄関（東寄せ）から入る最初の部屋である。規模は、東西2間、南北4間である。北辺の首実検の間の境で礎石が2石検出されている。また、束柱にあたる礎石跡も、中央の1基が不明だが、4基検出されている。東辺・西辺では未調査部があり、それぞれ2基分の特徴がつかめない。この部屋から首実検の間にかけてが、尾根筋に近く標高の高い、比較的構造面の残りが良い箇所であった。

＜首実検の間＞

紅葉の間の北側に位置し、中門廊に相当する曲屋となる部屋である。規模は、東西2間、南北3間半である。西辺は、3間半を2つ割（第3図⑥）にしている。残存状況の良い西辺と紅葉の間との境である南辺で、礎石が計4石検出された。北辺・東辺では、擾乱溝や未調査部分があり、特徴をつかめなかった。なお、東辺側で南東角の礎石跡が検出されたほか、柱筋にのらない礎石跡が1基検出されている。逆に、中央部の束柱に相当する礎石跡は、未調査部に位置し検出されていない。この部屋は『地絵図』に「鏡板」と表記され、板の間であったことが分かる。



第2図 大広間跡遺構平面図と『御本丸大広間地絵図』の合成図（1/300）

〈虎の間〉

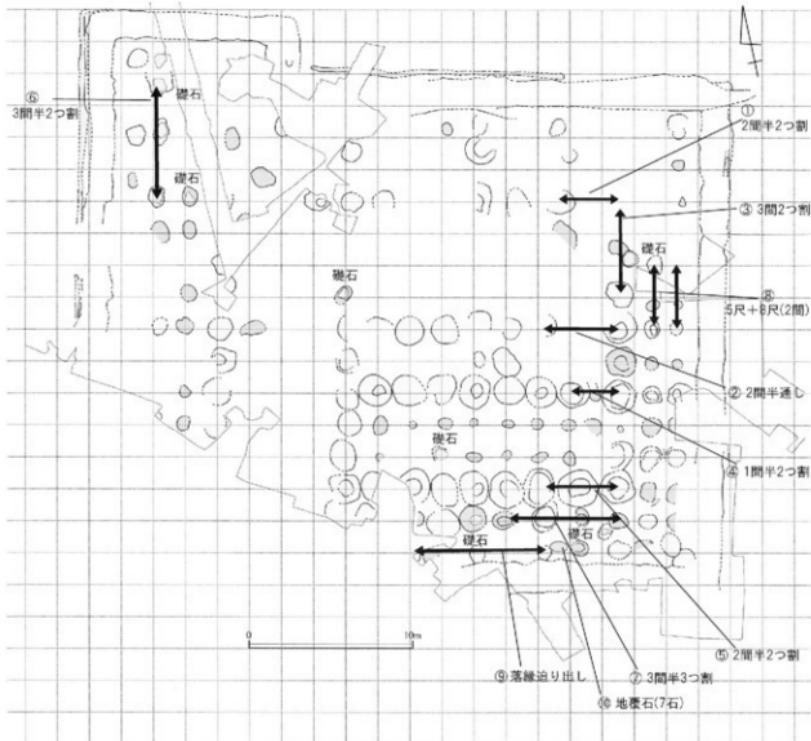
虎の間は前述した檜の間の南側に位置し、大広間建物内で最も広い部屋である。第20次調査で東辺側の礎石跡（7基6間分）がすべて確認できることから、東西4間、南北6間の規模になることが明らかとなった。さらに、礎石跡は西辺で4基（3間分）、北辺3基確認できた。部屋内部は上部が削平や搅乱を受け、束柱の礎石跡を検出することができなかった。なお、部屋の南西部は市有地外であることから調査が行えず、南辺部を確認することができなかった。

〈鹿の間〉

鹿の間は虎の間の南側に位置し、色代部に相当する曲屋となる部屋であり、南側に続く建物の出入口の機能も兼ねている。この部屋は全体が市有地外にあり、調査を行うことができなかった。『地絵図』によると、東西4間、南北5間の規模である。今後、機会があれば調査が必要である。

〈くらすみの間〉

くらすみの間（「御帳台」ともいわれる）は、上段の間の南側、裏上段の間の北側に位置している。ちょうど、東西方向の母屋中央部に3部屋（他は柳・芙蓉の各部屋）が東西に連なるが、その東端の部屋である。規模は、東西3間半、南北2間である。東西の柱列は、北辺側では2間半の通し部分があるが、そこには束柱礎石跡は検出できなかった。南辺側（裏上段の床の間の間）では1間半の2つ割の箇所が認められる。部屋中央では、上部を削平さ



第3図 大広間跡遺構平面図 (1/300)

れたためか東柱に相当する礎石跡は検出されなかった。

＜柳の間＞

柳の間は、くらすみの間の西側、上段の間と鶴の間の中間に位置している。規模は東西1間、南北2間で、それぞれ東西辺が各2基、南北辺が各3基あり、すべての礎石跡が検出できた。

＜芙蓉の間＞

芙蓉の間は、柳の間の西側、孔雀の間と鷹の間の中間に位置している。規模は、東西4間、南北2間で、四辺すべての礎石跡を検出することができた。内訳は、東辺・西辺各5基（4間分）、南辺・北辺各3基（2間分）である。しかし、ここでも部屋中央で東柱にあたるような礎石跡（3基分）は削平されており、検出できなかった。

＜裏上段の間＞

大広間南半部は奥向きとして扱われ、東西に連なる裏上段の間・鶴の間・鷹の間の3部屋で構成される。このうち、裏上段の間は建物南東角にあり、くらすみの間の南側、鶴の間の東側に位置している。規模は、東西2間半、南北3間である。東西の柱列は、北辺に礎石跡4基、南辺に3基であるが、北辺側が1間半を2つ割（第3図④）、南辺側は2間半2つ割（第3図⑤）にしている箇所が認められる。北辺には床の間を、東辺には附書院をそれぞれ設けている。北辺床の間中央床下に東柱とみられる礎石跡がある。東柱にあたる礎石跡（抜取り穴）は、柱間が6尺5寸等間隔に検出されたが、床の一段高くなる東側上段部では東西が約5尺間隔となっている。なお、樹木がある未調査部分に1基基礎石跡が予想される。

部屋名	東西		南北		備考
	調査	地盤図	調査	地盤図	
上段の間	3間？(28.5尺)	4間半	3間(26尺)	4間	北辺2間2つ割（第3図①）
上段の間					東辺3間2つ割（第3図③）
孔雀の間	4間(26尺)	4間	4間(26尺)	4間	
鷹の間	4間(26尺)	4間	4間(26尺)	4間	
虎（寅）の間	4間(26尺)	4間	6間(39尺)	6間	
麗の間	未調査				(4×5間)
クラスミの間	3間？(22尺)	3間半	2間(13尺)	2間	北辺2間半通し（第3図②）
柳の間	1間(6.5尺)	1間	2間(13尺)	2間	
芙蓉の間	4間(26尺)	4間	2間(13尺)	2間	
裏上段の間	2間？(16尺)	2間半	3間(19.5尺)	3間	北辺1間半2つ割（第3図④）
裏上段の間					南辺2間半2つ割（第3図⑤）
鶴の間	3間(19.5尺)	3間	3間(19.5尺)	3間	
鷹の間	3間(19.5尺)	3間	3間(19.5尺)	3間	
紅葉の間	2間(13尺)	2間	4間(26尺)	4間	
首実験の間	2間(13尺)	2間	3間(22.5尺)	3間半	3間半2つ割（第3図⑥）
上々段の間	1間？(11尺)	2間	1間(9.75尺か)	1間半	東西2間半通し南北1間半通しか

・柱間寸法は、6尺5寸（約197cm）を基準にしている。

・掘り方や抜取り穴のプラン内で、切のよい数値を採用し柱間寸法とした。

・上段ノ間、裏上段ノ間、首実験ノ間は、柱間が等間隔にならない。

・間数は長さではなく、柱間の数を示す。（ ）内は尺寸で記述。

・裏上段ノ間南側の広縁部にも3間三つ割りがあるとした各部屋の長さ。（第3図⑦）

第1表 大広間座敷部各部屋規模一覧（発掘調査成果による）

この部屋から鶴の間にかけてが、焼乱坑はあるが削平の影響の少ない、大広間跡では残存状況の最も良い箇所と言える。

<鶴の間>

鶴の間は、裏上段の間の西側、梯の間・芙蓉の間の南側に位置している。規模は、東西3間（礎石跡4基）、南北3間（礎石跡4基）である。礎石跡は、四辺及び部屋中央の東柱にあたる礎石跡（抜取り穴）も、6尺5寸等間隔ですべて検出することができた。また、鷹の間との境である西辺側中央で、東柱の礎石が1石検出された。

<鷹の間>

鷹の間は、鶴の間の西側、芙蓉の間の南側に位置している。規模は、鶴の間同様東西3間、南北3間で、四辺の礎石跡各4基ずつをすべて検出することができた。また、前述したように鶴の間の境で、礎石1石が検出されている。部屋中央では、東柱にあたる礎石跡（抜取り穴）が3基検出することができたが、南東側の1基分は検出することができなかった。

6) 縁側の特徴

縁側は、広縁と落縁とから構成されている。

<広縁>

広縁は建物東辺と南辺が座敷より6尺5寸の幅で廻るが、表向きとなる北辺や玄関側となる西辺は、より幅の広い広縁となっている。北辺側の広縁幅の柱間距離は、上段の間や孔雀の間で約2.9mあり、1間半の寸法を示している。これは『地絵図』の9尺7寸5分の記述と合っている。また、東西も10間半で、同図と合っている。西辺側は紅葉の間南辺で幅が約3.9mあり、こちらも『地絵図』の2間（13尺）の記述と合う。なお、未調査である鹿の間東側の広縁は、『地絵図』には1間幅で「鏡板」との表記がないことから、板の間ではない可能性もある。また、鹿の間から虎の間の西側部分は、北側3間分は調査を行うことができたが、南側8間分については市有地外で道路下になることから、調査を行っていない。

<落縁>

落縁は、座敷と広縁を合わせた平面形と相似形で、柱は広縁から5尺離れて外側を廻っている。未調査の鹿の間東側では、『地絵図』に落縁は描かれていない。広縁と落縁の縦柱間の幅は5尺であり、落縁の外周の礎石間では6尺5寸の柱間を基準としている。ただし、この基準に合わない箇所が2ヵ所ある。一つは、上段の間の東側にあり、柱2間分が6尺5寸等間隔にならず、5尺+8尺で13尺（2間）となっている所である（第3図⑧）。この地点には、例えば東階階段のような何らかの施設があったのではないか。もう一つは鶴の間の南側に面する地点である。ここでは、広縁と落縁間の柱間寸法が6尺5寸を示し、掘り方プランが雨落ち溝跡と接している（第3図⑨）。鶴の間から鷹の間にかけて、他よりも1尺5寸ほど落縁が南に迫り出して広かった可能性も考えられる。しかし、雨落ち溝跡には変化が無く直線的伸びており、屋根には変化が無かったものと考えられる。

裏上段の間南側の落縁部で、地覆石と考えられる石材が7石検出され（第3図⑩）、このうち5石が円礎であった。石の大きさは、幅18~29cm、奥行き13~40cm、厚さ5~12cmである。この地覆石は部分的に施工されたのか、全周するのかは判断できない。北辺部では、首実検の間の北側で落縁の礎石が1石検出された。

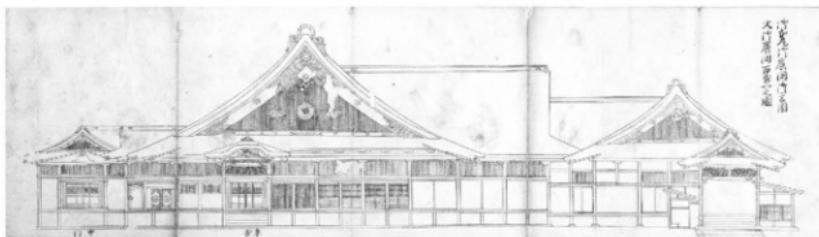
7) 屋根（瓦）

考古学的に屋根と関わりのある遺物には瓦があるが、これまでの調査で直接大広間跡に関わる遺構からの出土は少ないので、大広間跡関連の瓦については第2表のようになる。比較的多く出土した雨落ち溝跡からの瓦でも、建物規模を考えたとき、出土量は極めて少ない。したがって、考古学的には瓦葺建物とは言えず、建築学の指摘どおり板葺（柿葺など）とみてよいであろう。ただ、出土した瓦には鬼瓦や菊丸瓦があり、これらは屋根の棟に使用される。

のことから、大広間跡でも棟等の屋根の一部に瓦が葺かれていた可能性がある。それを裏付けるように、仙台藩大工棟梁の千田家に伝わる『仙台城及び江戸上屋敷主要建物姿絵図』(第4図 仙台市博物館蔵)には、大広間建物屋根の棟に鬼瓦等が描かれている。なお、金箔瓦など特別な瓦は、これまで出土していない。

遺構名	種類・点数	調査次数
礎石跡 KS-132	丸瓦1 平瓦1	15次(抜取り時)
KS-166	平瓦2	15次(抜取り時)
雨落ち溝跡 KS-53	軒丸瓦1	1次
# KS-53	菊丸瓦1	5次
# KS-53	丸瓦3 平瓦7 塚瓦1 鬼瓦? 1	12次
# KS-53	丸瓦1 平瓦2 軒平瓦2	15次
石敷通路 KS-178	平瓦1	10次
小型溝 KS-84	平瓦1	12次

第2表 大広間跡関連出土瓦(各次報告書より)



第4図 『仙台城及び江戸上屋敷主要建物姿絵図』(大広間部分) 仙台市博物館蔵

8)飾り金具類・銅釘

〈飾り金具〉

桃山建築の飾り金具は、それ以前に比べ躍動感にあふれる造形・意匠を見せるという。これまで、脇役だった金具自体が、自己主張を始めたといわれる。政宗も、京都の鍛師を仙台に招聘し、こうした時代の特徴ある金具を採用させ、大崎八幡宮社殿や松島瑞巌寺本堂の建築に当たらせた。大崎八幡宮の擬宝珠には「慶長十四年」「山城国上京一条之住 津田次兵衛」の銘が残されている。ほぼ、時を同じくして、大広間建物を飾る金具類にも躍影や魚々子打ち等の技法を駆使して、時代に合った造形・意匠の金具で飾らせたものと考えられる。

飾り金具はこれまで、合わせて132点(第20次調査まで)の出土が確認されている。銅を地金に鍛金した金銅金具は63点あり、多くは軒廻りの垂木材用と考えられている。そのうち主なものとして、第1次調査では1点は垂木先の八双金具、もう1点は隅木先金具の可能性があるものが出土している。第5次調査では釘隠し片、また、第7次調査では、鋳造の可能性のある菱形座金具(吊金具)が1点出土している。一方、第10次調査では鍛金が確認できず、銅金具としたものも68点出土している。

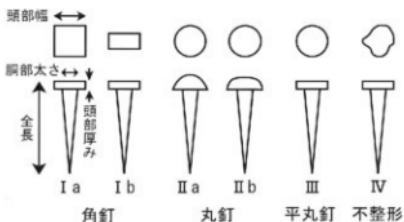
これまでの調査では妻飾は確認できず、建具用のものが含まれているのかどうかなど、種類や使用(取り付け)部位の特定は難しい。さらに、これらの金具はすべて建築当初からのものなのか、修理時などに取替えや追加されていないのかなど判断が付きにくい。なかには、文様をもつものがあり、躍影り・魚々子打ちの技法が観察された金具については、江戸時代初期の建築当初から取り付けられていた可能性が高い。今後も機会あるごとに、個々に検討が必要である。

〈銅釘〉

銅釘は、上記のような金銅金具・銅金具を建築部材などに留めるのに使用された。銅釘の種類は第10次調査時に

検討され、頭部の形状から角形・平形・平丸形・不整形の4種類に分類された(第5図)。第20次調査までに957本が出土している。内訳は第3表のとおりであるが、ここには御成門跡に関連するものも含まれている。また、銅釘の中には、頭部に鍍金の認められるものもあり、金鍍金具との関係を指摘できる。

出土傾向は、大広間跡西辺部の紅葉の間付近より御成門跡にかけて(第7次・第10次調査)と東辺部の上段の間からくらすみの間付近(第1次調査)に多い傾向が指摘できる。この東西に分かれる傾向は、建物の東西両面に対応している。妻側に、金具が多く取り付けられていた結果を反映したものと考えられる。



第5図 銅釘類型模式図・計測部位

<飾り金具>

飾り金具	1次	5次	7次	10次	12次	15次	17次	20次	計
金銅金具	9	9	30	7	4	3	0	1	63
金銅座金具か				1					1
銅金具					67			1	68
計	9	9	31	74	4	3	0	2	132

<銅釘>

類型	1次	5次	7次	10次	12次	15次	17次	20次	計
I類(角)	9	8	42	16	3	10	4	1	93
II類(丸)	4	8	43	10	5	0	3	2	75
III類(平丸)	134	21	113	53	9	14	32	15	391
IV類(不整形)	44	55	206	22	2	20	10	7	366
V類(形状不明)	0	2	12	7	0	9	1	1	32
計	191	94	416	108	19	53	50	26	957

第3表 飾り金具・銅釘集計表



第6図 大広間跡・御成門跡 飾り金具・銅釘出土地点図(1/400) ※第17次調査分を除く

(2)基礎の特徴

1)床下

①整地層の特徴

まず、前提となる基本層は以下のようになる。

I層 現表土

II層 大広間建物解体後の堆積土（近代以降の公園整備などによる）

III層 大広間建築時の整地層など

IV層 築城以前の表上層（中世以前、大広間跡では建築時に削平されたためか、確認できず）

V層 基盤層（黄褐色粘土層・浅黄色風化礫層）

大広間跡の整地層は基本層のⅢ層としている。Ⅲ層整地層を大別すると、イ：最上層の礎石抜取り時まで存続したにぶい黄褐色土層（第20次調査で確認し、礎石抜取り時までの表土相当）、ロ：礎石掘り方を被覆する明褐色土層、ハ：虎の間付近より西側に分布する黄褐色粘土層（V層起源とみられる整地層面）が見られる。ニ：さらに下層には、西側で砂礫層が、ホ：東側では風化礫等の混入物の多い褐色土（多数、細分が可能）等に分層される。なお、整地層の下層には、基盤層（V層）となる黄褐色粘土層が比較的厚く堆積している。

<その他の特徴>

Ⅲ層整地層は、現地表面から基盤層までが浅い尾根筋に近い大広間北西角部付近では、ほとんど見られない。整地層は、微地形に沿って東側に傾斜しており、東に行くにしたがい厚く盛られている。

大広間跡北西部の整地層（第20次調査西部付近）は、その中位の黄褐色粘土層（V層起源）では搅拌されたようなブロック状を呈している。建物跡南西部から北東部にかけて、砂礫層が帶状に分布している。この層の東辺部では漸移的に礫の量が減り、砂も灰色粘土に変化している（第7図参照）。

大広間跡のプラン内の整地層上部では、広範に褐色粘土層が認められ、礎石の掘り方は、この層の上面で検出される。礎石掘り方底面はV層（黄褐色粘土層）中に達するものが多い。一方、V層面で掘り込みが確認された礎石（KS-581）がI層確認され、古い建物跡の存在が予想される（第20次調査）。

第7次調査や第20次調査（裏上段の間付近）では、整地層自体の残りが良く、座敷部から雨落ち溝跡に向かう傾斜（勾配）が確認できた（別項参照）。

大広間跡下層の整地層中には、前述した建物礎石（KS-581）の他、土坑跡（KS-586）等と推定される遺構群が介在しており、すべての整地地盤が一気に行われたとはいえない。

大広間跡内部では、厚く整地層が行われているが、雨落ち溝跡の外側では整地層はほとんど見られない。

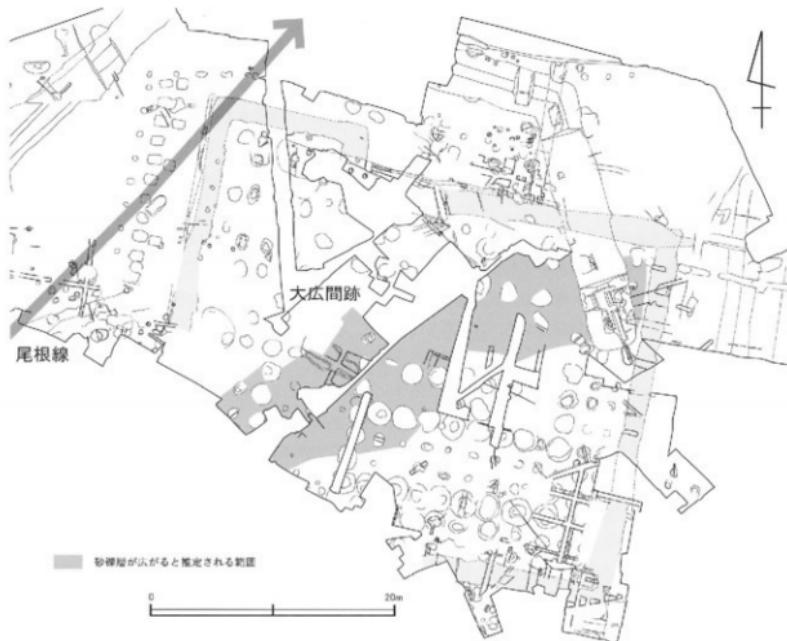
②砂礫層

大広間跡下層の整地層中には、床下全面ではないが、砂礫層が認められる。その分布範囲は、大広間跡南西部（虎の間付近）から北東部（上段の間付近）へ幅約10mで帶状に伸びる。北東部では、雨落ち溝跡の内側で途切れている（第17次・第20次調査）。

砂礫層は、2～5cm程の礫と粗砂から成るが、砂が主体で礫は少ない。第20次調査で1×0.3m、厚さ約2cmの範囲で、この層のサンプルを採取した。その結果、総重量14.8kgあり、そのうち礫は5.7kgで38.5%を占める程度であった。砂が主体の整地層であることが分かる。礫の大きさも長軸が5cm未満のもののが多かった。したがって、後述するような「石敷き」という表現がよいのかどうか、検討の余地がある。砂礫層東辺部では、礫がほとんどなく、砂は細砂が堆積していた。第20次調査では、サンプル採取地点の砂礫層直下に、極めて薄い厚さ約5cmの茶褐色有機土層が検出された。

砂礫層は、Ⅲ層の下層に建物の存在を想定し、これと関連する石敷き遺構ではないかとの見方があったが、この

点は、面的な調査ができない現状では結論が出せない。また、尾根筋ラインに平行しているという特徴も認められるので、地下水処理や地盤沈下防止など他の用途・機能も考慮する必要が考えられる。大広間跡北東部外側の砂礫層との関連は、前述したように雨落ち溝跡内で途切れしており、層を連続的に追いかけることができないが、一連のものである可能性は低い。この外側の砂礫層（KS-178石敷き等）は、形状が角礫のものを含み、瓦片がみられるなど、砂を主体に円礫を含む本砂礫層とは特徴に違いがある。

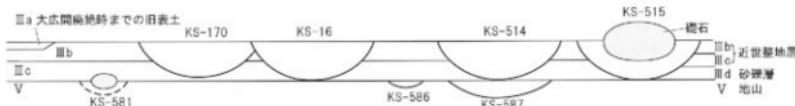


第7図 砂礫層分布図 (1/400)

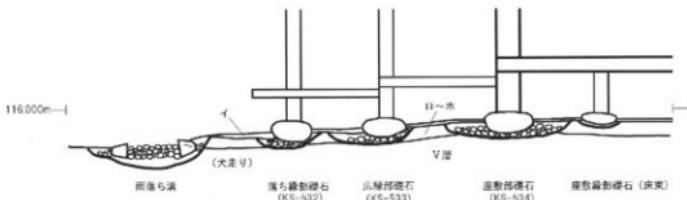
③座敷・縁側の勾配

座敷部床下から雨落ち溝跡までの状態については、比較的残存状態のよい第20次調査で観察することができた。この部分では、座敷部礎石掘り方No.31から広縁の礎石No.32、落縁の礎石No.33を経て雨落ち溝跡に至る（この間の距離は約3m）。整地層上面の傾斜は、約3°の勾配（法面）が確認できた。東部の法面部では、広縁礎石抜取り穴が整地層最上層（にぶい黄褐色土）より掘り込まれているのが観察され、この層の表面は硬く締まっており、II層がきれいに剥がれる現象がみられた。落縁礎石と雨落ち溝跡間はやや傾斜が緩くなり、この間の土層は上下に分層でき、上層が法面と同じにぶい黄褐色土（IIIa層）、下層（IIIb-1層）が硬化層となっていた（軒下の項で後述）。

なお、勾配の先の座敷部では、漆喰を塗るような亀腹状の隆起は認められなかった。



第8回 第20次調査 大広間南東周辺基本層序模式図



第9回 裏上段の間東側断面模式図

④軒下 犬走りの叩き（硬化層の形成）

第20次調査の東側拡張部（裏上段の間東側）、落縁礎石抜取り穴（No.33）と東側の雨落ち溝跡の間（犬走り部分）で、硬化層が検出された。軒下の犬走り部分が幅約90cmにわたり、IIIb-1層とした褐色シルト層（層厚最大6cm）が非常に硬化していた。特に、上面は硬く縮まっている。層中に、漆喰や小石が混ぜられたような形跡は認められなかった。このような硬化層は、他の部分では確認されていないが、本来は建物の軒下を全周していたと考えられ、大広間の軒下では、建築当初犬走りにおいて叩き仕上げ作業が行われていたと推定される。

なお、上層のIIIa層は硬化が認められなかつたが、この層の上面から礎石抜取り穴が掘り込まれているので、この層の形成は、下層（IIIb-1層）の叩き仕上げ後、落縁礎石（KS-532）の抜取り時までに形成された層であることが判明した。また、IIIa層は、拡張部では雨落ち溝跡の内部にも入り込んでいることや、上面あるいは上部で釘類が出土することも確認されている。

2)礎石

①残存礎石の特徴

これまでの大広間跡の調査において、その建物跡範囲内で検出された礎石は9石ある。このうち、1石は柱筋に載らない石で、上段の間の床の間中央床下に位置している（第7次調査 KS-130）。第17次調査の報告では、この礎石は掘り方で確認できず動いていると指摘したが、前述したように、篠山城跡大書院跡に類似があり、注意する必要がある。孔雀の間と檜の間の境に位置するKS-472礎石についても、石の上端が傾いていることから動いていると指摘されている。

大広間跡の柱筋にのる礎石は7石あり、いずれも扁平な自然石を使用している。北西部、首実検の間に位置する4石（首実検の間西側3石とその北側1石）のうち2石は動いていると報告したが（第5次調査）、柱筋にのってお

り礎石の標高にも問題ないので、ほぼ原位置を保っているものとしてここで扱うこととした。これらの礎石には、加工痕や、番付などの書き込みも確認できない。大きさには差異があり、長軸60~95cm、短軸38~68cmのものがある。詳しく見ると、礎石は使用する場所によって、大きさの異なる扁平な自然石を選択している。屋根を支える柱には、長軸80~95cm、短軸55~65cmの礎石が認められる。束柱用には、やや小型の長軸60~80cm、短軸50cm~75cmの礎石が使われている。落縁には、長軸69~89cm、短軸50~75cmの礎石が使われている。

首実検の間北端の礎石(KS-97)は、落縁礎石としては他の石に比較して大きいようである。大広間跡の主要な各部屋の本柱に当る部分の礎石は残存していないが、縁の部分や束柱の礎石跡に比べて掘り方のサイズが大きいことは後述のとおりである。掘り方のサイズと礎石のサイズがどのような相関関係にあるのか、検討を要する課題である。

大広間跡の北に1石、転石となっている礎石(長軸120cm・短軸80cm・厚さ20cm)があり、これには柱を掘る位置と考えられる部分に柱を受ける円形の加工痕が認められる(第12次調査で確認)。ただ、大広間に使用されていた礎石が明らかでない。

②礎石レベルの比較

礎石上端レベルは第4表に見られるように、首実検の間など座敷部の礎石では、115.80m台から115.90m台のものが見られ、最大約15cmの差が認められる。この差は、柱の長さを調整することによって解消したのであろう。平均礎石上端レベルは、標高約115.91mである。確認できるものは、すべて標高116.00mを下回る。不陸や沈下があったかどうか判断できないが、No.9(KS-551)の広縁礎石のレベルは他より低い特徴をもつ。

番号	礎石名	位置(部屋名)	法量(cm)	標高(m)	加工	備考
1	KS-97	首実検の間	約89×75	115.987	無	落縁
2	KS-98	"	約80×65	115.965	無	広縁、やや動く
3	KS-99	"	約90×65	115.839	無	広縁、やや動く
4	KS-100	首実検の間・紅葉の間	約95×55	115.948	無	広縁
5	KS-101	首実検の間・紅葉の間	約70×50	115.911	無	束柱
6	KS-130	上段の間(床ノ間下)	約80×75	115.779(※)	無	束柱、動く
7	KS-472	孔雀の間・前の間	約60×38	115.875	無	束柱
8	KS-538	鶴の間・廊の間	約72×(65)	115.93	無	束柱
9	KS-551	鶴の間(広縁部)	約69×58	115.792	無	広縁

※17次調査データ使用

第4表 残存礎石一覧

③座敷部礎石掘り方・抜取り穴

礎石の掘り方や抜取り穴については、全容の分かるものは多くない。公園整備による園路工事や各種の埋設管掘削工事などで削平されたものも多く、北半部では礎石の掘り方が確認できない所もある。

<掘り方・抜取り穴の特徴>

座敷部の礎石掘り方は、円形や楕円形の形状が多いが、不整形のものもある。直径は約1.7~2.4mが確認できるが、特に、上部の削平を免れた大広間跡南東部では、その多くが直径2m前後である。深さは、0.2~0.4mである。内部には主に褐色土と円礫を充填している。抜取り穴は、最大1.5×1.0mのものがあるが、0.7×1.0m程の略円形のものが多い。深さは確認できたもので、最深0.45mである(裏上段の間KS-17)。抜取り穴の内部は、暗褐色系の土で

埋められ、根固め石が起源とみられる円錐が入っているものが多い。

＜礎石設置＞

座敷部の礎石設置は廊の間・虎の間付近の観察では、掘り方内の観察から直径2m前後、深さ0.2~0.4mの穴を穿ち、基盤層の黄褐色粘土層中で底になるようにし、根固め石を入れて安定化を図り、礎石を設置したものと考えられる。礎石設置後は、根固め石が隠れるように褐色土やにぶい黄褐色土で被覆している。このうちにぶい黄褐色土は、座敷床下部ではあまり認められないが、裏上段の間の東、縁側部法面で良好に残存していた。この層は、前述した第20次調査東側拡張部のⅢ層と一連の層である。座敷床下では、この層が乾燥風塵化し、雨落ち溝上や犬走り付近に再び堆積したのではないかと推定される。

＜抜取り穴と抜取り時期＞

裏上段の間北辺に位置するKS-6礎石抜取り穴では、第1次調査の際に根固め石とともにレンガ片が出土している。これは、礎石抜取りの時期を考えるうえで、一つの視点を与えてくれる。一般に、大広間礎石の抜取りは、明治初年の建物解体と同時期（明治4年～8年頃）と考えられている。しかし、レンガは建物などに一定期間使用されてから廃棄され、礎石抜取り穴を埋める土に混入した可能性が高い。仙台市内で、最初にレンガが使用されたのは、明治15年の仙台警察署の建物で、レンガは片平丁にあった宮城県監獄署で製造されたという（『仙台市史通史編6 近代1』）。また、木丸跡地に明治35年竣工した昭忠碑は、その建設にあたりレンガを多量に使用したといわれ、これと関連する可能性もある。したがって、礎石抜取りは建物解体時だけでなく、その後も行われていた可能性が高いと考えられる。

＜東柱の礎石掘り方・抜取り穴の特徴＞

東柱の礎石抜取り穴は、第20次調査で多く検出されている。平面形は一定していないが、長軸0.4~0.9mで、円形より楕円形を呈するものが多い。深さは、0.1~0.27mを測る。礎石は、素掘りのもの（KS-20）、穴を掘り内側に粘性土を入れた（貼った）もの（KS-523）、僅かだが根固め石を入れたもの（KS-527）が見られた。礎石設置後は、その脇まで被覆する整地がなされたと考えられる。上記のように、東柱と考えられる礎石の設置に際しては、形状や構造に統一性があまり見られない。

④縁側部礎石掘り方・抜取り穴

縁側部の礎石の掘り方は、落縁・広縁とも直径1m前後のものが多い。深さは、第20次調査で確認した例では、0.14~0.26mを測る。なお、広縁では間仕切りライン上で屋根を支える柱の礎石掘り方に、座敷部の礎石掘り方同様、直徑1.7~2.0mを測るものがあり、鶴の間の南側KS-170・552、上段の間KS-124が該当する。座敷部では、掘り方直徑が約2m前後のものが一般的である。

礎石抜取り穴の大きさは、掘り方よりやや小さいがほとんど差がない。深さは、多くが0.1~0.25mであるが、削平を免れ整地層の残りのよい第20次調査3区裏上段の間付近では、0.3~0.45mを測る。裏上段の間から鶴の間にかけての広縁では、柱間隔が3間半の3つ割となっている特徴的な箇所がある（第3図⑦）。

III. 付属施設

(1)雨落ち溝跡の特徴（KS-53）

雨落ち溝跡は大広間建物跡の外側を廻り、溝跡中央部（芯々）は、屋根の軒先ラインと一致することが判明している。なお、南西部の鹿の間付近の雨落ち溝跡については、敷地外に位置することから調査を行はず、特徴をつかむことができなかった。

1)規模・形状

溝跡の芯々間を図上で計測すると、東西37.68m（北半部）、南北29.79m（東辺部）を測る。形状は大広間建物跡

と相似形を成す。溝跡は、切石を縁石とする石組溝で、溝幅（縁石間）は50～56cm（大広間北西部に当たる第5次調査では最大で90cmを測る）、深さは確認面からで一定しないが、溝底面まで20～50cmを測る。

雨落ち溝跡西辺部では、溝跡の輪郭が西側に張り出し、突出部を形成している。調査では厚さ約1mを測り、西側へ突出する部分は内側で50cm、外側で30cm程度張り出している。この突出部は玄関（紅葉の間）に対応した何らかの施設を反映したものと考えられる。

2)構造

1.7～2.0mの掘り方を建物と相似形に掘り、内部に一部加工した削石による石組溝を作り、さらに溝内に川原石や削石を充填している。裏込め部分にも小礫や割石が含まれている。縁石の大きさは、およそ20～40cm（最大49cm）で、小口を広くとり、控えの短い切石を使用している。縁石は解体時などに抜き取られたようである。残存部でも一段分しか確認できない。二段の石組みの可能性も考えられたが、明らかではない。溝内の川原石は、検討の結果、下部の石は粒径・重量が揃い規格性が認められるが、上部の石は一定ではないことが確認されている（第12次調査）。

3)その他の特徴

大広間建物跡北辺部の雨落ち溝跡は、第12次調査時に同じ位置で上下の重複が確認された。詳細な時期は不明だが、藩政期に雨落ち溝北辺部は改修されていたことが分かる。

また、溝跡内の流水方向を明らかにするため、川原石面の標高を比較した結果、建物跡の北西側が高く南東側が低いことが確認された。特に、車寄せ付近が最も高く（115.694m）、北西角部（115.622m）がこれに次いでいる。逆に、最も低い箇所は南東角部で、標高115.451mを測る。北東角部もこれとはほとんど差がない（115.455m）。

鹿の間付近の雨落ち溝跡は明らかではないが、雨水などの排水処理は溝の底面レベルの低い東側で行われた可能性が考えられる。しかし、これまでの調査では、KS-45G暗渠状造構（第15次調査）が排水施設の可能性を残すが、大広間の雨落ち溝に続く側口する排水処理施設は明らかなっていない。

IV. その他の遺構

(1)石敷き遺構（KS-178）

第7次調査時に、大広間建物跡と御成門跡の間に両者を繋ぐように石敷き遺構が検出された。幅約1.7m、長さ7.4mに亘り検出され、下部に深さ30～40cmの溝状造構を伴っていることが明らかになった。溝状造構の内部下層では、多量の円礫が出土した。この造構は当初、暗渠の可能性が考えられた。上面の石敷き遺構は、溝部の埋土1層上面に10cm未溝の大きさの掛けた円礫を敷き詰めたものである。方向はN-約72°-Eを測り、大広間建物跡の東西軸方向に比べ、北に約30°傾いていた。また、石敷き部の右レベルは大広間跡に向かって下がり、約20cmの比高差があり、大広間建物跡とは紅葉の間で接するようである。引き続き、翌年の10次調査で、この造構の追加調査と検討を行った。その結果、通路跡で全長約12.5mとなり、石敷きの幅は最大約2.5m、下部の溝状造構は上幅0.9～1.2m、深さ20～40cmを測る。石敷き部の礫は、採取し検討した結果真円に近いものを多く選択し、使用されていることが明らかとなった。溝内部の礫は、選択性はあまり看取されなかった。ところで、この造構の延長線が、御成門跡に繋がらず予想外に南側にずれることも判明した。御成門跡の規模の検討からも、やはりずれることが明らかとなり、御成門跡とこの造構との連続性は低いと判断された。ただ、御成門跡の礫石掘り方内から瓦が出土していることから、この門跡は築城当初からのものではなく建て替えられている可能性も考えられ、なお検討の余地を残している。また、下部の溝状造構の珪藻分析では、珪藻がほとんど検出されず、一時的でも乾燥した環境だった可能性がある。したがって、暗渠ではなく通路下の地業造構とも考えられる。こうした状況から結論を出せないが、通路跡とみてよいものの、この造構と接続すると予想される古い御成門跡が別地点に存在した可能性を考えなければならない。



第10図 大広間跡関連遺構位置図 (1/400)

(2)区画施設

①1号堀跡（南北柱列）

大広間建物跡西側に位置し、大型の掘り方をもつ柱列で柱穴13基 (KS-67~76, 233, 246, 296~298, 12間分) が検出され、全長20.8mを測る。柱間間隔は1.55~1.6mである。さらに、南側調査区外に伸びていくと予想される。方向はN-約10°-Eを示し、大広間建物跡の西辺南北ラインに約7.4m離れて平行している。柱穴は略長方形を呈し、長軸が0.8~1.5m、短軸が0.7~0.95mで、その多くで柱痕跡が検出できた。堀跡には、柱列の東側に1間おきに控え柱とみられる柱穴 (KS-51・78・79・80) が取り付いている。また、堀跡を構成する柱穴のうち、KS-233とKS-296は柱間隔が他と異なり約4mと広く、深さも他より深い。底面まで確認できたKS-233柱穴では、底面から扁平で大きな根石が出土した。こうした特徴から、2基の柱穴は門柱の柱穴と考えられる。KS-296柱穴跡には、柱の抜き取り穴 (KS-246) が認められた。遺物はKS-51柱穴から、丸瓦・楕斗瓦が1点ずつ出土した。堀跡は、本丸入り口より直接部屋や廊下が見えないように、区画・遮蔽を目的に設置されたものと考えられる。なお、前述した石敷き造構は、KS-233・296の門柱間の下を通り、大広間の雨落ち溝跡に達するものと推定される。

②2号堀跡（南北柱列）

大広間建物跡、1号堀跡の西側にこれと並行して位置する。小型円形の掘り方をもつ柱列で柱穴8基 (KS-58~65, 7間分) が検出され、全長約13.7mを測る。柱間間隔は1.9~2.0mで、約1.96mを測る箇所が複数あり、6尺5寸を基準としていたと考えられる。方向はN-10.5°-Eの南北方向を示し、大広間建物跡とは約8.5m、1号堀跡とは約

1.2m離れ、ほぼ平行している。柱穴は直径0.4~0.5mの略円形を呈し、その多くで柱痕跡が検出できた。遺物は出土していない。この痕跡北端柱穴（KS-58）より約1m北に、後述する3号堀跡の西端柱穴（KS-254）が位置しており、両者は関連するあるいは一連のものと考えられる。1号堀跡との新旧関係は不明である。

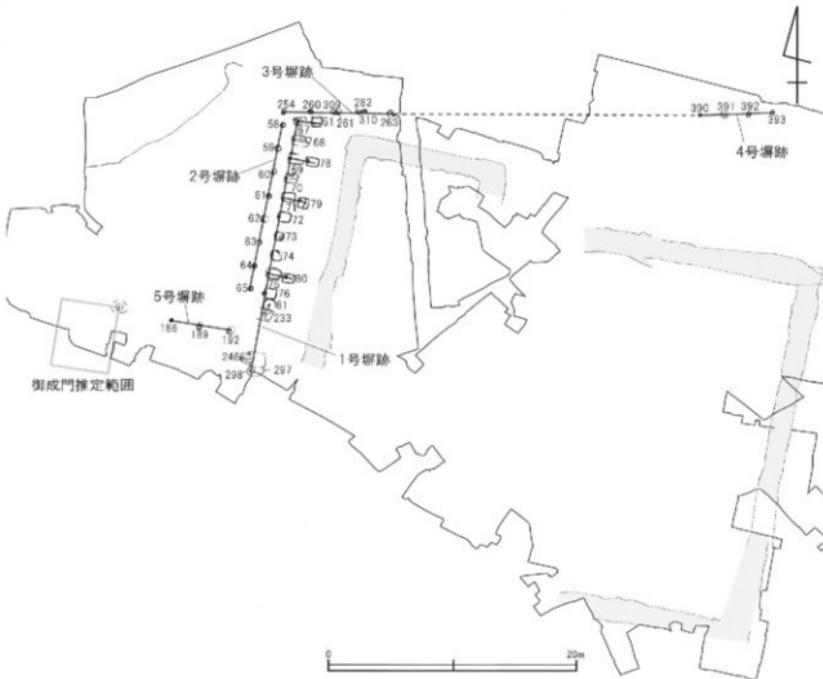
③ 3号堀跡（東西柱列）

大広間建物跡の北側に位置し、2号堀跡と類似した小型円形の掘り方をもつ柱列で、西端の柱穴は2号堀跡北端の柱穴に合っている。柱穴は5基（KS-254, 260~263, 306, 309, 310, 4分間）検出され、全長約8.6mを測る。一部で柱穴どうしが重複しており、建替え等が行われたものと判断される。柱間間隔は1.9~2.1mとばらつきがあるが、6尺5寸を基準にしていた可能性がある。方向はN-90°-Eで真東西方向を示し、大広間建物跡北辺ラインとは平行しない。柱穴は直徑0.3~0.4mで、重複している穴は0.4×0.9mを測る。遺物は出土していない。

④ 4号堀跡（東西柱穴列）

3号堀跡の東約25mの地点で、方向が一致する柱列が検出され（第12次調査）、柱穴4基（KS-390~393）で3間分になり、全長5.8mを測る。柱穴は直徑0.3~0.5m、柱間間隔は1.8~1.9mを測る。遺物は出土していない。

3・4号堀跡は東西に離れて検出されたが、一連の遺構と推定している。東側は大広間の範囲を超えて伸びていると推定され、大広間北辺と同一方向ではなく、Ⅲ期石垣のラインと平行している。Ⅲ期石垣の盛土層より新しいことが確認されている。これらの痕跡は大広間の付属施設とみるより、大広間建物と石垣を遮蔽する施設であった可能性が考えられる。



第11図 大広間跡関連施設（痕跡）位置図（1/400）

⑤ 5号堀跡（東西柱列）

この造構は第7次調査の際、「KS-186・189・192柱穴」として報告したものである。今回、この造構を5号堀跡として扱うこととした。この堀跡は、御成門跡と大広間建物跡の間に位置し、3個の柱穴で構成される。柱痕跡が確認でき、一列に並ぶ。柱穴3個（2間分）で約4.8mを測る。KS-186は直径約0.32mで円形を呈し、直径約10cmの柱痕跡がある。KS-189は直径60cm以上で稍円形を呈し、直径約15cmの柱痕跡がある。KS-192は直径60cm以上で円形を呈し、直径約18cmの柱痕跡がある。方位は約N-82°-Wで、大広間建物跡東西軸にはほぼ平行し、2号堀跡とはほぼ直交し、形状の異なる1号堀跡とは方向が僅かにずれている。遺物は出土していない。

(3)暗渠状遺構

<KS-353暗渠状遺構>

この造構は大広間建物跡北辺の雨落ち溝跡の東部に直交し、さらに北方に延びる。方位は約N-10°-Eで、長さ約3.7mを測る。北端部は擾乱溝や近代大溝に切られ、どのように展開するのか明らかではない。検出面はⅢa層（第12次）で、雨落ち溝跡の新段階と同じ面である。造構掘り方は幅約90cm、深さ30cmで内部は石列を2列配し、その間の一段低い部位に小形棟を充填している。遺物は鉄釘・古銭等が出土している。この造構の埋土を珪藻分析した結果、珪藻密度が低く、乾燥した環境だったこと可能性もある。したがって、深さが30cmと浅い特徴もあり、調査時には暗渠の可能性を考えて報告したが、開口した石組溝跡であった可能性も残り、なお、検討の余地を残している。

<KS-456暗渠状遺構>

大広間雨落ち溝跡南東角に位置し、南あるいは東へ延びると予想される造構である。擾乱が著しく、形状・規模は不明だが、東西1.5m、南北3.2mの範囲に密度の高い礫の集中が検出された。大広間跡の雨落ち溝で一番低い部分にあたることから、雨落ち溝跡から続く排水施設であった可能性もある。

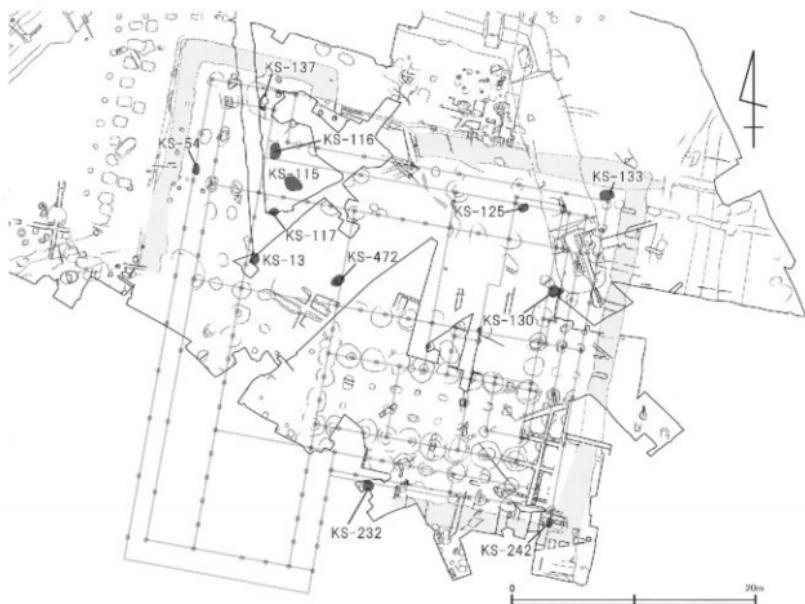
(4)KS-84溝跡

この溝跡は素掘りで、大広間跡の外周を巡る雨落ち溝跡と相似形を成す（第9図）。西辺部では約1～2m外側に平行している。全長18.8m程が検出できた。方向はN-11°-Eである。北辺部でも断片的に検出され、雨落ち溝跡に切られている。大広間跡北部で検出された礫石建物跡に伴う石敷きより新しいことが確認されている（第12次調査）。規模は検出面で幅25～32cm、深さ約30cmである。埋土は均質で、人為的に埋められた可能性が高い。遺物は、埋土中から瓦片が出土している。溝跡の性格としては、大広間建設にかかる何らかの造構と考えられる。

(5)柱筋にのらない礫石跡及び掘り方

柱筋にのらない礫石は、近代以降何らかの理由で動かされてしまったものを除き、礫石に限らずその掘り方も柱筋にのらないものとして扱っている。

この条件に合う礫石あるいは掘り方は、合計11基ある。礫石（掘り方）が、何故ずれているかは不明である。現代の擾乱等と異なり、当初から、あるいはその後も含めて、柱筋からはずれた位置に穴を掘り礫石を掘えたのであるから、そこには何らかの意図あるいは目的があったものと考えられるが、その理由は明らかでない。ただ、上段の間「タン」の下に位置するKS-130のように、新寛永通宝が出土したことにより、江戸時代のある時期に新たに追加設置された可能性を示すものもある。



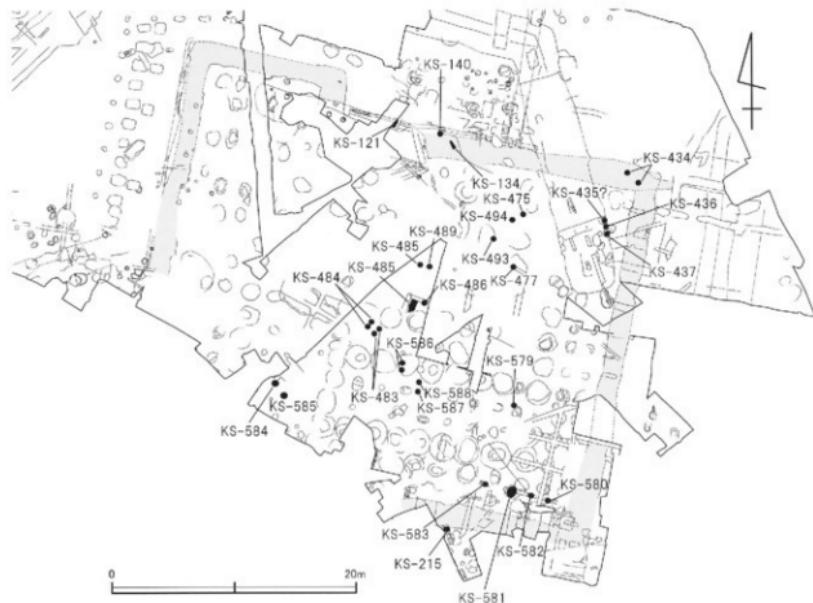
第12図 柱筋にのらない礎石位置図 (1/400)

礎石・振り方	位 置	東西筋	南北筋	備 考
KS-13	紅葉の間	×	×	
KS-54	西辺部落縁	×	○	
KS-115	桟の間	×	×	KS-54と東西筋合う
KS-116	同上	×	×	
KS-117	同上	×	×	
KS-125	北辺部広縁	○	×	
KS-130	上段の間	×	×	「タン」の床下礎石 新寛永通宝出土
KS-133	建物北東角	×	○	第5次調査ではKS-124
KS-137	首実検の間	○	×	
KS-232	鷹の間落縁	○	×	
KS-242	建物南東角	×	×	KS-166の外側 建物南東角対角線上
KS-472	孔雀ノ間、櫛ノ間境	○	×	礎石振り方もずれている

第5表 柱筋にのらない礎石跡及び振り方一覧 ※柱筋にのるものは「○」、のらないものは「×」

(6)下層遺構

大広間建物跡は調査の結果、盛土整地層上に建造されていることが判明したが、この整地層中あるいはその下層（基盤層上）で検出できた遺構を、下層遺構と呼んでいる。下層遺構の多くは、平面的な観察や精査できたものは極めて少ない。大部分は擾乱溝等の壁面で確認できたものばかりで、特徴や時期が明らかなものはない。第6表は、下層遺構を一覧表にしたものである。Ⅲ層中及びV層上に遺構が検出されているが、いずれも、規模や形状等が異なり一連の遺構とは考えにくい。検出できた下層遺構は個別のものが多いと判断されるが、第20次調査のKS-581礎石は1基だけだが、大広間建物に先行する建物跡の一部になる可能性があり、注目される。大広間建物跡に比べ、礎石やその掘り方は小さく、標高も低い。ただし、1基だけなので、その規模や特徴は明らかではない。遺構からの遺物の出土も殆どなく、時期・年代を決めがたい。



第13図 大広間下層遺構位図（1/400）

次数	遺構名	調査区	層位・他	規模(確認長)	備考
1次					該当なし
5次	KS-121?	2B区	KS-84の下	約1m、深さ0.9m	土坑状
5次	KS-134?	2B区	雨落ち溝下	約1.7m、深さ0.12m	皿状
5次	KS-140?	2B区	"	約0.36m、深さ約0.3m	ピットか
7次	KS-215	2区	雨落ち溝下	約0.3×0.29m	雨落ちに切られる
12次					該当なし
15次	KS-431	1区	"	約1.5m、深さ0.14m	皿状
15次	KS-435	1区	KS-410の下	約0.2m、深さ0.14m	
15次	KS-436	1区	KS-410・435の下	約0.46m、深さ0.18m	底、平坦
15次	KS-437	1区	V層上面	約0.8m、深さ0.21m	ゆるいU字状
17次	砂礫層	2~4区			基礎の特徴項参照
17次	KS-485	2区	III d 層上面	幅1.48m、深さ0.36m	皿状
17次	KS-486	2区	III b2層下	幅0.34m、深さ0.1m以上	ピットか
17次	KS-489	2区	III c 層・III d 層	幅0.84m以上、深さ0.16m	皿状、KS-485に切られる
17次	KS-493	3区	III d 層	幅0.28m、深さ0.12m	ピット状、KS-469隣右下
17次	KS-473	4区	V層上面	幅0.55m、深さ0.25m	
17次	KS-474	4区	V層上面	幅0.7m、深さ0.25m	KS-473より古い
17次	KS-475	4区	V層上面	幅0.12m、深さ0.16m	礫多量
17次	KS-476	4区	V層上面	幅0.12m、深さ0.24m	ピットか
17次	KS-477	4区	V層上面	幅0.12m、深さ0.16m	礫多量
17次	KS-483	2区	V層上面	幅1.68m、深さ0.16m	
17次	KS-484	2区	V層上面	幅0.48m、深さ0.18m	KS-483より古い
17次	KS-494	4区	V層上面	幅0.4m、深さ0.12m	
20次	KS-580	3区	V層上面	0.7m×0.15m以上	平面、梢円形か
20次	KS-581	3区	V層上面	礫石0.62×0.38m 掘り方0.75×0.6m	根固め石なし 標高115.572m
20次	KS-582	3区	III c5層	0.53×0.21m以上	平面、円形か
20次	KS-583	3区	V層上面	0.65×0.3m以上	平面、円形か
20次	KS-584	1区	V d 層上面	幅1.32m、深さ0.14m	上部開くU字形
20次	KS-585	1区	III d 層上面	幅0.94m、深さ0.28m	擾乱溝凹壁確認
20次	KS-586	2区	III c8層上・V c 層上面	幅1.13m、深さ0.44m	瓦片出土、KS-514隣石下
20次	KS-587	2区	V c 層上面	幅1.02m、深さ0.18m	皿状
20次	KS-588	2区	III c19層下	幅0.43m、深さ0.14m	浅いV字状

第6表 下層遺構一覧

V. 出土遺物

大広間建物跡として扱う遺物は、雨落ち溝跡（KS-53）の内側を対象とし、Ⅲ層上面や礎石掘り方や礎石抜き取り穴、さらに、付属施設である雨落ち溝跡や堀跡出土のものを扱う（詳細は各次報告書参照）。大広間跡にかかる遺物は、雨落ち溝跡（KS-53）及び建物の床下に当たる整地層最上層のⅢ層（Ⅲa層）から、多くの遺物が出土している。遺物の種別としては、金具・釘が口立ち、陶磁器・土器類は予想外に少ない。局所が明らかでないので対象から今回外したが、雨落ち溝跡の外側や基本層Ⅱ層の出土遺物にも、本来、大広間建物跡に帰属すると推定される遺物（金銅金具等）がある。

(1)陶磁器

次数	調査区	遺構名・層位	産地・種類	時期	備考
5次		KS-53	肥前染付碗	18世紀	くらわんか手
7次	2区	Ⅲ層	常滑窯	中世	

第7表 大広間跡関連出土陶磁器

(2)土器類

次数	調査区	遺構名・層位	産地・種類	時期	備考
7次	2区	Ⅲ層	土師質土器皿	江戸	灯明皿 スス付着
7次	2区	Ⅲ層	瓦質土器鉢	江戸	
7次	2区	Ⅲ層	瓦質土器火鉢	江戸	

第8表 大広間跡関連出土土器類

(3)金属類（金具・鋼釘を除く）

次数	調査区	遺構名・層位	産地・種類	時期	備考
5次	2A区	KS-53 1層	煙管	雁首部分	付け肩
10次	2区	KS-369 1層	鉄釘	頭部角	先端欠損
15次	2区	Ⅲa層	煙管	延べ煙管	火皿欠損
17次	4区	KS-130 1層	古錢	寛永通宝	新寛永

第9表 大広間跡関連出土金属類（金具・鋼釘を除く）

(4)瓦

次数	調査区	遺構名・層位	産地・種類	時期	備考
1次	1A区	KS-1 (53)	軒丸瓦	連珠巴文	瓦頭約1/6残
5次	1区	KS-51	丸瓦		一部欠損 壁跡
5次	2B区	KS-121 4層	軒丸瓦	連珠巴文	瓦頭約1/2残
5次	2A区	KS-53 1層	菊丸瓦	菊文	一部残存
5次	1区	KS-51	製斗瓦	四面御日あり	約1/2残 壁跡
7次	2区	Ⅲ層	軒平瓦	三引飛雲文	瓦頭一部残
12次		KS-53 4層	鬼瓦？		接合面の突起
15次	2区	KS-53 1層	軒平瓦	桔梗文	瓦頭約1/3残
20次	3区	礎石抜き取り穴	軒平瓦	桔梗文	瓦当約1/2残
20次	3区	Ⅲa層	角棟瓦		約1/1残

第10表 大広間跡関連出土瓦

VI. 科学的分析

8年間の大広間建物跡の調査において行なわれた科学的分析をまとめると、以下のとおりである。なお、まとめは、直接大広間建物跡とその付属施設の遺構等に関係する分析に限ることにした。

第1次調査（平成13年度）

- ・地ドレーダー探査 調査前に行う。礎石や溝跡に有効。礎石掘り方跡の把握には不充分。
- ・土壤分析 雨落ち溝跡東側（外側）で検出された白色土が、漆喰かどうか分析。蛍光X線分析でカルシウムが主成分の土（石灰）と判明。
- ・プラント・オパール定量分析 植物珪酸体が検出。スサ入りの可能性が高いことが判明。この分析の結果、白色土は漆喰土である可能性が大である。
- ・金属分析 飾り金具と銅釘について非破壊による成分分析を依頼。

第5次調査（平成14年度）

- ・地ドレーダー探査 調査前に行い、礎石・近代の溝状遺構・金属の埋設管等を把握。
- ・土壤分析 雨落ち溝跡とKS-84溝跡について花粉分析を行う。両遺構の花粉組成の差は認められなかった。
- ・金属分析 金銅金具について成分分析を依頼。

第7次調査（平成15年度）

- ・金属分析 成分分析の結果、金銅金具は、銅の含有量90%以上。一部で砒素検出。金部分は、金以外に水銀を検出し、鍍金であることが確認された。
- ・土壤分析 KS-163雨落ち溝跡・KS-222土坑・Ⅲa層について、花粉分析を行う。分析の結果は良好なデータは得られなかつた。

第10次調査（平成16年度）

- ・土壤分析 KS-178石敷き通路跡の機能解明のため、珪藻分析を行う。分析結果は、珪藻が少なく、乾燥した堆積環境だったことが判明。

第12次調査（平成17年度）

- ・土壤分析 KS-84素掘り溝跡の珪藻分析を行う。分析結果は、珪藻が少なく、乾燥した環境か、堆積速度が速かったことが判明。
- ・年代測定 大広間建物に先行する北側の礎石建物跡の構築に伴う整地層（Ⅲg層）出土の炭化物3点の測定を行う。分析結果は、14C年代C1:330±40yrBP、C2:330±40yrBP、C3:300±40yrBPの値がえられた。

第20次調査（平成20年度）

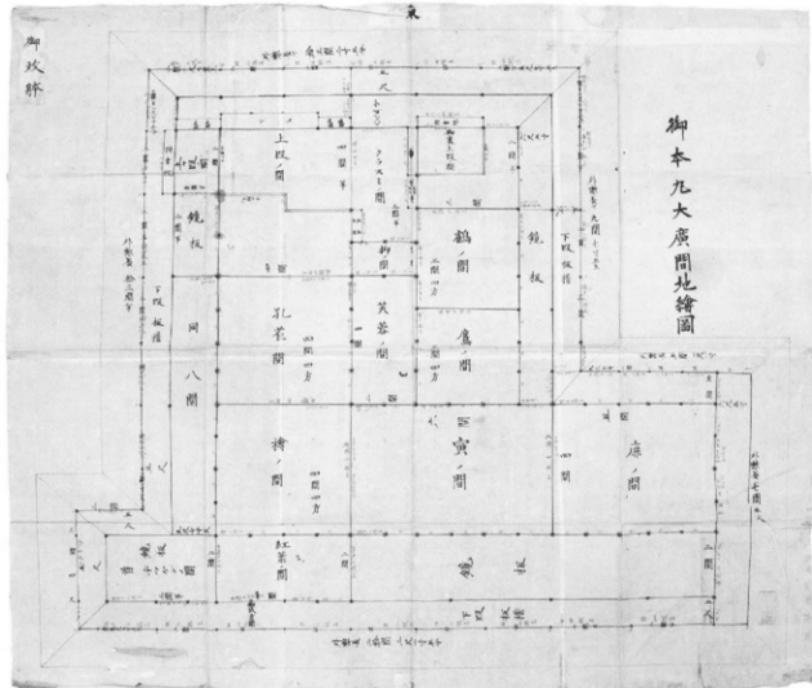
- ・年代測定 KS-586（土坑？）内の木片について、放射性炭素年代測定を行う。なお、この遺構は、大広間整地層下の基盤層上で検出。また、報告書では、2区層扱いになっているが、ここに訂正する。測定結果は、木片の14C年代は、2300±30yrBPである。予想とは異なり、より古い年代のものであった。

VII. 絵図の検討

第1次調査以来、絵図に関する調査・検討を野外調査と合わせて行ってきた。特に、大広間建物について、第5次・第7次・第10次・第15次・第17次の調査にあわせて検討してきた。その詳細は各次報告書のとおりである。大広間を描いた絵図資料は現在のところ8点確認されており、そのうち「御本丸大広間地絵図」、「青葉城御本丸之図」、「御本丸千疊敷之図」、「旧木丸御屋形図」の4点について比較・検討し、その結果を整理した。

1. 御本丸大広間地絵図

大広間建物を描いた絵図はいくつか残っているが、御本丸大広間地絵図（以下、「地絵図」と略す）部屋割りや規模等の建築学的な特徴を最も良く示している。製作年不詳で、約1/60の縮尺で描かれている。地絵図は発掘成果と比較すると、他の絵図より柱の位置や柱間寸法、部屋の規模が正確に描かれている。部位名称では他の絵図と異なり、上段の間の東辺の床は「タン」、裏上段の北辺は「床」とし区別している。紅葉の間西側の玄関部には、「御成玄闇」と記載し、唐破風の屋根を描いている。この絵図には、法量の実長記載に誤りがみられる。西辺の總長「二拾間二尺一寸五分」は誤りで、各部屋の合計では20間1尺1寸5分となる。同様に南辺東半部も合計の長さは「九間七寸五分」ではなく、9間1尺7寸5分となる。この点に気づかれた佐藤巧氏は、「仙台城」（1967年）で首実検の間を例に修正案を示されている。地絵図では、西辺の總長、南辺東側の總長に、記載の誤りがみられるが、絵図の資料的価値を下げるものではないであろう。また、屋根軒先ラインや戸板、板敷等の表記がみられるが、他の絵図と異なり、障壁画等の内部装飾や仕様の表記はみられない。絵図作成に際し、他の絵図とは視点が異なっている。



第14図 『御本丸大広間地絵図』(斎藤報恩会蔵)

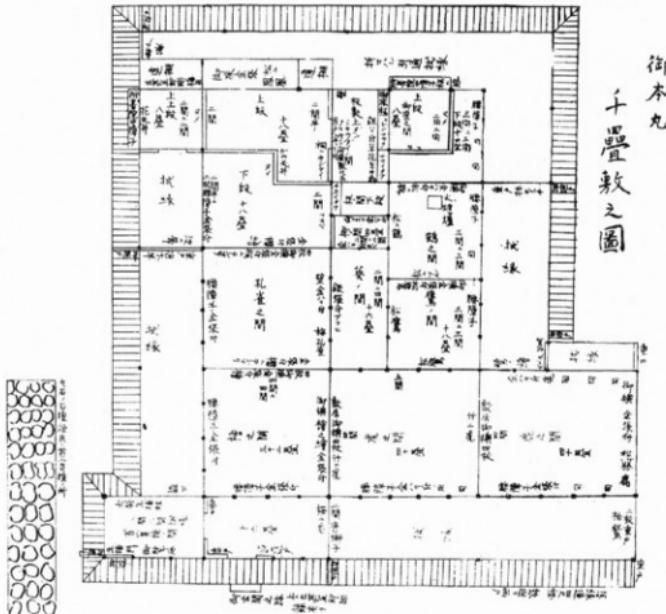
2. 御本丸千畳敷図

この絵図は、江戸末期の仙台藩家臣茂木新九郎が模写したものと言われているが、原本が何かは不明である。部屋割りは他の絵図と同じであるが、部屋の名称、規模に違いが認められる。広縁（この絵図では「拭縁」）は地絵図が2間・1間半・1間の別があるのに対し、概ね2間として描かれている。また、虎の間の南北柱間は地絵図が6間に対し、5間と記載されている。広縁や落縁の柱の表示は、省略されている。柱の配置や寸法等には、あまり注意が払われていない。しかし、地絵図に比べ、各部屋のしつらい（装飾）は天井を含めて記載し、障壁画や板戸絵等の内容が具体的に分かり、これに力点が置かれている。地絵図との主な違いを以下に列記した。

- 1)「壁」、「火熾炬」(鶴之間)、「大将生柱」(首実検ノ間の北東角の太い柱)の記載あり。
 - 2)西側の玄関は、「御玄闇之跡」としている。
 - 3)大広間北西部首実検ノ間の北側に接するように、「丸石ノ石壇雜兵ノ首実検ノ所」として3段～4段の石壇または石敷きの壇が描かれている。
 - 4)落縁幅が4尺で、西側ではその外側に雨戸が付くとの記載あり。

これらの特徴は地絵図ではなく、調査でも確認できなかった。特に、北側に描かれた石壇は、付属施設として扱っ

これらの特徴は地絵図ではなく、調査でも確認できなかった。特に、北側に描かれた石塙は、付属施設として扱った3号跡跡の位置と重複する可能性が高いのだが、検出できなかった。落縁幅4尺と表現されているが、地絵図に示されたとおり調査成果から基本的に5尺としてよい。



第15図 「御本丸千骨數之図」(『仙台郷土研究』第十二巻第十一号所収)

3. 青葉城御本丸之図

この絵図は、前述の「御本丸千疊敷図」と同一の原本からの写本と推定されている。内容は「千疊敷図」とほぼ同じ記載だが、柱の表現がない点が大きく異なっている。ただ、「千疊敷図」に表現された「首実検之間」にある「大将生捕柱」だけが、大きく強調されて描かれている。方位の記載があるが、東西南北を取り違え、まったく逆になっている。この絵図にも北側に石壇が描かれている。

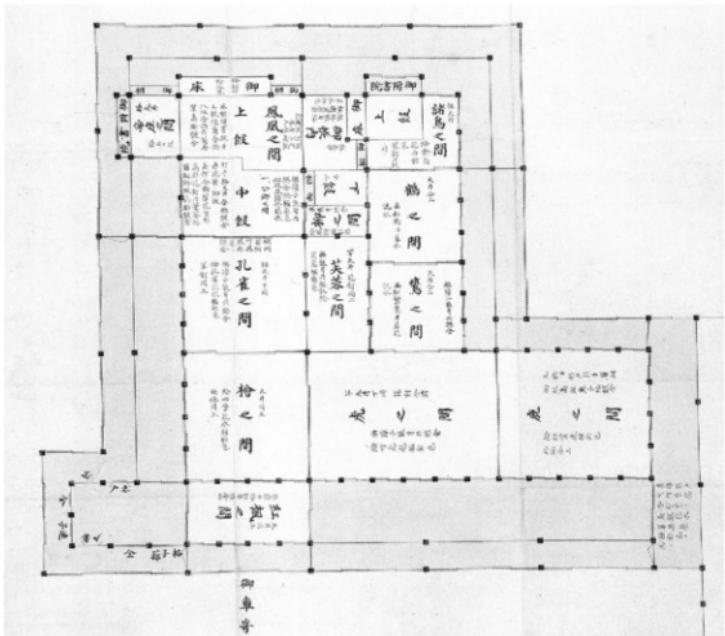


第16図 『青葉城御本丸之図』(仙台市博物館蔵)

4. 旧本丸御屋形図

この絵図は、明和4(1767)年の原本を明治26(1893)年に写したもので、その際加筆（朱書き）されている。部屋割り、部屋名称、柱の位置が記載され、さらに、部屋内部の装飾の特徴も具体的に記載されている。この図は彩色され、座敷部と縁側部は色分けされている。地絵図とは部屋の名称に違いが認められる。釘の飾り金具、障壁画の金銀の使い分け等詳細な特徴の記載がある。地絵図との大きな相違点は、柱の位置、数が大きく異なっている点である。したがって、調査成果とも異なることになる。ただし、虎の間と鹿の間は規模が異なり、柱間は地絵図と一致している。

以上、大広間にわたる各絵図を検討してきたが、地絵図は建物規模、部屋割り、柱位置等建物そのものの特徴に力点を置いて描かれている。これに対して、他の3種類の絵図は各部屋内部のしつらい、細部の特徴、絵画等に力点が置かれた描き方になっている。



第17図 「日本丸御屋形図」(仙台市博物館蔵)

番号	御本丸大広間地絵図	御本丸千疊敷図	青葉城御本丸之図	旧本丸御屋形図
1	上々段の間	上々段の間	上々段	帝座の間・俗上々段
2	上段の間	上段	上段	上段・鳳凰の間
3	# (下段部)	上段	下段	中段・公卿の間
4	孔雀の間	孔雀の間	孔雀の間	孔雀の間
5	檜の間	桧の間	檜の間	檜の間
6	虎の間	虎の間	虎の間	虎の間
7	鹿の間	鹿の間	鹿の間	鹿の間
8	くらすみの間	板敷上段、他	板敷上段	御帳内
9	# (下段部)	下段	板の間下段	下段
10	柳の間	柳の間	柳の間	柳の間
11	芙蓉の間	葵の間	葵の間	芙蓉の間
12	裏上段の間	上段・御座の間	上段・御座の間	上段
13	# (下段部)	下段	下段	諸鳥の間
14	鶴の間	鶴の間	鶴の間	鶴の間
15	鳶の間	鳶の間	鳶の間	鳶の間
16	紅葉の間	なし	なし	紅楓の間
17	首実検の間	首実検の間	首実検の間	なし

第11表 大床間座敷・部屋名対照表

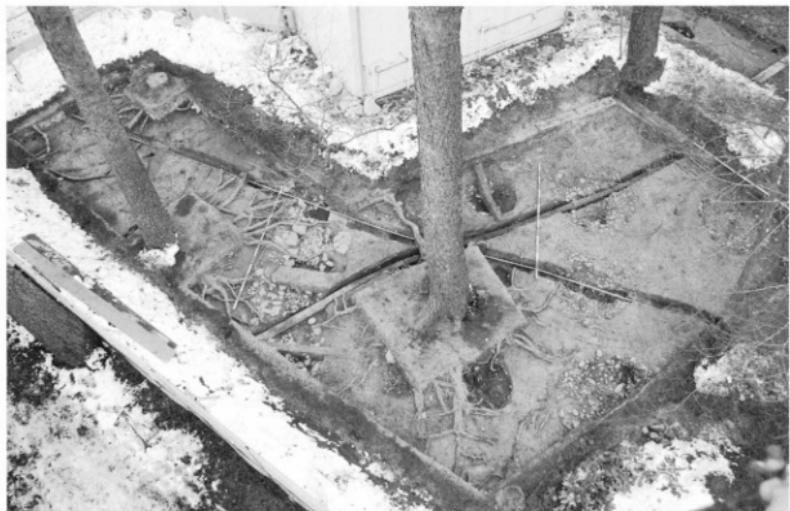




第19図 大広間跡遺構平面合成写真 (1/200)

引用・参考文献

- 小倉 強『仙臺城の建築』仙臺高等工業学校 1930
- 久保哲康『日本の美 No.437 銅金具』至文堂 2002
- 京都国立博物館『特別展覧会 黄金のかぎり－金属工芸にみる日本美－』図録 2003
- 財文化財建造物保存技術協会『国宝 大崎八幡宮本殿・石の門・拝殿保存修理工事報告書』2004
- 篠山市『国指定史跡篠山城跡大書院復元工事竣工記念誌 20世紀から21世紀へのおくりもの』2000
- 篠山町教育委員会『史跡篠山城跡－「の丸跡発掘調査報告書」－（篠山町文化財資料第28集）』1995
- 佐藤 理『昭和・平成の大修復全記録 柱離宮の建築』木耳社 1999
- 佐藤 巧『近世武士住宅』叢文社 1979
- 佐藤 巧『仙台城の建築』『仙台城』仙台市教育委員会 1967
- 佐藤 巧『仙台城の建築と姿絵図』『東北大学建築学報 第21号』1981
- 佐藤巧・小林清治他『歴史群像 名城シリーズ13 仙台城』学習研究社 1996
- 仙台市教育委員会『仙台城跡1』仙台市文化財調査報告書第259集 2001
- 仙台市教育委員会『仙台城跡2』仙台市文化財調査報告書第264集 2003
- 仙台市教育委員会『仙台城跡3』仙台市文化財調査報告書第270集 2004
- 仙台市教育委員会『仙台城跡5』仙台市文化財調査報告書第285集 2005
- 仙台市教育委員会『仙台城跡6』仙台市文化財調査報告書第297集 2006
- 仙台市教育委員会『仙台城跡7』仙台市文化財調査報告書第309集 2007
- 仙台市教育委員会『仙台城跡8』仙台市文化財調査報告書第330集 2008
- 仙台市教育委員会『仙台城跡9』仙台市文化財調査報告書第348集 2009
- 仙台市史編さん委員会『仙台市史特別編7 城館』2006
- 仙台市史編さん委員会『仙台市史通史編6 近代I』2008
- 仙台市博物館『仙台開府四百年記念特別展』仙台城－しろ・まち・ひと－ 2001
- 第二師團司令部『仙台城沿革（第5版）』1937
- 西 和夫『図解 古建築入門 日本建築はどう造られているか』彰国社 1990
- 平井聖・鈴木解雄『日本建築の鑑賞基礎知識－書院造から現代住宅まで－』至文堂 1997
- 矢野顯蔵『仙臺藩祖尊皇事蹟』1899
- 大和 智『日本の美術 No.405 城と御殿』至文堂 2000



調査区全景（1A区・北から）



1A区礎石跡（南から）



雨落ち溝跡（西から）



鍍金飾り金具・銅釘検出状況（雨落ち溝東側・南から）



2B区中央部遺構検出状況（束から）

写真図版1 第1次調査（平成13年）



1区全景（北西から）



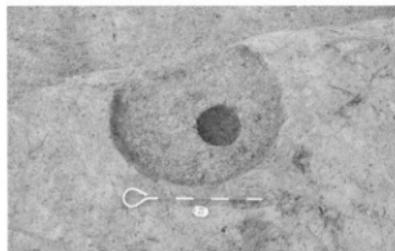
1区雨落ち溝跡（北西から）



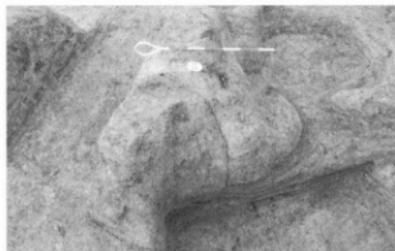
2 A区雨落ち溝跡・縁石・KS-84溝跡断面（北西から）



1区1号堀跡KS-51方形柱穴断面（南西から）



1区2号堀跡KS-62円形柱穴（西から）



1区2号堀跡KS-63円形柱穴断面（西から）



1区1号堀跡・2号堀跡（北から）



1区1号堀跡KS-75・80方形柱穴（西から）



2区全景 遺構検出状況（北東から）



2区雨落ち溝跡検出状況（北東から）



2区雨落ち溝跡断面（東から）



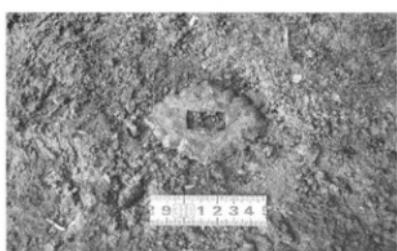
2区落縁部地覆石検出状況（東から）



2区KS-230礎石跡検出状況（南西から）



1A区KS-233掘立柱穴（東から）



2区金銅金具（No.531）出土状況

写真図版3 第7次調査（平成15年）



1A区銅釘（No.142・143・144）出土状況



1区全景（東から）



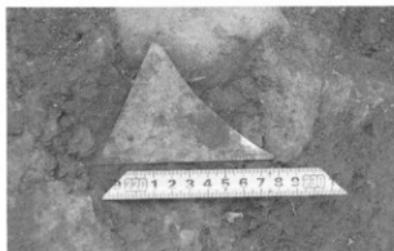
2区中央部KS-178石敷き溝状遺構全景（北から）



2区東部張出部・KS-296断面（西から）



2区中央部KS-178断面（南西から）



No.390金銅金具出土（西から）



調査区全景（北から）



KS-53雨落ち溝跡・353他検出状況（東から）



KS-53雨落ち溝跡断面（東から）



KS-84溝跡完掘状況（上が東）



KS-350・353・359断面（北から）

写真同版5 第12次調査（平成17年）



1区全景（西から）



1区KS-53雨落ち溝跡・84溝跡断面状況（北から）



2区遺構検出状況（北西から）



2区西壁全景（東から）



2区全景（南から）



2区KS-166・242磁石跡検出状況（北から）



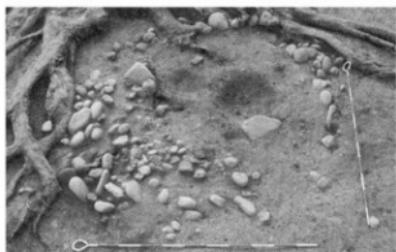
2区作業風景（南東から）



現地説明会風景（北西から）



大広間北半部遺構検出状況（北西から）
上々段の間から上段の間、ぐらすみの間方向を望む



4区KS-486検出状況（北から）
上段の間東辺の礎石



2区KS-462検出状況（北西から）
孔雀の間と芙蓉の間の境の礎石



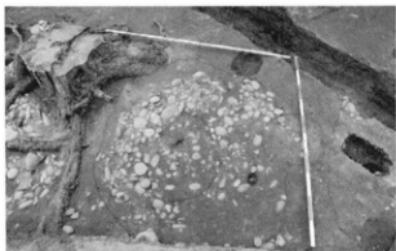
4区KS-473・474断面（東北から）



4区KS-130検出状況（東から）
上段の間床の簡下の礎石



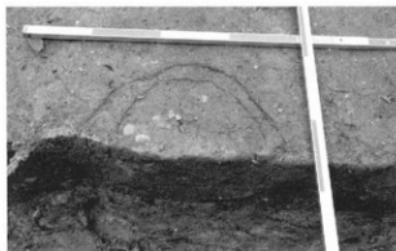
調査区全景（東から）
裏上段の間から鶴の間、鶴の間方向を臨む



2区KS-513検出状況（北から）
柳の間と鶴の間の境の礎石



2区KS-212検出状況（南から）
鶴の間の東柱の礎石



2区KS-524検出状況（南西から）
鶴の間の東柱の礎石



2区KS-538検出状況（北西から）
鶴の間と簾の間の境の礎石



2区全景（北から）
鶴の岡、嵩の間方向を望む



2区KS-551検出状況（南から）
広縁部南辺の礎石



3区広縁部勾配状況（北東から）



1区砂疊層検出状況（南東から）



3区KS-581検出状況（南から）

写真図版9 第20次調査（平成20年）

報告書抄録

ふりがな	せんたいじょうあと							
書名	仙台城跡10							
副書名	一平成21年度 調査報告書 仙台城本丸大広間跡調査成果の総括－							
卷次	10							
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第374集							
編著者名	佐藤 洋・在川宏志							
編集機関	仙台市教育委員会							
所在地	〒980-8671 仙台市青葉区国分町3丁目7-1 TEL022-214-8544							
発行年月日	2010年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
せんたいじょうあと 仙台城跡	みやけいさんひいし 宮城県仙台市 あわばくわくうちならい 青葉区川内地内	市町村	遺跡番号					
せんたいじょうあと 仙台城跡		04100	01033	38°15'06"	140°51'38"	2009.7.1 ～ 2009.11.12	369m ²	重要遺跡 の構造 調査
せんたいじょうあと 大広間跡	04100	01033	38°15'02"	140°51'33"	2009.12.14 ～ 2009.12.15	2.25m ²		
せんたいじょうあと 仙台城跡	04100	01033	38°15'06"	140°51'51"	2009.12.16 ～ 2010.1.7	250m ² (立面)		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
仙台城跡	城館跡	江戸時代	礎石跡・石列・井戸跡・カマド跡・石組構	陶磁器・土師質土器・瓦・石製品・金属製品・木製品			第23次調査では、造酒屋敷に伴うと考えられる礎石跡や石列、井戸跡、カマド跡、石組構などを検出した。また、近代以降の鍛冶工房に伴うと考えられる炉跡、掘立柱建物跡などを検出した。	
		明治時代	鍛冶工房跡・炉跡・掘立柱建物跡				第24次調査では、大広間にかかる礎石跡を検出した。	
要約	仙台城は、初代仙台藩主伊達政宗によって造営された城である。慶長5年(1600)に城の縄張りが開始され、翌年から普請に着手、工事は慶長7年(1602)に一応の完成をみたとされている。築城当初は「山城」である本丸を中心とする城郭であったが、政宗の死後、二代藩主忠宗が山麓部に「三の丸」の造営を開始する。寛永年間以降はこの「三の丸」が藩政の中心となり、「三の丸・勘定所・重臣武家屋敷などが一体となって城城を形成していた。 造酒屋敷は清水門の南側に位置し、伊達政宗が親しい徳川家重臣柳生宗矩の紹介で、慶長13(1608)年に大和国から侵入した南都流の酒造技術を導入するため、又右衛門という技術者を招き、仙台城内の一角に墨敷地を与えた場所にあたる。また、出身地にちなんだ「樅森」の苗字を名乗ることを許し、樅森家は「御酒屋」として藩内で消費する酒を造った。第23次調査では屋敷に伴うと考えられる礎石跡や井戸跡、酒の醸造にかかるとされるカマド跡を検出した。酒造にかかる遺構が検出されたことからも、この地で酒造りが行われていたことが明らかになった。井戸跡から樅森家当主の名前のを記した木簡をはじめ、年賀米の荷札木簡や米俵、桶の部材、木製の栓など酒造りにかかる可能性のある遺物も多数出土した。これらの川土遺物から、調査地が「樅森家の造酒屋敷」の一角であることが裏付けられたと考えられる。							

仙台市文化財調査報告書第374集
仙 台 城 跡 10
平成21年度 調査報告書 一
仙台城本丸大広間跡調査成果の総括
2010年3月

発行 仙台市教育委員会
仙台市青葉区四丁目7-1
文化財課 TEL. 022(22)4 8544

印刷 株式会社 建設プレス
仙台市青葉区五丁目10-1
TEL. 022(30) 6177

